
モノクロームの夢の中から

彩霞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロームの夢の中から

【Nコード】

N0160V

【作者名】

彩霞

【あらすじ】

何度か見ている夢は、記憶にない場所の夢。
つていうかむしろ記憶喪失だし？
記憶がなくてもポジティブにがんばる毎日を過ごしてました。
ところがある日、街中が大変なことに…

2章から、戦闘の描写があります。そこまで詳しい描写ではありませんが、苦手な方はご注意ください。

10/12 サイドストーリーをアップしました。
↓Nコード
5396Xです。

登場人物紹介（前書き）

随時更新予定…です。

最終更新日：11/4

登場人物紹介

ミア（♀？歳）

髪：シルバーグレイでストレートのロングヘア、お仕事中は後ろで束ねている。

瞳：黒

色白で、見た目は13〜4才くらい。

街道沿いの野原でボーっとしてたところをとある冒険者グループに拾ってもらった。

絶賛記憶喪失中の主人公。

白枝亭に住み込みで働いている。平服にエプロン常時装備。
誰かさんの早とちりで冒険者登録されている。治療師^{ヒーラー}。

ネコくん

黒猫。何かとミアと関わることの多いネコ。

マリー（♀32歳）

髪：プラチナブロンド、ストレートでセミロング。いつも後ろで束ねている。

瞳：アクアブルー

白枝亭の女将さん。主に接客と掃除を担当。

元冒険者の舞踊士で『^{ダンサー}白の舞姫』と呼ばれていた。

元『^{インセントホワイト}無垢なる白』所持者。

クルト（♂34歳）

髪：ココア

瞳：グレー

白枝亭のご主人。調理全般を担当している。料理の腕はなかなか。

リユート（♂ 18歳）

髪：ライトブラウン

瞳：ライムグリーン

酒屋の息子。新しいお酒を色々と考えている。

ユーリエ（♀ 17歳）

髪：ブルネット

瞳：ロイヤルブルー

薬草屋を営む。青色魔法を使える。

冒険者ギルドに登録してる。薬草士。
ハーバリスト

ゼルマル（♂）

魔法士。青色と緑色の魔法を使える。

白枝亭の常連の冒険者グループ『白を継ぐもの』

フェリックス（♂）

リーダー。戦士。
ファイター

「無垢なる白」の現在の所持者。
インセントホワイト

ラルフ（♂）

引退して鍛冶屋の跡取りとして再出発中。戦士。
ファイター

アリサ（♀）

治療師。
ヒーラー

エリカ（♀）

エルフの野伏。
レンジャー

レックス（♂）

ラルフの代わりで加わった。格闘士。
グラップラー

アルフォンス（♂）メリンダ（♀）グレン（♂）

迷子の兄妹と、その父親。

ヴァルヴィック商会のえらい人。有名な商会。

シャルテ（♀）

タレイアのミルファム教会でシスターをしているお姉さん。
緑色魔法の使い手。

グンドルフ（♂）

衛兵隊の隊長さん。

リゼル（♀）

冒険者ギルドの受付のお姉さん。
顔が広くて頼りになるけど、ちょっと早とちり。

ボルト（♂）エレイン（♀）

ラルフの両親。鍛冶屋さん。

アンフィット大陸から来た冒険者グループ
ファイランダー（♂）

リーダー。隊長って呼ばれてる。

クレメンテ（♂）
スカウト
斥候。

エステル（♀）
レンジャー
野伏。

レイア（♀）
ソーサラー
妖魔族、鱗妖の魔法士。

エメット（♂）
ヒーラー
妖魔族、翼妖の治療師。

1 いつもの夢

真っ白な

どこまでも真っ白な世界に

あたしは立っていた

たくさんの黒い人の影たちに囲まれて

たくさんの視線を感じた

蔑むような

憐れむような

あまり感じの良くないその場に

あたしは立っていた

正面には1人の特に濃い影が見える

すぐ目の前にいるようで

でもずっと向こうにいるようで…

不意に言葉が響いた

声ではなく

直接身体の中に言葉が響いてきた

『…、……ミア………の力………、……び………らの………
……す………』

ざわめく周りの影たち…

その瞬間

世界が暗転し

体が落ちていくような感覚を生じて…

1 いつもの夢（後書き）

まだどんな方向へ転がるかはあんまり決まっていなかったりもしますが、お付き合いいただければ幸いです。

2 いつもの朝

ゴンッ

という鈍い音とともに目の前がちかちかした。

「~~~~~っっ!!」

すつつごく頭が痛い…

涙眼を開いてみると目の前には床が…

「何かすごい音がしたけど大丈夫かい？」

外から声が掛けられた。

ここの女将さんのマリーさんだ。

「だいじょうぶです…」

ほんとはあんまりだいじょうぶじゃないけど（泣）そう返事を返してとりあえず床に座りなおす。

ベッドから落ちたのね…とほほ

でもひとつだけいいことが。

いつもあの夢を見た朝は、何か緊張してるときのような変な気分になっただけ。

今日は床と頭のケンカのおかげでそんな変な気分にはならなかった。何かやなんだよね、あの気分。

とりあえず…

着替えてお手伝いに行かなきゃ。

ここは冒険者の宿と呼ばれる施設であたしはここに泊めさせてもらってる。

そもそも事の発端は、この宿の常連さんのグループがあたしを捨ててくれたところから始まる。

街道沿いの野原で、普段着で何も持たずにボーっとしているあたしを見かけたその人たちは

不思議に思って声をかけてくれたみたい。

そのときあたしは、いつもの夢から覚めてモヤモヤした気持ちにとらわれてた。

色んなことを聞かれたんだけど、頭がボーっとして何を聞かれてもちっとも思い出せなかったから

とりあえず街まで連れて行ってもらって、ここの宿に預けられた。

連れてきてくれた人たちの口利きもあって、居候させてもらえることにはなっただけ

タダってわけにもいかないと思って、従業員として働かせてもらってるんだ。

だって、お金も持ってなかったんだもん…。

着替えも終わって、下に降りたらいつもどおりマリーさんは笑顔で迎えてくれた。

「おはよう、ミア。今日もしっかり頼むよ！」

そう、ここに来て1週間。あたしが思い出したのは、自分の名前……たぶん。

夢の中でそんな風に呼ばれていた気がするだけなんだけどね。

「マリーさんおはようございます。今日もよろしく願いします」

と、深々とお辞儀。

ここで働きたいと言ったとき、少しだけびっくりしたマリーさんが、一番最初に教えてくれたこと。

「うちはお客様相手の商売だから、挨拶がとても大事。元気な挨拶ができない子は雇うつもりはないよ？」

と言われたから、精一杯の声で「よろしく願います！」と挨拶をしたら、笑顔でうなずいてくれたんだ。

「さて、それじゃそろそろ早い人たちが起きてくるから、テーブルの準備からね。」

「はい！」

積まれたイスを降ろして、テーブルを拭いていく。

拭き終ったところには、お泊りのお客さんたちが起きだしている気配が聞こえてきた。

「ミア、厨房に行つてクルトの方を手伝ってちょうだい。」

「はい！」

クルトさんはここのご主人さん。料理が上手でここの宿で出されるものは全部クルトさんがつくつてる。

「クルトさん、おはようございます。お手伝いしました！」

「おはよう、ミア。今日も忙しくなりそうだ……お皿の準備から頼む

よ。
」

そう、いつもご飯時は大忙し。そんなに大きな宿じゃなかったから、ずっと二人で切り盛りしてたみたいけど、この忙しさを感じると、二人ともどんなにすごいんだろうつて思っちゃう。

「ミア、ボーっとしてないで、できたものから運んでくれよ?」

「あ、ごめんなさい、すぐいきます」

今日もいつものように、朝の食事戦争、開戦なのです。

3 一人でお使い

「やあっ！」

カコンッ

小気味良い音を立てて薪が真っ二つになる。
これはあたしのお気に入りの仕事の1つ。

朝食時の片付けも終われば、次はもうお昼の準備に取り掛からなきゃいけない。

でもあたしは、料理はあんまり得意じゃなかったみたい…（あまりにも包丁の扱いが危なかしくてクルトさんにすぐに止められたの…）

だから、チェックアウトした部屋のお掃除や薪割り、お買い物なんかでお手伝いしてる。

薪割りは、クルトさんのお仕事のようすを見てたときに、何となくできそうな気がしたからちょっと試させてもらったら、意外と上手くいったんだ。

以前にやっていたのかもしれないし、何か思い出せたらってことでさせてもらってる。

っていつても、あんまりたくさんはできないんだけどね。

割るのは楽しいのよ？でも…

ある程度の量を作ったら、薪を束ねて裏にそろえておかなきゃいけ

ないの。

実はこれが大変で、薪って束ねるとすっごく重くなる。ふらふらしながら運んでいるのを見て、クルトさんは

「斧の扱いは割と様になってるのになぁ」って笑ってた。

一応女子だもん…力持ちの方だとは思っけど。

ま、包丁でケガするよりは運んでる方がいいし、がんばらなきゃね！

「ふい、おっしまい」

汲んでおいた水で手を洗って、お勝手から宿に戻ったら、クルトさんがお昼の仕込み中だった。

「薪割りかなりよーです！」

「はい、ご苦労様。戻ったらマリーが来てくれって言ってたよ。」

「はい。いつてきまーす。」

とてととカウンターの方向に向かったんだけど。

マリーさんはいなかった。

「はれ？マリーさん！」

「あ、ミア来てくれた？ちょっと待ってね。」

上からマリーさんの返事が。待っているとすぐにマリーさんが降りてきた。

「もうお昼も近いし、クルトは手が離せないだろうし、あたしも出られないからちょっとお使いお願いね。」

「はい。何か買ってくるの？」

「いや、頼んでくれるだけでいいよ。こないだ一緒に行った市場の酒

屋さんに、またいつものやつ1樽っていえばわかるから。」

「ん、それじゃいつてきますー。」

「お昼前には戻ってこれるようにちょっと急いでね。」

「はい。」

市場まではそんなに遠くないけど、だいぶお日様も高くなってるしちよつと小走りしていくことにした。

道も簡単だし、すぐに市場には到着。

「酒屋さんは…あっちの方だったかな？」

ばつちり正解。ちゃんとありました。

店頭には初めて見るお兄さんがいた。こないだはおじさんがいたのに。

「すみませーん。」

「いらっしやいませ。初めてですか？」

「えと、この前一度来て、白枝亭のお手伝いをさせてもらって…」

とそこにこないだ見たおじさんが奥から出てきた。

「おう、嬢ちゃん、お使いかい？」

「あ、こんにちは。お願いします。」

そのやり取りを見てお兄さんがおじさんに声をかける。

「親父、この方は？」

「白枝さんここでこないだから手伝いしてるって嬢ちゃんだよ。」

とおじさんが紹介してくれたし、あいさつあいさつ。

「はじめまして。白枝亭のお手伝いすることになったミアです。よろしく願います。」

「そうですか。僕はリュートです。これからごひいきに願います。」

深々とお辞儀をするお兄さん。丁寧な人だなあ。

リュートさんのあいさつが終わったからおじさんが声をかけてくれた。
「それで、注文は何だい？」

「あ、そうだった。えと…いつものやつ1樽願います。」
「届けるのもいつもの時間くらいでいいのかい？」

はれ？時間…?!なんて聞いてないよ…

「えと、えと…特に何も言われなかったからそれで大丈夫…かな？」
「おいおい、大丈夫かい？」
と酒屋のおじさんに笑われてしまった。

「ま、もし急ぎだったりしたらまた連絡に来な。こいつに運ばせるから。」

そういつておじさんはリュートさんの肩をバンバン叩いて笑った。

「ありがとーございます。それじゃお願いします。じゃ、ちょっと急ぐので…」

ぺこりと頭を下げて走る。

「ありがとございました。」

背中からリユートさんの声が聞こえた。

んゝ、おじさんと全然違うなあ…

そんなことを考えながら走ってたから、宿に帰るまでにこけてしまったのは内緒…

うー…いたかった…

4 黒い来訪者

「にゃー」

朝、まだぼーっとしてるときに、ネコの鳴き声が聞こえた、ような気がした。

あたしはネコなんか飼ってないし、白枝亭でも飼ってないから、たぶん気のせい。

あー、でももう朝かあ…起きなきゃ…

「んしょ…ん…？」

起きようとして何か足元に感じる…

「にゃー」

「ひ…うあ?!」

黒い塊が何故かあたしのベッドに…

「き…!!」

叫びそうになって、思いとどまる。まだ早いのに大声あげたらお客

様に迷惑だ…

かろうじて叫ぶのをこらえ、もう一度しっかりと黒い塊を見ると、まだそんなにおっきくないネコだった。

「キミ、どこから入ったのよ…もお…」
「にゃー」

小声で話しかけたけど、当たり前だけどまともな返事なんてなかった。
部屋を見回すと、窓が少しだけ開いてた。

「あれ…開けてたっけ…疲れてるのかなあ？」
「にゃ？」

何か、ネコに返事されたみたいでちょっとかわいかった。
けど、とりあえずこのまま居つかれても困るし、着替えて外に追出すことにした。

とんとんとんと…と階段を降りていくと、マリーさんも朝の準備をしていた。

「マリーさんおはようございます。」

「おはよう、ミア。ん？」

あたしが手にぶら下げてる黒い塊を見て目を細める。

「あ、何か今朝起きたらあたしのベッドにいたんです。窓が開いてたから、昨日閉めずに寝ちゃったみたいで…」

「へえ…また若い娘の部屋に忍び込むなんて大したネコだねえ。」

「ひう、と、とりあえず追い出してきますね。」

慌てるあたしを見て笑ってるマリーさん。むう、からかわれてる？

外に出てネコを地面に下ろすと、ネコはその場にちょこんと座ってこっちを向いた。

「さ、もう間違えて入ったりしたらだめよ？」

「にゃー」

また絶妙のタイミングで返事されたみたい？

とにかく朝の準備もあるし、すぐに中へ入った。

「いけたかい？」

「すみません、放してきたから、すぐお手伝いします〜。」

マリーさんに返事をして、テーブルのセッティングを始める。

何か変な朝になっちゃったな…

朝の食事戦争も一段落して、ちょっと一息。

厨房で朝ごはん。っても、仕事がないわけじゃないから、順番に一人ずつ。

お昼の準備もあるし、チェックアウトしたお部屋の片づけもあるからそんなにゆつくりもしてられない。

チーズと菜っ葉がはさんであるパンにかぶりつく。

急いでご飯をすませたら、お部屋の片づけに行く。

マリーさんはもう始めてるはずだけど…

「あ、ミア。今日はちょっと少ないからあんたの部屋のシートもまとめてやっちゃうよ」

「はい、一緒に集めときますね。」

お客様の部屋を回ってベッドのシーツを集めてまわっていると、シーツの塊に背を抜かされることもある。

前にシーツの山を運んだるとき、クルトさんに「ミア、シーツのお化けみたいになってるぞ。」って心配されたことがある。ちゃんとそのうちおつきくなるもん…

今日はそこまで量は多くないけど、ちょっと視界は悪い。

最後に自分のシーツを回収しようと、部屋に入ったとき…

「にゃー」

「へあ？」

聞こえた…朝と同じ声…

シーツを下ろすと、朝と同じようにベッドに黒い塊が…

「キミ、また来たの…?」

「にゃー」

あー、そういえば窓閉めてなかったカモ…（汗）

「それにしたって、何度も窓からなんて、泥棒みたいじゃない…」

「にゃ？」

「とぼけてもダメ！シーツ集めるし、出てってね。」

ちょっとめんどくさくなって、窓の外に追い出す。窓から入ったんだし、屋根の上でも平気でしょ、きつと。
今度はちゃんと窓も閉めて、シーツを回収する。

「変わったネコだったにやゝ…はっ、伝染った?!」

あわてて首を横に振り振り、シーツを運ぶ。
何か変に疲れちゃった気がするよ…

5 お友達

今日はお使いも兼ねて、ユーリさんのところにお邪魔してる。

ユーリさんは、あたしよりたぶん年上のおねーさん（っていつても自分がいくつかはわかんないんだけど、背もおっきいし、スタイルもいいし…むう）で、お茶とかハーブをうちに卸してくれてる治療士^{ドクター}さん。

ほんとユーリエさんなんだけど、初めて来たときに、お友達になつてもらつて、愛称で呼んでねつてことでユーリさんって呼ばせてもらつてる。

ハーブじゃなくて魔法でケガや病気を治す専門の人たちもいる。

それは、白色魔法を使う治療師さんたちで、冒険者の宿にいと、白色魔法を使う人たちも結構来てるみたい。

でも、普段街でお世話になることが多いのはユーリさんみたいな治療士さんなんだ。（魔法つて使つてらうと早いけど、結構お金がかつたりもするみたい。）

「あ、そうだミアちゃん、また新しいのあるから試してくれない？」
「わーい、ユーリさんの新作？」

ユーリさんは、街の外までお茶の材料やハーブを採りに行つてるなかなか行動的なおねーさん。
遊びに来るたびにいろんなお茶をご馳走してくれるからそれも楽しみだったりする。

「今回は、川の上流のほうで採ってきたハーブを混ぜてみたんだけど…」

「ふあ、何かスーッとする香り？ん…あう、何かピリピリ、スーする…」

「ちよつとミアちゃんにはきつかったかな…ごめんごめん。何か甘いもの取ってくるね。」

ペロツと舌を出して謝るユーリさん。ちよつと照れたような顔で苦笑いされると…何かあたしも照れちゃう。

でもいいなあ…あたしも街の外とかも見てみたいな…
最初に拾われたときのこともなんてあんまり覚えてないし…

「何ぶつぶつ言ってるの？声に出てるわよ…」

いつの間にか戻ってたユーリさんにツッコまれた。はう…（恥）
持ってきてもらったドライフルーツをかじりながらユーリさんに聞いてみた。

「ねえ、ユーリさん、街の外って危なくないの？」

「そうね…あたしはあんまり危ない所に行かないからね。一人で行くときは見晴らしのいいところか、街からそんなに遠くないところだけだし。ちよつと森の奥とかになるとやっぱり何かあったら怖いから、獵師さんと一緒に、とかかな？」

「ふみゅー…じゃ、街の近くならあたしでもいけるかな？」

「ん…さすがにミアちゃん1人じゃちよつと…あたしは一応こう

見えてちよつとは戦えるからね。」

「ええっ?! ユーリさんすごい...!」

照れたように笑いながら「まあ、あんまり当てにはならないけどね」
って言うてたけど、きつと魔物と戦ったこともあるんだろなあ...

「そうね... 今度また見回り強化期間になれば、あたしと一緒に
てみる?」

「ほあ?!」

ボーっとしてるところにすごい提案をされちゃった。

見回り強化期間っていうのは、街の周りを衛兵さんや自警団の人
たちが頻繁に回る期間で、人が大勢回るからあんまり魔物も近づ
かなるみたい。

その間ならってことでユーリさんが考えてくれたんだ。

「い、いきたいです!」

「あはは、まあまあそんなにがつつかなくても。わかった。約束
ね。あ、ただし、クルトさんとマリーさんがいいって言ってくれたら、
だからね?」

「うん、帰って聞いてみるね。ユーリさんありがとー!」

思わず抱きついたら、頭をなでなでされちゃった。むう、こどもじ
やないもん...

5 お友達（後書き）

ちょっと修正しました。

6 再来

以前の侵入から数日後、宿の前を掃除しようとして外に出たあたしを出迎えてくれた子がいた。

「にゃー」

「うわ、でたっ！…っってお化けじゃないんだしひどいよね…ごめん。」

「にゃ？」

そう、前にあたしの部屋にフホーシンニューしたネコだった。

それにしても会話になってるんだかなってないんだか…意外とあたしの言ってることわかってたりするのかなあ？

とりあえず宿の前を掃いていく。

その間、ネコはずっとおとなしく座ってあたしのことを見てるようだった。

「そんなに見てたって、キミを飼うことはできないよ？あたし、この居候だもん。」

「にゃ？」

「んー、だからあたしはここで世話になってるだけで、ここのご主人さまじゃないから、許可は出せないってこと。なんて難しいよね。」

「にゃー…」

あたしの返事に、何か考え込むような仕草がちょっとかわいかったりする。

でも、やっぱりダメだね。あたしじゃこの子にエサをやることだってできないし。

あたしを飼う（？）だけでもマリーさんやクルトさんには十分迷惑をかけてると思うし…。

「ごめんね、やっぱりきつと無理なの。」

うう、そんなきよとした眼で見られても困るから！

ちよっとかわいいけど、しょうがない。掃除を終えたあたしは、宿の中に戻った。

お昼ご飯時は朝晩に比べると、人も少ないことが多いのでちよっとは気が楽なんだけど、それでもお客様がいないってことはない。

ただ、お昼からお酒をたくさん飲む人もあんまりいないから、お給仕はそれなりにスムーズにできる。

夜は人もいっぱいで、お酒が入って盛り上がっちゃうこともあるから、気を抜くと運ぶの失敗したりするもんね。

とにかく今日のお昼ご飯も無事終わり、休憩がてら自分のお昼ご飯。

今日はうすつぱたく焼いたパンに、野菜のスープ♪
クルトさんのご飯っていつもおいしい。ほんとここで世話になれたのってラッキーだなー。
なんて考えながら食べてたんだけど。

「ミア、スープこぼれてるよ。ニヤニヤして何か思い出し笑いかな？」

「ひう？あうう…クルトさん今日もおいしいですっ！」

うう、恥ずかしいとこ見られてた…

クルトさん、後ろ向いてるけど、肩が震えてるよ…そんなに変な顔してたのかなあ…ちよつと気をつけないとダメかも…

つと、また考えに入りこんで大変なことにならないようにまずはご飯食べちゃおう。

「と、そうだ。私はこの後、ちよつと出かけてくるけど、ご飯が終わったら食器だけ頼んだよ。」

「はい。どれくらいで戻られますか？」

「市場のほかに、鍛冶屋さんにも寄ってくるつもりだから、いつもよりは少しかかるかな。」

「お手伝い行かなくていいですか？」

「大丈夫だよ。そうだなあ、マリーの方が何かあるかもしれないし、あとで聞いてみてるかい？」

「りょーかいです。いつてらっしゃいます。」

お鍋と包丁を1つ箱に納めて、あたしがぶんぶんと手を振ってるのに笑顔で答えてクルトさんは厨房から食堂の方へ出て行った。食堂

には、カウンターと正面玄関があるから、多分マリーさんに行つてきますをして、正面からお出かけだね。

「マリー、ちょっと行ってくるから。」

「あ、クルト、行つてらっしゃい。」

向こうの部屋から、いつものように交わされるあいさつが聞えた。マリーさんとクルトさんつてほんと仲がいいなあって思う。

それに2人ともとっても優しい。（もちろんあたしを置いてくれていることを差し引いても十分お釣りがくるくらいに！）

よっし、さっさとご飯食べて、食器片付けてマリーさんのお手伝いに行かなきゃ！

と思つてたらまた食堂の方からクルトさんのちょっと慌てた声が。

「うわっ、びっくりした。」

「どうしたの？大丈夫？」

「ああ、大丈夫。足元にネコがいたから、危うく引っかけてしまうところだったよ。」

「もう、氣をつけてね？」

「わかつてるよ。いつてきます。」

んー、やっぱり2人のお互いを思う氣持ちを感じるなあ。素敵なご夫婦♪

それにしても…ネコ…？ってあの子だよね、きっと。まだいたの…

？
(汗)

7 お願いつと

今日も晩ご飯のにぎやかな時間も終わり、後片付けも一段落した。いつものように、厨房でほっと一息のティータイム。

ま、この後は休むだけだから、普通のお茶じゃなく、ハーブティーだけど。

普通のお茶は、飲みすぎると寝付けなくなるんだって。

絶対そんなことないと思うんだけどなあ。いつもベッドに入ったらすぐ寝てるし。

「今日も無事終わったね。1日お疲れさん。」

「マリーもいつものでいいかな？」

「そうね、お願い。」

マリーさんが返事するよりも早く準備に取り掛かっているクルトさん。さすがだよー…。

「はい、おまたせ。」

「ありがとう。」

手際よくお茶を淹れたクルトさんもテーブルについて、今日のことをあれやこれやと話してる。

まったりと過ぎるこの時間もあたしは結構好き。

ぼーっとしていると急に話を振られたりもするんだけど。

「でも、ミアもだいぶ慣れてきたねー。」

「ふぁ？えー、まだまだですよー…料理ダメだし…」

マリーさんからの急な振りにちよとびっくりしつつ、でもやっぱりあんまりできてないんだよね、あたし。

「そんなことないよ。ミアが来てからお客さん増えても対応できるようになってるからね。」

「そうよ。助かってるわ、ほんと。」

「はう、ありがとうーございます。」

2人からそんなにいわれるとちょっと恥ずかしい…けど嬉しいかも。

「また明日も頼むよ。」

そう言ってくれたクルトさんも、マリーさんもとても素敵な笑顔を向けてくれた。

「さてと、それじゃそろそろ片付けて休みましょうか。」

「そうだね、あまり遅くなるとまた朝が大変だろうし。」

「あ…ちよっただけいいですか？」

あたしから話を振ることはあんまりないから、2人ともちょっと不思議そうな顔をしてる。

実はこの間から、ユーリさんのお出かけをお願いしそびれてたから、今日こそって思ったんだけど。

「えっと…」

話を振ったけど、ちょっと詰まっちゃった。さっきあんなにほめてくれたのに、お出かけをしたいっていうのは、お休みさせてくださいってことになるから。

まだまだへっぴこなあたしを優しく見てくれている2人に何だか悪い気がしてきたから。

固まってるあたしを心配そうに見ている2人に気がついて、あわてて言葉をつないだ。

「あ、ごめんなさい。また今度でいいや。えへへ…」

笑ってごまかしてカップを片づけに立とうとしたんだけど、2人もイスに座りなおしてる…。

「ミア。座ってちょうだい。」

「あう、でも…もう遅いし…」

「いいのよ。何かお願いでもあるんでしょ？」

「ふえ?!」

びっくりした。まだ何もしやべってないのに。

よっぽど変な顔でもしたのかな…2人とも普通に笑顔でいたのに、びっくりしたあたしを見て声をあげて笑ってる。

「な、何で知ってるの?」

「伊達に客商売をしてないってことよ。」

ふふつと笑うマリーさん、その横でやっぱり笑顔のクルトさん。2人ともほんとにすごいなあ…

「それで、どんなお願いかしら?」

「あう…えと、えとね、ユーリさんが今度の見回り強化期間に薬草採りにつれてってくれるって言うてくれたの。でもね、マリーさんとクルトさんがいいって言うてくれたら、なの。」

ふうむ、と軽く息を吐いたクルトさんを、マリーさんが見る。

「えと、忙しかったらまた今度をお願いするから…」

「ま、いいんじゃないかな?マリーも構わないだろう?」

別にいいですって言おうとする前にクルトさんは口を開いてた。

マリーさんも笑顔でうなずいてる。

「ま、ユーリエちゃんと一緒になら問題ないだろうし。詳しい日取りが決まったらちゃんと教えるんだよ。」

びっくりするくらいあっさりの返事に、言葉が出ず首を縦に振り続けるあたしを見て、2人はまた笑ってたけど。

「それじゃ今度こそお休みましょ。ほんとに明日の朝、起きられなかったら、それこそ大変よ?」

「そうだね。あとは私がやっておくよ。マリーもミアも、先に休んでなさい。」

「あら、ありがと。それじゃお願いね。」

立ち上がった2人にあたしは後ろから思わず抱きついちゃった。

「マリーさんもクルトさんもほんとにありがとー!」

「あはは、ミアは何だか大袈裟だね。私たちだってがんばってるミアのお願いに応えることができてよかったよ。」

そう言って、頭をぽんぽんと叩いてるクルトさん。

「それじゃ、クルトに任せて先に休ませてもらっちゃいませよ。」

というマリーさんに連れられて厨房を出た。
真つ暗な食堂をランプで照らしながら階段を昇る途中で、あることを思い出してあたしは階段を降りた。

「ん？」

降りてくる気配に気づいたマリーさんが振り返った。

「マリーさん、おやすみなさい。」

ぺこり、と頭を下げたあたしに、マリーさんも「はい、おやすみなさい。」と返事をくれた。

街の外、今からドキドキしてる。

そして、マリーさんとクルトさんの気持ち、あたしの心をホコホコにしてくれた。

この宿に来ることができてほんとによかったな。」

8 魔法

「ユーリさん、こんにちはー。」

今日は、ちょっと休憩をもらって、報告も兼ねてユーリさんの所にお邪魔してきた。
んだけど…そこには先客がいた。

「あ、お客様、ごめんなさい。」

「あら、ミアちゃん、どうぞー。」

「い、いいの？お客様が…」

「いいのいいの。ね、先生？」

先生と呼ばれたその人は、クルトさんと同じくらいの年齢の男の人だった。

「構いませんよ。僕だっていらっしゃったお嬢さんと同じようなものですから。」

「ふえ？」

「この方はあたしの魔法の先生よ。先生、この子は白枝亭で働いてるミアちゃん。」

「なるほど、はじめまして。ゼルマルと申します。」

と立ち上がってお辞儀してくれた。

こんなあいさつされたことがなかったのでちょっとびっくり。

「はう、あ…み、ミアです。よろしく願いしますです。」

慌てて返事をしたけど、噛んじゃった…

「ふふっ、ミアちゃん緊張しすぎよ〜?」

「えええっ、でもでも…」

「あんまり硬くなられると先生も困っちゃうわ。」

「あう…スミマセン…」

「こらこら、あんまり困らせてはいけませんよ、ユーリエくん。ま、でもミアさんもあんまり気負わずにお付き合いくださいね。」

あたしが縮こまったのを見てか、先生ことゼルマルさんが助け船を出してくれた。

よかった、優しいそんな人で…

「あの…何て呼びすればよいですか?」

「ゼルでも先生でも、好きなように呼んでくださって結構ですよ。」

「ゼル…先生…はい、ゼル先生。」

何となくくつつけちゃった。いいよね。笑顔でうなずいてくれたし。そういえば、魔法の先生…っていつてたけど…

「もしかして、ユーリさん魔法使えるの？」

「あれ、言ってなかったっけ？使えるわよ。青色だけだね。」

「青色だけ？」

「ミアちゃん、魔法のことあんまり知らない？」

「うん…」

「白枝亭なら魔法士も来るんじゃないの？」

と不思議そうに尋ね返されたんだけど、宿で魔法使ってる人なんか見たことないんだよね。

「まあ、冒険中でもないし冒険者が魔法を使うことも少ないでしょう。」

「そっか。さすが先生。何でもお見通しね。」

「それはあなたの先生ですから。」

「何か引つ掛かるわね…。」

言葉だけ聞いてると何だか怖いけど、2人とも笑ってるから大丈夫だよな…？

「ところで、ミアさん。魔法に興味があるのですか？」

「えと、あんまり良くわかんないです。ユーリさんが魔法使いだっただのもびつくりだし…」

「ふむ。ユーリエくんも魔法は使えるが、いわゆる魔法士ではないソサラー^{ソーサラー}のです。魔法の素質を持つ人は割といるのですが、1色のみの素質という方も少なくありません。もちろん、素質があればそれなりに魔法を行使することはできますが、2色以上を使いこなせて初めて

魔法士と呼ばれるのですよ。ま、白色だけは別ですが。」

「ちなみに、先生は緑色と青色の2色が使えるから魔法士なのよ。」

ふーみゆ…ゼル先生もすごいけど、ユーリさんもすごいんだあ…

「ところでミアちゃん、何か用事があったんじゃないの？ご注文？」

「あ、そうだった。びっくりして忘れるところだったよー。」

「なるほど、それでは私はこのあたりでお暇させていただきましたよ。お茶、ごちそうさまでした。」

「あ、先生ごめんね。また来てね。」

「さ、さよならです。」

笑顔で手を振るユーリさんと、あたしに軽く会釈してゼア先生は帰って行った。

「それで、今日は何のご注文かな？」

「えと、注文はないんだけど…マリーさんとクルトさんがいいって言ってくれたの！」

「ん、そっか。それじゃ計画立てなきゃね。今は…休憩時間が出てきたのよね？」

「うん。だからあんまり時間がかかると困るかな…晩の準備も始まつちやうし。」

「それじゃ今度、白枝亭に顔出すから、そのときに相談しましょ。」

「わーい、じゃ、お待ちしてますっ！」

とってもわくわく♪何だか大冒険(?)の予感がする…かも！

8 魔法（後書き）

ちよつと説明っぽくなってしまいました…
少し訂正

9 パーティー（前編）

今日の晩は大きなパーティーがあるってことで、朝ご飯後からいろいろ準備に大忙し。

ちよつと気合入っちゃう。だつてパーティーを開くのは、あたしを助けて（拾つて？）くれた人たちなんだもん。

実は有名な人たちだつて聞いてびっくりした。あたしほんとに運がよかったんだなつて。

「しかし、ラルフが引退ねー。」

「正直、俺たちにも痛手なんだけどね。ま、あいつはずっとこつちが目的だったから。」

マリーさんと話してるのは、フェリックスさん。

今回の宴会の主催者さん。

「でもまあ、盛大に祝つてやりたいからさ。マリーさんもほんとよろしく頼むよ。」

「まかせときな。あ、ミア。ちよつと来て。」

「はい。」

2人の方に走って行くと、先にフェリックスさんが声をかけてくれた。

「おー、すっかり元気だな。」

「そのセツはおせわになりました。」

「がんばってるみたいでよかったよ。今日はよろしくな？」

「はいっ！」

あたしも気合が入ってるからつい大きな返事をしたら、頭をくしゃくしゃなでてくれた。

「こらこら、うちの娘に手を出すんじゃないよ？」

「うわ、マリーさんひでえ…俺がそんな風に見えるかよ？」

つていつても、軽口を叩き合ってる感じ。マリーさんとフェリックスさんと、ちょっと年が離れてるっばいんだけど、あんまりそんなのを感じないって言うか…あ、何か姉弟みたいな感じ？

「あはは、まあいいわ。ミア、ちょっとお使いお願いね。クルトも手が離せないから、ここに書いてあるものを揃えてきて。」

「はい。」

「でも、ちょっと量があるね…」

マリーさんが眉をひそめる。

そしたらフェリックスさんが何か思いついたように、マリーさんに耳打ちした。

マリーさんもうんうんうなずいてる。

「んじゃ呼んでくるわ。」って言って、フェリックスさんは出て行

った。何だろう？

「ミア、ちょっと待ってね。リックが応援呼んできてくれるから。」
「応援？」

リックってフェリックスさんのことだね。それにしても応援って…
と思っただらばどなくしてフェリックスさんが、1人の女の人を連れて戻ってきた。

「お待たせつと。連れてきたぜ。」

「ご苦労さん。アリサ、お願いね。」

「まかせてくださいー。ミアちゃん、はじめましてー。でもないっけ。治療師のアリサですー。」

何かほわつとした人だなあ。

フェリックスさんたちのグループの人だそうで、あたしを拾ってくれたときに一緒にいたからはじめましてじゃないってことみたいだけど…うう、あんまし覚えてない、ごめんなさい。

とにかく、アリサさんと一緒に市場へ出発した。

「そうですかー。ミアちゃん、まだ思い出せませんかー。」

「はい…。でもマリーさんもクルトさんも焦らなくていいからって

言ってくれてるから。」

「ちよつとだけ、いいですかー？」

「ふえ？」

「ミアちゃんに魔法を使わせてもらっていいですかー？」

あたしに？魔法？？

「それってどういう…？」

「あ、心配しないでいいですよー。もしかしたら記憶喪失の原因がわかるかなーって。」

急なお話にびつくりした。

記憶が戻ればいろいろわかるかもしれないけど、今まで全然思い出せそうになかったし、マリーさんやクルトさんも優しくしてくれてたから、あんまり考えもしてなかった。でもちよつと怖い気もする…

「…マリーさんとクルトさんに相談して決めてもいい、ですか？」

「そうですねー。その方がいい気がしますー。ごめんなさいねー、急にこんなこと言いだしてー。」

「うっん、ありがとーございます。」

今まで解決しようと積極的に動いてなかったし、やっぱり考えなきやだめだよな。

「それではー、お使い、急ぎましょー。」
「はーいっ!」

時間は待ってくれないし、まずは今晚の準備をがんばらなきゃ!

9 パーティー（前編）（後書き）

また人が増えてしまいました…
人物紹介も作ろうかと思ってます。

10 パーティー（後編）

「それでは、我らがラルフの新たな門出を祝して、かんぱ〜い！」

パーティーは、フェリックスさんの乾杯の音頭で始まった。

今夜はもう、いつもと全然違う食堂だった。

たくさん人が来るからってことで、イスを片付けて立食形式にしてあるけど、それでもスペースに余裕はあんまりないくらい。

うちの常連さんたちはもちろん、主役のラルフさんはこの街の人だから、ご近所さんもとくさん来てるみたいなんだ。

これだけたくさんの人があると、ご飯やお酒もすっごい勢いで減っていく。

クルトさんはある程度、作り置きをしていたけれど、もちろんそれで足りるわけがないから、今も厨房で調理中。

あたしもできたものを運んだり、空になったお皿を片づけたり厨房と食堂を行ったり来たりで大忙しだけど、パーティーの雰囲気はすごく盛り上がって、楽しくお給仕してた。

「ミア、大丈夫かい？そっちのテーブルの隅に、飲み物と簡単につまめるもの置いてあるから、適当なところで休憩していいよ。」

何度目かに厨房に戻ったとき、クルトさんがそう言って奥のテーブルを指差した。

調理だけでも大忙しのはずなのに、あたしの分まで用意してくれるなんてクルトさんすごすぎる！

「ありがとです！でもまだ空のお皿とか結構あるから、もうちょっと運んでくるね。」

「今日のミアは、いつも以上に張り切ってるね？」

「だって、あたしの恩人の方たちだもん！」

「そうだったね。まあ、無理はしすぎないように頼んだよ。」

「はい！」

厨房から食堂に新しい料理を運んでいくと、フェリックスさんのお話にみんなが注目してた。

「それでは本日の主役、ラルフからの皆様への挨拶です！」

「あー、どうも、ラルフです。今日はたくさんの方々が集まっていたきありがとうございます。」

ちょっと緊張した感じでラルフさんが喋りだした。フェリックスさんが「ラルフ、ガチガチだぞ〜」って言うって、ラルフさんに叩かれてる。

「今日をもって、俺は鍛冶に専念しようと思います。今までの冒険で得られた知識や素材を存分に活かせるようにがんばりたいと思います。」

リックたちもそうですが、お世話になった冒険者のみなさん、近所のみなさんたちに、1日も早く鍛冶屋としてお役にたてるようになりたいと思っています。

まだまだ親父がメインですが、うちの鍛冶屋を御贔屓にお願いします。」

食堂全体から歓声と拍手が上がった。そっか、ラルフさんはお家の仕事を継ぐんだね。

隣にいるのはお父さんかな？ちよつとうるうるしてる…

「あ、それと」

思い出したように言葉を続けるラルフさん。食堂がまた静まりかえった。

「貴重な素材を手に入れた方もぜひ俺に！」

一瞬の静寂の後、今度は笑い声で食堂が満たされた。

「ちやつかりすぎ！」とか「おめえじゃまだはええよ！」って声も飛んでた。

「それじゃ続けて、ラルフの鍛冶の師匠でもある、親父さんからっ
！」

フェリックスさんの案内でラルフさんのお父さんが前に立った。

「今日は卒のために、かくも多くの方々にお集まりいただきありがとうございます。」

後を継いでくれることは、親としてもとてもうれしく思っておりますが、あとは早いこと所帯を持ってほしいと思っております。」

また笑い声上がり、ラルフさんは赤くなってた。

「みなさんのこれからに幸多きことを願いまして、乾杯させていただきます。」

乾杯っ！」

2度目の乾杯も、すごく盛り上がってみんな楽しそうだった。

長く続いたパーティーが終わってしまつと、食堂はいつもと同じように静かになった。

今は、フェリックスさんたちと、マリーさんとクルトさんとあたししかない。

片付けも終わつて、ゆっくりお茶してるところなんだ。

「みんな、今日は本当にありがとう。正直こんなに大きなものになつてゐるなんてびっくりしたよ。」

ラルフさんが、ちょっと照れくさそうにフェリックスさんたちに話してる。

「マリーさんもクルトさんも、こんな無茶を聞いてくれてありがとうございます。」

「まあ、かわいい後輩のためだしね。」

「うちもお世話になつてゐるだし、持ちつ持たれつだよ。」

頭を下げるラルフさんに、マリーさんもクルトさんも笑つて答える。

「それから、ミアちゃんも本当にお疲れさま。ありがとう。」

「あ、あたしも楽しかつたです！」

ラルフさん、あたしにまでお辞儀してくれてびっくりした。でも、ほんとに楽しいパーティーだなつてすっごい感じた。

みんながとっても楽しそうで、たくさんの楽しいが集まって、何倍も何倍も楽しい雰囲気になってた。

そして、今もまだその楽しいが残ってる気がする…

今日のお茶会は、いつもよりちょっと賑やかで、いつもよりだいぶ遅くまで続きそう、かな♪

10 パーティー（後編）（後書き）

いつもよりちょっと長めになりました。

でもいつもが短いからそんなに変わったように感じないでしょうか…

11 マリーさんの趣味

ラルフさんの引退パーティーの翌日、朝からみんなでお片付け。フェリックスさんたちも手伝ってくれたおかげで、お昼までには全部終わっちゃった。

ほんととはもつとかかるんじゃないかってことで、クルトさんは明日から営業のつもりだったみたい。

ということ、今日の午後は、ゆっくりお休みすることになったの。

お昼もすんで、お茶とクッキーが用意されたテーブルを前にして、あたしは動けないでいる…

「フィッシュボーン、完成♪」

「わー、マリーさんすごいですー」

今は男子と女子で別れてて、一緒にいるのはマリーさんと、アリサさんと、エリカさん。

エリカさんもフェリックスさんたちのグループで、エルフなんだって。

あ、そうそう、それで何で動けないかっていうと、マリーさんがあたしの髪を結ってくれてたからなの。

普段はマリーさん、自分の髪も後ろでまとめてるだけだったけど、実は人の髪を触るのが大好きなんだって。

「いいなー。わたしも髪伸ばそうかなー。」といいながら、編みこまれたあたしの髪をなでてるアリサさん。

「アリサくらいでも大丈夫よ。じゃ、アリサ次はいつてみよつか。」

マリーさんにおいでおいでされて、あたしは座ってた席をアリサさんと変わる。

「そうね…左側に編み込んでまとめてみましょうか。」

「お願いしますー。」

鼻歌を歌いながら、櫛を使って髪をすくってきれいに編み込んでいくマリーさんの手際に思わず見惚れちゃう。

アリサさんの髪は、マリーさんの魔法のような手によって、あっという間に結われちゃった。

最後に紐でくくった上からバレッタで留められる。

「うん、上出来上出来。そのバレッタはアリサにプレゼントするわ。」

「えー、ほんとですかー。ありがとございますー。」

嬉しそうなアリサさんを、あたしと一緒に見てたエリカさんが、ぽつりと「いいな…」ってつぶやいた。

そんな声が聞こえてたのか聞こえてなかったのか、当たり前のようにエリカさんにおいでおいでしてして。

「わ、私もいいの…?」

「いいのっていうか、あたしはさせてもらってる方だからね。嫌ならやめる?」

と聞かれて、首をぶんぶん横に振ってるエリカさん。ちょっとかわいい♪

「エリカは…んー、ミアと一緒にじゃ芸がないわね…そうだし」

髪を左右に分けて三つ編み。何か普通のおさげっぽい…？

って思ってたなら、三つ編みした髪を、ピンで後ろにまとめちゃった。

「どう？長かったエリカの髪が短くなったように見えない？」

「すごいすごい、短くなってる！」

「びっくりですー…」

当のエリカさんも、おそろおそろ髪を触ってる。

立ち上がってくるっとまわったりしても髪型は全然崩れなかった。

「何だか、不思議…マリーさん、ありがとう。」

「いやいや、あたしもだいぶ楽しませてもらったからね。」

うーん、と伸びをするマリーさんは、とっても満足げ。一仕事終えましたって感じがしてる。

「さてと、そろそろ夕方だね。クルトたちも、夕ご飯の準備に戻ってくるころだね。」

「それじゃ準備行きますね。」

そういつて厨房の準備に行こうとしたあたしをマリーさんが、ちょっといたずらっぽい笑顔で止めた。

「せっかくだし、男性陣にお披露目するまでは待ってない？」

「え…何だか恥ずかし…」

「あははー、それも楽しそうですねー。」

赤らめたほほを両手でおおうエリカさんと、のほほんとしたアリスさんの間で、あたしもちよつと恥ずかしいなっと思いつながら、クルトさんたちの反応が楽しみだったりした♪

早く帰ってこないかなー…

11 マリーさんの趣味（後書き）

人物紹介ができてないのに登場人物はどんどん増えてる気がします
：

12 お買い物

今日はお昼のあと、マリーさんに誘われてお買い物に行くことになったの。

「ところで、何を買いに行くんですか？」

「ま、ついてからのお楽しみね。」

なぜかマリーさん教えてくれなかった。

何を見に行くかわかんないけど、マリーさんとお買い物ものなんて久しぶりだし、楽しみ♪

マリーさんも妙に楽しそう、だよな？

歩いて行く先は、いつもの市場を越えた向こうの方みたい。
道すがら、いろんな話をしてたんだけど…

「あ、マリーさん、今晚、ちょっと相談したいことがあるの。クルトさんにも。」

「ん？…何かあった？」

「えとね、この前、アリサさんに…、えと、記憶のことで…」

「そっか、さすがに立ち話っつてわけにもいかないね。とりあえずそれは夜に時間つくるわ。」

「はい、ありがとーです。」

「さて、もうすぐだよ。」

着いたお店は武具屋さんだった。

「ここ…?」

「そうよ。さ、入りましょ。」

マリーさんに引つ張られてお店に入ると、カウンターにいたおばさんがびつくりしたみたいだった。

「もしかしてマリーかい?」

「ども、おひさしぶり。」

「急にどうしたんだい?と、その子は…新米かい?」

「あ、違うの。今、うちで働いてくれてる子。ほら、ミア。」

「は、はじめまして、ミアです。」

マリーさんに促されてあいさつしたら、おばさんも「ああ、よろしくね。」って返してくれた。

「で、冒険者でもない子連れてくる場所でもないと思うんだけどね?」

「冒険者じゃないんだけど、こんどちょっと外出るから、一応ね。」

「そういつことかい。じゃ、ちょっと寸法取らせてもらつよ。」

そういつて、おばさんはあたしのいろんな所を測っていく。

「マ、マリーさん…えと、えと?」

「おっと、動いちゃだめだよ。」

「ミア、落ち着いて。昨日、ユーリが来て、今度のお出かけのことで相談してたのよ。」

「え、そうなの?」

「ミアはちょうど、お使い出てる時だったから、あたしが話を聞いたってわけ。」

マリーさんの説明を聞いているうちに、おばさんは測り終わったみたいだった。

「それで、どうするの？」

「まあ、冒険者の服でいいかなって。」

「妥当なところかね。サイズ出してくるわね。」

「ミア、ごめんね。何が何だかって感じだったでしょう。」

「うん……」

「いくら強化期間っていつても、念には念を入れておかないといけないからね。」

「今日はお出かけの準備のお買いものだよ。」

「ふえ……？あう……あの……」

上手く言葉が出なかったところに、おばさんが戻ってきた。

「じゃ、ちょっとこれ着てみてくれるかい？」

そういつて渡された服は、いつもの服と違って分厚くて丈夫に作つてある服だった。

「試着室はそのカーテンの奥だよ。」

指差された先のカーテンを開けると小さな部屋になった。着替えているとマリーさんとおばさんの声が聞こえる。

「しかし、ほんとに久しぶりだね……あんたが冒険者の宿をやることになるとは思わなかったよ。」

「あたしだって思ってたわ。でも、楽しくさせてもらってるし。」

フリマ・ホワイト

「『白の舞姫』がねえ…」

「ちよ、それはもう！」

「あー、着てみました…」

盛り上がってるところに、ちよっと出辛かったんだけど…しょうがないよね…

「ミ、ミア、今の、聞い…」

「はいはい、ちよっと調整するよ。」

マリーさんが真っ赤になってる…のを尻目に、おばさんは袖や裾を折ったり、針で留めたりしてる。

「はい、終わりっつと。それじゃこれはまた詰めとくね。武器も見えるのかい？」

「えっと、マリーさん？」

マリーさん、口元を手で隠して、まだちよっと赤いけど、こっち来てくれた。

「多分何も使ったことがないのよね。」

「んー…斧は？薪割りしてるよ？」

「薪割りとはずいぶん勝手が違うからね。まあ、使うこともないだろうし。服だけでいいわ。」

「はいよ。それじゃ2日後までには仕上げておくよ。」

「おねがいね。さてと、それじゃミア、次行くわよ。」

「はいー。おばさん、よろしくおねがいしますー。」

次はどこに行くのかな？

12 お買い物もの（後書き）

マリーさんの過去が…？

13 あったかい

「こんにちはー。」

「あら、いらっしやい。できてるよ。ちょっと取ってくるから待っててね。」

そついうと武器屋のおばさんは奥に入っていた。

注文の日からもう3日。もうできてるだろうってことで、今日はお出かけ用の服を取りに来たんだ。

「はい、じゃあこれね。合わせてくれるかい？」

服を受け取って、試着室に入る。

しつかりとあたしに合わせてくれてあるから、前よりも着るのが楽になってる。

「着れましたー。」

「よし、じゃその場でゆっくり回って…うん、右手を上げて…左手も…大丈夫そうだね。」

あたしが動くのをじっと見ながらおばさんは満足そうにならずいた。

「それじゃ、元の服に着替えてね。」

試着室に戻って、普段着に着替えてると、男の人の声が聞こえた。

「母さん、注文いつてくるね。」

「はいよ、気をつけて。」

息子さんかな？おばさん1人でやってるわけじゃなかったんだ。

着替えが終わって出ていくと、おばさんは冒険者の服をきれいにたたみ直してくれた。

持ってきた小袋おさいふに手を触れて、出てくるときのことを思い出した。

「ミア、今日はあたしはついていってあげられないけど、もう仕上がってると思うし、今から服を受け取りに行っておいで。」

「はい、いつてきますー。」

「こらこら、今日は手ぶらじゃダメよ。」

そういつて、小さな袋を渡してくれた。

受け取って持ち上げると、中で金属が触れ合ってチャリチャリなってる。

「あ、これ…。」

「うん、支払いもしなきゃね。」

「え、でも…あたしお金持ってなかったんだよね…。」

マリーさん…ごめんなさい。何も考えずにお出かけしたいなんて言ったから…。」

あたしが余計なこと言わなきゃ、無駄なお金を使うこともなかったんだ…。

そう思ったら、何か涙が出そうになった。そんな顔も見せたくなくて、うつむいてしまう。

あたしの頭を、ポンポンとマリーさんがなでて、そのままぎゅっと

抱きしめてくれた。

「ミア、あんたはほんとにいい子だね。でもね、このお金はあんたのお金だよ。」

毎日毎日、うちでがんばってたじゃない。」

「えっ、でも、ずっと泊めてもらってて…ご飯とか…。」

「もう、そんなことまで心配して…。」

大丈夫、あたしもクルトも、ミアが来てくれて本当に助かってるし、むしろ受け取ってもらえなきゃちょっと困るんだけど、ね？」

マリーさんがあたしの顔を覗き込んでにっこり笑ってくれた。

すっごく嬉しかったのに、どうしても涙が止まらなくなったあたしを、マリーさんはまたぎゅってしてくれた。

そのあと、落ち着くまでしばらく抱きついたまま、グスグスしちゃったんだよね。

マリーさん、あったかかった…

「さて、できたよ。」

「はひ？！え、えと…おいくらですか？」

「あー、そうだね。マリーの注文みたいなもんだし、40でいいよ。」

小袋から、10枚銀貨を4つ出して、おばさんにわたす。

「はい、確かに。また何か入用になったら相談しにきてね。」

「ありがとうございます。」

「マリーにもよろしく伝えておくれよ。」

おばさんのお見送りを受けて、お店を出たあたしは、両手に服を抱えて歩きだす。

早く帰って、マリーさんとクルトさんに服を見てもらいたい、何だかそんな風に思ったから。

何だかちよつといつもより早足で宿^{おしや}へ向かっちゃいました。

13 あったかい（後書き）

いつも時間がバラバラですみません…

14 黒の導き

今日は午後の休憩時間に、ユーリさんのところに行こうと思ってたんだけど、予定を変更して追跡中。約束してたわけじゃないし。

何を追跡してるかっていうと…

「にゃー」

そう、黒ネコさん。きつと前も来たあのネコ、だと思っただけど、今日はいつもと何か違ってた。

声に気付いてあたしが見ると、トコトコトコつと進んで、振り返る。何となく来てほしそうだったから、近づくともたトコトコトコつと進んで振り返る。

こうやってあたしの追跡調査が始まった。

普段あまり行くことのない、市場と反対側の方向へどんどん進んでいくネコを追いかける。

知らない場所だったけど、あんまり不安は感じなかった。

そうやって何度か角を曲がった先の細い通りで、ネコは止まった。

あたしとネコの前には、あたしよりもだいぶ幼い男の子と、もうちょっと小さな女の子がいた。

女の子は泣いてるみたい…ふとネコを見ると、ネコもこっちを見てた。

わざわざここまで連れてきた、んだよね…不思議なネコ…

「もう泣くなよー、兄ちゃんがちゃんと連れて帰ってやるから！」

「うええ…おとーさん、おかーさん…ひつく、うう…」

…もしかして迷子かな？って思ったとき、ネコが同意するみたいに「にゃ」って鳴いた。

「誰だっ?!」

「あ…えっと…あたし、ミアだよ。」

「へ、変なやつっ!」

つつぱってるけど…膝ががくがくしてる…。お兄ちゃんががんばってるんだね!。

「どうしたの？迷子？」

「か、関係ないだろっ!」

「どこからきたの？」

「関係ないって言うてるだろ!あっちいけ!」

そっいつて女の子、妹かな？の前に両手を払って立ちはだかる。

「送ってあげよっか？」

「お前なんか怖くな…へ？」

「んー、だから、送ってあげようか？」

「お前、僕たちの宿がわかるのかっ？」

何か急に食いついてきた…やっぱり迷子だね。

「宿の名前とか教えてくれれば案内できるかもしれないよ。」

「名前…おぼえてな…いや、知らない人に教えちゃダメなんだっ!」

むう、わかんないつか…。どうしよう。

いろんな人が来るところで聞けばわかるかもしれないよね。

とりあえず、泣きやんでもらって…って思ってたら妹はもう泣きやんだ。

その両手のなかでネコがたわむれてる。

「おにーちゃん…にゃんこさん。かわいい」

「メリー、どこからそのネコ…」

「あ、だいじょうぶだよ。あたしをここまで連れてきてくれたネコだから。」

お兄ちゃんの目が丸くなる。あたしも自分で体験しなきゃネコがこんなことするなんて信じられるわけないけどね。

「さ、それじゃメリーちゃん？と、お兄ちゃんは何ていうの？」

「ばっ、こ、子どもあつかいすんなっ！」

「ごめんね、で、名前は？」

「…アル。」

「アルくん、ね。それじゃいこっか。」

「宿も知らないのにどこに連れてくんだよ…」

相変わらず突っかかるような言い方だけど、左手をメリーちゃんとないであたしについてくる。

メリーちゃんの左手は、ネコのしっぽと遊んでたけど。

「とりあえず、教会に行ってみようかな。近くに1こあるし。」

この間、近所のおばさんとお話したときに、教会にたくさんの人があるって聞いてたから、そこに行ってみようと思った。

うちだと、クルトさんもマリーさんも忙しくて、教会に行く暇がな

いんだよね…だからあたしも初めてだつたりする。
教会の鐘楼は高いから、ちょっと大きな通りまで出れば割とすぐ見つかる。

あたしは2人と1匹を連れて教会に向かった。

教会には無事ついたけど、そこからあんまり考えてなかった。
だって…勝手に入って怒られたら困るよね…。
入り口でうろろしてたら、お姉さんが声をかけてくれた。

「どうされたのですか？」

「あ、すみません。えっと、この2人が迷子なんです。」

「迷子じゃないぞ！」というアルくんの叫びを聞き流して、お姉さんに尋ねる。

「泊ってる宿も分かんないみたいなんですけど、どうやって探したらいいのかなって。」

「そうですね。衛兵さんに尋ねてみるのはどうでしょうか。
もしかしたら連絡が入っているかもしれません。
とりあえず、お2人も一緒に中に入りませんか？」

たぶん2人ともだいぶうろろしたんだろうし、ちょっと休ませてもらった方がいいよね。

「それじゃお願いします。」

「ではこちらへどうぞ。」

お姉さんの案内に歩き出そうとすると、アルくんが止まった。

「どしたの？」

「だって、早く帰らないと…」

「うん、でもむやみに歩いたって疲れるだけだよ。今から衛兵さんの所に行つて、聞いてきてあげるから、休んでなよ。」

「…うん、わかった。」

たぶん、だいぶ疲れてるみたい。ちょっとほっとした感じになったアルくんの手を引いて連れて行く。

そのアルくんは、もちろんメリーちゃんの手を引いているから、ずらっとつながったみたいになる。

「あ、にゃんこさんが！」

教会に入ろうとすると、ここまで着いてきてたネコが、パツと走つて行ってしまった。

「ううう、にゃんこさんが…」

あらら、また泣き出しちゃった…どうしよう…

そのとき急に誰かが教会へ飛び込んできた。

あれ、衛兵さん？お姉さんもびっくりして声をかける。

「あわててどうなさいました？」

「あ、シスター、実は子どもが迷子になっていて情報を聞いて回つ…あ…！」

衛兵さんの大きな声に、お姉さんも、あたしも、アルくとメリーちゃんもビクツとなった。

「…す、すみません…。」

衛兵さん、真っ赤になって縮こまる。でもすぐに、アルくとメリーちゃんの方にしゃがみ込んだ。

「アルフオンスくんと、メリンダちゃんだよね？」

「え、何でぼくたちの名前…。」

「君たちのお父さんから、搜索依頼が出ていたんだよ。…君が2人を連れまわしていたのか？」

立ち上がった衛兵さんは、あたしの方を向いて、ちょっときつい口調であたしに尋ねた。

「ええ？あたしはただ…。」

「そのねーちゃんは僕たちを送ってくれたんだ。」

急なことに言葉が出なかったあたしに代わって、アルくんが衛兵さんにそういった。

「ねーちゃんがいなきゃ、僕たちまだ迷子だったと思う。ねーちゃんが悪くないぞ。」

「ふむ、そうか。いや失礼しました。依頼主から誘拐の疑いもあると聞いていたもので…申し訳ない。」

すみませんが、話をお聞かせ願いたいので、ご同行していただけますか？」

「あ、でも…そろそろお仕事に戻らないと…」

「困ったな…どちらでお仕事されてるのですか？」

「白枝亭っていう冒険者の宿です。」

今までやり取りを聞いていたお姉さんが「ああ！」と声を上げた。

「大丈夫ですわ。白枝亭に新しく入った女の子ってあなたのことで
すね。」

衛兵さん、あとで白枝亭にお伺いされてはいかがですか？」

「ふむ、そうですね。それではそうさせていただきます。まずは子
どもたちを帰してあげないと。」

それでは後ほど、お伺いさせていただきます。」

そう言つて、衛兵さんはあたしたちに敬礼して、アルくとメリー
ちゃんを連れていった。

「お姉さん、ありがとうございます。それじゃあたし、仕事に戻ら
なきゃいけないので。」

お姉さんにお辞儀して、教会を後にする。んゝ、ちょっと走って帰
らなきゃだめかも。

そして…今夜はいろいろと忙しくなるのですた。

14 黒の導き（後書き）

いつもより、長めになってしまいました。
うまくまとめられるようになりたいです…

15 忙しい夜 その1

「ミア、奥のテーブルの4人さんのところに、エール2つ追加お願い
！」

「はいっ！」

今日も夕食時の食堂はお客様でいっぱい。
あたしもジョッキやお皿を運んで行ったり来たりしてる。

「料理上がってるから、それ終わったら頼むよ。」

「はい！」

お酒をとりに厨房に戻ると、クルトさんがあたしの気配を感じて言
った。

台には湯気の立ってる料理が並んでる。

この時間帯が一番忙しい。もうちょっとすると落ち着いてくるんだ
けどね。

ある程度落ち着いてきたので、厨房に戻って汚れた食器の片付けを
していると、扉が開く音が聞こえた。

ちよっとして食堂の方から「ミアちゃん、お客さんみたいだよ！。

」って常連さんの声が聞こえた。

誰だろ？クルトさんの方を見ると「いっておいで。」って言うてく
れたから、手を洗って食堂の方に向かった。

「あー、昼間の衛兵さん！」

「どうも、すみません、お忙しいときに来てしまったようで…」

衛兵さんが困ったように笑う。

「ミア、何かあったの？」

「あ、いえ。ミアさんにはお昼にお世話になりました、その時の話を伺いに来た次第であります。」

マリーさんが、不思議そうな顔してる。

返ってきたのが結構ぎりぎりで、お話す暇、なかったんだよね…。

「えとね、お昼の休憩のときに、迷子の子を見つけて案内してたの。それで、そのときに話を聞きたいって言われたんだけど、時間がぎりぎりだったから…」

「走って帰ってきたのはそういうことだったのね。」

マリーさんも納得してくれたみたい。入口近くの常連さんたちが「ミアちゃんえらいぞっ！」って拍手してくれた。何か恥ずかしいなあ。

「そんなにかからないなら、今は落ち着いてるし、奥でお話すれば？
ここはあたしだけでもいけるから。」

そういつてマリーさんは厨房を指差した。その入り口からはクルトさんも覗いてた。

気になって見に来てくれたのかな？

「はい、それじゃこちらへ。」

「すみません、それではお願いします。」

衛兵さんを連れて、厨房に入るとクルトさんがイスを用意してくれてた。

「クルトさん、ありがとーございます！」

「恐れ入ります。それでは時間もあまりないようですし手早く……」

衛兵さんからの、見つけた場所や状況なんかの質問に、答えられる限り答えていく。

ネコを追っかけて見つけたってところでは、衛兵さんも困った顔してたけど、事実だもんね…。

「ありがとございました。お時間をとらせてしまつてすみません。」

「いえ、こちらこそお昼は時間がなくてすみませんでした。」

「それでは、これで失礼します。お仕事、がんばってください。」

そういつて衛兵さんは席を立てて敬礼してくれた。

「あ、もう1つありました。依頼者、あ、迷子の2人の父親ですが、明日、あいさつに来说たいと言つてましたよ。」

午前中に寄せてもらいたいといつておりましたが……

「たぶん、ここにいますと思います。」

「わかりました、伝えておきます。それでは。」

そういつて、今度こそ衛兵さんは帰つていつた。

さてつと、それじゃ仕事に戻らなきゃ！

何人かの常連さんは、迷子の話を聞いてきたりしたから、食器を運びながら説明した。

ネコの話をする、みんな「へえ。」つて驚いたり、「不思議なこともあるもんだ。」なんて言つてたけど。

そうこうしているうちに、お客様も帰ったり、部屋に戻ったりして、食堂も閉めることになった。

衛兵さんが来た以外は何もなく、今日も無事にご飯の時間は終わりと。
と。

でも、今日はこれで終わりじゃない。
アリサさんが来てくれるんだ。

うう、ときどきしてきたよお…

15 忙しい夜 その1（後書き）

今日は2本立てです。

一晩のことだから一気に進んでみました。

16 忙しい夜 その2

扉がノックされて、アリサさんが入ってきた。そしてもう1人、フエリックスさんも一緒だった。

「こんにちはー。遅くなりましたー。」

「こちらこそ、遅くにお願いしちゃってすみません。飲み物を用意し来るので待っててくださいね。」

「アリサ、遅くにごめんね。リックはどうしたんだい？」

「一応夜だし、ラルフとこの手伝いで一緒にいたから送ってきたんだよ。」

アリサさんとフエリックスさんをテーブルに案内し、マリーさんにお任せして厨房に戻る。

厨房ではクルトさんがすでにお茶の用意をしてくれていた。

「クルトさん、ありがとー。」

「うん、それじゃ持って行ってあげようか。」

お茶の用意を持って、食堂に戻る。

もしかしたらこれであたしの記憶が戻るかもしれないって思うと、ときどきする。

けど何だか不安に感じてたりもして、何か落ち着かないよ…。

あの日、マリーさんとクルトさんに話してみたんだけど。

「それで、ミアはどうしたいの？」

っていうマリーさんからの問いかけに、あたしは困ってしまった。
いろんなことをいっぺんに考えようとしたのが悪かったんだって今
なら思うんだけどね。

そしたらクルトさんが「1つ1つ考えてみようか。」って提案して
くれた。

「ミアは記憶が戻ってほしいのかな？それとも戻ってほしくないの
かな？」

「それは…戻ってきた方がいい…って思う…」

「何かあいまいな言い方になってるけど、気になることがあるのか
な？」

「ん…」

また詰まってしまう。

何か大事なことがわかるかもしれないから記憶が戻ってほしいって
いうのはあたしの本心。

だけど、今の生活はとっても楽しくて、マリーさんやクルトさんや、
他のいろんな人たちもやさしくしてくれてて。

今をなくしたくないっていうのもあたしの本心。

だから、記憶が戻ってほしいし、戻ってほしくない、なんて変なこ
とを考えちゃってる。

「ミア、いろいろ不安もあると思うけど、あんたがここで過ごして
きた日々がなくなるわけじゃないんだよ。記憶が戻っても、戻らな
くても、ミアはミアなんだから。」

「マリーさん…！」

前もびっくりしたけど、今度もびっくりだった。あたしの心なんか

お見通しなのかな…。

「ミアが望むなら、マリーも私も、ミアがここにいてくれるのには大賛成だよ。」

「クルトさん…」

2人やさしい微笑みが、2人のあたしへの気持ちがすごく感じられたから、あたしは決心することができたんだ。

「さてー、それでは今から魔法をつかいますねー。

この魔法はー、ミアちゃんがー、受け入れてくれないとー、効果が発揮できないんですー。

気持ちを楽にしてー、受け入れてくださいねー。」

そういうと、アリサさんは着けていたペンダントを両手で包むようにして目をつむり、集中しはじめた。

アリサさんの両手が、柔らかな白い光に包まれていく。

「マインドサーチ
《精神探査》」

アリサさんの口が言葉を紡ぎ出すと、柔らかな白い光があたしの方に伸びてきた。

その光が到達した瞬間に、あたしの体全体が白い光に包まれる。それをみてアリサさんがちょっと驚いたように目を見張ったような気がした。

そして次の瞬間。

光がパツと消えた。

「あらー？」

「どうしたアリサ、失敗か？」

「いえー、魔法自体は成功していたんですがー…」

ちよつと考えるようなそぶりを見せて、アリサさんがあたしの方に向き直った。

「あ、ごめんなさいねー。ぼーとしちゃって。」

「は、はい、それで…」

「結論から言うんですねー…失敗しましたー。」

ふえ…?! ってことは…記憶戻らないってこと…?

あ…フェリックスさんがずっこけてる…

マリーさんとクルトさんも固まってる…

「ただー…」

「は、はい？」

「何か封印…か、呪い、のようなものが、関係しているみたいですねー。」

あたしの魔法よりもー、強い力で遮断されちゃいましたー。

まあ、記憶以外にー、影響しているわけでもなさそうですよー。」

はあああ~~~~つ、何か気が抜けちゃった…

マリーさんとクルトさんの方を見ると、2人とも疲れてる感じだったけど笑ってくれた。

「封印か呪い、か…俺たちも何かわかったことがあれば、連絡するようにするわ。」

「ああ、それじゃ頼んだよ。アリサもまたお願いね。」

フェリックスさんの一言に、マリーさんが答えて、固まっていた場が動き出したようだった。

「それじゃ俺たち、ラルフんとこ戻るわ。」

「お役に立てなくて、すみませんー。」

フェリックスさんとアリサさんが席を立ったので、3人でお見送りに出た。

「アリサさん、わざわざありがとーございました。」

「あ、わすれるとこでしたー。」

「はい？」

「ミアちゃん、白色魔法の素質があるみたいですよー。」

「ほへ…？」

「あたしの魔法にー、共鳴してたから、たぶん間違いないと思いますー。それではおやすみなさいー。」

さらっととんでもない一言を残してアリサさんはフェリックスさんと去っていったんだけど…

固まってるあたしの両手を、両側からやさしい手が包んでくれた。

そんな2人に、あたしも笑顔で答える。

これからもよろしく願いします！そんな気持ちを込めて。

宿に入ろうとしたとき、いつの間にか聞きなれた「にゃー」という声が聞こえた。

16 忙しい夜 その2（後書き）

少量も多めになりましたが、これでこの晩のお話は一区切りです。
初の2本立てはなかなか忙しかったです^| ^ ;

17 来客

「マリーさん、おはようございます!」

「おはよう。今日もしっかり頼むよ。」

昨日の晩は何かいろいろあったけど、今朝もいつもと同じように始まったみたい。

「それじゃテーブルの準備お願いね。」

「はい。」

さすがにもう慣れてるし、端のテーブルからイスを降ろして拭いていく。

マリーさんはカウンターの途中でいろいろ準備中。

「終わりましたっ。厨房入りますね!」

「ご苦労さん、頼んだよ。」

いつも通りマリーさんは、顔を上げて笑顔で見送ってくれた。

「クルトさん、おはようございます!」

「おはよう、ミア。そろそろお客さんも来るころだね。がんばっていこうか。」

「はいっ!」

手早くお皿を並べていくと、クルトさんがどんどん盛り付けていく。今日も忙しくなりそうだね。がんばるぞっと!

朝の食事の時間も終わり、片付けに入る。
まずはマリーさんと、食堂の方から。

床を掃いたり、テーブルを拭いたり。

それが終わったら、厨房で洗い物をしているクルトさんのお手伝いに。

でも、クルトさん、お料理だけじゃなくて、洗い物も早いから、あたしが行くときには半分以上終わっちゃってること多いんだよね。

一段落して、ちょっと休憩つてときに、扉がノックされて、1人の男の人が入ってきた。

こんな時間にお客さんが来ることはあんまりないんだよね？

それに、その人は普段あんまり宿では見ないような、身なりのいい感じのものだった。

「いらつしゃい。」

「失礼、こちらにミアさんというお嬢さんが居られると伺いましてな。」

「ふえ？…あたし？」

何だろう、つて思ったとき、また扉が勢いよく開いて、見たことのある男の子が飛び込んできた。

さらにその後ろからもう1人男の人が…。

「ねーちゃん！」

「アルくん…何でここに？」

「アルフォンス…馬車で待っていると言っただろう。」

「すみません旦那様、お坊ちゃまが急に飛び出しまして…」

少しきつい口調で男の人に怒られたアルくんは、「だってえ…」つて、口をとがらせてる。

「まあよい。…お見苦しいところを見せてしまいましたな。

もうおわかりかもしれないが、私はアルフォンスとメリンダの父親で、グレン・ヴァルヴィックと申します。

昨日は、息子と娘がご迷惑をお掛けしたようです。」

「あ、いえ、そんな、ぜんぜん…」

グレンさんが頭を下げちゃうから、慌てて両手も首も横に振りまってくった。

「宿から出ないようにときつく言っていたのですが、どうも目を盗んで抜けだしたようで。」

「ふえ…」

「ミアさんには、あらぬ疑いも掛けてしまったようで申し訳ない。誘拐されたという可能性も捨てきれなかったもんでね…」

クルトさんとそんなに変わらなそうな歳だと思ったけど、そういつたグレンさんはちょっと疲れてて、何か歳をとってるように見えた。大変そうだなあ…

「で、でも無事でよかったですね…」

「おまえもミアさんにきちんとあいさつをしなさい。」

「は、はい父上。ごめいわくをおかけしてもうしわけありませんでした。」

急に堅苦しいしゃべりになるアルくん…

「さあ、お前はもう馬車に戻りなさい。」

「ええ〜！」

「…戻るんだ。」

しぶしぶといった様子で、外に出ていくアルくん。おうち、大変なのかな…

「まったく…申し訳ない。それで、お礼の方なのだが。」

そういつて、お付きの人に合図すると、お付きの人が小袋を差し出した。

金属が触れ合う音がしてる。もしかしてお金…？

「ええっ？！そんなお礼なんてもらうようなことしてませんっ！」

またぶんぶんと手と首を横に振ってみただけど、お付きの人は困ってる…

グレンさんもちょっと眉をひそめてる。うう、機嫌損ねちゃったかな…

でも、お願いされてやったことでもないし、受け取りづらいな。困ってる、マリーさんがしゃべりだした。

「ヴァルヴィックつて、あのヴァルヴィック商会でしょう？」

払わずに済むのならそれでいいのでは？」

「ふむ…まあ、私としては息子と娘が世話になったことに感謝を表すための手段の1つだったわけだが。」

恩人に、いらぬ恩を売るものでもないですな。

他ならぬ『プリマ・ホワイト白の舞姫』の助言、受け入れさせていたごう。」

マリーさんに軽く会釈したグレンさんは、手で合図して、お付きの

人を下がらせる。

あれ、何かマリーさん、ちょっとグレンさんにらんでる…？

「忙しいときに、邪魔をいたしましたな。それでは失敬する。」

「あ、す、すみませんでした！」

思わず頭を下げたあたしを見て、グレンさんの表情が少し崩れた。厳めしい顔をしてたけど、今は優しいそう。

「あなたは…不思議な感じがするな。」

「ふえ?!」

何だかよくわかんないけど…ま、いいよね。

グレンさんについて外に出ると、立派な馬車が停まっていた。

お付きの人が扉を開けると、グレンさんが乗り込む。

閉められた扉の窓から小さな顔が2つ覗いた。

「ねーちゃん、ありがとー。またなー！」

「おねいちゃん、ばいばい。」

笑顔の2人にあたしも手を振る。

「もう勝手に抜け出しちゃだめだよー！」

ところで…ぷりま・ほわいって何だろ？

18 はじめてのお出かけ その1

いよいよお出かけの日がやってきた。

っていつても、朝は忙しいのでいつも通りお手伝いをして、ちょっとゆっくり出発の予定。

片付けも一段落したから、部屋に戻って服を着替える。

下に降りて行くと、ユーリさんがもう来てて、マリーさんと何かしゃべってた。

「あ、ミア。準備できたのね。」

「ミアちゃん、おはよー。」

「おはよーございます!」

「いい天気でよかったね。」

そつえばそうだよ、雨なんか降ってたら、お出かけできなかったんだ…。

そんなこと全然考えてなかったや…。

「よかった。間に合ったようだね。」

クルトさんが厨房から、バスケットと布の包みを持って出てきた。

「これは、お弁当だよ。今の時間からだとお昼をまたぐだろうしね。」

「クルトさん、ありがと!」

「ミアがお世話になるし、これくらいはね。」

ちゃんとミアにも背負えるようにしておいたから。それと、ミア、これも。」

そういつて布の包みを開けると、中から出てきたのはナイフだった。

「外では何かと役に立つかもしれないから、持って行きなさい。」

「は、はい……」

「ちゃんと研ぎ直してもらってるから、特に問題ないと思うけど、ケガには注意するんだよ。」

それじゃユーリアちゃん、ミアを頼んだよ。」

「2人とも、気をつけてね。ユーリ、今日はうちで夕ご飯用意してくから。」

「ありがと、マリーさん！それじゃ行きますか。」

「は、はいっ。お願いします！」

マリーさんは、腰に短めの剣を差して、かごを背負ってた。

あたしもお弁当のバスケットを背負う。ひもの長さぴったり。」

「行つてきまーす！」

マリーさんとクルトさんに見送られて、あたしたちはいよいよ出発！
まずは門に向つて通りを歩いて行く。

「ミアちゃん、荷物重くない？」

「あ、はい、だいじょうぶです。」

「そつ、途中で疲れたらすぐに言つてね。」

「はいっ。」

「ま、街を出てもしばらくは平坦だから大丈夫かな。」

お話しながら歩いて行くうちに、門までたどり着いた。

よく考えたら、あの日、外から来た時以来の門、なんだよね。

前の記憶あんまりないけど…

ユーリさんが、衛兵さんとちょこつとお話して、外に出ることになった。

「ふっわぁ…広い…」

「あはは、そつか。初めてだもんね。」

あたしがびっくりしてるのを見て、ユーリさんが楽しそうに笑う。でも、ほんとに広いんだよ。木は生えてるけど、建物がないから、見通しがすごくいいの。

草が生えてる中を、大きな道がすーっとのびてる。

何だか吸いこまれるような感じがして、道へと足を進めようとしたら、ユーリさんに呼びとめられた。

「ミアちゃん、勝手に行っちゃだめよ。」

「はう、ごめんなさい…」

「ま、今の時期ならいきなり危ないなんてことはないと思うけど、必ずあたしの後ろについててね。」

「はいっ。」

大きな道沿いを歩いていくと、途中で荷馬車の人達とすれ違ったりもする。

ユーリさんに聞くと、商人たちは基本的に大きな道を使っているみたい。

そのほかにも、旅をしている人たち、冒険者も移動には道を使ってるんだって。

たくさんの方が使えば、それだけ、危険も寄ってこないってことみたいだけど…

そこそこ歩いてきたところで、ユーリさんが立ち止まる。

「ここからちよつと道を外れるから、一応足元注意ね。」

「一応？」

「ま、そんなにでこぼこもしてないから大丈夫だと思うけど…ね。」

ユーリさんについて歩いて行く。草もそんなに多くないし、とくに歩きにくいこともなかった。

途中、お花がたくさん咲いているところとかもあって、思わず「わあ！」って声をあげちゃった。

そしたらユーリさんも、「帰りにもつかい寄るから、ちよつと摘んでいく？」って言うてくれたの。

んゝ、楽しみ♪

ちよつとお腹がすいてきたかなって思いだしたころ、あたしたちは、川にたどり着いた。

「さてと、休憩にしましょ。だいぶ歩いてミアちゃん疲れたんじゃない？」

「はう、ちよつとだけ…」

えへへって笑いながら返事したら、ユーリさんも笑ってた。

「いい時間だし、お弁当にしましょ。」

「わーい、それじゃ準備しますー。」

バスケットを降ろして開けてみると、パンにお肉や菜っ葉がはさんであるのや、ゆでた卵や果物なんかも入ってる。

あとは…革？でできた袋…？何か水みたいなのが入ってる…

「あれ、ミアちゃんそれしらない？水袋。井戸とかなくて、お水汲

んだりできないところに行くときに、お水を入れていくのよ。」

「そつか…いつも桶で汲んだり、かめやたるに貯めてたから…」

「街中ではあんまり使わないわね。さて、それはともかくとして、いただきますよ。」

「はい、いただきます。」

クルトさんのお弁当は、いつものご飯と変わらずおいしかった。

ちなみに、水袋の中身は、ユーリさんところから買ってるお茶でした。

お弁当食べて元気回復♪

この後、ユーリさんの探してるものを採りに行くみたいだし、がんばらなきゃ！

18 はじめてのお出かけ その1（後書き）

いつもつたない文章にお付き合いいただきありがとうございます。
累計1000アクセス突破、本当にびっくりします。
これからもよろしく願います！

19 はじめてのお出かけ その2

「さてと、それじゃそろそろ行きましょっか。」

お弁当も終わってちよつと休憩もとって、リフレッシュできたし、
どんどんいけそう！

バスケットも、お弁当の中身がなくなって、水袋も中身が減ってる
から軽くなってるし。

「つと、そうだ。これつけといってくれる？」

そういつてポーチから出したのは小さなベルだった。

ユーリさんも自分のかごにつけてる。

「これ、なんですか？」

「森は見通しが悪いから、動物もあたしたちに気づかずに出くわし
てしまうことがあるのよ。」

出会っちゃうと…ケンカになることもあるからね。こっちから音
を出して、動物に注意してもらったためのものよ。」

「ほへ…」

わかったようなわからなかったような…とにかくバスケットにつけ
てみた。

動くたびに、カラコロ鳴ってる。

「ここから、しばらく川沿いに進んだら、ちよつと森の中に入るか
ら、足元注意してね。」

川に沿って歩いて行くと、川が分かれてるところまで来たんだけど、

ユーリさんはその川の細い分かれた方をたどっていくみたい。
生えてる木もだんだん増えてきて、ちよつと森っぽくなってきた。

「根っこに気をつけてね。変に踏むと、足痛めちゃうから。」

今までに比べると土は柔らかくて、たまに木の根っこが出てたりして結構危ない。

しつかり足元確認しなきゃ…

「いたっ！」

「ミアちゃん、大丈夫？」

ユーリさんが慌てて声をかけてくれる。

左手の甲に、赤い筋がついてた。枝を引っ掛けて、すっちゃったみたい。

下ばかり見てて気付かなかったけど、低い木の枝も結構出てる。

「あうー…」

「あらら、下も木をつけないといけないけど、前も見えてね。」

そういつて、腰のポーチからきれいな白い布を出して手に巻いてくれる。

うー、迷惑かけちゃってる…

「ごめんなさい…」

「気にしない気にしない、っていうか、あたしもちゃんと注意してあげてなかったね。ごめん。」

「そんな、ユーリさんは全然悪くないもん。」

「ありがと。もうちょつとだから、がんばろうね。」

ふふっ、と笑ってユーリさんは歩き出した。

今度は前も注意しながらついて行く。もうケガしないんだから！前を見て気付いたのは、少し薄暗い木々の間から、木漏れ日が射してること。

風が吹くと、光もさやさやと揺れてる。何だか不思議な感じ。前を見て、下を見て、また前を見て…忙しい。けど、ちゃんとついていける。

…あれ、もしかして、ユーリさん、ゆっくり進んでくれて…る？

「ユーリさんもしかし…」

「さあ、ついたわよー！」

あたしがしゃべろうとしたときに、ユーリさんがそう言った。

すこし開けたその場所は、泉になっていて、たくさんの草が生えてた。

「すごい、きれい…水の上にも生えてるんだ。」

「ここで摘んでいくから、ちょっと待っててね。」

そういうと、ユーリさんはブーツを脱いで、裾をまくって泉に入っていく。

なれた手つきでハーブを選んで摘んでいく姿は、さすがって感じだった。

「あ、ミアちゃん、さっきのケガ大丈夫？」

巻いてもらった布を外すと、赤く筋になってはれてる…。でも、傷にはなっていないみたい。よかった♪

「だいじょーぶです。傷にもなってなかったみたい。」

「そっか、よかったね。こっちももうちょっとだから待っててね。」

そういいながらも手早くハーブを摘み取ってはかごに入れていくユーリさん。

そのまま入れてるのもあれば、ぬれた布に包んでいるものもある。いろいろ違うんだね…

「これくらいでいいかなつと。ミアちゃん、おまたせー。」

ユーリさんは泉から上がると、手足を拭いてブーツを履いていく。持ってきたかごは、まだまだ余裕がありそうだけど…

「ユーリさん、まだまだ採れそうだよ？」

「あ、うん、でもね…全部摘んじゃうと、次から採れなくなっちゃうからね。」

ちゃんと残しておかなきゃだめなのよ。採りすぎて使えなくなってももったいないし。」

「ふーん…」

「あともう1か所回しましょう。ミアちゃん、もういける？」

「いけまーす。」

泉を後にして、また森の中を進んでいく。

カラコロとなるベルのおかげか、動物たちに出くわすこともなかった。

「はい、次はここ。」

「ほえ？…ここ？」

今度は一見何もない森のはずれ近く…だけど。

「ほら、この木をよく見て…」

ユーリさんが指さしたあまり大きくない木には、青紫色の実がなってる。

これ、市場でも見たことがある…甘酸っぱいやつ？

「すごいでしょ。お茶の材料にもなるけど、ミアちゃんもお土産に少し摘んでつたらどう？」

「わーい、そうしますっ！」

いくつも生えてるその実から、おいしそうな大粒を選んで摘んでいく。

左手いっぱいになったところで、ちょっと困っちゃった。

「ミアちゃん…何してるの？」

「あ、ももてない…です」

「…背中に背負ってるの何だっけ…？」

ユーリさん、必死に笑いをこらえてるけど…

あ。バスケットがあるんだった…

ユーリさんに照れ笑いで返しながら、バスケットを開けた。

ちようど、お弁当を包んでいたナプキンがあるから、摘んだ実を包んでおく。

もうちょっとだけとって、終わりにしようかな。これも採りすぎるときっとだめだね。

あたしが摘み終わる頃には、ユーリさんも採った分をかごに詰め終わってた。

「さて、それじゃそろそろ帰りましょ。夕方までには街に戻るわ。

「はい。」

帰りはそのまますぐに森を抜けて、原っぱを歩いてく。

たくさん歩いたけど、楽しかったなあ…

ボーっと歩いてたら、ユーリさんがふと思い出したように声を上げた。

「あ…」

「ユーリさん、どしたの？」

「帰りにお花摘んで帰るって言ってたのに、違う道で来ちゃったなって…ミアちゃん、ごめん！」

「あ…そういえば…」

うん、そんなこと言った気がする…けど、今日は盛りだくさんであたしもすっかり忘れてた。

申し訳なさそうな顔のユーリさんを見ると、何だかあたしの方が申し訳ないよ…

「ユーリさん、だいじよぶ。あたし、今日ほんとに楽しかった！だから、お花のこと忘れてたよー、えへへ。」

「そう？ほんとごめんね。今度また機会があれば連れて行くから。」

「え、いいの？！…あ、でもあたしと一緒にいろいろ時間かかりたり大変じゃ…」

「ううん、あたしも楽しかったし、またミアちゃんで行きたいって思ってるから。」

もちろん、ミアちゃんが嫌じゃなければ、けどね。」

そういつて微笑むユーリさんの腕にぎゅってして、あたしたちは帰

り道を歩いていきました。

マリーさんもクルトさんも、おみやげ喜んでくれるかな……？

19 はじめてのお出かけ その2（後書き）

青紫色の実、イメージはブルーベリーです。

20 眠れない夜に

その日、あたしはなぜか寝付けない夜を迎えてました。

今日も1日、いっぱいがんばったから、体は疲れてるのに。

ちよっとお水を飲もうかなって思ったけど、水差しにお水を汲むのも忘れてたみたい。

しょうがないから、厨房まで行くことにした。

キキイ…

部屋の扉が音を立てて開く。

お客様もお休みだし、マリーさんもクルトさんももう寝てるはずだから、静かに行かなきゃダメなのに。

扉の音は意外と大きく鳴っちゃう。

あたしの部屋は2階の一番奥の、廊下の角を曲がったところにある一番小さな部屋。

マリーさんとクルトさんがここを買い取る前に、やっぱり従業員の人が使ってた部屋だっていった。

お客様が泊まるには、ちよっと小さすぎる部屋。

その奥の部屋から階段までは、お客様の部屋の前を通らなきゃいけない。

できるだけ音をたてないように、そろり、そろりと足を踏み出す。

無事廊下を通り、階段に差しかかる。

ギシ、ギシ…

普段はあんまり気にしてなかったけど、階段を踏み出すたびに音が

鳴る。

真つ暗な食堂は、それでも窓の隙間や、扉の隙間から、わずかに差しこむ外からの光で、ぼんやりとその景色が見えてる。

イスはテーブルに全部上げてあるから、引つ掛けることもないはず。テーブルの間を抜けて、カウンターの脇から厨房に入る。

厨房の扉から出た廊下の向かいには、マリーさんとクルトさんのお部屋や、物置のお部屋が並んでる。

音をたてないように…

お水をためてるかめは…これだよね。

ふたを開けてみると…

「あれ？からっぽ…？」

思わず口から言葉が出ちゃった！あわてて口を押さえてじっとする…だいじょうぶ、誰かが起きた気配はないみたい。

それにしても、お水使いきったのかなあ…

どうしよう…っていつても、すぐくのどが渴いてきたし、お水なしでは眠れそうにない。

やっぱり井戸まで行くしかないよね…

厨房に水差しを置いて、代わりに桶を持ってお勝手口に向かう。

カチャ。

よかった、鍵はしっかり油も差してあるみたいで、そんなに大きな音もなかった。

「ふわあ…」

扉を開けると、よく晴れた空にたくさんの星と、少し欠けてるお月

さま。

思ったよりも明るくて、これならあんまり怖くない…かな…でもでもやっぱり、ちょっと走って井戸に向かう。

夜の街は、お昼と全然違う表情で、まるで別世界のよう。

淡い明かりの中を1人、すこし寂しいような、そんな気持ちも感じながら。

井戸をこぐとお水が出てくる。持ってきた桶に半分くらい。そんなにもいらないかもしれないけど、こぼしたらやだし、半分くらい。

よあし、それじゃいそいで帰らなきゃ。

桶を持ち上げようとしたとき、不意に強い風が吹いて、寝間着の裾がひるがえる。

慌てて押さえて、目をつむる。

風がやんで、目を開けると、あたりは暗くなっていた。

「あ、れ？」

急に不安が押し寄せてきた。

見上げると、空に黒い雲がかかっている。

さっきまで晴れてたはずなのに…

お水を汲んだ桶を持って、あたしは走り出した。

宿のお勝手口が見えたところで、やっとちょっとほっとした。そうだ、あんまり音をたてないようにしなきゃ…

…あれ？扉閉めなかったっけ…ちょっと隙間が開いてる。

そっか、たくさんの星とお月さまを見て「ふわぁっ」ってなって…
閉めるの忘れてた、かも？

厨房に入って鍵を閉める。

カチャリ。

部屋の中は外よりずっと暗い。しばらく目が慣れるまではじっとし
なきや。

ぼんやりと部屋の中のようにすが見えてきた。
桶からゆっくりと水差しにお水を注ぐ。

早く部屋にもどらなきや。

食堂を抜けて階段を上がつてく。

やっぱり曇ってるせいかな、行きより暗い気がする。
ゆっくり、ゆっくり…ギシ、ギシ…
できるだけ音が立たないように。

あとは廊下を渡りできれば、部屋に帰れる。
そろり、そろりと進んでく。
角を曲がればあたしの部屋だ。

無事に部屋の前にたどり着いた。
あれ、扉閉めてなかったっけ…こんなのばかりだ。
中に入って扉を閉める。
少し音が出たけど、きつとだいじょうぶだね。

隅の台に置いてたコップにお水を注いで飲む。

汲んできたお水は、まだ冷たくて、のどにしみこむみたい。

ふう、満足できたかな。

ちよつと動いたからかな、眠れそう…かも？

台に水差しとコップを置いてベッドに向かう。

ベッドに入ろうとしたとき…

あたしに向かつて…

何かが飛びかかってきた…

生あたたかい何かが…

「ミア、遅いわね…？」

いつもならもうとっくに降りてきているはずなのに、今日はどうして
たのかしら？

ちよっと見に行きますか…

コンコン。

「ミア？起きてる？」

返事がない…あら、鍵がかかってないわね。
ガチャ。

そこでわたしが見たものは…

床で寝てるミアと…

ベッドにちょこんと座ってる黒いネコでした…

20 眠れない夜に（後書き）

せつかなので怪談っぽく…
しようと思ったけれど難しかったですTT

21 眠らされた翌日

今日はちよつと朝から不機嫌なあたし。
原因は目の前にある、かわいい子。

朝、気がついたら、マリーさんに起こされてたの。

あたし、床で寝て…倒れてたみたい。

左のほっぺに、床の形がくつきりと残ってて、マリーさんが苦笑してた。

ぼーとした頭で、こんなことになった原因を思い出そうとしたんだけど。

ふと眼をやると、あたしのベッドに黒いネコ…

食堂の準備をしながら、マリーさんに昨日の晩のことを思い出しながらしゃべってた。

のどがかわいてお水を飲もうとしたこと。

水差しに汲むのを忘れてたこと。

厨房のかめにもみずがなかったこと。（これ、実は毎朝新しい水をクルトさんが汲んできてたんだって。）

外に汲みに行ったこと。

そして部屋に戻ってお水を飲んだこと。

ここまではわりとはつきり覚えてたんだけど…

「そのあと、よく覚えてないの…」

「いるはずのないネコくん、びっくりしたのかしらね…」

それにしても、好かれてるわねえ。」

ふふつと笑いながらマリーさんがそういったけど、あのネコくんのせいで一晩床で寝てしまったのなら、何か悔しい気がする…

朝のご飯時間も終わって、今日はマリーさんとクルトさんが2人で出かけてる。

何でも、冒険者ギルドからの依頼を、うちの宿でも扱えるようになるっていうことみたい。

よくわかんないけど…

あたしはお留守番。

お昼もあたし1人じゃ何もできないから、今日はお昼の食堂はお休みにしてる。

休みでいいよって言われたんだけど…

誰もいない食堂で、なぜか黒ネコと一緒にいるあたし。

外したエプロンにじゃれついて遊んでるのを見ると、かわいいなっと思う。

アルちゃんとメリーちゃんの迷子事件のときには、この子がいなきゃあたしは2人に会うこともできなかったし。

でもやっぱり…

「昨日のはひどいよねえ…」

ぽつり、と呟いても、返事をしてくれる人は誰もいない。

マリーさんは、このネコくんの関わった話を全部わかった上で、

「そんなになついてるなら飼ってもいいんじゃない？」

って言ってくれた（昨日のことも含めていいっていうのは何だかなんだけど）けど、あたしは迷ってる。

ネコを、っていうか生き物を飼ったことはない（少なくともオボエテナイ…）あたしでも、飼うのは大変だろうって想像はできる。

ましてやここはお客様もくる冒険者の宿で、あたしは置いてもらってるだけなんだもんね。

あたしがそんなに悩んでることを知ってか知らずか、ネコくんはいつのまにかエプロンにじゃれつくのをやめて、エプロンにくるまって寝てた。

「もー、キミのことを考えてるのにい。」

ふう、そろそろお昼だね。ちょっとお腹すいてきたし、ご飯にしよう。

ネコくんは寝てるみたいだし、このままでも大丈夫だね。

厨房に行くと、朝のついでにクルトさんがつくってくれたトマトのスープと、薄く焼いたパンがあった。

温めて、っていったけど、1人分だし、火を起こすのももつたないからいいや。

…ちゃんと1人でも火は起こせるんだからね？

そのとき。

コンコン。

表の玄関をノックする音が聞こえた。

「はい？ちよっと待ってくださいねー！」

おっきな声で返事をして玄関に急ぐ。

あ、ネコくんがびくつとした。

扉を開けると、フェリックスさんたちがいた。

「よ、ミアちゃん。マリーさんたちうわあっ!」

急に叫んだフェリックスさんにびくくりしていると、駆けていくネコくん…逃げた?!

ま、いいよね…本人(?)の意思だし…

「びくくりした…わりい、逃がしちゃった?」

「ううん、いいです。それよりどしたんですか?」

「ああ、ちよつと挨拶にね。しばらく出かけることになったから。」

「にう…マリーさんとクルトさん、今日、冒険者ギルドにお出かけなんです。」

「あれ、そうなんだ。俺たちもさっきまで行つてたのになあ。」

振りかえつた先で、アリサさんとエリカさんと…もう1人男の人が…誰だろ?

あたしの視線に気づいたのか、フェリックスさんが紹介してくれた。

「新しく一緒にやってくことになった、レックスだよ。」

レックス、この子はミアちゃん。ここのお手伝いな。」

「どうも、レックスです。新しく『白を継ぐもの』に入れてもらつたっす。」

「は、はいいい…」

手を取られてぶんぶん握手されたもんだから、あたし目が回っちゃっ…

「レックスくん、ミアちゃんがふらふらですよー。」

「はっ、申し訳ないっす!」

「だ、だいじょうぶです…」

アリスさんが助け舟出してくれてよかった…。

「しょうがない、夕方出直すわ。マリーさんとクルトさんによろしく伝えといてな。」

「はい、わかりました。」

「それではー、ミアちゃんまたですー」

アリスさんが手を振ってる後ろで、エリカさんも手を振ってくれた。

あたしも手を振って返す。

しばらく出かけるってことは、旅に出るのかなあ。楽しいかなあ？
また夕方くるみたいだし、どこに行くのか教えてもらおっかな。

と、そうだ。ご飯の準備中だったんだ。

…ネコくんはどこにいったんだろ？でもまたすぐに会える気もする、
ね。

21 眠らされた翌日（後書き）

昨日の続きです。

ネタばらし？ ばればれでしたよね ^
| ^
;

22 しばしのお別れ

お昼ご飯を食べ終わっても、マリーさんは帰ってこなかった。
お出かけしようかとも思っただけど、フェリックスさんたちの伝
言もあるし、宿にすることにした。

でも、せっかく時間があるから、何かしよう♪

そだね…壁のランプって、普段あんまり磨く時間ないよね？
食堂の壁にかかってるランプくらいは…

背伸びしても…届かない…

どーせちっちゃいもん…

はあ…せっかくいい案だったのになあ。

あ、でもイスに立てばいけるかな。

イスを運びながら、アリスさんがあたしも魔法の素質があるって言
ってたことを思い出した。

背が高くなる魔法とかないかなあ…

そもそも魔法ってどうやって使えるようになるんだろ？

アリスさんに聞けばいいかな？あ、でもしばらく出かけちゃうんだ
よね…

ユーリさんならだいじょうぶかな？今度行ったとき聞いてみようか
な…

カランカラン

扉のベルが鳴って、マリーさんとクルトさんが入ってきた。

「ミア、ただいま。…って、何で壁際に座ってるの…」

…マリーさん、固まっちゃった。クルトさんも、口開いてるし。あたしも何でイスを置いて座ってたかなんて説明はできないよ…？ランプとるためだったのに何で座ったんだろ…

気を取り直して、伝言を伝えないとね。

「お昼くらいにフェリックスさんたちが来たよ。

お出かけしてるって言ったら、夕方にまた来ますって。」

「ふうん、何かあったのかしら？」

「しばらくお出かけするって言ってたよ。」

「そっか。まあ、あの子たちが来てからまた聞きますか。」

そっいつて、イスを2つ引いて、クルトさんも一緒に座る。

「ミアにもちよつとお話ね。」

あたしも壁際に座ってたイスと一緒にテーブルまで移動して、お話体勢に入った。

「今度から、ギルド業務も一部請け負うことができるようになったの。

だから、お客さんが増えるかもしれないのよ。」

「業務って？」

「各種申請や、依頼の紹介なんかができるようになったんだよ。

まあ、基本的にややこしいことはマリーが私がやるから、ミアは今まで通りがんばってもらえれば助かるんだけど。」

「そうね。いろいろ新しいこと聞かれるかもしれないけど、わたしたちに回してくれればいいからね。」

「うん、がんばるね!」

あんまりよくわかんなかったけど、お客様が増えるのはいいことだよね。

よっし、がんばるぞっ!

そのあと、いつものように夜に向けての準備をしてただけど、フレックスさんたちがまた来たから、クルトさんも厨房から出てきて、一旦みんなで食堂に集まったの。

「マリーさん、クルトさん、今度新しく一緒にやってくレックスってんだ。」

「は、はじめまして、自分はレックスといいます!今後ともよろしくお願いします!」

「レックス、緊張しすぎだろ…」

「で、でもあの『ブリマ・ホワイト白の舞姫』っすよ?」

昼間よりも緊張してるのがよくわかるレックスさん。マリーさんに緊張してるみたいよね?

クルトさんは笑ってるけど、…あれ?マリーさん真っ赤つか…?

「そ、その話はもう終わり!いつまで古い話もちだすの禁止!」
「でもー、古いだなんてー、とんでもないですよー。」

マリーさんの叫びに、アリスさんが返す。エリカさんも、うんうんと首を縦に振ってる。

「マリーさんって、すごい人？」

思わず出ちゃったあたしの質問に、一瞬シーンってなったあと、みんながニヤニヤした。

あ、マリーさんだけ怖い…

「そりゃまあ…」

「リック…わかってるわね？」

「別にそれくらいいいんじゃない？…ミアちゃん、マリーさんはすごい人だよ。」

フェリックスさん、棒読みだよ…あれ、アリサさんも、エリカさんも、レックスさんも固まってる。
クルトさんは笑ってるけど。

「クルトも、もういいでしょー…」

…マリーさん、あいかわらず真っ赤つか。

…フェリックスさんたち、固まりっぱなし。

クルトさんの方を見ると、人差し指を口にあてて、シーってしてる。
やっぱり聞いちゃだめなのかな。

何かちょっと変な雰囲気になったから別の話を振ってみようかな…

「んー、あ、そーだ。フェリックスさんたち、お出かけてどこいくの？」

「あ、ああ。そうだった。俺たち、しばらくタレイアから出る事になったんだよ。」

んで、マリーさんとクルトさんにあいさつに来たってわけで…」

あ、やっとマリーさんが普通になってきた。

「それで、今度はどこまでいくの？」

「ハルナソスまで商隊の護衛と、そこで別件がありそうなんだよな
」。呼び出し食らったから。」

「ふうん、王都かあ……。ま、気を付けて行ってくるんだよ。

帰ってきたらまた顔を出しに来てちょうだい。」

「わかってるって。んじゃ、俺たち、打ち合わせもあるから、そろ
そろ行くわ。」

そういつてフェリックスさんたちは席を立った。

お見送りに行こうとしたら、夜の準備もあるだろうし、いいよって
言ってくれたんだけど、マリーさんもクルトさんもお見送りする気
満々みたいだし、あたしも玄関までついてく。

「それじゃ、気を付けてね。」

「へマするんじゃないよ？」

「またお話聞かせてくださいね！。」

3人で手を振ったら、フェリックスさんたちも元気に手を振って
くれた。

次に会えるのはいつかな？

「さて、それじゃ夜の準備しますか！」

「そうだね。」

「はい！」

今日もいっぱいお客様来るかな♪

22 しばしのお別れ（後書き）

タレイアは、この街の名前です。

ハルナソスはこの国の王都の名前ですね。

それにしてもマリーさんってば…

23 お祭りにむけて

今日は、クルトさんと市場に買い出しに来てるんだけど、何だかいつもより忙しそう。

「ん、ミア、どうかしたのかい？」

「クルトさん、今日は何だか市場全体が忙しそう。」

「ああ、きつと建国祭のためだね。」

「ケンコクサイ？」

「そう、このミューゼスの国の誕生日をお祝いするお祭りだよ。」

そういえば、洗濯に行ったときに、近所のおばさんたちもお祭りのこと、話してたなあ。

「まあ、うちは宿だから、これといって何かするわけじゃないけど、近所のお店でもお祭りに向けていろいろ準備しているところはあるんじゃないかな。」

「ふみゆ、楽しそうです！」

「タレイアでは2日間だけど、王都では10日間ほどかけて、お祭りがおこなわれるそうだよ。」

「えーっ？！すごいです…」

よっぱど変な顔になったのかな…クルトさんがあたし見て笑ってる…でも、見に行く暇はないのかなあ。

そのあと、何件かお店を回って食材を注文したり、直接受け取ったりと市場を回ってきて、最後に酒屋さんに寄ったの。

今日はリユートさんだけなのかな。おじさんは見当たらないけど。

「ああ、クルトさん、いらっしやいませ。ミアさんもお久しぶり。」
「こんにちは。リユートくん、この間言ってた新しいお酒はどうなってるかな？」

「順調ですよ。建国祭で少し出してみようかと思っています。反応がよさそうなものを量産、ですかね。」

「そうか、うちも新しいのを入れてみたいし、またよろしく頼むよ。あと、いつものをまた届けておいてほしいんだけど。」

「すみません、お急ぎでしょうか？」

リユートさんの顔が曇った。どうしたんだろ？

クルトさんも、不思議そうな顔をしてる。

「実は、建国祭前で注文が立て込んでしまつてて…親父も手伝いの子も出ずっぱりなんですよ。」

「なるほどね。来れるとしたらいつくらいになるんだい？」

「夜にはお伺いできると思いますが…お忙しいですよね…」

「いや、それでかまわないよ。」

ただ、さすがに表からというわけにはいかないから裏口においてもらえればいい。

大変だろうけどお願いするよ。」

「いえ、それではそのようにさせていただきます。ありがとうございます。」

クルトさんもあたしも、荷物を抱えて宿への帰り道。

「みんな忙しそうです。でも何かにぎやかで楽しそう。」

「そうだね。この建国祭と新年祭は街中大騒ぎになるからね。」

「ふわぁ…早くお祭り見たいです！」

「ミアにとっては初めてのお祭りだね。」

「何だか今からドキドキしてきたあ……」

そんなあたしを見て、あははって笑うクルトさん。つられてあたしも笑っちゃった。

その日の夜も、いつもと同じように食堂はにぎわってた。

壁の掲示板を見に行く人もたくさんいた。（何かギルドからの依頼を貼りだしてるんだって。ギルドまで確認に行かなくても依頼がわかるってことみたいだけど。）

何度目かに厨房に戻ったときに、お勝手の扉がノックされた。きつとリユートさんだね。

「ミアごめん、手が離せないから頼む。出たところに置いてもらっていいから。」

「は、はいっ！」

火に向かつてる最中のクルトさんが、いつもよりちよつと鋭い声で言うから、ちよつとしゃきつとなっちゃう。

ぱつと扉を開けると、リユートさんじゃなくて酒屋のおじさんがいた。

「わっ！」

「おっと、嬢ちゃんか。驚かせちゃったかい？」

「い、いえすみませんっ！」

「頼まれてたやつ、どうすればいい？」

「あ、えつとそこに置いてもらえればいいです。」

「そうかい、そりゃこつちも助かるな。」

そういつて、はっはっはって笑うおじさんは、台車から陶器のビン

もとります。

「こいつは、今年の祭りです出すうちの1本だが、遅くなったお詫びだつて、クルトに伝えといてくれ。」

「はい。わざわざありがとうございます！」

おじさんの台車にはまだ樽やビンが残つてゐる。
配達つて大変そう。

「おじさんもがんばってください！」

そういつて手を振つたら、おじさん、ガッツポーズで答えてくれた。厨房に入つて、クルトさんにビンのことを伝えたら、「今晚、ちょっと試してみるかな。」つていつてた。

そういえばクルトさんがお酒飲むとこつて、あんまり見たことないかも。

うちに来る人は、夜だとお酒頼む人もたくさんいるけど、お酒つておいしいのかな？

「ミアー、お皿下げてー。」

ボーつと考へてたら、食堂の方からマリーさんが顔を覗かせてた。

「は、はひっ！すぐ行きますー！！」

いけないいけない、今はお仕事に集中しなきゃね。

24 いつもの朝？

「はれ…？」

いつもの朝。

いつものあたしのベッド。

いつものあたしの部屋。

いつものあたしの寝間着。

そう、おかしなところなんて何も無い。

昨日の記憶がないこと以外は…

…

……

うん、順番に思い出そう。

昨日もいつもみたいににぎやかな夜だったよね。

わたたと走り回ってお給仕してたよね。

酒屋のおじさんが配達に来てくれて、応対したよね。

そのあともお給仕したよね。

お客様が帰ったあとにお片付けしたよね。

あとはいつものようにお茶…

お茶したっけ？

とか考えながらちゃんと着替えてたんだよ。

準備完了！朝のお仕事いきますっ！

「あら、おはようミア。大丈夫？」

「おはようございますマリーさん。」

…あれ？大丈夫って…？

「昨日は大変だったもんねえ…」

「マリーさん…」

「ん？やっぱり調子悪い？」

「……すみません、何があったか覚えてません…っていうか、あたし何かしちやいました…？」

マリーさんが苦笑い…してる、よね。
はうー、何だろ…

「ミア昨日、お酒飲んだの覚えてない？」

「おさけ…ってあのお酒、だよね…？」

「もちろんそうよ。それでね…」

「お茶持ってきましたー。」

「ミア、ありがと。今日もお疲れ様。クルトは？」

「もう来ると思います。」

ミアが言い終わるか終わらないかというところで、クルトも食堂から入ってきた。

カップと、陶器のビンも持ってきているけど、どうしたのかしら？

「クルトもお疲れ様。」

「待たせたかな。」

「それは？」

「ああ、酒屋の親父さんが持ってきてくれたんだよ。新しくつくったものの1つだそうだよ。」

「なるほど。試してみるのね。」

笑顔で答えて、クルトが自分の分とあたしにビンの中身を注いでくれる。

カップの中身は赤く透き通って、割と嗅ぎなれた香りがする。

「これ、紅茶？」

「みたいだね。リユートくんのアイデアかな。」

「あ、甘いんだ。割と飲みやすいわね。女性にも受けそうねー。」

うん、女の子のお客様も来るし、こういうのがあってもいいわね。クルトもうなずいてるし、新メニューかも？

他の新作も気になるところだけど…

「クルトさん、あたしもちょっと飲んでみていい？」

「えっ？んー…ミアにはちょっと早い気もするけど…」

ミアの残念そうな顔に、わたしもクルトも弱いよね…

「ちょっとくらいならいいんじゃない？」

「そうだね。でも無理そうならやめとくんだよ。」

「はいっ！」

この子、ほんとにうれしそうな顔するなあ…

っと、カップ2個しか持ってきてなかったのね。

「ごめんね、カップとりに行くのも面倒だし、わたしの残りでもいい？」

「わーい、いたたきますー。」

カップを両手で持ったミアは、まずくんくんとおいをかいでる。何となく、ミアって子犬っぽいところがあるのよね。素直でいい子だし。

あ、ちびちび飲んでる。

「わ、甘ーい。おいしーかも！」

もう、そんなにニコニコして…って一気に飲んじゃった？！

「ミア、そんなに一気に飲んだら…」

「クルトさん、これすごくおいしーですよ！」

…割とお酒強いのかしら？

横を見ると、クルトもちよつと驚いてるみたい。

「ま、ミアも飲めるくらいだし、新メニュー候補、かしら？」

「そうだね。ま、今日はもう休もうか。片付けだけしてしまつよ。」

「あ、わたしも手伝うわ。ミアは先に休んでいいわよ。」

「えー、お手伝いしますよー？」

ミアの気持ちは嬉しいけど、初めてのお酒も入ってるし、休ませてあげた方がいいわよね。

もうやる気満々でカップ重ねてるけど…

「いいから、今日は先に上がってね。」

「うー、はあい。マリーさんありがとねす」

カップを取り上げたら（もちろんやさしくね？）、ミアも素直にうなずいてくれたし。

クルトも、先に持っていった分を洗ってるだろうし、洗うのと拭くのを手分けしてやったらすぐよね。

「よし、これで終わりつと。あれ、ビンは？」

「あ、まだ持ってきてないわ。取ってくるわね。」

ミアからカップだけ取り上げてそのまま持ってきてちゃったから…クルトがカップを棚に片付けてくれている間に行きますか。

「あれ、ミアまだいたの？」

テーブルに座ったままだったみたいだけど…あれ、反応がない？

「ミア？」

「あ、まりーさん。ふあふあー。」

「ミア…ってあんた、酒臭い…」

「ごめんらさひー、びんがたおれね…」

よく見たら、テーブルの上に倒れたビン、ミアはお酒まみれで、酔ったってこと…？

「ミア、大丈夫？ちよつとべたべただし、流しに行ける？」

「かたづけましゅー…くうー…くうー…」

寝ちゃったし…やっぱりお酒は早かったかしら…

「で、体拭いて着替えさせて、クルトにベッドまで運んでもらったんだけど…」

「ごごごめんなさいいいい…」

とんでもないことしてるあたし…
どうしょ…どうしたらいいの…？

「ミア、落ち着いて。大丈夫だから。ごめんね、わたしたちも飲ませちゃったんだし。」

頭痛いとか、胸がムカム力するとかない？」

マリーさんがぎゅってしてくれたから、ちょっとだけ落ちつけたみたい…

「だいじょうぶです。頭も痛くないし、ムカム力もしないです…」

「それならいいわ。じゃ、今日もがんばりましょ！」

「は、はい！」

次にあたしができることは…食堂まで駆けこむことだった。

「クルトさん！」

「あ、ミア、おはよう。大丈夫かい？」

「お、おはようございます！だいじょうぶです！」

クルトさんもマリーさんも、あたしの体調気にしてくれてる…ほん

とごめんなさい。

「昨日はほんとにすみません!」

「ミアが大丈夫ならいいんだよ。今日もしっかり頼むよ?」

「はい! あ、食堂の準備まだだから先に行つてきますね。」

まだテーブルとか準備してなかったから、食堂に戻ろうとしたら、クルトさんが呼びとめた。

「あ、ミア、1つだけ…」

「はい?」

「しばらくお酒禁止。」

あうう…しばらく飲みたいなんて言いません…

「ところで、頭痛かったりしない?」

24 いつもの朝？（後書き）

ミアちゃん、お酒に負けちゃうの巻でした。

25 お祭りの日に その1

「んー、よく晴れてるね!」

今日と明日は建国祭。もう大通りには、露店とかの準備で人が結構来てるみたい。

うちも忙しくなるのかな。

「マリーさん、おはようございます!」

「おはよう、ミア。」

「お天気もいいし、お祭り楽しそうですね!」

「ミアも楽しそうね。」

ふふっと笑ってるマリーさんも何だか楽しそう。

「クルトさん、おはようございます。」

「ミア、おはよう。今日は楽しそうだね。」

「だって、朝から大通りもお祭りって感じがしてて」

なるほどね、ってうなずいてくれるクルトさんもやっぱり楽しそう
な気がするな!。

朝のご飯時間も、お片付けも一段落したところで、ちょっと休憩で
お茶することになった。

いつもはお昼の準備もあるのに、どしたんだろ?

「ん？ミア、どうかしたのかい？」

「あ、今日は何かのんびりかなって…」

「言ってなかったっけ？昼はうち閉めるんだよ。」

「ふえ…？」

聞いてないよね…うん。聞いてなかったよね…？

「今日はお昼に開けてても、お客様は来ないんだよ。みんな、お祭りの方に行ってしまうからね。」

「そーなんだあ…」

「お茶が終わったら、準備しようか。」

「じゅんぴ…？」

ポカンとしてたら、いつの間にか後ろに来てたマリーさんが肩をポンとたたいた。

「お祭り、ミアも行くでしょ。一緒に、ね。」

「え、う、うん！」

忙しくて行けないと思ってたけど、行っているんだ！

お茶をすませて、部屋に戻ったあたしは、エプロンだけ外して、下に降りてく。

おさいふは今日も持っていていなくていいっていわれたんだけど…

「さて、それじゃ行こうか。」

クルトさんの一声で、いよいよお祭りに出発！

玄関を出ると、いつもよりもずっと人が多いのがすぐにわかるくら

い。
宿から大通りはちょっと歩くだけだから、まずは大通りまで出るみたい。

「うわぁ、うわぁ…たくさん屋台が出てる！」

お肉を串にさして焼いてるとこ、いろんな果物が置いてるところ、揚げ物にお菓子…

見たこともないくらいに、大通りがにぎわってた。

「とりあえず、広場まで行ってみようか。」

クルトさんを先頭に、あたしとマリーさんが少し後ろをついてく感じで広場まで進んでく。

もちろんその道には屋台や露店がたくさん並んでた。

けど、広場の盛り上がりは、そこまでの道以上だったの。

広場の一画にステージがつくられてて、何かイベント中みたいだった。

人がいっぱいであんまり近づけないから、何やってるかはあんまりわからないけど…

「あれって、何やってるのかなぁ？」

「今は早食い大会かな。出場者が並んでるところだね。」

この後も今日は、劇団の出し物や歌唱大会と腕相撲大会の予選もあるはずだよ。」

「いっぱいあるんだねー…」

「ミアも出てみるかい？」

「ええっ、で、でないです…」

「あはは、冗談だよ。」

もークルトさんってば、びっくりしたよ…

広場もぐるっと1周して、もっと向こう側の大通りもちょっとのぞいてから、引き返すことになった。

途中の屋台でいろいろ買って食べたりもして、酒屋さんの屋台にも寄ったの。

クルトさんは、新作を少しずつもらってたみたいだけど、あたしは禁止…しよーがないけどね。

「リユートくんの新作は、親父さんとは全然違う方向だね。」

「ええ、親父のは親父ので需要がありますが、今まであまりお酒を嗜まなかった方にも飲んでいただけるようなものができたらなと考えたので。」

今回、人気のあつたものを量産してみようかと思っています。」

「そうか、またお願いすることになりそうだね。」

「今後ともご贔屓にお願いします。」

そんな感じでいろんなところを回りながらゆっくり戻ってたんだけど、だんだん人が増えてきたみたい。

広場も行きに通ったときより、戻るときの方がたくさん人がいた気がするし。

うー、ちょっと歩きにくい…ちっちゃいとこいうとききついよ…

「ミア、大丈夫？」

「あうー、だいじょぶですー。」

「ん…ほら、手、つないどこ。」

「えっ…」

マリーさんが手を出してくれてるけど、何となく恥ずかしい…けど、ちょっと嬉しいな。

えへへって笑って、手をつなぐ。マリーさんの手、あつたかいな。大通りを抜けるまで、ずっとマリーさんに手をつないでもらって帰ってきたんだけど、脇の道に抜けると、だいぶ人も減ってた。もう宿まではそんなにかからないけど、ここならいいよね……ちよっと前を歩いてるクルトさんの左手を、開いてる右手でつかまえた。

クルトさんは、ちよっとびっくりしたみたいだったけど、笑って握り返してくれた。

宿の前まであと少しだけど、3人並んで歩いてたら、近所のおばさんに、ミアちゃん楽しそうねって言ってもらったよ。

マリーさん、クルトさん、こんな嬉しい気持ち、ありがとう！
この後がんばるからね！

25 お祭りの日に その1（後書き）

今日の分だけは予約更新ですが、明日、明後日とちよつと更新がで
きなくなります。

また次話でお付き合いいただければ幸いです。――（――）――<

8/21：次話に合わせて、題名をちよつと変更。

26 お祭りの日に その2

今日は建国祭の2日目。

昨日の食堂は、夜もいつもよりお客様が少なく、楽しかったけど、お泊まりは満室になったよ。

今朝は昨日からの続きで屋台の準備も早いみたいで、朝ご飯を取らずにお祭りに向かうお客さんもいるみたい。

おかげで朝の食堂も、いつもより少し余裕があったんだ。

「今日も、お昼は閉める予定だったんだけど、私はギルドに行かなければならなくてね。」

「そうなんだ…。」

「だから、今日はわたしと2人だけど、一緒に回りましょ。」

「せっかくのお祭りなんだし、そんなにしよげないように。私の分まで楽しんで来てくれればいいよ。」

「うん、ありがとークルトさん。」

ちょっと残念だけど、お仕事じゃしょうがないよね。

部屋に戻って準備して、降りてきたときにはクルトさんはもう出かけちゃったあとみたい。

マリーさんと、戸締り確認して、いざお祭りに出発！

今日もまずは広場まで行ってみることにしたんだけど、大通りに出ると、もうすでに大賑わい。

「昨日よりも、人が増えてる気がしますー…。」

「そうね。はぐれないように注意しなきゃね。」

マリーさんと手をつないで、大通りをゆっくりと進んでく。

屋台や露店も昨日より増えてるみたいで、みんなとっても楽しそう。広場につくと、ステージには『力自慢！腕相撲大会』の横断幕がかつてる。

何人もの人がステージ上に立ってて、台の上で腕相撲してるのを、司会の人盛り上げてるところだった。

「あの人、おっきい声ですねー。」

「んー、多分魔法で大きな声にしてるんじゃないかな？」

あらっ？ミア、ちよつと前まで行ってみましょ。」

何かに気づいたマリーさんに引つ張られて、人ごみの中を進んでく前の方まで来て、マリーさんが指さす方向を見ると、知ってる人がいた。

「あ、ラルフさんだ！」

「出てたのね。わたしに内緒だなんて、どうしてやろうかしら。」

急な言葉にびつくりしてマリーさんを見たけど、いたずらっぽい笑顔だったから、一安心。

そうこうしている間に、ラルフさんの順番になった。

名前が呼ばれて、相手の人と組んだところで、マリーさんがつんつんとつついてきた。

「はひっ？」

「ミア、ラルフのこと、応援してあげよっか。ふふっ」

「え、う、うん。」

みょーに楽しそうなマリーさん。
でも応援してあげるのはいい案だね！

おつきく息を吸って、ステージに向かって叫んでみた。

「ラルーフィーさーん、がーんーばってーー!!」

声に反応して、ラルフさんがこっちを見てくれた。

司会の人「かわいい応援団も来ているようです!」っていうと、会場がわーっとわきあがって…

あれ、ラルフさん、顔が赤くなった。てれやさん?

「ラルフー、負けたらわかってるわよね?」

っていうマリーさんの声に、今度はビクッてなるラルフさん。

「前置きが長くなってしまいました!」という司会の人的一声で、再びわきあがる会場。

そんなこんなで、勝負が始まったんだけど、ラルフさんは割と余裕で勝ってた。

そのあと順調に2回勝ち進んで、次がいよいよ優勝決定戦っていうとこまできちゃった。

相手の人はラルフさんよりごっつい人で、ちよっとラルフさんピンチな感じ…

「さあ、いよいよ今回のナンバーワンが決まるときがやってきました。

冒険者を引退し、鍛冶屋として新たに邁進するラルフか、それとも前回チャンピオンのギッシングか。

注目の一戦、レディ…ファイト!!」

司会の人も含めて、勝負は始まったけど、2人の腕はほとんど動かなかった。

それでも、お互いに全力の力を込めてるのは、ぱんぱんに張ってる筋肉が小刻みに震えてるので、見てる人にも分かったんだと思う。会場は、今までにも増して盛り上がってるし、あたしも全力でラルフさんに声援を送ってるんだけど、当の2人はまだ動かないまんまふつと横を見ると、マリーさんは静かに勝負を見てた。けどその表情はちよつと困った顔…？

会場の声がさらに大きくなったから、ステージを見てみたら、ラルフさんが少しずつ押されてた。

そのきつそうな表情を見ると、何だかあたしまで緊張してきた。応援したいのに、声が出なくなっちゃったみたい…

そしてラルフさんはそのままじわじわと押されて、とうとう負けちゃった…

「勝者はギッシング、これで3連覇だ〜〜〜！おめでと〜〜〜う！
！」

司会の人の宣言で、会場はすごい拍手と歓声に包まれる。

ラルフさん、負けたのに笑顔で相手の人と握手してる。

悔しくないのかなあ？

表彰式も終わってラルフさんがあたしたちの方に来てくれた。

「マリーさんもミアちゃんも、応援ありがとうございました。」

来てるとは思いませんでしたけどね。」

「まあ、いいじゃない。」

それにしても、強くなったわねー。あのころとは大違いだわ。」

ふふつと嬉しそうに笑いながら、マリーさんがラルフさんの腕をぽんぽんって叩いた。

2人とも、負けたことをあんまり気にしてないみたい。

「ラルフさん、負けたのにあんまり悔しくないみたいですね？」

「ん？ああ、今の俺の全力でぶつかった結果だからね。

悔しくないわけではないんだけど、それ以上に全力を出せたことがよかったかな。」

「ふみゅー……」

「ま、もちろん次は負けるつもりはないけどね。」

そういつて、ラルフさんが見た先には、みんなに祝福され続けてるチャンピオンのギッシングさんがいた。

そのラルフさんの表情は、とっても楽しそうだった。

マリーさんは、そんなラルフさんを見ながらうんうんとうなずいてる。

よくわかんないけど、悔しいだけよりは、楽しい方がいいよね。

そんなラルフさんを見ると、何だかあたしもいろいろがんばろって勝手に思っちゃいました。

26 お祭りの日に その2（後書き）

無事帰ってこられました。

累計2000PVありがとうございます！

お祭り、もうちょっと続きます。

27 お祭りの日に その3

腕相撲大会が終わったラルフさんとあたしたちは一緒に少しお祭りを回ることになった。

実はラルフさんも、鍛冶屋さんで出店してるんだって。だから、ご飯だけ一緒に食べようってことになったの。ラルフさんのお父さんも、腕相撲大会で優勝したことあるみたい。それで今回ラルフさんも参加することにしたんだって。

「まあ、じっくり鍛冶の修行しながら体も鍛えますよ。」

「それじゃ、次回はチャンピオンのラルフが見られるってわけね。」

「ラルフさんがんばってください！」

「はははっ、ちょっと気が早かったかな？」

そんな話をしながら、ラルフさんの屋台の方に向かってく。

途中の屋台で串焼きのお肉といろんな果物のジュースをみんなで分けたりもしたよ。

ちなみに、ラルフさんの屋台では、お父さんが包丁100本研ぎに挑戦中なんだって。

腕相撲といい、ラルフさんのお父さんは、何かに挑戦するのが好きなのかな。

そうこうしているうちに、ラルフさんの屋台についた。

周りには、近所のおばさんたちが輪になってるとこだった。

中心はもちろんラルフさんのお父さん、包丁を研いでる真っ最中。

「父さん、ただいま。」

「こんにちは。ご精が出ますねー。」

「ああ、おかえり。マリーさんもいらっしやい。」

ちらつとこつちを見ただけで、また包丁に集中してる。

「で、どうだったんだ？」

「あー、チャンピオンには勝てなかったよ。父さんの方は？」

「う、む。73本目だ。少しかかり気味かな…」

そんな会話をしながらも、ひたすら包丁を研いでる…すごい。

その横で、ラルフさんは販売の準備を始めてる。

おうちで使えるような簡単なものを安く出売るみたいで、すでに人が並びだしてた。

「あんまりじゃましても悪いわね。わたしたちも戻ろっか。」

「はい。ラルフさん、おじさん、またですー。」

「がんばってね。」

「すまないね、碌に鎌いもせず。」

「マリーさん、ごちそうさまでした。」

忙しくなったラルフさんとこの屋台を後にして、そろそろ宿に戻るうってなったんだけど、途中で1つやりたいことがあったからマリーさんに相談してみた。

「クルトにおみやげ？」

「うん、ちゃんと自分で持ってきたから…」

そういつて、持ってきた小袋おさいふを懷から出して見せたら、マリーさん、ちよつと渋い顔になっちゃった…

「ミア、もしかして全部持ってきてる？」

「ふえ？…うん、全部。」

「んー…ちょっと中身が多くて怖いんだけどね…」

お祭りのときは人が増えて、スリとかも多くなるからね…って、顔を曇らせたマリーさんを見てると、相談せずに持ってきてしまったの、大失敗…しょぼん。

「勝手に持ってきてごめんなさい…」

「ま、今日はわたしも注意してなかったしね。使わない分はわたしが預ければ大丈夫かな。それで、どんなおみやげにしたいの？」

マリーさんが頭をなでなでしながらそう言ってくれた。ありがとーマリーさん…ぎゅむっと抱きついちゃう！
…そーいえば。

「…何がいいのかな？」

「考えてなかったのね…」

「はう…」

「そうねー…あ、昨日見た珍しい果物とかは？クルト結構好きだし。」

「じゃあ、それにします！」

ということで、小袋おさいふの中身は1枚銀貨8枚と、あとは銅貨だけにしておいて、残りはマリーさんに預かってもらうことに。

「屋台の場所、覚えてるわよね？」

「だいじょうぶです。」

「わたしはちょっとこのままうちに戻るから、気をつけて行くのよ。」

マリーさんは、夜の準備があるから一足先に帰ることになったけど、屋台はそんなに遠くないし、あたしも遅くならないようにしなきゃ。確か、広場からちよつと行ったところが変わった果物いっぱいあったよね。

広場まで来ると、相変わらずの大賑わい。

ちよつと美男美女コンテストっていうのをやってるみたい。

腕相撲大会のときよりも人がいっぱいいるよー…

何とか人ごみを抜けて、ほっと一息。

ついたときに、前から来た人にどんって当たっちゃった。

「きゃうっ!」

ぶつかった衝撃と、びっくりしたのとでちよつとよろけちゃった…

「ぎゃっ!」

「にゃー!」

「くそっ、このネコ何しやが…いだっ!」

「にゃにゃっ!」

ちよつと先のところで、あたしにぶつかった人…だよね、と黒ネコが争ってた…

あれ、もしかしてあのネコくん…?

周りの人も、その争いを不思議そうに見てる。

そうこうしてるうちに、ぶつかった人はネコくんを振りはらって走ってった。

ネコくんは、あたしの方に向かってくる。

「どしたの?」

しゃがんで声をかけたあたしの目の前で、ネコくんは啜えてたものを放した。
チャリン。

「あれ…それ…？あー！ー！」

懐にあつたはずの小袋は、なぜか目の前に…。
もしかして取り返してくれたのかな…？

ネコなの…？！

小袋を拾い上げてあたしとネコくんを中心にちよつとした人だから
ができてただけど、なぜか急に拍手が起こった。

「いやー、優秀なネコだ。」「使い魔だったりして？」「あんな小さな子が魔法士かあ？」などとよくわからない周りのお話に、ちよつと居辛くなったあたしは、ネコくんを抱っこして逃げることにした。

ネコくんもおとなしく抱っこされてくれる。

「す、すみません通してください！」

広場の端まで走って、ちよつと一息つく。

あ、ネコくんがちよつとぐったり…ごめん、走ったときに揺れちゃったんだね。

ゆっくり降ろしてあげると、ちよこんと座った。

「ネコくん、あたしのおさいふとり返してくれたの？」

「にゃー。」「

「ありがとね…」

「にゃ。」「

言葉はわかんないけど、気持ちには伝わったかな…

このまま帰ろうかと思ったけど、もう屋台もすぐだし、お金持つてるのも何となく怖いから、予定通り果物を買っていくことに決めて歩きだしたら、ネコくんもついて来てくれた。ちよっと心強いかも。

結局、屋台で変わった果物をいろいろと買い込んで、お金をほとんど使いきっちゃった。

屋台のおじさん、結構たくさん買ったから、あたしが持てるか心配だったみたいだけど、何とかいけぞ。

「ネコくん、帰りにうちまで来る？お礼にミルク頼んであげるよ？」
「にゃ。」

たぶん、「いいよ」っていったんだよね。
それじゃ、落とさないように帰らなきゃ。

何とか宿まで帰り着いたんだけど、途中までついて来てたネコくんは、どこかではぐれちゃったのかな…
それとも、返事は「いない」だったのかなあ…
今度来てくれたら、しっかりお礼しなきゃね。

27 お祭りの日に その3（後書き）

ミアちゃん、危機一髪。

ネコくん大活躍?!の巻でした。

28 魔法が知りたいの その1

お祭りも終わって、またいつもの日々に戻ったら、朝もお昼も晩も、食堂が盛況です。

今日も元気にお昼の食堂営業終了！

「それじゃ、ユーリさんのところ行ってきますー。」

「はい、気を付けて行ってらっしゃい。」

小さなバスケットを持って、いざしゅっぱーっ！

カランコロン。

扉を開けると、少し傾いたお日様が、元気に照ってる。今日もいい天気だね。

今日はユーリさんのお店で、人に会う約束してるの。
一昨日行ったときに、魔法について知りたいなっていったら、ユーリさんがゼル先生を呼んでくれるって言うてくれたの。

ユーリさんそこに向かっててくてく歩いてると、聞きなれた声が聞こえた。

「にゃっ。」

「ネコくんこんにちは。」

お祭りの日以来、外に出るとよく会っただよね。

今日はあたしの持つてるバスケットに鼻を近づけてくんくんしてる。中身はクルトさんが焼いてくれたクッキーなんだよね。

ユーリさんとゼル先生へのおみやげなんだけど…

「１枚だけだよ？」
「にゃー。」

食べやすいようにちよつと割ったクッキーを、手のひらにのせて差し出すと、ネコくんはぺろりと平らげちゃった。

おなかすいてるのかな…クルトさんのクッキーがすごくおいしいからかな？

食べ終わっただけど、次を催促するわけでもなさそうだね。

「あたしこれからおでかけなの。それじゃまたねー。」

手を振って歩きだしたら、ネコくん着いてきちゃった。

ま、いいよね？

そんなわけでネコくんをお供に従えてユーリさんのお店まで一緒にてくてく。

「ユーリさん、こんにちはー。」

「あ、ミアちゃん、いらっしやい。ちょうど今、先生も来たところよ。」

「ミアさん、お久しぶりですね。」

「ゼル先生、こんにちはー。今日はありがとーございます。」

一通りあいさつが終わったところで、バスケットの中身を取り出したら、ユーリさんはお茶を入れてくるねって行っちゃった。

ゼル先生と２人きり。うー、前に一回お話したただだからまだキンチョーするかも…

「そつえば、ミアさんは魔法のどんなことを知りたいんですか？」

「はひっ…えと、あの…」

どう説明したらいいんだろうって悩みながら、前に魔法を使ってもらったこと、記憶が戻らなかったこと、封印か呪いのようなものが関係していること、白色魔法の素質があるって言われたことを説明した。

「ふむ、何かと魔法に縁のありそうな話ですね。

まずは簡単に魔法とはどのようなものを説明してみましょうか。

」

「あら先生、さっそく授業ですか？」

笑いながらお茶を持ってくるユーリさん。

クッキーとお茶を嗜みながらゼル先生がお話してくれる。

「魔法とは、このセルフアリアの世界に満ちるマナと呼ばれる力を、自らの持つマナによって導き、様々な形で具現化するものと言えます。」

そして、6つの色でその性質が分かれています。

我々が魔法を使うときは、各個人のフィルターを通して、世界に満ちるマナに色をつけるようなイメージですね。

ですから、素質、言い換えれば、その色を持つ者でしか、魔法を発現させることはできません。

我々人族は、黒を除く5色を、妖魔族は白を除く5色を使うことができる可能性がありますね。」

せんせー、むつかしいです…

「今のは概念なのであまり深く考えなくてもいいですよ。

次に封印と呪いのことを少しだけ…

記憶の封印、あるいは呪いは、精神にはたらく力なので白色もしくは黒色の魔法で扱える属性になると思います。

アリサさんが越えられなかった強さだとするとよっぽどですね。」

「アリサさん知ってるんですか？」

「ええ、魔法士ギルドに所属していますし、『白を継ぐもの』といえばそれなりの知名度ですよ。」

『白を継ぐもの』って…つまりフェリックスさんたち全員が有名なんだ。

そしてまた新しい言葉がでてきちゃったよー。

「魔法士ギルドって何ですか？」

「ああ、名前の通り魔法士が所属しているギルドですね。」

以前もお話したとおり、2色以上の魔法を扱う者を魔法士ソーサラーと呼びます。

そういった人たちは、魔法士ギルドに所属することで、ギルドから魔法を学ぶことができるのです。

もちろん私も所属していますよ。」

「あたしはギルドには所属していないから、先生から習ってるだけなのよ。」

「ユーリエくんのように、1色のみの素質を持つ方は、ギルドに所属することはほとんどありません。」

色を組み合わせる使えないために、覚えられる魔法に限りがあるからです。

ただ、そういった方には、ギルドに所属する魔法士が私塾などで教えることになっていました。」

「だからユーリエさんの先生なんですね。」

「はい、その通りです。ただ、例外がありまして、白色だけは、他と素質を併せ持つことがないのです。」

そして、白色はそれだけで割と覚えられる魔法がたくさんあるた

めに、ギルドに所属する価値もある、ということになります。」

それでアリサさんもギルドにいるのかぁ。

あれ、それじゃもしかしてあたしもギルドに入れば魔法が覚えられたりするのかな？どきどき…

28 魔法が知りたいの その1（後書き）

今回もちよつと説明ばかりです。

センサー、説明難しいです……

題名変更しました。

29 魔法が知りたいの その2

「ただ、問題がありまして…ギルドに入るには会費を納めなければいけません。これが結構高額なのです。」

もしくは特待生として受け入れてもらう方法もありますが、この場合、高い素質はもちろん、知識もしっかりしていないとその試験に通うことは難しいですね。

魔法を使う場合、ルーンワード魔法語の読み書き、正しい発音も必須ですので、まずはそこから勉強していくことになるでしょう。」

「…ってことは…お金持ちになるか、すっごく勉強するかしか方法がないってこと…？
どっちも無理っぽいです…」

「あたしはルーンワード魔法語完璧じゃないけどね。使うものが限られてるし。」

「ユーリエくんのように、1色であればそれでもいいのですが、限られてるとはいえ、簡単にできることはありません。ユーリエくんは私が教えている中でも、非常にまじめな生徒でしたよ。」

「先生ったら、おだてたって何も出ないわよ？」

「ユーリさん、口調はきつめだけどちょっと照れてますね？うふふ。」

「あれ？もしかしてゼル先生に習ったらダメなのかな？」

宿のお手伝いしながら何とかならないかな？

「残念ですが、私は青と緑の魔法しか教えることができないのです。ですから、ミアさんが魔法を使いたいならば、ギルドに所属するか、治療師ヒーラーの方に直接習うか、になりますね。」

「治療師で暇してる人なんてほとんどいないわね…」

教えてもらって言ったらやっぱりギルドの治療師ヒーラーになるかしら。

「そっかあ……」

「ただ、魔法語ルンワード だけなら、私が教えることは可能ですよ。これには色は関係ありませんから。」

そういつて、ゼル先生は持ってきていた本を開こうとしたとき、足もとから黒い塊があたしの膝の上に飛び乗ってきた。

「にゃー。」

「あれ、ネコくんも入ってたんだ？」

「この子、ミアちゃんのお友達？」

「んー、そんな感じ、かな？」

あたしの上に乗ったネコくんは、ゼル先生が開いた本を見てる。まさかネコくんが読めるわけないよねー……

「はれ？…これが魔法語ルンワード ですか？」

「ええ、そうですか……？」

あんまりにもすっとんきょうな声を出しちゃったからなのかな。

ゼル先生が不思議そうに尋ねてくるし、ユーリさんも同じような顔してる。

でも、それくらいびつくりしたんだもん。だって……

「あたし、これ読めます……」

「「ええっ?!」」

ゼル先生とユーリさんが全く同じ反応をした……。見事なハモリです！

「だってミアちゃん、これ全部 ルーンワード 魔法語 なのよ？」
「よくわかんないけど、知ってるみたい…？」

2人ともまだ信じられないみたいだけど、ネコくんはじつとこっちを見て何か言いたそう。

んー、あ、読んであげればいいってこと？

なんて思ったらタイミングよくネコくんが両目をぱちっとなつたから、ちよっとおかしかった。

でも、読めば分かってもらえるよね？

「えっと、 ははなるあおきうみやさしくつつみまもりとなれ？」

「読めて…ますね。 たしかに…意味は取れてないようですが大したものです。」

意味を理解して読むことができれば、魔法を使うこともそんなに難しくないかもしれませんね。」

「意味を理解したら魔法が使えるの?!」

思わず立ちあがっちゃったらネコくんがぴょんと跳びおりて、そのまま逃げちゃった。

…ごめんね。驚かせちゃって…

「まあ、ミアさんは白色の素質があるようなので、私の本では勉強できませんね。」

私は青と緑しか使えませんから。

あとは魔法の発動体が必要ですね。」

「発動体…？」

例えば…と言いながら、ゼル先生は短杖テンジを取り出した。

先っぽに青い石と緑の石がはまってて、何かかわいい感じ。

「私の場合は、青と緑を使いますので、それに合った発動体を持っているわけです。」

「ですから、ユーリエくんなら…」

「このペンダントね。」

そういつて胸元の石を見せてくれた。もちろん青い石。ユーリさんは青色魔法が使えるんだもんね。

アリサさんも、魔法使うとき、ペンダント握ってたよね。

「あれ、そーいえばアリサさん、魔法語ルーンワード使ってなかった気がする…」

「魔法に慣れてくると、詠唱しなくても発動することが可能になるのですよ。」

もちろん、意識として、詠唱と同じように魔法語ルーンワードを連ねることは必要ですし、その魔法の核となる名前は、声に出さなければ発動しませんね。

先ほどミアさんが読んだものは、《保護プロテクション》という魔法の詠唱です。

ただ、詠唱なしになると、発動が非常に早くなるので、非常に有用でしょうね。」

「そっかぁ…」

アリサさんは魔法に慣れてるってことなのね。でも、今のままじゃ魔法習うのは無理かなあ…

アリサさんがいたら教えてもらえるのかな？

今度来てくれたときに聞いてみようかな♪

29 魔法が知りたいの その2（後書き）

今回も説明っぽいです。

ややこしくてごめんなさい。

筆者の頭も、うにうにになりそうです…

30 はやおき

.....

ふう…

久しぶりにあの夢を見た。

白枝亭に来た当初は何度も見た夢。

最近はしばらく間が空いてただけど…

窓を開けるといつもよりずいぶん早く起きちゃったみたい。

あんまり気分も良くなかったし、朝の準備の前に、おさんぽに行くことにした。

着替えて外に出ると、空がほんのり明るくなりだすところだった。

広場の北側にある、街中の川まで行っても大丈夫かな。

まだ静かな街の中を、てくてく歩いてく。

こんな時間でも、煙突から煙が上がるところがある。

ここはパン屋さんだね。焼きたてのパンの匂いがお店の外までただよってくるね。

朝の広場は、昼間とは全然違って、とっても静か…

まだ鳥も起きてないのかな？

噴水の音がいつもよりも大きく聞こえる気がしちゃう。

「にゃー。」

「あれ、ネコくん。おはよー。」

噴水のところにちょこんと座ってるネコくん。

何か待ち合わせてみたい？

もう何だか当たり前のように、ついてきてくれるネコくんと一緒に、広場を越えて歩いてく。

こっち側は大きな通りがないから、ちょっと狭くなった道をどんどん進んでく。

川辺まで行くと、だいぶ空も明るくなってきた。

そろそろお日様が昇ってきそうだね。

川に沿って歩くと、ちょっと涼しい気持ちになるね。

あ、人がいる。あの人もおさんぽかな？

ゆつくりしてたい気もするけれど、そろそろ戻らなきゃ朝の準備に間に合わないかな？

来た道をそのまま引き返してもいいけれど、ちょっと別の道を通ってみようかな？

「にゃん。」

いつの間にかあたしの前に出たネコくんが、こっちを振り返って鳴いた。

何だかついて来いって言ってるみたい？

小走りのネコくんを追っかけて、通ったことのないちょっと細い道をてくてくてく。

まわりのおうちの人も、起きてる人が増えてきてるね。

煙突から煙が出てたり、声が聞こえたり。

だんだん街が、起きていくみたい！

ネコくん連れられて、細い道を抜けた先は、広場よりも宿に近い

大通り。

こんな風に抜けることもできるんだね。

ちようど昇り始めたお日様を背中を感じる。

ネコくんもあたしも、とっても長い影をつくってる。

ここから宿まであと少し。

ちよつぴり駆け足。ネコくんと勝負！

って思ったんだけど、ネコくんはあっという間に先に行ってしまった。

足、速すぎるよー。バイバイもしてないのに…

宿に着いたけど、表の玄関はまだきつと鍵がかかってるから、裏に回ってお勝手に。

カチャ。

中に入るとクルトさんがもう準備を始めてる。

「クルトさん、おはようございます。」

「あれ、ミア、どこかいつてたのかい？」

「ちよつと早起きしたからおさんぽにいつてきました。

気持ちよかったです！」

「ははは、元気いっぱいだね。それじゃマリーも待ってるだろうし、今日も準備の方、しっかり頼むよ。」

「はい！」

食堂に入ると、厨房から入ったあたしに、マリーさんがちよつとびつくりしてる。

「マリーさん、おはようございます。えへへ。」

「もう、今日はちよつとお寝坊さんかなって思ってたら、そっちか

「来るなんて。」

「ちよつとおさんば行つてたんです。」

「そう、何だかとても楽しそうね。」

「とっても気持ちよかったです！さあ、がんばるぞー！」

起きたときは何だかちよつといまいちな気分だったけど、おさんばのおかげでとっても元気。

いつもよりがんばれそうな気がするね！

食堂の準備もばっちりになったころ、お泊りのお客様たちが降りてきた。

「おはよーございます！すぐにご用意しますね！」

「お、ミアちゃん今日も元気だねー。何だかこっちまで元気になるよ。」

「それじゃよろしく頼むよ。」

「かしこまりましたー！」

お客様にも喜んでもらえたり、また早起したらおさんば行こうかな♪

31 風邪

「うん、やっぱり熱があるわね…風邪かしら？」

「あー…」

「あとでユーリちゃんに来てもらってから、眠たくななくても目を閉じて横になってるのよ。」

「はい…ごめんなさい…」

「大丈夫よ。さ、部屋に戻って休んで。」

今朝、起きたら何だか体がすごくだるかった。

昨日もちよつと暑くて寝つけなかったし、寝不足なのかなって思ってた。

着替えて降りてったら、マリーさんが「ミア、どうしたの、顔真っ赤じゃない！」って。

そのままおでこに手をあてたマリーさんに促されて部屋に戻ってきたところ。

お手伝いできなくて迷惑かけるけど、このまま行っても役には立てないよね…

ちゃんと寝て治さなきゃ…

もっかい寝巻に着替えてベッドにもぐりこむ。

横になっても、体が何だか重たくなつた気がする…

「…………ア、…………ミア。」

「ほえ…？」

まだ何かぼーっとしてるけど、声がする方を向いてみた。
マリー、さん…？

何だか声がぼんやりしてるし、まぶしくて見えないよ…

「封…………乱れ…………な…………憶を…………せる…………し……………」

よく聞えないよ…

それに体が動かない…の…

マリーさん…！

「ごめんね、起こしちゃって…」

「あれ…マリー、さん…？」

あたしはベッドに寝てた。

隣りにマリーさんが座ってる。

おでこがちょっとひんやりしてた。

「大丈夫？タオル替えたところけど、ちょっと汗もかいちゃったみ

たいね。

1 回着替えた方がいいわ。いける？」

「ん……」

ベッドの上で体を起こすと、寝巻が体にぺっとりくつついてた。ちよつと脱ぎにくくてもぞもぞしてたらマリーさんが手伝ってくれる。

「ありがとうございます。」

「ううん、ちよつと体拭いちゃうからじつとしててね。」

動けるほどの元気もなく、ぽーっとベッドの上に座ってたら、マリーさんが硬く絞ったタオルで体を拭いてくれる。

ちよつとくすぐったいけど、ぺとぺとしたのが拭ってもらえて、さっぱりする。

「はい、じゃこれ着てね。」

「うん……」

もぞもぞしながら、マリーさんに手伝ってもらって替えの寝間着に着換えることができた。

「それじゃ、もうちよつと寝てようね。ユーリちゃんももうすぐ来てくれると思うし。」

「ん……」

横になったら、マリーさんがお布団をかけてくれた。

そして、もっかい新しいタオルをおでこに乗つけてくれる。

「マリーさん……いそがしいときにごめんなさい……」

「ミア、気にしすぎよ。それに、あたしたちこそ、気付かなくてごめんね。」

「うっん、そんなことない…そんなことないよう…」

そつと手を握ってくれたマリーさん。

ほつとした瞬間、涙が出てきて止まらなくなった。

「うー…っくう…ううー…」

「よしよし…もう少し休もうね。」

しばらくはここにいるから、心配しないで。」

「うっん…ひっく…」

マリーさんがお布団の上から、ぽんぽんって叩いてくれてるのが心地よくて、少しずつ涙も落ち着いてきた。

目を閉じてても、マリーさんがずっといてくれるのがわかるから、とっても安心できる…

あれ…何かいる…

黒い…人影…？

いつの間にか周りに何人も…

見られてる…気がする…

どうしていつも…

「…アチャ…、…アちゃん、ミアちゃん…」

「大丈夫？うなされてたみたいけど…」

「はれ…ユーリさん？」

夢…っか。

心配そうにのぞきこむユーリさんに、何とか笑顔で答えた。 ンだけど…

「無理しないの。ちょっと確認させてね。」

そういつて、おでこや首をさわったり、口の中を見られたり…

一通り終わったところで、カバンの中からいくつかの包みを取り出してる。

「お薬、持ってきてるから。飲めそう？」

「ん、だいじょぶだと思いま…ふい」

体を起こそうとしたらふらっとして、起きれなかった。

「急に動いちゃだめよ。ちょっと下で煎じてくるから待っててね。」

そういつて、ユーリさんがパタパタと走っていった。

いつのまにか寝ちゃってたんだね…

何かやな夢見たような気がするけど、さっきよりちょっとは楽にな
ってる…気がするかな…？

少し待つてると、すぐにユーリさんがマリーさんと一緒に戻ってき
た。

ユーリさんはカップを持ってきてる。

きつとお薬だね。

「はい、じゃこれ飲んでね。

むせないように注意してね。」

カップの中身は、黒っぽくて、何か不思議な香りがした。
こく。

一口飲んだら…

「うー…」

「がんばって、ミアちゃん。」

とっても苦い…

鼻をつまんで一気に飲み込んだけど…苦いのが口の中に残ってるよ
う…

「はい、ミア。」

「うー？」

マリーさんが続けてカップを渡してくれた。
今度は何だろ…？

「心配しなくても、ただのお水だから大丈夫よ。」

よっぽど変な顔しちゃったのか、マリーさんもユーリさんもちょっと笑ってた。

もらったお水で口をゆすぐように飲んだら、ちょっとにがにがも治まった。

「あとは寝てれば、夕方にはだいぶ落ち着くと思います。」

「ユーリちゃん、わざわざきてもらってごめんね。」

「そんな、マリーさんたちにはうちもお世話になってるし、ミアちゃんのためですから。」

「ユーリさん、ありがとー…」

「うん、さ、あとはしっかり寝てね。」

「はいー。」

もっかいベッドに横になったら、マリーさんがお布団をかけ直してくれた。

そして…あつという間に…

「にゃー。」

あれ…ネコくん、いつの間にか…？

でも周りはぼんやりとしてる。

もしかして夢かな…

っていうか、何かネコくん、白く光ってない？

あの時の…魔法使ってるアリサさんみたいに…

じつとこっちを見ているネコくんの目を見ると、何か伝わってくる気がする。

早く元気になって、っていつてるような…

何だか体が楽になっていく気がするよ…

ありがとう、ネコくん。

みんなが優しくしてくれたから、きっと明日は大丈夫だね…？

31 風邪（後書き）

風邪ってつらいですね…

夏風邪は特にしんどいっていうけど。

ちょっとミアちゃんをいぢめてしまった気がする…（――…）

32 できちゃった

「んあ…？」

見慣れた部屋の天井が、いつものように見える。

今日は、体のたるさもほとんどない感じで、元気いっぱい♪

昨日1日、迷惑かけちゃった分、今日からまたがんばらなきゃ！

コンコン。

服を着替えてエプロンをつけてると、扉がノックされた。

「はい。」

「あ、ミア起きてるのね。入って大丈夫？」

「だいじょうぶですよー。」

扉を開けてマリーさんが入ってきた。着替え終わったあたしの頭のとっぺんからつま先までじーっと見てる。
何かちよつと恥ずかしい…

「おはよう。もう起きて大丈夫なの？」

「はい。元気ですっ！」

マリーさんが、あたしと自分のおでこにふれる。

「熱は引いたみたいね。でも昨日の今日よ？」

「でもでも、いつも通り元気ですよ？ぜんぜんしんどくないです。ちゃんとお手伝いできます！」

「ふふっ、きつとお薬がちゃんと効いたのね。」

わかったわ。それじゃお願いするわね。」

「わぁ…はいっ！」

よし、昨日迷惑かけちゃった分までがんばらなきゃ！

「ただし…」

「は、はひ？」

「ちよつとでも調子がおかしかったら無理しないこと。約束ね。」

「はう…」

「返事は？」

「は、はいです…」

あたしの返事に、マリーさんは笑顔でうなずいてくれた。そのあと、不意にぎゅって抱きしめられてびっくり。

「ごめんね…」

「マリーさん…？あたしの方がごめんなさい…迷惑かけちゃって…」

「ううん、ミアが元気になってくれて本当によかったわ。」

こうやってると、何かもつと元気が出てくる気がする…

けど、そろそろ準備に行かないとね。

「ミア、もう大丈夫なのかい？」

厨房に入ったあたしを見て、クルトさんもマリーさんと同じようにちよつとびっくりしてる。

「はい、元気いっぱいです！」

「そうか、それは何よりだね。でも、あまり無理して、またしんど

くならないようにするんだよ。」

「あ…はいです！」

クルトさんもマリーさんと一緒だ。

迷惑も心配もかけちゃってごめんなさい、ほんとにありがとうございます。

そのあと、いつものように朝ご飯の営業。

常連さんたちから「もうだいじょうぶ？」って声もかけてもらったの。

朝の営業も落ち着いた頃には、ユーリさんも来てくれたけど、あたしの回復ぶりにやっぱり驚いてた。

「2、3日続くかなって思ってたけど、元気になってよかったね。」

「はい、お薬ありがとーでした。」

「もう大丈夫みたいだけど、また調子崩しそうなら何か持ってくるから。」

「うー、にがいのもういいです…」

ユーリさんにも、マリーさんたちにも笑われちゃったけど、ほんとににがいんだから…

お昼も過ぎて、休憩してもいいって言われたんだけど、元気が有り余ってる気がしたから薪割りさせてもらうことにした。

宿の裏で、いつものように薪割りしていると、いつの間にかネコくんが横で見てた。

「あれー、いつ来たの？」

「にゃー。」

宿の軒下で、ちょこんと座って…一応あたしのこと見てる…んだよね？

カコン、カコンと割り続けて、ある程度の量ができたところでまとめることにした。

縄で束ねて、順番に運んでく。
やっぱり束ねると重いよねー。

最後の1つの束を運ぼうとしたんだけど、前の2つよりちょっと重くて、いったん持ち直そうとしたら。

「いたっ！」

薪のとがっつてるところで、指を切っちゃったみたいで、血がにじんできた。

うー、ちょっとざっくりやっちゃったかも…じんじんする…

しゃがみこんで、切った指の付け根をぐっとにぎってみたけど、なかなか止まらない…

「にやっ！」

声に反応して顔を上げたら、ネコくんが目の前に。
じつとあたしの目を見てる。

…あれ？何かこんな状況見たことある気がする。

そうだ、昨日の夢…だったよね？

「また心配してくれたんだね…ありがとー。」

そういつてネコくんをなでてびっくりした。

昨日の夢のように、ネコくんがぼやっと光り出す…

うつん、違っ、ネコくんだけじゃない。

あたしも…一緒に光ってるんだ…

何で?!

不意に頭の中に言葉が浮かんだ…

ゼル先生に見せてもらったのと同じ、

ルーンワード
魔法語 …

「優しき光、包み込み、その傷を癒す助けとなれ…《負傷治療》^{ヒーリング}

」

体から何か少し抜けていくような感覚と、指の傷がほわつとあった
かくなるような感覚を感じてあたしたちの光は消えた。

「今の、魔法…?できたの?

…ネコくん?!」

一瞬ボーっとして、指を見ると、傷はふさがってた。

魔法、使えちゃった…!

慌ててネコくんの方を振り向いたつもりだったけど…ネコくんはどこに?

「ミア、ちよっといいかない?」

お勝手口が開いて、クルトさんが呼んでるのが見えた。

魔法のことは気になるし、ネコくんの行方も気になるけど、また会えるよね…あつたら何かわかるかもだね、きつと。

「はい、この薪運んだらすぐ行きますー。」

今度はケガしないように慎重に運ばなきゃ
…

32 できちゃった(後書き)

ミアちゃん、才能開花？

33 できなかった？

実は今、ユーリさんのとこに来てるの。

魔法のことで誰かに相談しようと思ったんだけど、ゼル先生はユーリさんここでしか会ったことなかったんだよね。

それに、マリーさんもクルトさんも魔法は使えないと思うし、頼れるのはユーリさんだけだったの。

お昼の食堂を閉めた後、ユーリさんとこに来て、朝あったことを話したんだけど。

「魔法が…使えたの?!」

「うん、指を切っちゃったんだけど、すぐに治せたの。」

「ん…疑うわけじゃないけど、ちょっと見せてくれる?」

「うん、あ、でも…ケガしてなくてもできるのかな?」

「そこは問題ないと思うわ。」

「それじゃやってみるね。優しき光、包み込み、その傷を癒す助

けとなれ…《ヒーリング負傷治癒》…」

朝と違って、ほわつとあったかくなる感覚も、何かが抜けていくような感覚もなかった。

「あ、あれ…?」

「…えっと、ミアちゃん。発動体はどこにあるのかしら…」

ハツドータイ…?そーいえばゼル先生もそんなこと言ってたよーな…

「さっきは何を使ってたの?」

「あたし、発動体なんか持ってないです…」

「へっ?」

そんなにびっくりされると、何だか変なことを言ってる気になってくる…

たぶん…変なこと言ってるんだろーけど…

「でもね…体から何かが抜けてくような感じがして、ケガしたところがほわーってあったかくなって、治ったんだよ？」

「うーん、その体から何か抜けてくような感じっていうのは、あたしが魔法を使ったときとたぶん同じなのよね。」

そのときは本当に魔法が使えたんだ…」

「うん…たぶん…そうだと思う…」

何だか自信がなくなってきた…

でもあれが夢ってことは…きつとないよね。

薪もちやんとできてたし、最後の薪にはちょっと血がついてたし。

「白色の素質があるって言われてたんだし、もしかしたらなくした記憶にその手がかりがあるのかもしれないけど…」

あ、もしかしてその時何かに触ってたとかない？

偶然、発動体に…なんてありえないわよね…」

「んー…ネコくんに触ってた。」

「ネコくん？」

「うん、仲良しの黒ネコくん。こないだ来た時にもついてきてた子だよ。」

「そつえば来てたわね…」

でも、ネコは発動体じゃないわね。」

くすくす笑いながら、「しかも黒かったしね。」って付け加えるユーリさん。

そっかぁ…ユーリさんのも、ゼル先生のも、使う魔法の色の石がつ

いてたもんね。

「んゝ、ごめん、お手上げ。あたしじゃわからないわ。」

「そーですかあ。」

「また先生に連絡取ってみるから、先生が来れそうな日がわかったら白枝亭にも連絡入れるね。」

「あ…はい。ありがとーです！」

ちょっと先延ばしになったけど、ゼル先生なら何かわかるかもだよ
ね。

ようやく気持ちが落ち着いたところで、ユーリさんが用意してくれたお茶をいただいた。

「あ、これ…」

「気が付いた？そう、ちょっと新しいの出してみたの。」

「すっごく甘い香りです。」

「さて、何の香りでしょう？」

えー?!急にそんなこと言われても…

あれ、ユーリさん、みょーに楽しそうだね？

んー…あ、でもこの香り、どこかで…

「ミアちゃんも知ってるはずよ。」

「うん…この香り知ってます。何だっけ…」

「そうねゝ、ヒントはお出かけ、かな？」

お出かけ…っていったら、こないだの連れてってもらったやつだよ
ね。

「あっ！帰りに摘んだあの実?!」

「はい、せいけい！」

乾燥させて、茶葉に混ぜてあるのよ。

目の疲れとかもとれるみたいだから、本が大好きな先生みたいな人にもぴったりかなって。」

「ふえ…こんなお薬なら飲むのも楽なのになあ…」

「気に入ってもらえて何よりだわ。でも、お薬も必要なときはちゃんと飲まないとだめだからね。」

「はうー…」

そのあとも、ユーリさんといろんな話をしてたんだけど、結構時間過ぎちゃった。

そろそろ帰らなきゃいけないね。

「ユーリさん、そろそろあたし帰るね。

相談乗ってくれてありがとうです！」

「あら、そっか。それじゃ、先生の予定わかったらまた連絡するから。」

あ、それと…」

ちょっとユーリさんの表情が硬くなった気がした。

「魔法のことは、先生に相談するまであまり誰にも言わない方がいいかもしれないわ。」

「え…？」

「魔法のことでミアちゃんの変なことに巻き込まれたら嫌だし…先生ならきつとしっかり考えてくれるから。」

「うん…そうするね。」

「それともう一つ、もしまた魔法が使えたとしても、むやみに使わないこと。」

魔法使ったときに、何か抜けていくような感覚ってあったよね。
あれって、体の中にあるマナなんだけど、限界超えちゃうと倒れるからね。

慣れてくると、自分の限界も分かるようになるんだけど…ミアちゃんはきつとまだわからないから。」

倒れちゃうんだ…それ、怖いかも…
うん、気をつけなきゃ…！

「それじゃ、気を付けて帰ってね。
またいつでも来てね。」

「はい、おいしいお茶、ごちそうさまでした！」

笑顔で手を振るユーリさんに、あたしも笑顔で手を振ってお店を出た。

ちょっと長居しすぎちゃったかな？

急いで帰らなきゃ、夕方の食堂の準備が始まっちゃうね！

33 できなかった？（後書き）

謎ばかり転がしてる気がします…
早くちゃんとまとめなきゃ…

昨日はいつもより1時間遅れになっちゃってすみません…

3 4 昔のことを勉強（前書き）

今回、ちょっと説明ばかりになります…

34 昔のことを勉強

今日は教会に来てる。

昨日の午後、さっそくユーリさんが来てくれたんだけど、ゼル先生の時間がとれるのって明後日になるって言われたの。

そのときに、ちょっとだけ魔法の話してたんだけど、あたしが昔のお話っていうのも全然覚えてないのにびっくりされたんだよね。

それで教会に行ってみればってことになったんだけど、あたしが知ってる教会は、この前アルくんたちが迷子になったときにお世話になったところだけだった。

「そーいえば…、入ってもいいのかな？」

この前はお姉さんが声をかけてくれたからよかったけど…
あのお姉さん、またいないかなあ…

「あら、どうされましたか？」

「あ、えつと…あ！」

この前のお姉さん…！

よかったー…

「今日は迷子の方を連れて来てくれたわけではなさそうですね。」
「はひっ?!」

お姉さん、覚えててくれたんだ…
びっくりしたあ…

「それで、今日はどうなさいましたか？」
「は、はい、えと、その…」

今日ここに来た理由を何とか説明すると、お姉さんは教会の中へどうぞっていつてくれた。

お姉さんについて、教会の中の部屋に入れてもらった。

「お茶を用意してきますので、お待ちくださいね。」
「え、そんな、おかまいなくです…」

って言ったんだけど、笑顔で部屋を出て行っちゃった。
何だか…お世話かけちゃてるかも…

ちよつと待つてたら、お姉さんがお茶を持って戻ってきた。

「すみません、何だか…」

「いえ…はい、どうぞ。」

「ありがとうございます。」

えと…あたし、ミアっていいいます。」

「よろしく願いますね。わたしはここでシスターをしているシヤルテと申します。」

「よ、よろしく願いますー。」

「それで、昔のことでしたね。」

どこまで詳しいことをお知りになりたいのかはわかりませんが、わたしの知っていることをお話させていただきますね。

このセルフアリアの世界は、光と闇の神によって創られたといわれています。

二柱の神は、その後、結ばれて何人もの神々を産み出しました。

この教会に祀られている天候と農業の女神ミルファムも、その一人ですね。

そして神々は、この世界にたくさんの生命を産み出していきました。

人族と呼ばれる、わたしたち人間やエルフ、ドワーフ、妖魔、それに動物や植物…

神々によって、適した場所に住めるように導かれていったそうです。

しばらくは平和な時代が続いたそうですが、あるとき、光の神と闇の神が反発することになったそうです。

原因が何かはわかりませんが、このとき、他の神々は、光と闇の陣営に分かれて争うようになり、また人族もその争いに巻き込まれていったそうです。

しかしその争いは、ある日突然現れた、悪魔と呼ばれるものがセルファリアの世界に現れたことによって、終わりを迎えます。

悪魔たちは、神々が創りだしたこの世界を壊すことを目的にしていたようでした。

神々は争いをやめ、悪魔たちと闘うことになったそうですが、悪魔たちの中には、神々に匹敵するような非常に強い力を持つ魔神と呼ばれるものと、相果てることとなり、肉体を失った神々は、天界と呼ばれる世界に、その精神を移したといわれています。

魔神たちは、神々によって滅ばされたとされますが、残った悪魔たちは、人族が協力することで封印したそうです。

その後、神々を失った人族は、主たる2つの大陸に分かれて住むことになりました。

悪魔に対して協力して立ち向かったとはいえ、それ以前の争いで禍根は、深かったようです。

光の陣営に立った、わたしたち人間や、エルフ、ドワーフは、こ

のリュシア大陸に、闇の陣営に立つた妖魔たちは、アンフィット大陸に分かれたのです。

ただ、長い年月の間に、多少は関係が改善されたので、今日では交流を持っていますね。」

シャルテさんのお話をずっと聞いてきたけど…もともと知らなかったのか、覚えてないだけなのかはわからないけど、始めて聞くお話だった。

あれ…でも聞きたいことが出てきてないよね…

「あの…」

「はい。どこかわかりづらいところがありましたか？」

「いえ、あの、えっと、その…魔法についてのお話ってありますか？」

「魔法ですか？」

そうですね…始めはすべての人族が魔法を使えたといいますが…わたしたち今の人間は、魔法の素質を持つ方もいらっしゃいますし、持つておられない方もいらっしゃいますね。

エルフは必ず黄色と青色の素質を持つそうですし、ドワーフは黄色と赤色の素質を持つことが多いそうです。

また、黒色は闇の陣営の人族にしか使えないということですが…それ以上のことは。」

すみませんと頭を下げるシャルテさんに、慌ててお礼を言う。あたしの方が時間を取らせちゃって謝らなきゃいけないのに。

「少しでもミアさんのお役に立てたなら幸いです。」

「シャルテさん、本当にいろいろとありがとーございました!」

「またいらしてくださいね。お待ちしております。」

「は、はいっ!」

魔法のことはあんまりわかんなかったけど、
たくさんお勉強になっ
ちゃったね。

明日はユーリさんにも報告しなきゃ！

35 ゼル先生の大予想 その1

今日はゼル先生との約束の日。

お昼の食堂営業のあとの休憩時間に、またユーリさんここで会うことになってる。

「こんにちはー。」

「あ、ミアちゃん、いらっしやい。」

「先生はまだよ。」

「よかった、お待たせしてなくて。」

お茶を淹れてくるからと、ユーリさんが奥に行ったから、座って待たせてもらうことにした。

ぼーっと待っていると、入口からお客様。

先生かな？って思ったんだけど…知らない男の人だった。

「あれ、ユーリアさんはいない…？」

「えっと、今ちよつと奥に。たぶんすぐ来ます。」

「そうか、それじゃ待たせてもらうかな。」

きつとお店のお客様だよな。

ちよつとこっつい感じで、おひげがわさつと。

何となく…くまさん？

って見てたら、目が合っちゃった。

「君も、お茶を買いに来たのかい？それともハーブの方かな？」

「えと…ユーリさんとお話しに来ました。」

「なるほど、ユーリエさんのお友達か何かか。」

ふむふむ、とお髭を触りながら納得してくれた。

君も、っていうくらいだから、この人もお茶を買いに来てるのかな？

「ミアちゃんおまたせ」。

あら、ランディさん、いらつしやいませ。」

「すまないね、小さな先客さんがいらしたんだが、少し急ぎでね。」

「いいえ、大丈夫ですよ。」

ミアちゃん、ちよつとごめんね。お茶飲んで待つてて。」

「はい。」

テーブルをちよつとわきに寄せて、先にお茶をいただくことにした。ランディさんは、いつもここにお茶を注文に来てるみたいだけど、聞こえてくる話ではどこかのお屋敷で働いてるみたい。

いつもは大体決まった間隔で来てたみたいだけど、何か問題があった、お茶が足りなくなったのかあ。

何か大変そう……

お話はすんなりまとまって、ランディさんは、茶葉を受け取ってそのまま帰ってった。

「ふう、おまたせ。」

「おつかれさまですー。」

「それにしても、先生遅いわね……何かあったのかしら？」

「ふみゆー……」

そういえばちよつと遅いかも……

だいじよぶかなって考えてたそのとき、ゼル先生が入ってきた。

「いや、お待たせしてしまつてすみません。」

「いらつしやいませ。もー、何かあったかと思つたわよ。」

「ゼル先生、こんにちはー。」

「ああ、ミアさんもお待たせしてしまつて申し訳ない。」

「こちらこそ無理を言っちゃつてすみません。」

あたしとゼル先生はお辞儀合戦みたいになつてゐる。

「でも先生にしては珍しいわよね。」

もしかして本当に何かあつたの？」

「いえ、そういうわけではないのですが、少し寄りたいところがありまして。」

そう言つて、椅子に座つたゼル先生は、改めてあたしの方を向いた。そして、テーブルに1つのブレスレットを置いた。

「ユーリエくんから聞いたのですが、ミアさんは魔法を使えたということですね。」

「あ、は、はい。」

「それで、ここで試したときはうまくいかなかったと。」

「そうです。」

「では、これをつけてみてください。」

と、テーブルに置いたブレスレットをあたしの方に差し出してくれる。

よく見ると、ブレスレットには白い石がはまつてた。

ユーリエさんがはつとして声を上げる。

「先生、これつて白色用の発動体……ですか？」

「そのとおりです。」

「でもどうして先生がこれを？」

「実は……ギルドの知り合いに頼んで借りてきたのですよ。」

ユーリエくんの話聞いて、発動体があれば魔法が使えるのでは

ないかと思ひまして。

少し時間がかかってしまいましたが…」

あうー、ゼル先生、すみません。迷惑掛けまくりです…

「さて、それでは試してみましようか。」

そう言つてゼル先生は自分の袖をまくつた。

あれ…ひじがすりむけてる…

「わざとではないのですが、丁度いいかと思ひまして…」

「先生…タイミングよすぎるでしょ…」

ユーリさんの冷やかな一言が決まつたところで、実際にプレスレツトをつけて試してみることになった。

何となく左腕につけてみたんだけど、あたしにはちょっと大きめだった。

でも、発動体としては問題ないからっていうことで、さつそく実験。ゼル先生のすりむいたひじに手を当てて、治そうとするイメージを持って…

「優しき光、包み込み、その傷を癒す助けとなれ…」ヒーリング《負傷治癒》

「

あの時と同じ感覚…体から何かが抜けるような感じがして、あたしの手がほんのり光りに包まれる。

そしてゼル先生のひじは、きれいに治つた。

「あ、できた！」

「ふむ、間違いないですね。」

「ほんとにほんとなのね…」

あたしとユーリさんは割とびっくりした感じだったけど、ゼル先生は落ち着いていた。

「これは私の想像ですが、もしかすると、ミアさんが以前に魔法を使ったときは、その触っていたネコが発動体になるようなものを身につけていたか、もしくは体内に飲み込んでいたのかもしれない。」

「「ええっ?!」」

ゼル先生の言葉に、あたしもユーリさんも思わず声をあげちゃった

…

35 ゼル先生の大予想 その1（後書き）

何か中途半端になってしまいましたが、次続きます。

36 ゼル先生の大予想 その2

「ネコくんが何で発動体を持ってたの?!」

「生き物の体内にあっても発動体って使えるんですか?!」

あれ…?

あたしとユーリさんの疑問は、どうやら別物だったっぽい…?

「まあ、落ち着いてください。」

と、その前に、ミアさん、ブレスレットを返していただけますか？
申し訳ないが、借り物ですから。」

「は、はい…」

ブレスレットを返すと、ゼル先生は、布に包んで懷に仕舞った。

ユーリさんが、3人のカップにお茶を注ぎ足してくれる。

3人とも何となくお茶をすすって一息ついて、落ち着いたけど…

「さて、まずユーリエくんの疑問の方からいきましょう。」

これに関しては、小さな生き物であれば実証されています。

ペットが誤って魔石を飲み込んでしまったときに、ペットを通して魔石が反応したという実例が報告されていますから。

大きな動物では実例報告を聞いたことがありませんし、誰も好き好んでそんなことをしようとは思いませんからね。」

「何だか意外だわ…」

「ゼル先生…魔石って何ですか？」

「ああ、すみません。魔石とは発動体に組み込まれる石のことです。ミアさんの疑問にも関わるところですが、魔石はつくることができません。」

それぞれのマナと相性の良い石、主にはその色の石になりますが、

それに魔法をかけることで作りだすことができます。

ただ、ある程度の力量のあるものでないとできませんが。」

「そっか、石が重要だったんですね。」

「でも先生、それがミアちゃん疑問とどう関係があるの?」

「はい、実は魔石は自然界でもつくられることがあるのです。」

「ええっ? そうなんですか?!」

ユーリさん、さっきから驚いてばかりだね。

あたし? だってよくわかんないし…

「あまり知られていませんが、長い時間をかけてマナが結晶化したものがあるそうです。」

まあ、ほとんど見つかることはない上に、質が高いので、希少価値も高く、目にすることはほとんどありませんが…」

「一般人には縁のない世界なのね…」

「そうですね。」

おっと、話が逸れてしまいました。

ミアさんの言うネコが、もしかするとそういったものを誤って飲み込んでいたという可能性はなくもないかと思ひましてね。」

「さすがにそんな偶然は… っていうても、それくらいしか説明つかないかも…」

「ネコくん、だいじょぶかな…」

もしそんなの飲み込んでたら、ネコくん変なことになっちゃうとか…

「ミアさん、心配そうですね。」

大丈夫ですよ。魔石自体には害はないはずですから。

それに、飲み込んだものならそのうち出てくるでしょうし…」

「そっかぁ… よかったー…」

「…でてくるのよね、やっぱり。」

あれ、ユーリさんどうしたんだろ？
何か遠い目してる…

「ところでミアさん、もし本格的に魔法を使ったり勉強したりするならば、ギルドに入るなり、治療師ヒーラーに習うなりということになりますが、どちらにせよ発動体が必要になりますね。」

「あ、そっか。自分の発動体がいるんですね。」

「はい。ギルドでは使える魔法の発動体しか売ってもらえませんが、ミアさん自身が所属するか、ギルド所属の治療師ヒーラーにお願いするかありませんね。」

私では白色の発動体は買うことができませんので。」

ゼル先生だと、青色と緑色しか買えないんだね。

魔法、使えるのはわかったけど、使えそうにないかも…
お勉強に行く時間は取れそうにないもんね。

「ゼル先生、ありがとーございます。」

あたし、魔法が使えるのがわかっただけで十分です。

宿のお手伝いもあるし、今はギルドとかもいいです。」

「そうですか。今後何かお手伝いできることがあれば協力させていただきますよ。」

「ほんとにありがとーございます！」

ゼル先生は、この後借りてきてくれた発動体を返しに行くから、先に帰ることになった。

あたしもそろそろ、夕方の準備に行かなきゃいけないから、おいとますることにした。

「ユーリさん、あたしもそろそろ帰りますね。」

「うん、気をつけてね。」

あ、それから、一応確認が取れたし、クルトさんとマリーさんにはちゃんと報告してね。」

「はい。ユーリさんもいろいろとありがとーです！」

「いつでも頼ってね。あたしに協力できることならまかせといて。」

もしかしたら、魔法が使えることは、あたしの忘れちゃった記憶の手がかりなのかな。

でも、思い出せなくてもいいかなって今は思ってる。

だって、毎日とっても幸せだから。

帰ったらマリーさんとクルトさんに教えてあげるんだ♪

2人とも、びっくりしてくれるかな？

36 ゼル先生の大予想 その2（後書き）

ちよつと中途半端でしょうか…

37 ちゃんと報告

ユーリさんところから帰ったら、すぐに夕方の食堂の準備に入ることになったから、2人に報告することができなかったの。

食堂の片付けも終わって、いつものようにお茶の時間だし、ここで報告だよな。

クルトさんが淹れてくれたお茶は、甘い香りがする。

前にユーリさんが出してくれた、青紫色の実が入ったあのお茶を、クルトさんに紹介したら、すぐに注文してくれたみたい。

お茶をおぼんにのせて、クルトさんについて食堂に運んでいったら、マリーさんがテーブルの準備をしてくれてた。

「待たせてしまったかな？」

「ううん、大丈夫よ。クルトもミアもありがとう。」

「お茶ですー。」

カップを渡して、あたしもクルトさんも席に着いた。前と同じ、甘い香りが立ち込めて、とってもいい感じ。

「ミアのお勧め、とってもいい香りがするわね。」

「うん、生で食べたときよりも、香りが強く出ている気がするね。」

えへへ、何だかほめられてるみたいで嬉しいな。つと、報告しなきゃね。

「マリーさん、クルトさん、ちょっとお話しとかなきゃいけないことがあるの。」

「あら、何かしら？」

「えっとね、あんまり驚かずに聞いてほしいんだけど…」

んー…何て言ったらいいんだろ…？
…悩んでもダメだよね。

「あたしね、魔法が使えたの。」

「……………」

「あの、えと…マリーさん？クルトさん？」

「ミ、ミア、魔法が使えたって…どうということよ？」

クルトさん、まだ固まってる…

やっぱりちゃんと順番に話さないためだよな。

薪割りしててケガしたときに魔法が使えたこと、身近で魔法が使えるユーリさんに相談したこと、ゼル先生が相談に乗ってくれたこと、順番に話してみた。

「そういえば、アリスもミアに素質があるって言ってたわね…ちょっとクルト、大丈夫？」

「ん、あ、ああ…驚いてしまっ…」

「それで、ミアはどうしたいの？」

「どうしたいって？」

「魔法、習ってみたい？」

「ん、別にいいです。使えなくても問題ないから。」

「そう、ミアがそう思うならわたしはそれでいいと思うわ。」

「私もミアの思う通りにすればいいと思うよ。もし、そのうち習いたいと思うなら習えばいいし。」

2人とも、あたしの気持ちを大事にしてくれてる。
その心づかいが、ほんとにあっただかいなっと思う。

「マリーさん、クルトさん…いつもあたしのことを考えてくれてほん

とにありがとーです。」

「何？改まって…ミアはうちのだいじな家族みたいなものじゃない。」

「そうだよ。ミアががんばってくれているから、私たちもすごく助かっているし、毎日がとても楽しいんだよ。」

「はうう…」

そんなに言われると何だか恥ずかしくなるよ…

テーブルの上に突っ伏してたらなでなでされてる。

あつたかくて気持ちいいな…

「ミィアー…寝ちゃだめよ？」

「はひっ!？」

「目を閉じて、今にも眠ってしまいそうだったね。」

「ちょっと子ネコのようなだったよ。」

あたしが眠そうだったからかもしれないけど、今日はちょっと早めに切り上げることになった。

クルトさんは、片付けておくっていつてくれたけど、たまにはあたしもやらなきゃね。

ってことで、2人には先に休んでもらって、あたしが片付けることにさせてもらったの。

「それじゃミア、よろしくね。」

「先にながらせてもらうよ。おやすみ。」

「おやすみなさいー。」

2人を部屋に見送って、カップを洗っちゃう。

あとはひっくり返して置いておけばいいんだよね。

残ってるお水は一旦捨てるけど、お部屋に持っていく水差しに先に汲んでおかなきゃ。

残った水を流してしまつて、戸締り確認。
ばつちり大丈夫だね。

食堂も、もう真つ暗で静まり返つてる。

ゆっくり階段を上つて、静かに部屋へと向かつて、服を着替えると、何だか眠気が…

今日は、魔法が使えることがしっかりわかつたし、マリーさんとクルトさんにもちゃんと報告できたし、いろいろあつたね。
しっかり休んで明日に備えなきゃね。

それじゃ、おやすみなさい…

37 ちゃんと報告（後書き）

気がつけば4000PV、本当にありがとうございます。
毎日更新、できる限りがんばりたいと思います。
よかったらこれからも応援よろしくお願いします！

38 切るの？切られるの？

「……………」

「ミア、息が止まってるよ。」

「っ！ひゅうー…はぁー…」

とんでもない強敵を前に、あたしは息をするのも忘れていたみたい…
右手には、包丁。ただし一番小さいの。

左手には、じゃがいも。あたしたちのご飯になる予定。

もっとお手伝いできることが増えた方がいいって、前から思ってたの。

今日はちよつと朝の食堂が忙しくて、クルトさんも大変だったんじゃないかな。

そこで、あたしも料理ができるようになればお手伝いできるかも、ということ、クルトさんをお願いしたのが、朝の食堂営業後。

早くも心折れそうです…

「ミア、集中して…包丁が先に行かないように。」

「ん……………」

「じゃがいもの方を動かす感じで。」

たまに力が入りすぎて、包丁がサクッと動いちゃうと、もう冷や汗
出まくりです…

何とか1つめの皮むきが終わったけど、包丁を置いたら、くたつと
なっちゃう。

向けたじゃがいもを、クルトさんが手にとって見てる。

離れて見たって、やっぱりでこぼこかくかく。

クルトさんが向いたらまるっこくてきれいなのに。

「一番最初に包丁使ったときに、クルトさんがあわてて止めたのを思い出しちゃった。」

あたし、やっぱり向いてないのかもしれない……」

「まあ、最初からうまくできるなんてことはないからね。」

何度もやっているうちに上達するはずだよ。」

「何度もしなくちゃダメなんですネ。」

「私だって、最初はぜんぜんダメだったんだからね。」

「えー、クルトさんが？何か信じられない……」

もう一つ、やってみようかな……

次のじゃがいもを手にとると、クルトさんがなでなでしてくれた。よっし、がんばるぞっ。

「包丁をそんなに握りしめてはいけないよ。」

…

「もう少し肩の力を抜いて……」

……

「うー、やっぱり難しい……」

「大丈夫、さっきよりはずいぶん早くなってるよ。」

って言ってるクルトさんの目の前にはすでに4つのきれいなじゃがいもが……

あたしのようすを見ながらもその早さですかっ！

…練習しかないよね。

「ま、6つもあればいいかな。」

ミア、そのじゃがいもを適当に小さく切ってくれるかな。」

「適当って…」

「小さくなればいいよ。」

あ、こつちの大きな包丁を使いなさい。」

そう言つて、朝のメニューのスープが残つてるおなべを火にかけてる。

よし、切るぞー。

まな板にじゃがいもを置いて、包丁を当てると、コロんと転がった。

「きゃっ！」

「左手でじゃがいもを押さえて。」

「は、はい…」

「こんな風に軽く指を曲げて、包丁を添わせるように。指を切らないように注意するんだよ。」

注意深く包丁を進めていったおかげで、ケガはせずにすんだけど、何かとつても疲れちゃった…

小さく切ったじゃがいもをまな板ごとおなべのどこまで持つていくと、クルトさんはそのままおなべにじゃがいもを投入した。

「あとは…スープにじゃがいもを使ってしまったし…あ、あのパンが残っていたはずだね。」

「もしかして、この前食べたおつきいやつですか？」

「うん、あのパンは割と日持ちするけど、早めに食べることにしたことはないからね。」

ちよつと取ってくるから、鍋の方は頼んだよ。」

「はい。」

おなべのようすを見るのは、何度も手伝ってるし大丈夫。
ぼこぼこ泡ができるようになったら、ちよつと火を弱めてあげれば
いいんだし。

まあ、クルトさんはすぐに戻ってきてくれたから、あたしが火を調
節することもなかったけど。

戻ってきたクルトさんは、おなべの様子を見ながら、パンを切り分
けてる。

「ミア、マリーを呼んできてくれるかな。」

「はい。」

厨房から食堂に入ったら、マリーさんはいつもどおりカウンターで
お仕事してた。

あたしに気付いてマリーさんが顔を上げる。

「あら、ミアどうしたの？」

「ご飯できましたー。」

「そう、すぐ行くわ。先に食べててね。」

「はい。」

厨房に戻ったら、もうパンが用意されてた。

入ってきたあたしの顔を見て、クルトさんがスープをよそってくれ
る。

「マリーさんもすぐ来るって言ってました。」

「ミアは先に食べてていいよ。」

「はい、いただきます。」

これも実はいつものこと。

あたし、ちょっと食べるの遅いんだよね。

だって、おいしいから急ぐともったいない気がするんだもん。

「おまたせ。ごめんね。」

「全然待つてないよ。」

今日はミアも手伝ってくれたからね。」

「じゃがいも切っただけだけど……」

「がんばってるじゃない。」

そのうちミアの手料理が食べれるのかしら?。」

「うー…がんばる……」

でもいつかほんとにちゃんと料理して食べてもらえたらいいな。
ちよっとずつやってみなきゃね!

39 おひさしぶりです

「ありがとーございました。」

今日のお昼の食堂ももう終わり。

今のお客様が最後だから、お見送りついでに、玄関の表の札を準備中に替える。

「ミア、食器お願いね。」

「はい。」

マリーさんもカウンターでいろいろ後片付けしたり、帳簿付けたりしてる。

カウンターに残ってた最後の食器を、厨房に運ぶ。

厨房ではクルトさんが、片付けを始めてたから、あたしも水場で洗い物を始める。

あたしが洗い物を終えるころには、クルトさんはあたしたちのちよつと遅いお昼の用意をしてくれた。

今日はじゃがいもをゆでてつぶして味付けしたのに、グルストがついてる。

お客様用のお昼メニューの簡易版だね。

「ミア、マリーにも声をかけてきてくれるかな？」

「はい。」

食堂に入ると、マリーさんのほかに何人かいるみたい。

お客様かな？でもお昼終わってるし、あたし、ちゃんと準備中の札出してきたはずだから、ご飯とは関係ないかな？

「よう、ミアちゃん、久しぶり。」

「あ、フェリックスさん！お久しぶりですー。」

アリサさんもエリカさんもレックスさんも

いつ戻ってきたんですか？」

「まあ、ついさっきだよ。」

「ところでミア、どうしたの？」

「あ、そだ。ご飯の準備できたって伝えにきたんだった。」

「ありがとう、先に食べててね。ちよっとリックたちと話があるから。」

「はい。」

みなさんにお辞儀したら、アリサさんとエリカさんが手を振ってくれたので、あたしも振り返って厨房に戻った。

「遅かったね？」

「フェリックスさんたちが戻ってきてたんです。」

「そうか、しばらくぶりだね。」

私もちよつと挨拶してくるよ。」

「いつてらっしゃいます。」

クルトさんも食堂に行っちゃったから、あたしは先にご飯をいただきます。

料理を盛り付けてある横に、お茶まで用意してあった。

クルトさんありがとうございます。いただきます。

食べ終わる頃になってもクルトさんもマリーさんも戻ってこなかったから、お話が盛り上がってるのかな？

お茶、淹れていこうかな…

包丁も使わないし、だいじょぶだね。

ということ、お茶の準備に取り掛かることに。
クルトさんが沸かしてくれてた（たぶん、お昼のお茶用の）お湯を
そのまま使えば、すぐにできるよね。

「なるほどね…何か嫌な感じがするわ…」

「ああ、俺たちもそう思って、まあ戻ってきたついでって言うたら
なんだけど、報告に来たんだ。」

「隊商なんかに影響が出そうだね…」

「実際、もうやられてるっていう噂も聞いたつすよ。」

「ありゃ…何か難しいお話してたかな…」

「あんまりお茶って雰囲気じゃなかったかも…」

「あ、ミアちゃんー。」

「アリサさんが気づいて手を振ってくれたんだけど、両手でトレイを
持ってたあたしはもちろん振り返すことができなかった。」

「でもその声でみんながこっちを見たから…何か変な状況に…」

「あ、ミア、もしかしてお茶淹れてきてくれたの？」

「何だか時間がかかってそうだったから…」

「ありがとう。それじゃみんなに配ってあげてね。」

「はいっ！」

「お茶を配り終わると、アリサさんが隣にイスを用意してくれてて、
おいでおいでってしてたから、せっかくなので、お隣に座らせても
らった。」

「ミアちゃん、魔法が使えたって聞きましたよー。」

すごいじゃないですかー。」

「ほえっ！」

「マリーさんが、教えてくれたんですよー。」

驚いてマリーさんの方を見ると、「ごめん、先に言っちゃった」って…

別にいいんだけど、使うこともなさそうだから、ちょっとそのこと意識してなかったや…

「おっと、マリー、お昼を忘れてたね。」

「あらやだ、ほんと。」

「あー、すみません、俺たちが変なタイミングで来ちゃったから。」

「いやいや、私たちに情報を急いでくれたんだから、むしろこちらがお礼を言わなきゃいけないくらいだよ。」

「わたしたちの方からも、ギルドに情報入ってないか確認しとくわね。」

「お願いします。あ、あと今晚からしばらく泊まれるかな？」

「今朝発ったところがあるからいけるわね。」

ミア、ご案内お願いね。」

「はい。」

マリーさんとクルトさんは、厨房でご飯。

フェリックスさんたちには待つてる間に、お茶してもらおうと思ってたんだけど、アリサさんとエリカさんは予定があるみたいだから、お荷物だけ預けてもらって、お出かけしてもらうことになった。

お部屋の準備をして降りてきたら、フェリックスさんとレックスさんが、アリサさんとエリカさんの荷物も持って上がるうとしてた。お荷物運びますって言ったんだけど、「ちょっと重いものもあるだろうから、俺たちが運ぶよ。」って持ってた。ちやった。

確かにあたし、ちっちゃいし、あんまり力ないけど…

お客様に気を使わせちゃってるよね…

もっと頼られるようにならなきゃ！

でも、フェリックスさんたち、しばらくお泊まりしてくれそうだし、いろいろお土産話とか聞かせてくれるかもしれないよね。
ちよっと楽しみ♪

40 白色のプレゼント

「ミア、ちょっと来てくれるかい？」

お昼が終わった後、食堂の方でクルトさんがあたしのことを呼んでる。

クルトさんもマリーさんも先にご飯をすませて、食堂の方で何かしてただけ。

ごちそうさまして、食器を水場に持っていくってから食堂にいくと、テーブルでマリーさんとクルトさん、そしてアリサさんが待ってた。

「座ってくれるかな。」

「はい。」

何だろ…

何かあったのかな…？

クルトさんとマリーさんが並んで座ってるから、向かいのアリサさんの隣のイスに座ることにした。

んー、いつもみたいなお話じゃなさそう…？

って思ってたなら、アリサさんがイスごとあたしの方に向いた。

「ミアちゃん、あたしに魔法を習ってみる気はないですかー？」

「……ナラウ？」

ナラウって、習うだよね…魔法を？

あ、そっか、アリサさんは白色魔法が使える治療師ヒーラーさんだっけ。でも急に…？

「ミア、大丈夫？」

「は、はひっ?!」

「落ち着いて、そんなに固まらないでね。」

「はい…、だいじょうぶです。」

「ま、急に何でっと思って思ったかもしれないけど、ミアがやってみたいなら、どうかなって。」

「でも、でも…宿のお手伝いもしたいから、習ってる時間は…」

魔法に興味がないかって言ったら、そんなことない。

使えたときはびっくりしたし、ちよつと嬉しかったもん。

けど、今一番やりたいのは、宿のお手伝い。

マリーさんと、クルトさんと一緒にがんばりたいから。

「ミアちゃん、実はですね!」

わたしの考えなんですけど、ギルドで習うとかになるとー、時間がかかっちゃいますよね!」

でも、ミアちゃんは魔法がもう使えるみたいですしー、そんなに時間をかけずにー、少し使えるものを増やせるんじゃないかって思ってます!」

「そう…なんですか?」

「やってみなくちゃー、わかりません!」

だからー、試してみませんか?」

んー、もし休憩時間とかにできるなら、やってみたいかも…

マリーさんたちの方を見ると、2人ともにっこりとうなずいてくれる。

「それじゃ、休憩時間とかにちよつと…っっていうのでもいけますか?」

「もちろんですよ!」

わたしも、いつもできるとは限りませんのでー、お互いに時間が

取れたときにー、やってみましょうー。」

「ありがとうーございます！よろしく願います！」

何だかすごいことになってきたけど、わくわくもしてきた。

マリーさんとクルトさんも嬉しそう…っていか何かほっとしてる
感じもする…かな？

ちよつと気になったんだけど、あたしの前にアリサさんが布の包み
を差し出してくれたから、考えるのそこで止まっちゃった。

「これは…？」

「うふふー、実は昨日のうちにー、買ってきてたんですよー。」

無事、ミアちゃんにプレゼントできますー。」

包みを開けると、中からアリサさんのとよく似たペンダントが出て
きた。

そう、白い石がついてるペンダント…

「これ、発動体…ですよね…？」

「はいー、そのとおりですー。」

どんな形がいいかー、迷ったんですけどー…」

「あたしに…？」

「そうですよー。あ…もしかして別の形のほうがよかったですかー
…？」

ちよつと困ったような顔でアリサさんに尋ねられたけど、首をぶん
ぶん横に振って違うって主張する！

「ありがとうーございます。うれしいですっ！」

「喜んでもらえたならー、よかったですー。」

あれ、もしかしてマリーさんたちがほっとしてたのはこのプレゼン
トのことだったのかな…
きつとそういうことだね。

「それではー、わたしもいろいろとー、準備をしておきますのでー。
よかつたらー、明日の午後からー、始めましょうかー。」

「ふに…クルトさん、明日の午後って、だいじょうぶですか？」

「ああ、問題ないと思うよ。」

「ありがとうーです。それじゃアリサさん、明日からよろしくお願
いします！」

「はいー。がんばりましょー！」

アリサさんが準備があるからって出かけた後、マリーさんとクルト
さんと3人でちょっとお茶することになった。

今回のことはきつと、あたしのために2人がアリサさんをお願いし
てくれたんだと思う。

ありがとうーっていったけど、2人も「何のこと？」って笑ってるだ
けだったけど。

とにもかくにも、こうして、明日からあたしは魔法を習うことがで
きるようになった。

いっぱいがんばって、いろんな魔法覚えたいな♪

もちろん、宿のお手伝いだってばっちりがんばるんだからね！

41 初授業

「それではー、さっそく始めましょうー。」

ここはあたしの部屋。

小さなテーブルに向かいあって、イスに座ってるアリサさんと、ベツドの端っこに座ってるあたし。
いよいよ今日から魔法を習うの。

「よろしくお願いします！」

「あまりー、かたくならないでくださいねー。」

アリサさんはそういうけど、やっぱりちょっと緊張しちゃう。
どんなふうに教えてもらえるのかな？

「まずはー、わたしたちが使える白色魔法についてー、少し勉強してみようー。」

ミアちゃんはー、魔法についてはー、どれくらい知っていますかー？」

「えっと…6色あって、人によって使えるものが決まってるんですよね。」

あと、魔法語ルインワードが使えないとダメで…
発動体がないと使えない…くらいです。」

あたりまえだけど、ゼル先生に教えてもらってたことしかわかんない。

教会でも少し聞けたっけ…？

「はいー、今ミアちゃんが言ったことはー、全部合ってますよー。」

これはー、少し予習もしていたみたいですねー。

ところでー、魔法が使えたということはー、魔法語ルーンワードがー、あの程度理解できてる感じですよー。」

「あ、はい、読めたし、話すこともできました。」

「わかりましたー。」

それでは次に白色魔法の特徴を少しお話しますねー。

魔法は色ごとにその特性を表した力を持っていますー。

白色は大きく3つの特性を持っているのですけどー…」

そこで言葉を切ったアリサさんは、ペンダントに左手を当てて集中し始めた。

そして右手の人差し指をすっと伸ばしてる。

「ライト
《光》」

アリサさんが、魔法語ルーンワードを唱えると、伸ばした指の先に、明るく光る玉が生まれた。

そして、指を動かすと、光の玉が動いていく。

「すごい…」

「1つめは、光という特性ですねー。」

光源になるような光もあればー、強い光で目くらましのように使えたりもしますー。」

あとはー、悪魔たちに対抗する力にも成り得ますー。」

「ほへ？悪魔って…封印されたんじゃないんですか？」

教会に行ったときに、そんな風に聞いたよね。
シスターのシャルテさんがお話してくれた…

「んー…確かにー、大昔にー、魔神や悪魔の中でも強力なものたち

はー、多くが封印されたそうですー。

ところがー、中にはー、封印を逃れたものやー、封印するまでもなく倒されようとしていたところを逃げだしたものがー、現存する悪魔たちですねー。」

「それって…それってすごく危なくないですか?!」

「そうですねー。ただー、古くからある遺跡やー、洞窟なんかにー、潜んでるからー、普通に街で暮らしてたりするとー、会うことなんてないですけどねー。」

そっか…世界を壊そうとしたようなやつらになんか会いたくないもんね…

あれ、でも遺跡とか洞窟とかって、うちのお客様なんか行くんじゃないの…?

っていうか、アリサさんもあつたことあるんじゃない…

「アリサさんは、悪魔に会ったことってあるんですか…?」

「ありますよー。」

さらっと答えられちゃった…

アリサさんたちって、実はやっぱりすごい人たちなんだ…

「あー…」

「ど、どうしたんですか?」

「まだ1つ目の説明でしたねー。あと2つも行きましょうー。」

びっくりした、何か変なこと思い出したのかと思っちゃったよ。うん、だいじょぶ、きつとあたしが会うことはないよ。うん…

「2つ目はー、前にわたしがミアちゃんに掛けた魔法のようにー、心にはたらくという特性ですー。」

「あ…記憶が戻せないかっていうときの…」

「そうですねー。」

それから3つ目ですけどー、ミアちゃんも使ったー、治癒の特性ですねー。

白色魔法を使う人たちがー、治療師ヒーラーと呼ばれるのはー、この特性の魔法のせいですねー。」

あたしの魔法って、切っちゃった指を治すくらいなんだけど…それでも治療師ヒーラーって呼んでもらえるのかな…

でもがんばったら何かの役に立てるようになるよね、きっと。

「さてー、それではちよつとー、実践的なこととしてみましょうー。最初はー、自分の限界をー、感じることですー。」

「自分の限界…？」

「はいー、魔法を使うときー、自分が持っているマナを使っちゃいますー。」

そのときー、自分の限界を越えて使っちゃうとー、倒れちゃうんですよー。」

あ、それって前に聞いたよね…

ユーリさんからだっけ？

「倒れるっていつてもー、眠っちゃうようなものですけどねー。

ほらー、体が疲れたらー、眠っちゃうのとー、一緒ですー。」

「眠っちゃうんですか。」

あ、でもそつか、お外で魔法使って眠っちゃったら大変だ…」

「うふふ、その通りですー。」

それではー、やってみましょうー。」

コツさえつかめばー、すぐですからー。」

アリサさんが言う通りに、目を閉じて体を楽にして座り、魔法を使ったときと同じような感じで意識を集中させる。

あたしは1回、魔法を使ってるから、意識の込め方とかはわかりやすいはずっていわれたんだけど、それでもなかなか感じる事ができなかった。

「うー…難しい…」

「そうですかー。わたしも最初はー、ちょっと時間がかかりましたからー、焦らずに行きましょうー。」

「はいー…」

んー、結構大変なのね…

コンコン

もう1回、集中してみようかと思ってたときに、扉がノックされた。

「はい？」

「ミア、入っていい？」

マリーさんの声がしたので、いいですって答えると、トレーを片手に入ってきた。

「がんばってる？」

お茶持ってきたから、適度に休憩してね。」

「ありがとーです！」

「わー、いただきますー。」

「アリサもありがとね。」

晩にでも、今日のこと教えてね。」

そういつて、マリーさんは降りて行った。

ちよっとお茶をいただいて、リフレッシュして、もっかいがんばる

ぞー！

42 お仕事は集中しなきゃね

結局、休憩の後もあたしは自分のマナの量を感じることができなかった。

アリサさんは、「一度ー、これってわかればー、あとはもう自然にできちゃいますからー。」っていったけど。

最初が難しいのね…

コツ、かあ…

「ミア！」

「はひっ?!」

「今、ボーっとしてたね。大丈夫かい？」

「あ…」

クルトさんの声に、意識が手元に向いた。

あたし、お皿を持ったまま、水場を通り過ぎてた…

これじゃダメだね。

今はしっかりお仕事に集中しなきゃ。

「ごめんなさい、だいじょぶです。」

「わかった。それじゃ、できてるやつ運んでいつて。」

「はいっ！」

夜の食堂は、一番忙しい。

宿のお客さん以外にも、ご飯を食べにきたり、お酒を飲みに来たりするから。

できあがった料理を、食堂に運んでいくと、マリーさんも急がしそくに動いてた。

お客様のイスの間を抜けて、注文されたテーブルに料理を運ぶ。

「お待たせしました。日替わりプレート2人前です！」

「おー、ミアちゃん、待ってたよ。」

「今日のも美味そうだなっ！」

常連さんはあたしのことをミアちゃんって呼んでくれる。

すっかり定着しちゃった感じかな？

慣れてないうちからいろいろと声をかけてくれるお客様が多くて、がんばる元気一杯もらったしね。

厨房に戻るときは、空いてるお皿やカップを回収していく。

重ねて積んでくれたりすると、回収しやすいんだよね。

いくつかのテーブルやカウンターを回って回収したら、また厨房に戻る。

そして、水場の桶につけていく、っていうのが一連の流れかな。

席が埋まってある程度過ぎれば、少し余裕が出てくるんだけど、そのときに、ミアさんと交代で、ちよつとずつ水場の食器を洗っていく。

全部貯めちゃうと、後で大変なんだよね。

でも、ずっと洗ってるわけにはいかない。
だって…

「ミア、テーブル空いたから、お願いー。」

食堂からミアさんの声。

お客様がお帰りになったら、テーブルのお掃除。

忙しいときは次のお客様がすぐに入ったりもするから、手早くしないとね。

食堂の空いたテーブルの食器をかためて、布巾でテーブルを手早く拭き上げる。

待ってるお客様がいるみたいだね。

食器を厨房に運んだら、ご注文を聞きに来なきゃいけないかな？
食器を持って動きだしたあたしにマリーさんが声をかけてくれる。

「注文はわたしが受けるから、水場、お願いね。」

「はいっ！」

戻って水場で洗い物していると、マリーさんから注文が届いた。

っていつてもつくるのはクルトさんだから、あたしはお皿を用意したりするだけ。

早く料理もがんばらないとだめだよね…

何だかやることいっぱいだよー！

「はい、上がり。ミア、頼んだよ。」

「はいっ！」

できあがった料理を運んでいくと、新しいお客様は知ってる人たちだった。

「あ、フェリックスさん、エリカさん、レックスさん。」

おかえりなさいですー！

お料理お待たせしましたー！」

「ただいま。」

ミアちゃん、すっかり慣れたなあ。」

「えへへ、ありがとうございます。」

そいえば、アリサさんは？」

「何か用事があるって、別行動。」

ま、そのうち帰ってくるだろうけど。」

「そですか。」

「それではごゆっくりですー。」

そのあとも、空いた食器を回収して厨房に戻ったんだけど、今夜の山は越えたみたい。

テーブルもカウンターもだんだん空いてきてる。

ここまで来たら、食堂の方はマリーさんにお任せして、あたしは水場に専念だね。

「はい、今日もお疲れ様でした。」

「お疲れ様。今夜も繁盛してたわね。」

「おつかれさまでしたー。」

片付けも一段落して、お茶で休憩。

今日も忙しかったけど、食堂もにぎわってたからいい感じだよね。

「そういえばミア、魔法の方は調子どうなの？」

「んー、むずかしーです。なかなかうまくいきません。」

「そうかー、最初にあっさり使えてしまったみたいだから、簡単なのかと思ったんだけどそうでもないんだね。」

「はいー…あれ、そいえばアリサさんって帰ってきたのかな？」

「アリサ？そういえばあの子、リックたちが食事し終わったところに来てたわね。」

「ご飯、食べてないのかな…」

「どうかしら…外ですませてきてるかもしれないけど。」

気になるなら、あとで果物でも持っていつてあげる？

お世話になってるしね。」

「はいっ。そーしてみます！」

あたしだけ、お茶をちよつと早めに切り上げて、クルトさんに用意してもらった果物を持っていくことにした。
ほんとはあたしがやるべきんだけど…あたしがやると時間かかりすぎるもんね…

「あとは私たちで片付けておくから、ミアはそのまま部屋に戻っていいよ。」

「ありがとうございます。」

それじゃ、おやすみなさいです。」

果物をのせたトレーを持って、階段を上がってく。
喜んでもらえたらいいな♪

42 お仕事は集中しなきゃね（後書き）

5000PV越え、ありがとうございます！
無事に魔法が使えるようになるでしょうか…

43 もしかしてこれが

真っ白な

どこまでも真っ白な世界に

あたしは立っていた

何となく、これが夢だっということがあたしにはわかった
でも

今日の夢はいつもと違ってた

目の前には黒いネコ

ネコくん、夢でも来てくれるんだね

とととつと歩いてくるのを、しゃがんで待ちつける

ネコくんは、あたしのすぐ前でとまって、右手（前脚？）をちよいと差し出した

何となくその手を握ってみる

にくきゅう、ぷにぷに

夢だけど、何だかりアルな感触

そうやって遊んでいると

ふいにネコくんが走り出した

追いかけるあたし

逃げるネコくん

何だかうまく追いかけれなくて

全然距離が縮まらないけど

不安は感じない

ネコくんはあたしをどこかへ連れて行くことしてる気がする

気がつけば真っ白だった周りが暗くなってた

もう夜よりも暗い感じだけど

なぜかネコくんははっきり見えてる

そしてとうとうたどり着いたのは

闇に浮かぶ大きな姿見の前

こんなに大きなものは見たことがないかも

あたしの全身が映ってた

でもよく見るとそれはあたしと少し違う

背の高さも

髪長さも

着てる寝間着も一緒だったけど

姿見の中のあたしは眼の色が深い赤色

あなたは…だれ？

問いかけの返事はもちろんなかった

けどあなたは示してくれた

言葉ではなく

態度で

両手を重ねて胸の上に置き目を閉じる

それを見てあたしはなぜか自然に同じ姿勢をとっていた

あたしの中にほわつとしたあつたかさを感じる

そしてあたしはふわつと抱きつかれた

目を開けるとあなたが抱きついてきてる

とっても懐かしくてとっても安心する感じ

ああ、あたしはあなたを知っている

自然と目が閉じる

そのときあたしはあたしの中に

大きな力を感じた

これが…あたし…

目を閉じているのに

まぶしくて

暗い

まぶしい…

まぶ…しい？

「はひっ?!」

…ベッドの上。…雨戸、ちよつと開いてる。

昇りはじめたおひさまの光が雨戸のすき間から差しこんで、ちょうどあたしの枕もとを照らしてた。

「そっか…夢、だよな。」

そう、夢だったんだけど、できた気がしたんだよな。

あたしの中のマナを感じる事が。

両手を胸に当てて目を閉じて、そう、夢の中で抱かれていたときの
ように心を穏やかに…

「…………あ。」

あたしの中にある大きなほわつとした、だけど力強くある何かを、
はつきりと感じる事ができる。

これがあたしのマナ…

…なのかな？

確かアリサさんは、マナを感じながら魔法を使うと、マナが減るのがわかるって言ってたけど…

ケガしてないのに、魔法使えないよね。

今日もアリサさんが来てくれるはずだし、そのときに聞いてみようかな。

「あ、早くいかなきゃ！」

ちょこちょこやってるうちに、おひさま少し昇りはじめてる。

慌てて着替えて降りようとしたんだけど、慌てるとなかなかうまくいかない…

何とか着替えて、髪を束ねて結んで、準備完了！

まだお客様は寝てるかもしれないから急ぎたいけど、静かに歩いて階段を降りてくと、もうマリーさんが食堂の準備はじめてる。

「おはようございます。遅れてごめんなさいー。」

「おはよう、ちょっと疲れてた？」

「ううん、起きてからちよっとぼーとしちゃって…

すぐお手伝いしますー。」

「じゃ、テーブルどんどん拭いて行ってね。」

「はい。」

厨房に入ると、クルトさんももう作業中。

「おはようございます。」

「はい、おはよう。」

邪魔にならないように、端っこを通って水場で布巾をしぼる。
念のために2つ持っていてこう。
食堂に戻ったら、もうイスは全部降ろしてあった。

「あ、ミア、布巾もう1つ持ってきてくれる?」

「えと、2つ持ってきてます。」

「あら、ばっちりね。」

それじゃ1ついい?わたしはカウンターから拭いていくから、ミアはテーブルからお願いね。」

「はい。」

端っここのテーブルからどんどん拭いていく。
今日は何だか朝から調子いいかも。

「ミア、何だか楽しそうね?

何かいいことあった?」

「んー…」

あ、夢を見たの。」

「夢?どんな夢?」

…ちょっと説明難しいよね。

「えつと…何か変な夢?」

「…それなのに楽しいの?」

「えへへ…」

マリーさんは笑ってるあたしを見て、不思議そうだったけど、あたしは今から、アリサさんの授業が楽しみなんだもん♪
でも、お仕事するときは集中しなきゃね。
今日も元気にいっちゃうからね!

44 2回目の授業

コンコン

部屋の扉がノックされた。
きつとアリサさんだよね。

「はい、どうぞー。」

声をかけると扉が開いて、予想通りアリサさんが入ってきた。

「こんにちはー。」

「いらっしやいませ。今日もよろしくお願いします！」

アリサさんに入ってもらって、昨日と同じように椅子とベッドに分かれて座る。

あたしは待ちきれなくなって、報告することにした。

「アリサさん、あたし、できたかもしれないです。」

「はいー？」

「自分の中のマナを感じることが、です！」

「あらー、早かったですねー。」

「もしかしてー、夜も練習してたんですかー？」

「実は不思議な夢を見て…。」

その中で自分の中の大きな力のようなものを感じたこと、そして朝起きて同じようにやってみたら、感じる事ができたことを説明した。

アリサさんはあたしの話をふんふんと聞いていてくれたんだけど。

「不思議なこともあるのですねー。」
「…は、はい。」

全然不思議そうに見えないんですけど…

とにかく、実際に魔法を使って試そうと思ったら、使える魔法がなかったってことを追加で報告。

「そういえばー、《負傷治癒》^{ヒーリング}だけでしたねー。」
「はい。ケガもしてないから使うこともなくて。」
「そうですねー。それではー、簡単なものからー、覚えてみましょうかー。」

アリサさんが胸のペンダントに触れて少し集中して、前にも見せてもらった《光》^{ライト}を使った。
前と同じように、明るく小さな光の玉が空中に生まれる。

「まずはー、これにしましょうー。」
白色の中でもー、一番イメージしやすくてー、マナもそんなにー、使わない魔法ですからー。」
「はい。」

アリサさんは光を消して、荷物から、本を取り出した。
ゼル先生と同じように、アリサさんも本を持っているんだね。

「えー…あー、ここですねー。」
これを見てくださいー。」
「はい。」

テーブルに開かれた本は、^{ルンワード}魔法語 が書き込まれてる。

アリスさんが指さしたところには、《^{ライト}光》の説明が書いてあった。

「魔法を覚えるときはー、イメージを間違えないようにするためにー、基本的にはー、書かれた文字をー、読んでいくことになるんですー。」

「じゃあ、この本があればいろんな魔法が使えるんですか？」

「そうですねー…人によるとは思いますがー、本の文字だけよりもー、誰かがー、イメージをサポートしてくれた方がー、早く理解できると思いますー。」

アリスさんに促されて、まずは読んでみることになった。

「礎となりし片割れ、我が手に輝け」

「問題ないですねー。」

光はー、この世界を創ったといわれるー、二柱の神々のー、一柱そのものですねー。

ですからー、この世界の誕生時からー、ずっと存在しているわけですー。

そのイメージを持ってー、今度は実際に使ってみましょうー。」

イメージ、世界の始まりからあった光…

きつとずーっと世界を見守ってくれてるんだよね。

「やってみます。」

礎となりし片割れ、我が手に輝け《^{ライト}光》」

その瞬間、あたしの前に光の玉が現れた。

「できましたっ！」

「はいー、問題ないですねー。」

それでー、マナはどうですかー？」

「えっと…あれ、減って…ない？」

《^{ヒーリング}負傷治癒》のときほどじゃないけど、何か（たぶんマナ）を使った感覚みたいなのはあったんだけど…

「んー、おかしいですねー。」

ミアちゃんから聞いた感じではー、合ってるような気がしたのですがー。

もう一度使ってみましょうー。」

アリサさんに言われて、2回目の《^{ライト}光》を使ってみたけれど、やっぱり減ってる感じがしなかった…

「アリサさん…ダメみたいです。」

「そうですかー…」

しょうがないですねー、少し無茶かもしれませんがー…」

アリサさんの案は、《^{ライト}光》をさらに使い続けることだった。

《^{ライト}光》はマナをあんまり使わないから、初心者でも10回くらいは使えてしまうことがあるみたい。

「もし疲れて倒れてしまってもー、何とかしますのでー、張り切っていきましょうー。」

「は、はい…」

もうこうなったらやるしかないよね。

あたしは《^{ライト}光》を使い続けた。

3回目、4回目、5回目…

7回目、8回目…

9 回目…

「あ…」

「だいじょうぶですか…?」

「はい、ぜんぜんだいじょうぶです。」

あの…ちよつと減つてきたかも…」

「ちよつとだけですかー?」

うん、まだほんのちよつとだけど、減ってるっぽい感じがする。

よかったー…あたしの感じてたのはマナで間違つてなさそうだね。

「これはー…もしかするとー、ミアちゃんは記憶を失う前はー、治療師^{セラ}だったのかもしれないねー。」

とてもたくさんの方をー、中に持っているようですー。

詳しくはわかりませんがー、わたしとー、同じくらいかもー?」

「はひつ?!」

そ、そそ、そんなことぜつたいないでしゅよ…」

「あくまでー、想像ですけどねー。」

アリサさん、笑いながらいつてるけど…まさかそんなね…

うん、絶対ないない…

とにかく、あんまりにもびつくりしすぎて集中力も途切れちゃったので、今日はここまですなっただけだ。

まさか、ね?

4 4 2 回目の授業（後書き）

何だか大変なことになってきました…

45 お外に行ってみる

今日はアリサさんが都合が悪いので、魔法の授業はお休みなの。っていうか、お仕事みたいでフェリックスさんと朝一番で出ていっちゃった。

明後日には戻るって言ってたけど、今日と明日は予定が空いちゃった。

ちよつと残念だけど、昨日も一昨日も、ほとんど宿からでなかったし、「ちよつとくらいお日様を浴びてきなさい。」っていうマリーさんの勧めもあつて、今日の午後はお出かけすることになった。

とりあえず、いろいろな報告も兼ねて、ユーリさんと共に遊びに来ただけで、扉がしっかりしまってる。

あ、扉にプレートがかかっている。

『採集に行っています』

本日休業』

あう、残念…だけどうがないよね。

また街の外にも行ってみたいけど、何か出たら戦えないし、見回り強化期間でもないとムリだね。

「川まで行ってみようかな。」

って口に出して言ってみる。

返事を期待したわけじゃなかったけど、返事が返ってきてびっくりした。

「にゃー。」

「ひえっ！」

…何だ、ネコくんかー。

びつくりしちゃったよ。」

しゃがんでのどのところをこしょこしょすると、目を細めて気持ちよさそう。

これはネコくんとお散歩決定かな？

「一緒に行く？」

「にゃー。」

歩き出すとついてくるから、たぶん一緒に来てくれるんだよね。大通りに出て、広場を目指して歩いてく。

今日もとっても天気がいいから、ちよつと暑いかな。

広場にはいくつか屋台も出てたけど、その中で果物売りがあった。

「そーだ、何か買っていこつと。」

あ、でも屋台のは、もうカットしてあるんだよね。

川まで持っていくのは大変かな。

市場なら、何かいいもの見つかるかも。

つてことで、急きょ市場に寄り道決定！

市場は広場よりもちよつと戻ったところにあるから遠回りになっちゃうけど、まだまだ時間も大丈夫だし。

宿からの注文を聞いてもらってるお店を目指して歩いてく。

市場は色んなものが見られるから、歩くだけでも楽しいんだ。そつこうしてるうちに、お店に到着。

「こんにちはー。」

「はい、いらつしゃい。」

ああ、白枝さんとかい。

今日は何だい？」

「今日は宿の注文じゃないんです。」

「はあ、どういふことかい？」

「川まで遊びに行こうと思って、おやつを買いにきました。」

「ははは、そういうことかい。」

「じゃあ、何にする？」

「つて言われても、実はあんまりわかんない。

でもだいじよぶ。」

「クルトさんもいつも言ってるもん。」

「今日のお勧めをっ！」

「何でえ、旦那にそっくりじゃねえか、はっはっは。」

「よし、じゃあこいつだ。」

おじさんがさしたのは、握った手よりふたまわりくらい小さな、濃い赤色の果物。

1つのかごに7個か8個くらい盛ってあるけど、そんなにいらないかも…

「皮をむかなくても食べられるし、瑞々しくて、甘酸っぱくていいぞ。」

「ま、ちよつと種がでかいけどな。」

「うー、でもそんなに食べれない…」

「ああ、バラでかまわねえよ。」

「いくつ欲しい？」

「2つくらいなら食べれるよね。」

「あ、でもネコくんも食べるかな？」

「ネコくんを見ると、赤い果物をじっと見てる。」

うん、食べるかもしれないね。

「じゃ、3つでお願いしますー。」

「あいよ。銀貨1枚と半だ。」

服の中を探つて小袋おさいふを取りだす。

前の一件で、すっかり隠しとかなきゃダメってわかったからね。1枚銀貨と、銅貨5枚をおじさんに渡して、果物をもらった。手に持つてるのもなんだし、エプロンのポケットに入れとこ。

「ありがとーです。」

「毎度あり、川に行くんなら、川の水で冷やしてやるのもありかな。」

「はい。」

市場からだ、川までのいちばん近い道はちょっと細い道を抜けてくことになる。

でも、川に行くなら迷うことはないから、そのまま行っちゃおう。この辺りはお家ばかり。

お庭とかがないとが多いから、家の間に張ったロープに洗濯物が干してあったりして、宿のあたりとはちょっと雰囲気が違うかな。あたしよりも小さな子たちが、細い道で追っかけっこしたりしてる。

そこを抜けると一気に開けて川に出る。

川は街の東の方に向かって流れてるから、お洗濯とかで使いたい人は、東の方の決まった場所だけでやることになる。

だから、西側の方はお水がきれいなんだよね。

今日はちよつと暑いから、水浴びしてる子たちとかもいるけど。あたしもちよつと足つけてみようかな。

靴を脱いで、川に足をつけると、冷たい川の水が足にしみこんでき

そう。

「んー、気持ちいいー」

ネコくんは、あんまり水が好きじゃないのかな。あたしの後ろで丸くなってる。

こんなに冷たくて気持ちいいのにな。

果物も冷やしちゃうと思うんだけど、よく考えたら流されちゃうよね。

袋とかあつたらよかったんだけど…

ま、そのままでもいいか。

ガブリツとかじりつくと、口の中に甘酸っぱい汁があふれてとってもおいしい。

ちよつとぬるいけど。

1つをネコくんに差し出してみる。

「食べる？」

ネコくん、果物をつついたり匂いを嗅いだりしてるけど、食べようとはしない。

あ、もしかしておつきすぎるのかな…？

あたしのかじった後なら、ちよつと食べやすいかも。

ということ、かじりかけのをネコくんに差し出すと、端っこをぺろり。

そして…ぷいってした！

こんなにおいしいのに…

結局、3つとも食べちゃったあたしは、ちよつと食べすぎ状態で宿のお手伝いに戻ることになりました。

おいしかったんだよ？ほんとに…

45 お外に行ってみる（後書き）

ちよつと魔法関係お休み。

出てきた果物のイメージはプラムです。

46 かみさまのおみちびき その1

今日も午後の予定がないからお出かけの予定してたんだけど、ユーリさんは今日も採取にいつてるみたいなんだよね。

お昼の片付けをしながら何しようかって思ってたんだけど、意外なお客様が来てくれたんだ。

「ごめんください、わたし、ミルフーム教会でシスターをしておりますシャルテと申しますが…」

「あ、シャルテさん、いらっしやいませ。」

「こんにちは、ミアさん。」

よかった、お店が違ってたらどうしようかと。」

シャルテさんがほっとした感じでそう言った。

買い出しに行った帰りにうちに寄ってくれたみたいだけど、どうしたんだろ？

「以前、教会に来ていただいたときに、魔法について知りたいと仰っておられましたよね。」

「は、はい…」

「実は教会の方で、魔法に関して書かれた古い本を見つけることができましたので、お知らせしよう。」

「はう！わ、わざわざすみませんです！」

あわわわ…こんなことでお手をわずらわせるなんて罰あたりかもしれない…

っていうか、シャルテさんすごいそがしいんじゃない…

どどどどうしよー…

「あの…ミアさん？」

「は、はひ?!」

「どうされました…?」

「ミア、お客様の前で固まったりしてどうしたの？」

マリーさんが後ろから頭をポンポンってしてくれて、ちょっと落着いたけど。

あたしが勝手に聞きに行ったことで、ここまでしてもらうのは悪い気がする。

「すみません…お忙しいのにあたし何かのためにわざわざ来ていただいて…」

「いいえ、ミアさんがわたしのところに来てくださったのは、きつとご縁があつたからですよ。」

それはとても大切なこと、ですからぜひにでも訪ねたかったのですよ。」

きつと忙しくないはずはないけれど、こんな風にいつてもらえと何だか少し心が安らいだ感じがする。

教会にたくさん人が訪れるのは、きつとシャルテさんみたいな人たちがいるからだよね。

「ただ、その本は持ち出すことはできないので、もしよろしければまた教会まで足を運んでいただければと。」

「あ、ありがとうございます。」

マリーさんの方を見ると、「せっかくのお誘いだし、いつてらっしゃい。」って言うてくれたから、片付けがちょっと残ってたけど、マリーさんにお任せして、一緒に教会に向かうことにした。

「そういえば、ミアさんはどうして魔法のことを調べていらっやるのですか？」

「あ、実はあたし、白色魔法が使えるんです。」

「まあ、治療師さんヒーラーだったのですね。」

…あんまり言っちゃだめだった気がする。

何かシャルテさんのおしゃべりの雰囲気に乗ってすらっと出ちゃった…

だいじょぶだよね…

「え、えとでもあんまり誰にも教えてないって言うかその…」

「すみません、変なことを聞いてしまいました。」

「いえ、あの、その…」

「では、わたしも告白してしまいますね。」

実はわたしも魔法が使えるのです。緑色なのですが。」

「これで、お相手ですね。」って笑ってるけど…

その笑顔を見てると何だかだいじょぶな気がしてきた。うん。

教会までいろいろおしゃべりしながら歩いてく。

冒険者の宿のことや、あたしがどんなことしてるかとか、どうして白枝亭で働いてるかとか。

あたしが記憶喪失だっていうところで、シャルテさんの表情が曇っちゃった。

「すみません、辛いことを聞いてしまいましたね。」

「あ、いえ、そんなことないです。」

あたし、今がとっても幸せだから、もし記憶が戻らなくても平気だし、記憶がなくなっただけからみなさんに会えた気がするんです。」

あたしのそんな答えに、シャルテさんはちょっと驚いた表情をしたけど、すぐに笑顔で「そうでしたか。」って言ってた。そうこうしているうちに、教会にたどり着く。

今日も教会はたくさんの人が出入りしてるみたい。

入口近くで、シャルテさんはたくさんの人にあいさつされてた。

こんなに優しい人なんだもん。

みんな大好きなんだね、きつと。

中に入ったところで、いったん待つことになった。

すぐに戻ってきたシャルテさんは、鍵の束を持ってきてた。

「おまたせしました。それでは行きましょうか。」

「はい、よろしくお願いします。」

シャルテさんについて、脇の細い通路を通って教会の奥に進むと、上にかかる階段の奥に、頑丈そうな扉が見えた。

シャルテさんが鍵を差し込むと、扉の鍵はカチャリと音を立てて開く。

「よいしょ」って声をかけて開けるほど、扉は重そうだった。すっごく分厚くて、あたし何か開けれるのかな…？

中は真っ暗だったんだけど、シャルテさんは入ってすぐのテーブルの上に並んでる、小さなガラスのビンのようなものを1つ取り上げた。

「それは…？」

ライトクリスタル

「これは「光結晶」です。」

見たことはないようですね。」

シャルテさんが見せてくれたビンには、水晶のかけらみたいなもの

が入ってるけど…「光水晶」って言う割に光ってないよね？
って思ってたなら、シャルテさんが魔法語^{ルーンワード}を唱えた。

「光よ」

その瞬間、ビンの中の「光水晶」が光りだした。
そう、あたしが《光^{ライト}》で出したあの光と同じみたいな。

「シャルテさん、白色魔法も使えるんですか？！」

「これは魔法具の1つですね。自然にあるマナをとりこんで、簡単なキーワードで発動することができます。

ただ、たまっているマナを使いきると、またたまるまでは使えません。

ここは、火で灯りをとるわけにはいきませんので…」

シャルテさんが差した先は、「光結晶」からの明かりで照らされている。

階段を少し下った先にはたくさんの本棚にぎっしりの本。
こんなに本があるの、初めて見た…

「さあ、参りましょう。

少し入ったところですからついて来てくださいね。」

47 かみさまのおみちびき その2

シャルテさんについて、奥へと進んでいく。

明かりはシャルテさんが持つてる「光結晶」ライトクリスタルだけだから、離れると大変なことになりそう…

って思ってたんだけど、よく考えたら、あたし光出せるんだよね。それは置いといて、とにかく進んでく。思ってたより割と広いんだよね。

と、シャルテさんがある本棚のところで止まった。

「あ、ここですね。」

明かりを持っていただけですか？」

「はい。」

「光水晶」の入ったガラスのビンを受け取って、本棚が見えやすいようにかざしてみる。

シャルテさんはそこに並んでいる本の背表紙を確認して抜き出した。

「今回はこちらの本を見ていただければと思います。」

「この本はどんな本なんですか？」

「そうですね、この間お話したような創世期のことを記したものです。」

とはいっても、創世期からあるものではないのですが。

おそらく、後世になってから、口伝のようなものを編集したものではないかと考えています。」

…そーせーきのくでんをへんしゅうしたものですか。
うん、よくわかんないや。

「簡単に言ってしまったえば…昔話をまとめたものでしょうか。」
「ふーん。あれ、これって魔法語^{ルーンワード}…ともちよつと違うのかな…？」

シャルテさんが開いた本の中には、魔法語 とよく似た感じの文が並んでる。

けど、同じようなところもあれば、全然違うところもある。

「これは ^{アルカイックワード} 古代語 です。

神々が人族に与えたと言われる原初の言葉だと言われています。」
「んー…読めそうで読めないような感じです…」

「大丈夫です。」と言って笑顔になるシャルテさん。
パラパラとページをめくっていつて、あるところで止まった。

「それでは、お話していきますね。」

「は、はひっ?!」

「すみません、説明不足でしたね。」

ミアさんの代わりにわたしが読んで、内容をお話させていただくということです。」

ひー、何から何まですみません！

もう、体が縮こまっちゃうよ…

そんなあたしを見て、不思議そうなシャルテさん。

ほんとにすみません…

「コホン、では参りますね。」

まず、魔法についてですが、もともとは神々が用いていたようです。
す。

神々はその司るものを具現化するような力を持っていたと伝えら

れていますね。

わたしたち人族は、神々の争い…これは以前にお話しした、光の陣営と闇の陣営の争いのことですね、このときに、それぞれの神々から、与えられたと記されています。

光の陣営についた人族は黒色以外の、闇の陣営についた人族には白色以外の素質が与えられたようですね。

しかしこのときはまだ、人族の魔法はあまり強くなかったようです。」

「強く、ない？」

「ええ、詳しく記されているわけではないですが、1色ずつでしか使えなかったようですね。」

そういえば、2色以上が使えないと魔法士ソーサラーって呼ばれないんだっけ。でも、どうしてそうなんだっけ…聞いたかな？聞いてなかったかな？んー、覚えてないや。

「1色だと強くないんですか？」

「え…あ、ご存じありませんでしたか。」

複数の色を合わせて行使することで、様々な力を行使することができるのですよ。

たとえばわたしの使える緑色は、風、奪うといった特性があります。

青色は水、守るといった特性があるのですが、この2色を合わせて行使することで、雷の力を扱えるようになるのです。」

「ほえ…」

組み合わせによっていろんな力が使えるようになるから、色がたくさん使える人じゃないと魔法もたくさん使えないってことみたい。でもあたしは1色だけだし…ちよっと残念かも。

「あらまあ…そんなことはないと思いますよ。

白色はもとから多くの特性があるので、魔法もたくさんあるようですし。」

さて、すこし話が逸れてしまいましたね。

実はこの後、素質を持った者同士が結ばれることで、複数の素質を持つ者や、逆に素質を失ってしまう者なども生まれてきたということです。」

「あ、それで今は…」

「そういうことでしょね。」

ただ、その力が大きく開花するのは、悪魔との闘いで、悪魔たちが行使する力を同じように使うことで対抗しようとしたから、ということです。」

ふーん…何だかすごいお話だね。

神さまや悪魔が魔法に関係してたんだ。

「さて、非常に簡単な説明で申し訳ないですが、これで魔法の始まりに関することは少しわかっていただけましたか？」

「はい、ありがとうございます。」

「そうですか、わざわざ来ていただいた甲斐がありました。」

う…元はと言えばあたしが急に聞きに行っただけで、シャルテさんは好意で調べてくれただけなのに。
どっちかっていうと、あたしが自分で探さなきゃいけないようなことなのに。

ほんとにお世話になりまくりです…

「あら、どうなさいました？」

急に元気が…立ちっぱなしで疲れさせてしまったでしょうが…」

「いえ、そんなこと！」

あの…ほんとにありがとうございます。

お忙しいのにこんなに協力していただいて。」

「そういつていただけで十分ですよ。」

それにわたしは本が大好きですから、ミアさんのおかげでわたしも楽しかったですよ。

だって…」

そういつてたくさんの本たちを振りかえり、「こんなにたくさんの本、何か目的がなければどんな風に呼んだらいいかなんてわかりませんから。」って楽しそうに言うシャルテさんは、ほんとに本が好きなんだなってあたしにも感じられた。

さすがにお世話になりっぱなしだし、何かできることがあればって思つて、「あの…何かお礼を…」ってあたしが言いかけたところで、トラブル発生…

「わたしが好きでさせていたいただいたことですから、お礼なんて…
と思つたのですが…」

先日使つたばかりの「光水晶」を持つてきてしまったみたいです
ね…

できれば…明かりをいただけますか？」

真つ暗で見えないけれど、きっとシャルテさんは少し困つた顔で笑つてたに違いない。

何だかそんな感じがしたから。

あたしは、発動体^{ベンダント}に手をかざし、感謝の気持ちを込めて唱えた。

「礎となりし片割れ、我が手に輝け…《光》^{ライト}！」

「よかった。一応、造りは覚えているのですが…ここ、手探りで戻るのはなかなか大変なんですよ。」

あはは…あたし、白色魔法が使えてほんとによかった…

47 かみさまのおみちびき その2（後書き）

たまに投稿が遅くなってしまうこともありますが、いつもお付き合いいただきありがとうございます。

毎日、たくさんの方が見てくださっていて、PVが6000を越え、ユニークも1000を越えることができました。

できる限り、こまめな更新を続けていきたいと思っています。

今後ともミアちゃんともどもよろしくおねがいします。

48 不安な報告

「マリーさん、ただいま。」

「あら、エリカ、とレックス。おかえり。」

「こんにちはッス。」

「お2人とも、おかえりなさいですー。」

お昼もそろそろお客様が帰りはじめたところに、エリカさんたちが帰ってきた。

「昨日の朝一番で出発したから、何となく帰ってくるの夜かなって思ったけど、早かったんだね。」

「にしても、2人だけ…？」

「フェリックスさんとアリサさんはついてきてないみたいだけど…マリーさんも同じこと考えてみたい。」

「そういえばリックとアリサは？」

「あ…リックはギルドの方に…アリサも魔法士ギルドです。」

「ちよつと報告に…あとでマリーさんにもお話すると思います。」

「…何かあった？」

「はつきりと、ではないですが…気にかかります。」

「何だか急に難しそうなお話に…マリーさんの表情も何だかちよつと険しい感じ。」

「あ、あつちでお客様が呼んでる。行かなくちゃ。」

「すみません、おまたせしました。」

「あ、いやいや、いいんだよ。」

「お勘定頼むわ。」

「はい、ありがとうございます。」

お代金を受け取って、挨拶して見送ったら、食器のお片付け。
厨房に持っていこうとしたら、マリーさんが「ランチ4人分通して
おいて。」って。
きつとみなさんの分だよね。

「クルトさん、4人分追加です。」

「こんな時間に珍しいね。」

「たぶん、フェリックスさんたちのかなって。
今、みなさん帰ってきたところです。」

「なるほど。」ってうなずきながら、すでに準備に入ってるクルト
さん。

行動、早いです！

その後も何度か食堂と厨房を往復して片付けてる間に、フェリッ
クスさんとアリサさんも合流してた。

「よし、できた。」

私も2つ持つから、ミアはあと2つを頼むよ。」

「はいー。」

もう新規のお客様も入ってないから、クルトさんと2人でみなさん
の分を運んでいくことになった。

食堂に入ると、フェリックスさんたちがテーブルについてて、マリ
ーさんも一緒に座ってた。

「お待ちせ。」

「どうぞです。」

みなさんの前に、ランチのプレートを並べていく。

少し遅めのお昼だったから、みなさんおなか減ってたみたいで、すぐにご飯に取りかかっている。

フェリックスさんたちならいいからって、マリーさんにいわれて玄関のプレートを準備中に替えてきた。

戻ってきたら、クルトさんがいなかったんだけど、マリーさんに座っててって言われたから、フェリックスさんたちの隣のテーブルに座ってることにした。

ランチは量がそんなに多くないから、フェリックスさんたちのご飯もそんなに時間はかからなかった。

ご飯が終わるころに、クルトさんがみんなの分のお茶を準備してくれてみたいで、そのままみなでお茶することに。

人数が多くて、大きめのポットで淹れるみたいだから、その間にあたしとマリーさんと、食器を水場に運んでおく。

うん、連携プレー。

「さて、みんな揃ったわね。

それで、いったい何があったの？」

「ああ、実は今回俺たちは護衛だったんだけど、少人数で割と急ぎたいのと、貴重品だからってことで指名があったんだよ。」

マリーさんが切りだして、フェリックスさんが答えてお話が始まった。

何となく雰囲気を楽しむそうじゃないんだよね…

一体どうしたんだろ？

「護衛自体は問題なく終わったんだけど…」

前に話したことがあったと思うんだけど、どうも噂どころじゃない

いかもしれないんだ。」

「前って…あれよね。」

「ああ、今回、行きがほぼ1日で、帰りが若干早かったけど…
こんな短い行程で、2回遭遇、しかも街道沿いでだよ…
偶然だとはちよつと、な…」

何か変なものに会ったのかな…

あれ、わかってないのあたしだけかな…

でもこのままじゃ何だかよくわかんないし。

「あの…遭遇って？」

「ん、ああ…悪魔族だよ。」

そんなに強くはなかったけどね。

あれ、こないだミアちゃん話に入ってたっけ…」

あくま…って…

何でそんなのがでてるの…？

普通に暮らしてたら会わないっていったのに…

「ミア。」

「ひうつ…」

隣りに座ってたクルトさんが、あたしの手を握ってくれてた。

でもあたし、自分の手をぐっと握っちゃってて、うまく開くことが
できない…

何だろう…怖いような、許せないような、何か緊張してよくわから
ない…

クルトさんがゆっくり手を開いてくれたけど、あたしの手の下には
自分でつけたつめあとがくつきり残ってる。

「大丈夫だよ。」

「ここにいるわけじゃないんだから。」

「うん…」

「さ、ちよつとお茶のお代わりを淹れに行こうか。」

「ん…」

きつとまだお茶は残つてると思うけど、あたしはクルトさんの提案に甘えさせてもらうことにした。

だって、みんな心配そうな顔してる。

だいじなお話なのに、あたしが止めちゃだめだから。

「ご、ごめんなさい。」

ちよつとびっくりしちゃいました。

おいしいお茶淹れてきますね。」

それだけ言つて、クルトさんと一緒に厨房に向かった。

だいじよぶだよね…

何も起こらないよね、きつと。

そう思いたいけど、どうしても一度膨らんだ不安は消えてくれない…

厨房に入っただけ、クルトさんはお茶を淹れようとはせずに、あたしをイスに座らせて、隣りに座ってくれた。

クルトさんが繋いでくれる右手だけが少し安心してる気がする。

うん、きつと、きつとだいじよぶだよね。

48 不安な報告（後書き）

少しいつものほん雰囲気ではありませんが…

49 ふくらむ不安

結局、あのお話のあと、あたしはずっと厨房にいることになった。1つには、食堂でのお話がなかなか終わらなかったから。

もう1つは、休憩時間だけど、外に行きたくないし、1人にもなりたくなかったから。

さすがにクルトさんにずっと手をつないでもらってるのは無理だから、手は放したけど。

一度だけクルトさんは、食堂に新しいお茶を運んだ以外はずっと一緒にいてくれた。

夕方の準備が始まるときにはだいぶ落ち着いたから、ちゃんと準備に加わったの。

マリーさんもクルトさんも、休んでもいいよって言うてくれたけど、さすがにそれは悪いし…

部屋に1人で休んでたくなかったから。

ということで、マリーさんと食堂の準備中。

「テーブル全部できました!」

「準備完了ね。」

クルトの方の様子見てきてくれる?」

「はいっ!」

厨房をのぞくと、クルトさんはお鍋のようすを見たり、野菜の仕込みをしたりしてた。

すぐにあたしに気づいて、声をかけてくれる。

「あ、もしかして食堂は準備できたかな?」

「はい、だいじょうぶです。」

「了解。こつちももうだいたい行けてるから、いつでも開けてもらっていいよ。」

「わかりましたっ！」

食堂に戻って、マリーさんに伝えたら、玄関のプレートを、営業中に替えて、営業開始。

今日もお客様たくさんくるといいな。

食堂を開けてすぐは、まだちょっと早いから、お客様もちらほらしが来ない。

けど、いつもこの時間に来てくださる常連さんもいるんだよね。だんだん増えてくるから、今のうちに、クルトさんの準備で手伝えることをやっておかなきゃね。

「いらっしやいませ！」

「お、ミアちゃん、今日は一段と威勢がいいねえ。」

「ありがとうございます！」

あちらのお席が空いてます！」

お客様もだんだん増えてきて、今日も食堂は大盛況。

マリーさんやクルトさんはもちろんいつもどおり、てきぱき動いてお客様の対応や調理に取り掛かっている。

あたしも食堂と厨房を行ったり来たりで大忙しかった。

「ごちそうさま。」

お勘定、置いてくよ。」

「ありがとうございます！」

お気をつけてお帰りください！」

最後のお客様を見送って、扉のプレートを外してしまう。
あとは片付けだけ、っていつても、運ぶのは大体終わってるから、
洗いものと、食堂のお掃除に取り掛かる。
お客様がいなくなると、急に食堂が広く感じる。
今までそんなこと思ったことなかったのに…

「ミア、テーブルからお願いね。」

「はいっ、布巾しぼってきますね。」

厨房ではクルトさんが片付け始めてる。

邪魔にならないようにさっと布巾をしぼって、小さな桶に水を汲んで一緒に持っていく。

マリーさんがカウンターから、あたしはテーブルから、いつも通りにきれいにふきあげる。

それが終わったら、食堂はマリーさんに任せて、今度は水場で洗い物。

クルトさんがもう始めてたから、横に並んでどんどん洗っちゃおう。

気のせいか、いつもよりも早く片付けもすんでしまっって、お茶の時間になった。

最近、ちよっと夜が涼しくなってきたから、お茶のあったかさがほっとする。

いつもと同じはずなのに、何だか今日のお茶会は静かに過ぎていく気がする…

「ミア…大丈夫？」

「え…はい、だいじょうぶですよ？」

「そっ…ならいいけど。」

マリーさんが気にかけてくれたけど、だいじょぶだと思う。

そろそろお開きになることになったから、みんなでお片付け。

クルトさんがやっとうかかって言ってくれたけど、すぐだしお手伝いしたいって言って、一緒に水場で洗い物をしちゃう。

「はい、じゃあこれで終わりっつと。」

「お疲れさまでしたー。」

「もう食堂の方は明かりを落としてるから、気をつけて戻るんだよ。」

「だいじょぶですよー。いつもちゃんと戻れてるし。」

明かりをつけてた厨房から食堂に入ると、真っ暗で何も見えなくなる。

けど、ちよつと待ってればぼんやり見えるようになるんだよね。

食堂の明かりが消えるまでに進めるだけ進んでおくと楽になるから、階段の近くまで行っちゃおう。

ちよつと階段の下にたどり着いたくらいで、食堂の明かりも消えて真っ暗になる。

手すりを伝えれば階段は上れるけど、もしこけたら大変だし、いつもどおり、目が慣れるのを待とうかな。

真っ暗な中でじつとすると、風の音や床が何かがきしむ音がやけに大きく聞こえてくる…

どうしてか、今日はそんな音が怖くなってきて、あたしは我慢できずに階段を上ってた。

上がった先の廊下も、真っ暗な闇に吸い込まれるような感じでどんどん怖くなってくる。

そして、ぴつとひらめいた。

「《光》ライト」

淡い光があたしの周りを照らしてくれる。
少しほっとするけど、廊下の先はさっきより暗く見えてしまう。
できるだけ変なことを考えないように、足もとを見て前に進んでく
と、突き当たりのあたしの部屋の扉が見えた。

「よかった…何も起きるわけないよね。」

そこで明かりがとぎれてちょっとドキツとしたけど、魔法が切れた
だけだった。

中に入って着替えると、テーブルにペンダントを置いてベッドにも
ぐりこんだ。

でも、不安ばかりがおつきくなっていく…

どうしよう…眠れそうにないよ…

そのとき、コンコンって音が…

誰…こんな時間に…

「ミア、まだ起きてる？」

「マリーさん?!今開けます!」

マリーさんの声を聞いてちょっとほっとしたから、慌てて鍵を開け
に行った。

扉を開けると、明かりを持ったマリーさんが立ってた。

「ミア…ちょっと入っていいかしら?」

「はい。」

入ってきたマリーさんが、明かりをテーブルに置いてベッドに腰掛
けて、あたしを手招きした。

扉を閉めて、マリーさんの横に座ると、マリーさんがぎゅってして

くれる。

マリーさんにひつついたほつぺたが冷たかった。
いつの間に涙なんて出てたんだろっ…

「ごめんね、ミアにも少し知っておいてもらった方がいいかと思っ
てたんだけど、不安にさせちゃっただけになっちゃったわね。」

「え…？」

マリーさんはあたしをぎゅってしたまま、背中をとんとんと叩いて
くれる。

それだけで、今までの不安だった心がちよつとずつ落ち着いてきた
…気がする…よ。

「本当にごめんなさい。」

ミアの力が、万が一のときにミア自身のことを守ってくれるって、
そう思ったから。

どんな万が一があるかは分からないけれど、今、この世界で起こ
っている異変を知っておいてもらおうって…」

「マリーさん…」

やさしくぎゅってしてくれてるそれ以上に、マリーさんのあたしを
思ってくれる気持ちがいらいに伝わってくる。

あたしのことをこんなに心配してくれてる。

それだけで十分です。

あたしはだいじょうぶです。

マリーさんとクルトさんがいてくれるから！

でも今夜だけは…マリーさんと一緒におやすみなさい…

50 不安をなくすいい方法

結局昨日はマリーさんが一緒にいてくれたこともあって、あのあとってほとんど覚えてないくらいにすぐ寝ちゃったみたい。

悪い夢を見ることもなくて、すっきり目が覚めたんだけど、マリーさんはもういなかった。

今は明るいいし、1人でいても、不安は全然ないかな。

あ、あんまりぼーっとしてたら準備に遅れちゃうから、手早く着替えて降りなきゃね。

今日も1日、がんばるぞー！

朝の食堂で、アリサさんが今日の午後、また時間取れるなら魔法のお勉強したいって言うてくれたから、今日は午後の休憩は授業してもらえることに決定。

その分午前中の休憩は短めにして、できることやつとかなきゃね。

何だか、元氣も湧いてきてた気がしたから、薪割りをがんばったんだよ。

お昼の食堂営業が終わって、軽くご飯すませたら、今日はあらかじめ、お茶の用意をして部屋に戻った。

窓を開けっぱなしと、さわやかな風が吹き込んでくる。

今日はお外も気持ちよさそうだね。

しばらくすると、コンコンと扉がノックされて、アリサさんの声が聞こえた。

扉までお迎えに行って、いつもどおりアリサさんがイスに、あたしがベッドの端っこに座って、今日の授業が始まった。

「さてー、今日はー、一度に2つの魔法をー、教えちゃおうと思
っていますー。」

「一気に2つですか?!」

あんまり魔法を一気に教えるようなことはない感じだったんだけど、
どうしたんだろ。

アリサさんはあたしを見て、クスツと笑うと、理由を説明してくれ
た。

「それはですねー、ミアちゃんがい、ある程度の魔法ならー、きっ
と簡単にー、扱えてしまうと思うからですねー。」

この前のー、様子を見てるとー、きっと今日も大丈夫ですよー。」

そういえば、前のときも、《^{ライト}光》の魔法はすぐに使うことができた
んだよね。

でも、だんだん難しくなると大変そうだな。

今日もちゃんと使えるようになれるかな？

「それとー、もう1つはー、ミアちゃんのー、不安が解消できれば
とー、思いましたー。」

「え、と...?」

「以前にー、光という特性がー、悪魔に対抗する力にー、なるって
言いましたよねー。」

使うことはー、きつとないでしょうけどー、使えればー、不安が
少しでも解消できるかなーって思いましたー。

ただー、少しこちらはー、マナの消費量も多くてー、扱いが難し
いかもしれませんー。」

アリサさんたちも、昨日のあたしの様子が変なことに気付いてたん

だね…

でも、もしかしたらこれでもっと不安解消できるかもしれないよね。それならちよつとくらい難しくても、覚えてみたいなって思ったから、あたしはアリサさんに「よろしくお願いしますっ！」ってお辞儀した。

「はいー、それではー、まず1つめですー。

この間覚えてもらったー、《光》の魔法がー、ありましたよねー。《光》はー、しばらくは持ちますがー、明るさはー、さほどなかったですよー。」

「そいえば、昨日、夜に明かりにしてたら途中で消えました。でも、ちゃんと周りが見えてましたよ？」

「ロウソクのー、灯りくらいにはー、明るいですからー。

この魔法はー、光が長持ちしますよー。」

つていうことは、昨日みたいに途中で切れてびっくりしたりはしないってことよね。

とっても便利かも？

またアリサさんの本を見せてもらって、ルーンワード魔法語 をなぞる。そしてそのイメージ、光がそばにあって照らし続けてる感じ…

「さっそくいつてみましょうー。」

「はい。

光よ、我に寄りそいて照らし続けよ…デュラブルライト《持続光》」

ほわんと指先に光の玉が現れる。

見た目は《光》と同じだけど…違うんだよね？

たぶん…

「これはー、だいたいー、半日くらいは持ちますねー。

あとー、物に対してかければー、そのものの一部が光り続けますよー。」

「夕方に使ったら、朝までいけちゃうんですね。」

「そうですねー。」

とりあえず今ある光を消しましょうー。

消すのはー、術者がー、念じるだけでできますー。」

言われた通り、消えてって思ったら、光はすつと消えてしまった。ほんとに便利な気がする。

《光》がなくてもいけるのかなって聞いてみたら、マナを使う量が《光》よりちよつと多いから、使い分けた方がいいんだって。

「それでは次に行きましょうー。」

実はー、この魔法がー、ミアちゃんの不安をー、やわらげてくれるかもー、しれないですー。」

「悪魔に対抗できる魔法……？」

「はいー、ただー、中でもー、一番弱いーものののですがー、それでもー、今までのものよりー、マナの消費はー、多くなりますのでー、注意が必要ですー。」

さっきのところから少しページをめくって、開かれたところにある魔法語 を読んでみる。

今までよりも少し長い感じがする。

真白き光、清らかなるもの、世界に仇為す邪悪なるものを押しとどめる力となれ《聖光》ホーリーライト

こんな風につづられていた。

「この魔法はー、悪魔が現れた後になってー、使われるようになったー、魔法だといわれていますー。」

悪魔はー、現れた時からー、この世界のー、敵ですしー、それ以

前はー、必要のないものですからー、きつとー、そうなんでしょうー。

このようにー、前に手をかざしてー、唱えてみてくださいー。」

「はい、やってみますね。」

真白き光、清らかなるもの、世界に仇為す邪悪なるものを押しとどめる力となれ…《聖光》」

そうすると、かざした手のひらから、真つ白な光がふわっと輝いた。すぐに消えてしまったけど、今までの光よりもたしかに清らかな感じがする…気のせいかな？

そして、マナの減りもちよっと感じられるかなっていうくらいだけど、《光》や《持続光》よりも多いかな？

「ミアちゃんやっぱりすごいですねー。」

この魔法もー、一発で成功だなんてー。

やっぱりー、以前はー、魔法が使えてたのかもー、しれませんがねー。」

「ありがとーございます。」

でも、こんなので効くのかなあ…？」

「これはー、一番初歩のー、魔法ですからー。」

でもー、ちゃんとー、効果はありますよー。

もちろんー、使うことにはならないとー、思いますけどー。

これでー、少しはー、安心してもらえるとー、うれしいですー。」

そっか、そうだよな。

使うことはないと思うけど、覚えてたら安心だよな。

何だっけ、こういうの誰かが言ってたよね。

備えれば嬉しい…だっけ？

何か違うかも…

とにかく、こうしてまた1つ、不安をやわらげるための優しい気持ち

ちを感じることができたんだ。
アリサさん、ほんとにありがとうです！

51 夜のおでかけ

アリサさんに新しい魔法を教えてもらったあと、2人でお茶してたら、フェリックスさんが訪ねてきた。

夜にみんなでちょっと出かけないかっていうお誘いだっただけど。

「あたし、お仕事終わるの結構遅いですよ？」

「ああ、でも問題ないっていうか、むしろそれくらいの方がいいかもしれないんだよ。」

えと、どういうことだろ？

よくわからないけど、クルトさんやマリーさんも誘ったら、あたしを連れて行ってあげてほしいって言われたんだって。

「別に街から出るわけじゃないし、もし何かあっても俺たちがいれば大丈夫だよ。」

「うん：お出かけは楽しそうです。」

行きたいですけど：どこに行くんですか？」

「ま、それは夜のお楽しみってことで。」

もしかしたら、街の人も結構来てるかもしれないけどね。」

何かある：っていう話なんて聞いてないよね。

いったい何だろー：

でも結局フェリックスさんははぐらかしてたし、アリサさんまで「楽しみにしてくださいー。」って。

うー、気になってきた：

そうやってお話してるうちに、そろそろ夜の食堂の準備をしなきゃいけない時間になって、2人といったんお別れすることに。

お茶のセットを持って降りていくと、食堂には誰もいなかったけど、厨房にはクルトさんがもういた。

先にこれだけ洗っておかないと、後で水場あふれちゃったら困るから、今のうちにやっちゃおう。

そうこうしているうちに、マリーさんがお外から戻ってきた。お買い物に行ってたんだって。

みんな揃ったところで、準備を始めることになった。

今日もお客様はいつもどおりたくさん来てくれて大盛況。

最後のお客様をお見送りして、玄関のプレートを片付ける。

食堂に残ってるのは、フェリックスさんとマリーさんとあたしだけ。

さっさとお片付けしちゃうと思うって、食器を運ぼうとしたら、マリーさんが代わりに持ってくれた。

「今日はもうこっちはいいから、お出かけしてきなさい。」

「え、でも……」

「リックたちを待たせるのも悪いでしょ。」

「こっちはわたしとクルトで何とかなるから大丈夫よ。」

って言われちゃったので、片付けはお任せすることになった。特に準備もなかったし、部屋に戻らずこのまま出発することになった。

「そいえば、そろそろどこに行くか教えてくださいよー。」

「まずは広場まで、だな。」

こんな遅くに広場につて何だろう…

とにかくフェリックスさんとレックスさんが前に並んで、アリサさんとあたしとエリカさんが後ろからついてく感じで進んでく。アリサさんが右手をつないでくれたから、左手はエリカさんとかなくて思っただけだ…

エリカさんの右手をつかんだら、「ひあっ！」って驚かれちゃった。でも、あたしの方を見て、ちゃんとつないでくれたんだけどね。

「やっと来たのか。」

呼び出しておいて遅れるなよ。」

「悪い悪い、ちょっとミアちゃんの仕事が終わるの待ってたんだよ。」

広場で待ってたのは、ラルフさんだった。

フェリックスさんたちが約束してたっぽいね。

っていうか、あたしが待たせちゃったのね…

「遅くなっちゃってごめんなさい。」

「ああ、ミアちゃん久しぶり。」

ミアちゃんのせいじゃないから。

リックが時間を考えなさすぎ、っていうかそんな責任の押し付け方していいのかあ？」

「すまん、マリーさんには内緒で。」

「まあいいけど…川まで行くんだろ？」

何だかよくわかんないまま、川まで行くことになった。

前を歩く男子3人は何か近況報告しあってるみたい。

あたしたち女子3人も最近のこととかお話ししながら歩いてくと、気がつけばもう川辺まで来てた。

「あれ、人がたくさんいる…」

「今夜はー、ちょっと特別なー、夜なんですよー。」

「特別？」

「そうですよー。」

あ、リックたちがー、場所決めたみたいですねー。」

前を歩いてたフェリックスさんたちが、いつの間にか大きなシートを広げてる。

暗くてあんまり気にしてなかったけど、まわりに来てる人たちも、シート広げたりして、座ったり、寝そべったりしてる人もいる。

「私たちも、早く行こ…？」

「行きましょー。」

アリスさんとエリカさんに引つ張られて、フェリックスさんたちが広げたシートの上に寝そべる。

何でお外でみんなで並んで寝てるんだろう…って思ったんだけど、みんなが何をしてたかそのときやっとわかった。

「いつ今っ！」

「お、さっそく見えたみたいだね。」

「う、うん…あっ、またっ！」

今夜はよく晴れてたんだけど、お月様が見えなくてちょっと暗かったんだけど、空には満天の星。

そして、そこを横切る光の筋が、また1つ。

「今夜はー、流星群がー、来てるんですよー。」

「流星…ぐん？」

「はいー、流れ星をー、たくさん見る事ができるんですよー。」

聞いている間にも、流れ星がいくつも…
何てすごいんだろう…まるで…

「魔法みたい…」

「魔法ですか？」

「そういえばー、星を降らせる魔法がー、あるそうですがー…」

…ほしをふらせるまほう？

何てとんでもない…

っていうか、アリサさん、何か答えがずれてる気がします…

「アリサって…いつも楽しい答え…だよね。」

「そうですかー？

そんなことないと思いますけどー。」

エリカさんはクスクス笑いながら言ってるけど、アリサさんは不思議そうに答えてるし。

「まあ、魔法でも何でもいいんじゃないか？

こんなにきれいなものを見られるんだからさ。

それに、これだけ流れれば、願掛けもできそうだよ。」

「がんかけ？」

「あら、ミアちゃんは知らなかったか。

流れ星が流れてる間に願掛けすれば、願い事が叶うって言われているんだよ。」

「そうなんだ…ラルフさん物知りだね。」

次流れてきたらちよつとやってみようかな？

でも何をお願いしよう…って悩んでたら、グーって音が聞こえてきた。

みんなが音のした方を見る…と、フェリックスさんのあきれたような声が聞こえた。

「おい…レックスのやつ、寝てるぞ…」

51 夜のおでかけ（後書き）

お話に、たまに自分の願望が混じったりします。
ゆつくり流星群とか見に行く機会とかないな…

ちょっと確認わすれてたら、PV7000越えててびっくりしました。

本当にいつもありがとうございます。

52 大騒ぎの日 その1

「魔獣が出やがったー！」

そんな叫び声が響いて、平和だったお昼の食堂に緊張が走った。冒険者のお客様たちは、ご飯をさつと平らげて、部屋に戻ってく。そして、お昼だけ食べにきてたご近所の常連さんたちはご飯を食べる手も止まってる…

「マリーさん、魔獣って…？」

「普通の動物たちよりも変に大きかったり、体の一部だけが歪に成長してたりする獣よ。」

それにしても、街の近くまで来るなんて…」

つていうことは、普通じゃない状況なんだ…

何だかちよつと…大変なこと…だよな？

クルトさんも厨房から、こっちに来てた。

「クルトも聞えたのね。」

「ああ、こっちも聞えたみたいだね。」

それにしても、ここしばらくなかったんだけどなあ…

みなさん、とりあえずは落ち着いて待っていてください。

何か動きがあれば、対応はさせていただきます。

下手に外の状況を考えずに出てしまうと、騒ぎに巻き込まれたりすることがありますので。」

クルトさんがまだ食堂にいるお客様たちに呼びかけて、少しみなさん落ち着いてみたい。

そうこうしてるうちに、部屋に戻ってた冒険者さんたちが装備をそ

ろえて降りてくる。

みなさん、マリーさんやクルトさんに、様子を見にいつてくるって出ていく。

フェリックスさんたちも降りてきたけど、行っちゃうのかな？

「俺たちも行ってくるわ。」

まあ、あれだけ行けば出番はないだろうけど。」

「気をつけてね。」

ってまあ、今のあんたたちならわたし何かが心配しなくても大丈夫だろうけど。」

「気持ちが緩むと…どんな相手にも負ける可能性…あります。」

マリーさんの言葉に、エリカさんが答えて、みなさんは出て行った。魔獣って強そうだけど、悪魔より強いのかな…？

だったら怖すぎる…

「ミア、大丈夫だよ。」

冒険者たちはみんな強いから、魔獣なんてあつという間にやつつけられるさ。」

「そっか、そだよね。」

うちだけでもあんなにたくさん冒険者さんたちが向かったんだから、きつと大丈夫だよね。

それからしばらくは静かで、さっきの騒ぎは何だったんだろって気がしてくる。

残ってたお客様たちも、落ち着いたみたいで、ご飯の残りを食べ終わってる人たちもいたから、クルトさんの案で、お茶をサービスすることになったの。

「どうぞー」。

サービスですー。」

「お、こりやありがたいね。」

お茶がついてくるなら、たまに魔獣が出てもいいかもなあ、ははは。」

何て軽口を飛ばせるくらいに、落ち着いてきてたんだけど…
ボタン

って急に表の扉が開いて、また食堂のみなさんがびっくりする。
あたしもマリーさんもびっくりしたけど。

飛び込んできて、荒い息を整えようとしてるのは、教会のシスターのシャルテさんだった。

「ミアさん…！よかった…少しお願いしたいことが…」

「大丈夫かい？ちよつと座って落ち着いて…」

「す、すみません、急に…」

イスに座ったシャルテさんに、まだ残ってるお茶を出した。

シャルテさんは苦しそうだったけど、少しにつこり笑って、お茶に口をつけてくれた。

「はあ…すみません、実はミアさんにちよつと教会の方まで来ていただけないかと…」

「ふえ?!」

「どういうこと？」

今は魔獣騒ぎで危ないでしょう?」

シャルテさんの言葉に、あたしよりもマリーさんが反応した。
それにしても、何か急いできたみたいだけど。

「はい…実は、ファングボアが…」

「また厄介なのが…」

「はい、それで、負傷された衛兵の方がミルファム教会に運ばれてきたのですが、少し傷が深いのです。」

治療師^{ヒラー}の方をお探ししようと思ったのですが、冒険者の方はみなさんフアングボアの方を追いかけて行かれたみたいで…」

フアングボアっていうのが魔獣のことなのかな？

って、ぼーっと考えてたら急にシャルテさんに両手をつかまれてびっくり。

「ミアさん、治療師ですよ？」

お願いします、どうか一緒に来てください！」

「え、ええっ?!」

急に言われて、混乱しちゃって思わずマリーさんを見たら、マリーさん頭をなでてくれたから、ちょっと落ち着いた。

「ミアはどうしたい？」

「え…と…あたしで力になれるなら…って。」

「うん、それじゃ行きましょうか。」

クルト、ちよっとこっち頼むわね。」

「やれやれ、まあ、君らしいな。」

気をつけていくんだよ。」

何だか、マリーさんも一緒に来てくれるみたい？

シャルテさんありがとうございますって、あたしとマリーさんの手をとってお辞儀しっぱなしだけど…

「さあ、そうと決まれば早く行かなきゃ。」

ミア、ペンダントはつけてるね?」

「はい、だいじょうぶです。」

「シスターさんは、いける?」

「ありがとうございます。」

大丈夫です。」

こうして、大騒ぎの街を、ミルファム教会へ3人で向かうことになった。

早くケガした人のところへ!

52 大騒ぎの日 その1（後書き）

何だか…事件です…

無事解決に導けるかな…

53 大騒ぎの日 その2

マリーさんとシャルテさんと3人で、教会へ急いでく。

広場の方が騒がしい感じで、この辺りは今は割と落ち着いてる気がするんだけど。

マリーさんとシャルテさんの表情は曇ってる。

「入られたみたいね。」

「はい、門で止められなかったようです。」

あまり被害が大きくならなければよいのですが。」

2人の話を聞けば、あたしにだって魔獣が街に入っちゃったってことはわかってしまう。

どうか、こっちに来ませんように…

しばらく細い道を進んで、大通りに出たら、魔獣の暴れた痕跡のよ
うなものをすることができた。

壊れた台車やタルの破片みたいなのがあったり、水か何かがたくさ
んこぼれたような跡があったり。

道沿いに被害が出てるみたい。

早足で進みながらマリーさんに聞いてみた。

「マリーさん、フアングボアってどんな魔獣なの？」

「簡単に言っちゃえば、大きなイノシシよ。」

ただ、名前の通り、牙が特に大きくてね。

その牙で突進して体当たり何かされたら、そりやもう大変なのよ。

「
実は教会に運ばれてこられた衛兵の方も、門を破ろうと突進して
きたフアングボアに引っかけられてしまったということ…」

シャルテさんの言葉を聞いて、マリーさんがうわあ…って言うてる…
どうしよう、大変そうなんだけど…

その後も、いくつもの被害跡を見ながら、教会にたどり着いた。

「シスターシャルテ、おかえりなさい。

お目当ての方は見つかったようですね。」

「はいシスター、引き受けていただけました。」

シャルテさんに声をかけたのは、シャルテさんと同じような服を着
てる、だいぶ年上のおばさんだった。

おばさんは、マリーさんの方を向いてお辞儀したんだけど、シャル
テさんがあわてて耳打ちしてる。

そしたら、おばさんびっくりしたみたいになって、あたしにお辞儀
した。

「申し訳ありません、早とちりしてしまい失礼しました。」

「え、ええっ?!」

おばさんと一緒に、シャルテさんも頭を下げちゃったから、どうし
ていいか困っちゃったんだけど、マリーさんが声をかけてくれて、
2人とも頭をあげてくれた。

「とにかく、今はそれどころじゃないんですよ。」

「は、はい。ご案内します。」

シャルテさんについて、奥に向かうと、ベッドがたくさんある部屋
についた。

そして、そのベッドの1つで、衛兵さんがうめいてる。

まわりには、衛兵さんや、教会の人たちがいて、腕を布で巻いたり、

汗を拭いたりしてる。

布はだいぶ赤く染まって、ケガがひどいのがすぐわかった。

「すみません、前を空けてください！」

シャルテさんがそういうと、周りにいた人が隙間を空けてくれる。マリーさんに背中を押されて、空いた隙間にあたしが進むと、周りにいた人たちは、ちよっとおどろいてるみたいだった。

けど、そんな余裕はあたしにはもうなかった。

大きなケガを前にして、体がすくんでしまって、声もうまく出せない……

どうしよう、って思ったとき、この場には何だか合わない、でも聞きなれた声が聞こえてきた。

「にゃー。」

「ええつ、ネコくん?!」

周りの人も、急なネコくんの登場に固まってる。

けど、あたしはネコくんの声で少し落ち着くことができたんだ。

ネコくんは、横のワゴンからぴょんと飛んで、あたしの肩に器用に飛び乗ってきた。

何だか、がんばられて励まされてるみたい。

「うん、だいじょぶ、できるよ。」

「にゃ。」

そのとき、いつもよりたくさんマナを込めなきゃっていう考えが不意に浮かんできた。

いけるよね、きっと。

衛兵さんの傷口に、布越しに手をかざして リンワード魔法語 を紡いでく。

「優しき光、包み込み、その傷を癒す助けとなれ…」
「ヒーリング《負傷治癒》」

いつもよりマナを込めたからか、いつもより強い光が傷を包んでいく。

マナを使っただけという感覚もいつもよりもおっきい。
光がおさまると、衛兵さんはぐったりしてしまった。

びっくりしたんだけど、教会の人が、様子を見て、寝てるようですって言うてくれた。

「きつかったんだろうね。」

ケガが治って、気がゆるんじやったのよ、きつと。」

マリーさんがそう言うてくれて、ちょっと納得した。
教会の人が巻いた布を確認しながら外したけど、傷は見当たらないって言うてくれた。

ちゃんと成功…したんだよね。

周りもほっとした雰囲気になってる。

あたしもちよつとほっとしたら、何か急に力が抜けちゃって、その場に座り込んだじゃった。

その拍子にネコくんは飛び降りてどこかに行っちゃった。

「ミア、大丈夫？」

「うん…何かほっとしたら力抜けちゃいました…」

「ミアさん、本当にありがとうございます。」

あとはわたしたちの方で看ますので。」

シャルテさんも、さっきまでの緊張した感じがなくなって、ほっとしてるみたい。

うん、力になれてよかった。

一緒にきてた衛兵さんが、お礼をって言ってたけど、別にそんなの
いらないうっていいおいた。

シャルテさんも、お茶を用意するから、少し休んでいったらうって言
ってくれたけど、宿も気になったから、せっかくだけど、遠慮させ
てもらったの。

教会の外に出ると、そこら中で片付けが始まった。

さっきまでの緊張感がだいぶん薄れてる、かな？

マリーさんは、もう決着がついたんじゃないかって言ってた。

すこし落ち着いた街をマリーさんと手をつないで宿へ向かってく。

あたしは、よかったっていうことしか考えてなかったんだけど。

あとで、このことに絡んでちょっといろいろあったんだよね…

54 今夜はおつかれさまパーティー

今日の夜の食堂は、みんなでパーティーみたいになってる。
主役は冒険者のみなさん。

そしてメインディッシュはフアングボアだったりする。
分厚く焼いたお肉が盛り付けられたお皿がいくつも出てる。
クルトさん、珍しい材料だからって張り切ったみたい。

冒険者さんたちは、基本的には依頼を受けてお仕事するんだけど、
街に被害が出そうなときとかは、衛兵さんたちや、王都だと騎士団
にも協力するのが当たり前になってるんだって。
うちに泊まってる冒険者のみなさんも、そういうことで、慌てて準
備して出て行ったんだね。

結局、大通りを広場まで走る間に、何軒かの建物に突っ込んで、壊
したりしたみたいだけど、弓とか魔法で止められたところを仕留め
られたんだって。

それで、参加した人たちで、お肉を分けてきたみたいで…冒険者さ
んたちってワイルドだね。

ちなみにフアングボアの牙は結構価値があるみたいだけど、こうい
うときは一番に駆け付けた人がもらうことになるみたいで、残念な
がらうちの宿のみなさんじゃなかったみたい。
ちよつと見たかったかも。

「ああ、そうだなあ…」。

あの大きさはなかなか遭わないな…」

「そんなにおつきかったの？」

「俺たちより背が高くて…まあ小さな倉庫くらいはあったんじゃない
いか？」

まあ、よく怪我人だけで済んだもんだよ。」

うん、想像するだけでびっくりする。

フェリックスさんがいろいろ教えてくれたから、実際に見てないけど、フアングボアがすごいのだったってことは何となくわかった。広場がだいぶ汚れたみたいで、今日明日は、有志の人たちで、広場掃除になるんじゃないかってことだったけど、それも大変だよね…

「っと、ミアちゃん、もう一杯もらっていいかな？」

「あ、すみません！。すぐにお持ちしますね。」

飲み物の方は、クルトさんとマリーさんが相談して、冒険者のみなさんには今日はサービスってことにしてみたい。フェリックスさんから空いたジョッキを受け取って、カウンターに持っていく。

「マリーさん、お代わりです。」

「はいはい、ジョッキ貸してね。」

注いでもらったお代わりをフェリックスさんのところに持っていく間に、他のお客様からもお呼びがかかったので、残念だけとお話を聴けたのはここまでになっちゃった。

でも今日は、立食形式だから、お料理の追加も割と楽なので、実はいつもよりも余裕があったりするんだけどね。

そんな感じでお給仕してたら、新しいお客様が訪ねてきた。

「失礼、こちらにミアさんという方がいらっしやると伺ったのだが

…」

その人は、衛兵さんたちと同じような格好をしてる、がっしりとした体格の人だった。

でも、いつも見る衛兵さんたちより、ちよつと立派な感じがした。何だか、ちよつとお客様たちも気になるみたいで、少し静かになっちゃった。

んー、そんな人があたしに用事…？

そのまま返事をしようとしたら、マリーさんが奥から先に返事をしていた。

「いらつしゃいませ。

失礼ですけど、ミアが何か？」

「ああ、お忙しいときに申し訳ない。

私は衛兵隊をまとめている隊長のグンドルフと申す。

この度は部下が世話になったようで、お礼に上がらせていただいたのだが。」

「グンドルフ…？」

隊長さんの名前を聞いて、マリーさんが何か考えてる。

有名な人なのかな？

お客様たちは、隊長さんが来た理由がわかったみたいで、もう元通りににぎやかに楽しんでる。

「奥さん…？」

「…どつかで聞いたことあるような気がするんだけど…」

ま、いいわ。

ミア、ちよつと来て。」

マリーさんに呼ばれていくと、隊長さんはこんな小さな子が…って驚いてる。

ぺこりとお辞儀すると、隊長さんは、オホンと咳払いをした。

「あー、この度は、我々の仲間を助けていただき、大変感謝してい

る。

あの騒ぎの最中、わざわざ治療師^{ヒーラー}の方に来ていただいただけでも申し訳ないが、あのままでは、彼はどうなっていたかわからない。ついてはこれを受け取っていただこうと思う。」

そういつて、隊長さんは外に声を掛けた。

そしたら、衛兵さんが何か袋を持って入ってきて、隊長さんにその袋を渡したんだけど、隊長さんはそのままあたしにその袋を渡そうとする。

「これって…？」

「うむ、治療師の方に無料^{ただ}で魔法を使わせたとあつては困るのでな。その分も含めたものだが。」

つてことは…お金？

うー…そんなつもりで助けにいったんじゃないんだけど…

「あのー…あたしは別にそんなつもりじゃなくて、シャルテさん…あ、シスターさんに頼まれて言っただけですから…」

「しかしですな…我々としても、無料で治してもらったとあつては…」

「あー…！」

あたしも隊長さんもうしょうつて感じになりそうなときに、マリーさんが叫んで、あたしも隊長さんも、そして食堂のお客様もみんな静まり返っちゃう…

みんなの視線を受けたマリーさんは、ちょっと赤くなつて、後ろのお客様の方を向いて、何でもないから続けてって言ってる。

もちろん、そんなこと言われたつてお客様たちも元の雰囲気急に戻れないよね。

こつちを気にしつつ、でもパーティーの方に向いてくれようとはしてる。

当のマリーさんは、お客様の方からまたくるつとまわって隊長さんに向き直る。

「あなた、王都の詰め所にいたグンドルフでしょ。」

「う、む？確かに私は王都で勤務していたが…何故それを？」

「覚えてないかしら…わたし、マリーですけど。」

まだちよつと顔が赤かったマリーさんに対して、マリーさんの名前を聞いた隊長さんは、少し青ざめた気がする。

そんな2人が向き合ってしゃべってるから、何かすごく色の違いが…って、外から袋を持ってきた衛兵さんも同じこと考えたのかな？
2人の顔を交互に見て、最後にあたしと目が合った…

「なぜ『^{ブリマホワ}白の舞…」

「ちよつと！その呼び方もうなし！」

「は…？あ、ああ…」

ますます赤くなっちゃったマリーさん、ますます青くなっちゃった隊長さん…

何なんだろう…相変わらずちんぷんかんぷんなのはあたしと衛兵さん。

マリーさんも隊長さんも、何か変だよー。

あ、忘れてたけど、きつちりお断りしなきゃ。

「あの一、とにかく、あたしはお金をもらつようなことはしてないので、すみませんがそれは受け取ることができません。

ほんとにごめんなさい。」

ぺこりとお辞儀したんだけど、あたしを見た後、ちらつとマリーさんの方を見て、隊長さんは、はぁーって溜息をついた。

「わかった。」

それではこれは持つて帰らせていただく。

忙しいときに邪魔をして申し訳ない。

後日、また本人がお礼に上がると思うが、そのときはまたよろしく頼む。」

つて、それだけ言つて、すんなり帰っちゃった。

扉が閉まって振り返ると、お客様たち、こつちを見てる…けど、マリーさんが近づいていくと、みんな何事もなかったかのようにパーティーを再開したんだよね。

…ま、いつか。

まだパーティー続きそうだし、お給仕しっかりやらなきゃね。

54 今夜はおつかれさまパーティー（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

PVも8000を越え、お気に入り登録もしていただいたりして驚くばかりです。

思いつきで書いてばかりなので、変な表現とかよくわからないとことかあると思いますが、これからもお付き合いいただければと思います。――（――）――<

55 街中みんなでお片付け

フアングボアが大暴れした次の日、朝の食堂も終わって休憩に入っただけ、あたしは広場のお掃除に参加したいってマリーさんたちをお願いしてみた。

衛兵さんたちや、冒険者さんたちががんばってくれたおかげで、被害も小さかったって聞いたけど、広場でフアングボアをやったから、だいぶ汚れてしまったっていつてたし。

マリーさんもクルトさんも、お掃除に行くことには反対しなかったんだけど、だいぶすごい状況になってるかもしれないから、大丈夫かなって心配してる。

「わたしはクルトがついていけばいいんだけど…」

「1人でも行けるよ？」

「あー、えっとね、そういうことじゃないのよ…」

何となく齒切れが悪い感じ…

あたしもどんな風をお願いすればいいかわかんなくなってきた…そのとき、上からお客様が降りてきた。

「あれ、エリカ、1人で出かけるのかい？」

「はい、広場の片付けに…」

私の魔法…たぶん役に立つ…から。」

「そうかい、冒険者は片付けに参加しなくても誰も文句なんて言わないけど、こういうときエリカは手伝いに行くこと、多かつたわね！。」

ふーん、冒険者さんたちは、街を守る方がんばるってことなのかな。

確かにあたしじゃフアングボアにはかないそうにないし…見てないけど。

あ…そうだ。

「エリカさんと一緒に行くのはダメ？」

「ええっ？」

エリカに迷惑かけてしまいかもしれないでしょ。」

急に言われて、エリカさん、不思議そうな顔をしてたけど、マリーさんが説明して納得したみたい。

ちよつと考えて、あたしも一緒に行ってもいいって言ってくれたんだけど、マリーさんは何か歯切れが悪い。

でも、エリカさんの口添えもあって、何とか許可を出してもらったとができた。

「…じゃあ、迷惑になりそうだったらすぐに帰ってくることに。」

いいわね？」

「はい！」

ということで、さっそく出発しようとしたら、マリーさんにデッキブラシを渡された。

エリカさんは手伝うとなると、魔法を使うことになるけど、あたしはそうはいかないもんね。

でも、魔法で手伝うってどういうことだろ？

広場に向かう途中の大通りでは、たぶんフアングボアが当たって、いくつが壊されてる建物があった。

そんな建物で、何人もの人が、修繕を始めてる。

衛兵さんたちも手伝ってるんだね。

広場につくと、たくさんの方がお掃除に参加してた。
台車にタルを乗せて、水を運んでくる人、ブラシで石畳をこすつて
る人、それぞれにがんばってるみたい。

「ミアちゃん…大丈夫？」

「はひ？」

「まだ何もしてないですよ？」

「えっと…臭いとか…」

臭い…そういえばちょっと変な臭いするよね。

どっかでかいだことのある気がする臭いも混じってるけど。

「んー、これって何の臭いですか？」

「たぶん…血…とか…腐敗臭、かな？」

マリーさんも心配…してたけど、昨日のうちに…だいぶ片付け…
進んでたみたい。」

そっか…マリーさんが気にしてたのって、そのことなんだね。

でも、がまんできないほどのものじゃないし、ちゃんとできそう。

エリカさんは、こすつても取れにくい汚れを、水を勢いよく飛ばす
魔法で落とすからって、別行動することになった。

とりあえずあたしも、見よう見まねで石畳をこする人たちに加わる。
川から水をくんでくれる人たちが、どんどん水をまいて、その
あとをあたしたちがこすつていくみたいな感じで作業は進んでく。
でこぼこしてるから、結構大変だったんだよね。

まわりの人たちは、お知り合い同士が多いみたいで、作業しながら
いろいろお話してる。

でも、あたしの知ってる人はいないみたいだね…

「おや、ミアさんもお手伝いに来ていたのですか。」

「はひ？」

あ、ゼル先生、こんにちは。」

急に声をかけられてそっちを向くと、タイミングよく知ってる人発見で何だかちよつとうれしくなっちゃった。

ミアさんも、っていうからゼル先生もきつとお手伝いに来てるんだろうつて思ったんだけど、ブラシも何も持ってないみたい。

そんなあたしの視線に気づいてか、ゼル先生が笑ってこういった。

「私たちギルドの方からは、主に魔法を使つてのご支援をさせてもらうことになってるのですよ。」

風を使つて、悪臭を吹き飛ばしたり、水で汚れを落としたり、といった感じです。」

「そですか！。」

街中でお手伝いなんですな。」

「はい、みんなの街ですから、みんなで協力しませんと。」

話をしたら、ゼル先生、別のところで呼ばれてる。

お互いががんばりましょう、って言つてそっちに走つて行っちゃった。

そんな感じでしばらくお掃除に参加してたけど、まわりの人たちの話を聞いてたら、エリカさんの言つてた通り、昨日のうちにだいぶ片付けしてみたいで、思ったよりも早く片付いちゃった。

あたしも、途中で抜けてお昼の準備かなつて思つてたんだけど、十分間に合いそう。

何となく噴水のところにみんなが集まつてたから行つてみると、1人のおじさんが噴水の縁に上つて、集まつた人たちの方に向かって「みなさん、お疲れさまでした！」って言った。

そしたら、集まつた人たちも、口々にお疲れさまで！って言い合つて、みんなで拍手大会みたいになっちゃった。

何だか、みんなでがんばるのって、楽しいね。

これでお掃除はお開きになったみたいで、集まっていた人たちも、ばらばらと帰り始めたみたい。

「ミアちゃん…も、お疲れさま。

大丈夫…だった?」

「あ、エリカさん。

はい、ちゃんとできました!」

「そう…良かったね。

それじゃ…帰りましょう。」

少し人ごみを離れると、離れたところにゼル先生が見えた。ぺこっとお辞儀したら、ゼル先生も気づいてたみたいで、手を振ってくれた。

あたしもちよつとは街のお役にたてたかな? 帰ったら、お昼の準備もがんばらなきゃね!

56 うわさを聞きたいの

「変な植物？」

「うん、ミアちゃんどこならそんな話出てないかなって。」

今日は久しぶりにユーリさんここに来てる。

っていうのも、フェリックスさんたちが急ぎの仕事のご指名が入ったみたいで、授業もなくなったからなんだけど、ちょうどユーリさんが声をくれたんだ。

ユーリさんも最近はずいぶん忙しかったみたい。

商隊が襲われたりして、お茶が少なくなった分を、外にいろいろ採りに行ったりしてたんだって。

それで、そのとき変な植物に出会って…っていうお話だったんだけど。

「変っていつでも…あたし、植物詳しくないよ？」

「あ、そんな難しくないのよ。」

動く植物なんて、普通見ないでしょ？」

「動くの?!」

うん、びっくりはしたけど…何かかわいくないかな？

どんなだろ、お花が踊ったりとか…？」

「ミアちゃん…何か変なの想像してない…？」

うつとりしてるけど…そんないいものじゃないのよ？」

「ほへ？」

お花が踊ったりしてるのか…」

あ、ユーリさんがずっとこけてる…違ってたみたい。

想像もつかないや…

「そうねー…、植物の魔物っていうのもいるのよ。」

「魔物？魔獣じゃなくて？」

「あら、そっか。」

魔獣っていうのは一昨日暴れてたフアングボアみたいなやつのことよ。

普通にいる獣の、ちょっと強いようなやつ、かな。」

そいえば、マリーさんがそんな風に説明してくれてたっけ。

でも、結局フアングボアがどれくらいおっきいか見てないんだよね… ちよつと残念。

「それで、魔物っていうのはね、明らかに自然じゃないやつ、っていうのかな…

ちよつと曖昧だけど。

植物の魔物だと、蔓を鞭みたいにして叩いたり、巻きついたり、拳句、動物とか人まで捕食するようなやつもいるんだけど…」

「ひう…」

か、考えてたよりだいぶ怖い…

そんなの生えてたらどうしよう…

「この前、採集に行ったときなんだけどね…

最近何だか物騒な話も聞くし、1人では出ないようにして、猟師さんたちと一緒に採集も行ったの。

あ、ちよつと話変わるけど、ミアちゃん、緑に縞々の模様の果物見たことある？

中は赤くてみずみずしくて、種が結構入ってる、これくらいの大ささのやつ。」

って言つて、ユーリさんは手で大きさをつくつた。
顔よりもおっきいのね。

んー…そんなのは食べた覚えも見た覚えもない…
だから、首を横に振って答えた。

「でも、その果物がどうしたの？」

「実はね…その果物つばいのに、4つの肢が生えて走り回つての
を見たのよ…」

「え…」

「別に怖くはなかったし、見ようによつてはかわいいっていう人も
いるかもしれないけど…」

とりあえずびっくりしちゃって、あたしも一緒に来てくれてた獵
師さんも固まっちゃってね。

それで、最近のことを聞いてると、何だか放っておいちゃだめな
のかなって思つて。」

ということ、ユーリさんから聞いた変な話のうわさがないか、今
日の晩の食堂で聞いてみるって約束をして、あとは採集に行つた
ときのお話聞いたり、あたしの魔法の勉強の進み具合を話したりし
て久しぶりのおしゃべりを満喫できたの。

宿に戻つて、マリーさんやクルトさんにも聞いてみたけど、2人と
もそんな話は聞いてないって言つてたから、まだあんまり誰も知ら
ないのかな？

また明日にでも冒険者ギルドの本部の方に聞いてみてくれることに
はなつただけ、冒険者さんたちの方がよく知ってるかもしれない
よね。

「…ということなんです。」

何かうわさとか聞いたこととかありませんか？」

「んー、僕は知らないなあ。みんなは？」

周りの方たちも、首を横に振ってる。

常連さんたちに、お給仕しながらいろいろ聞いてみるけど、みんな知らないみたい。

すごい珍しいのかなあ…

あ、またお客様が。

「いらつしゃいませー。」

「ふう、ちよつと遅くなっちゃったけどいけるかな？」

「あ、おかえりなさい。」

カウンターでもよかつたらすぐにいけますが、テーブルなら少し待ってもらわなくちゃです。」

お泊まりの冒険者さんのグループが、いつもよりちよつと遅めのお帰りで、ちようどテーブルが埋まっちゃってたんだよね。

リーダーの人が、グループの方と相談して、カウンターでいいってことだったので、ご案内。

ご注文をいただいて、厨房に急ぎ、他のお客様のできあがった分を運んでく。

配膳して戻るときに、今帰ってこられたお客様たちにも聞いてみようと思ったら、マリーさんがもうその話を振ってくれてるところだった。

「…という話があるみたいなんだけど、あなたたち、何か知らない？」

「あー…帰りにギルドに報告行つたときに、たぶんその依頼出て

ましたよ。」

「依頼？」

「はい、何でも植物に魔力を込めて、意思を持たせたり、自由に動かせないかって研究してた人のところから、何匹か逃げだしたから捕まえてくれて…」

探すのが大変そうで、受けるつもりがなかったからあんまり詳しく見てないんですが…」

「そう、ありがと。」

うちでも明日確認してみるわ。」

横で聞いてたら、マリーさんが気づいてウィンクしてくれる。
これで何とかわかりそうかな？
って安心してたら、奥からこんな声が…

「ミアー、できてるよー。」

運んでくれるかなー？」

ひう…クルトさん、ごめんなさい！

急いで厨房に向かうことになりました。

それにしても、いろんなこと研究してる人がいるんだねー…
ちゃんと捕まるのかな？

56 うわさを聞きたいの（後書き）

夏も終わりそうですね。

スイカに手足が生えたらうりぼうっばいになっていう変な発想が…
目とか鼻とか貼りつけてみたいかも…

57 かんちがい？

「もっとおつきいと思ってたけど…うちの宿よりちっちゃいや…」
「ま、宿と比べちゃだめよ。」

今日は、ユーリさんと冒険者ギルドに来てる。

何でこんなことになったかかっていうと、話は今朝に戻るんだけど…

朝の食堂も、お客様もいなくなって片付けっというときに、玄関の扉がコンコンとノックされた。

こんな時間にくるお客様なんてほとんどいないから、マリーさんと顔を見合わせる。

扉が開いて、ひょっこりと顔をのぞかせたのはユーリさんだった。

「おはようございます。」

もしかして変な時間に来ちゃいました？」

「おはよう、ユーリ。」

今から朝の片付けだけど…昨日の件かしら？」

「あ、マリーさんも知ってるのね。」

うん、何かわかったかなって思っで。」

ユーリさんは昨日あたしに言っでた変な植物の魔物のことを聞きにきたみたい。

ばっちり情報は手に入ってるもんね。

「えっとね、昨日…」

「あ、そうだミア、ちょっとお使いお願いしていい？」

ユーリさんに話そうとしたら、マリーさんが急にそんなお願いしてきた。

突然どうしたのかなって思ったんだけど…

「ユーリに説明するにしても、まだしっかり確認できてないじゃない。」

だから、直接冒険者ギルドに行ってきたらいいわ。」

「へ？でも…お片付けは？」

「うん、だからついでにギルドの新しい依頼聞いてきてもらうのと、ここで頼まれた分を受けてもらえるかを報告してきてもらえば、ちよーどいいじゃない。」

そう、だから、お使いだったんだ。

マリーさんたちで片付けの方をやっておくから、ユーリさんで行ってくればいいって提案してくれたから、2人で冒険者ギルドまで出かけることになった。

マリーさんから、うちに持ち込まれた依頼の詳細を書いたメモを預かって、さあ出発ー！

って思ったら、冒険者ギルドの場所をあたしが知らなかったり…

結局地図まで描いてもらったんだけど、ユーリさんも大まかな位置ならわかるってことで、今度こそギルドに向かうことになった。

ユーリさんがいたし、地図もわかりやすくて、ギルドまでは特に問題なくついたんだけど、あたしのイメージではもっとおっきいのかなって思ってたってわけで…

「とにかく入ってみましょ。」
「はい。」

入ってみると、結構人がたくさんいてちょっとびっくりした。
みんな冒険者さんなのかな？

入ってすぐのところが広くなつて、奥のカウンターで、何人かの人
が代わる代わるお話を聞いてるみたい。

右側の壁にはいろんなメモが貼ってあって、何人もの人たち（冒険
者さんだと思う）がメモを見てたり、そのメモをはがしてカウンタ
ーの列に並んだりしてる。

とりあえずは、マリーさんに言われたことを先にしなきゃね。

「ユーリさん、あたし先にマリーさんに言われたことをすませてく
るね。」

「あ、うん。」

じゃ、あたしは植物の魔物の依頼探してるね。」

ユーリさんと別れてカウンターの列に並ぶと、前に6人ぐらい並ん
でる。

でも、カウンターの人も2、3人してるから、きつとすぐだよね。
少し待ってたら、列は1人、また1人と用事をすませて減っていつ
た。

カウンターの人たち、テキパキしててすごく早いよ。
そして、いよいよあたしの前には誰もいなくなった。

「次の方、どうぞ。」

「あ、はい。」

呼んでくれたお姉さんのところに行ってイスに座って、マリーさんか
ら預かったメモを出す。

「あ、依頼の方ですね。

ギルドカードはありますか？」

「ほへ？カード？」

「お忘れだと受けられませんが…」

カードって何だろ…マリーさんそんなこと言わなかったよね？
でも受けてもらえないと困るんだけど…

「あの…カード持ってません…」

「あら、すみません、それでは登録からですね。

こちらの用紙に記入をお願いします。」

お姉さんが紙とペンを渡してくれる。

名前とか、種族とか…職業？

名前は…ミア、と。

種族って…人間、でいいんだよね。

職業って何…？

「あのー、すみません、職業って何を書いたらいいんですか？」

「何って…あなたの職業ですが…」

「宿のお手伝い、でいいのかな？」

「いえその…例えば戦士とか…ではなさそうですね。

もしかして魔法士とか…」

「あ、白色魔法使えます。」

「治療師だったんですね。

それではそのように書いてください。」

ふみゆ…治療師っと。

これでいいのかな？

お姉さんを見ると、紙をチェックしてうなずいてる。

「はい、それではこれでお受けしますので、しばらくそちらのベンチに掛けてお待ちくださいね。」

できましたら、お呼びいたしますので。」

「あ、はい、ありがとうございます。」

何とかかなりそうかな？

とりあえずベンチで待たせてもらおうと。

「ミアちゃん、いけた？」

「あ、ユーリさん。」

うん、何とかかなりそうです。」

「何とか？何か面倒なことでもあったの？」

「…よくわかんないけど、たぶんだいじょぶだと思います。」

「そっか。こつちも見つけたよ。」

ちよつと詳しいこと聞きたいから、並んでくるね。」

そういつて、ユーリさんも列に並んだ。来たときよりちよつと人も減つてて、列も短い。

すぐにユーリさんの番になって、カウンターでお話を聞いている。

そのとき、「ミアさん」って、さっきのお姉さんが呼んでくれた。

「はい。」

「お待たせしました。」

登録が済みましたので、こちらをお渡ししておきますね。

ギルドは各国共通なので、この身分証カードでどのギルドでも依頼を受けることができます。

また、登録がタレイアギルドになりますので、何かあればこちらの方に連絡が回るようになっていきます。」

「は、はい…」

何か大変なのね…依頼を受けてもらうって。

「それでは先ほどの依頼をお預かりしますね。

分かっていますけど、一応形式ですので、依頼を受けるときは身分証も一緒にご提示くださいね。」

今もらったばかりの身分証と、マリーさんから預かってきたメモを一緒にお姉さんに渡した。

お姉さん、メモの内容を確認してくれてただけだけど、急にびっくりしたみたい…どうしたんだろ？

「ミアさん…これって…」

「あ、えと、依頼です。」

マリーさん…じゃないや、白枝亭に持ち込まれた分ですけど、引き受けていただけるか確認をお願いします。」

マリーさんに教わった通りに伝えただけど…お姉さん固まってる…お話が終わったのか、ユーリさんがこっちにきてた。

「ミアちゃん、どうしたの？」

「お姉さんが…」

「あう…その…ごめんなさい、わたし、勘違いしました…」

ミアさんは、白枝亭に持ち込まれた依頼を受けてもらえるかという事でいらっしやってたんですね？」

「え…そうですけど？」

「きゃー！すみませんー！！」

お姉さんが急にがばつと頭を下げて…ゴチンって…カウンターに…

うあ…すっごい痛そう…

周りにいた人もみんな見てるよ…

あ、お姉さん、おでこを両手で押さえてカウンターの上にうずくま
ってる…

「~~~~~っ!!」

「だ、だいじょうぶですか?!」

ユーリさんもびっくりしてるし…

あ、そだ、こんなときにも魔法かな?

うずくまってるお姉さんのおでこを押さえてる両手の上から手をか
ざして意識を集中した。

「^{ヒーリング}《負傷治癒》」

ほわっとなったかい光があふれる。

上手く行けたかな?

「うっ…重ね重ねすみません…」

「だいじょうぶですか?」

「はい、ありがとうございます…」

そういったお姉さんの目には涙がにじんでたけど…とりあえずおで
こはだいじょうぶっぽいかな?

それにしても、どうして大慌てしたんだろ?

「あれ…ミアちゃん、その身分証って…」

「あー、すみません…」

実はミアさんが冒険者に登録して依頼を受けたいのだと勘違いし
てしまって…」

「冒険者登録されちゃったのね…」

ほへ？かんちがい…？

ってことは、依頼を受けてもらうのに登録とかいらなかったんだ…でも、何か困ったことになったわけじゃないしいいよね。

お姉さん、すごい落ち込んだし、気にしないでくださいって言うて、せっかくなので身分証ももらって帰ることにした。たぶん使うことなんてないだろうけど。

依頼の方は、中身を確認してまた連絡くれるっていうことで、ユーリさんも、気になるお話はちゃんと聞けたみたいだしそのまま帰ることになった。

帰ってからユーリさんと2人で、マリーさんとクルトさんにギルドでのことを話したら、2人ともすごい笑ってた。

お姉さん…ふぁいと！

57 かんちがい？（後書き）

でびゅー…？

58 いろんなお客様

「いらっしやいませー…あ、ギルドのお姉さん！」

「ミアさん！」

はわわ…あ、あの…こんにちは…」

お昼の営業も真ん中くらいかなってときに、お昼前にギルドでカウンターにいたお姉さんが来てくれた。

最初見たときはテキパキしてる人だなんて思ったけど、急にあわあわなっちゃってるよね…

あたしのせいかなあ…

「すみません、お忙しいとは思ったのですが、先ほどの依頼の件をお伝えしたくて…」

マリーさんいらっしやいますか？」

「はい、いますよー。」

カウンターへどうぞ。」

お客様も減りはじめてたとこだし、カウンターの開いてる席へとお姉さんを案内した。

今ならあたし1人でもいけそうだし、マリーさんはお姉さんとお話してもらってだいじよぶだね。

もう、来てるお客様みんなに配膳終わってるから、お勘定と食器の片付けくらいだし。

って思ってたんだけど、新しく注文が。

「ミア、ランチプレート1つね。」

「はい。」

お姉さんが、注文してくれたみたい。

急いで厨房に戻って、クルトさんに追加をお願いする。持つていくのはクルトさんがしてくれるってことだったから、また食堂の方に戻つてくと、マリーさんがだいぶお勘定すませてくれてたみたいで、空いた席も増えてた。

食器をまとめて水場に運んだり、テーブルを拭いたりしてたんだけど、いつの間にかお客様はお姉さんだけになってた。

「ミア、ちょうどいいからちょっとこっち来て。」

「はい。」

だいたい片付いたところでマリーさんに呼ばれて、カウンターの中に入る。

何かなって思ってたんだけど、お姉さんを紹介したかったみたい。

お姉さんが、ご飯を食べる手を止めてこっちを向いた。

「ミアもこれから行く機会増えるかもしれないから、挨拶しとかなきゃね。」

「こちらは、ギルドの職員のリゼルさんよ。」

「よろしく願いますー。」

「こちらこそよろしく願います。」

「先程は本当にすみませんでした。」

だいぶ気にしてるみたい…別にあたしは何もなかったのにね？

マリーさんも笑ってるし。

「いつも白枝亭の分は、マリーさんかクルトさんが来ていただいていたし、ミアさんはわたしが見たことなかったから、てつきり新しく登録に来た冒険者の方だと思ひ込んでしまつて…」

「リゼルさんは、人の顔や名前を覚えるのがとても早くて、仕事も

「テキパキこなすんだけど、たまにこういうことあるわよね、うふふ。」

「リゼルさん、赤くなっちゃってるし…」

「何でも、普通はこっちから依頼を受けてもらえるかを確認に行くはずなんだけど、さっきのことがあったから、わざわざお昼の休憩を使ってきてくれたんだって。」

「それでマリーさんがご飯を進めたってことみたい。」

「まあ、そういうことで、今度からミアが行くこともあるから、よろしくね。」

「はい、わかりました。」

「あ…もしよかったらミアさんもギルドの依頼を受けていただければって思います。」

「危険なものは進められませんが、治療師^{ヒーラー}への依頼って、それなりにありますので。」

「ふえ?! あたしなんて何もできないです…!」

「急にそんなこと言われても困っちゃう…」

「宿のお手伝いもあるし…」

「あ、もしも空いている時間でできるものがあれば、っていうことです。で、そんなに深く考えないでくださいね…」

「そうね、もしかしたらミアにとってもいい経験になるかもしれないわね。いし、危なくないものならいいかもしれないわね。」

「何か、マリーさんの方が乗り気な気がする…」

「とにかくそんな感じで、ギルドのお姉さん、リゼルさんとマリーさんとお話してたら、玄関の扉がノックされて開いた。」

「ごめんください、ミアさんはいらっしゃいますか？」

入ってきたのは衛兵さんだった。

何かあったのかな？

マリーさんは衛兵さんを見て、「今日はいろんな人が来るわね！」
って言うてるけど。

とりあえずカウンターから出て玄関の方に向かう。

「はい、ミアはあたしですけど、何かご用でしょうか？」

「は、はじめまして！…じゃなくて…」

あの、自分はフアングボアにやられたときにミアさんに助けていただいたエーリツヒであります！

その節は本当にお世話になり、ありがとうございました！

ミアさんが来ていただけなかったら自分はどうなっていたかわからなかったそうです。」

「は、はひ…」

衛兵さん、元気そうなのはよかったけど、声もすつごく大きいし、勢いのある人だったのね…

思わず後ろを向いたら、マリーさんもりゼルさんも、さらには厨房の入り口からクルトさんまでこっちを見てた…

「助けていただいたのに、お礼に来るのが遅くなつて誠に申し訳ないであります！

できる限りのお礼をさせていたきたいのであります！

何か自分にできることはないでありますか？」

「え、そんなお礼なんて…」

別に普通のことしかしてないです。」

「いえ、命の恩人に何もしないなんて、そついうわけにはいかない
のであります！」

ひう…お礼なんていいのにー！
勢いに負けそうになってたあたしの横に、いつの間にかリゼルさんが来てた。

「エーリツヒさん、お久しぶりですね。」

「これはギルドのリゼルさん、お久しぶりであります。」

「ところで、どうなさったのですか？」

ミアさんも何だかお困りのようですけど…」

尋ねられたエーリツヒさんが、リゼルさんに説明してる。

あ、隊長さんが来たときにお礼を受け取ってもらえなかったことまで…

「そうだったのですか。」

とにかくエーリツヒさんが無事で何よりです。

ところで、こちらのミアさんですが、ギルド所属の冒険者さんなんですよ。

ミアさんもお礼は結構だと仰られていますし、今回はミアさんのご厚意ということでは無いでしょうか？」

「しかし…」

「ギルドが間に立つてもよいのですが…そちらの方にもご迷惑になると申し訳ないですし、できればわたしからのお願いとして収めていただければ…」

エーリツヒさんは、リゼルさんに言われて少し考えてたけど、あなたの方を向いてお辞儀した。

「すみません、自分の気持ちばかりを押し通そうとしてしまい、ご迷惑をおかけしてしまったのであります。」

今回の件は、ミアさんのご厚意をいただいたということですのでありますか？」

すっかり変わっちゃった…

固まってるあたしの肩がとんとん叩かれる。
横を見るとリゼルさんがウインクしてた。

「は、はい。」

えと、その…いつも街を守ってくれてる衛兵さんに協力できて、あたしもよかったです。

これからがんばってください！」

「いえ、お忙しいときに失礼しました。」

自分は仕事に戻ります。」

そういつて敬礼してエーリツヒさんは帰っていった。

何か…すごかった…

それにしても…リゼルさんの方を見ると、あたしが見てるのに気づいて、ちよつと照れ笑いしてた。

「仕事柄、いろいろな人と面識があるんですよ。」

少しはミアさんにお詫びできたのなら幸いです。」

うん、とっても助かりました！

リゼルさん、ありがとう！

58 いろんなお客様（後書き）

普段使わない口調だと、どういつぶつに言うのかわからなくなっ
てしまいます。

言い回しとかおかしいところいっぱいありそうですね…

59 なかまがふえました

「ミア、終わったらちよつと来てくれるー?」

お昼の食堂も終わって、食器を洗つてるときにマリーさんの声が食堂の方から聞こえた。

「はいー、ここ片付けたらすぐ行きますねー。」

あたしもおつきな声で返事をして、洗い物を続ける。
今日はクルトさんがお昼の後、急ぎの用事で市場に行っちゃったから、食堂の方はマリーさんが、洗い物はあたしが担当することになつてゐる。

ちよつと時間はかかったけど、洗い物完了!

マリーさんが呼んでたから、食堂に行かなくちゃ。

食堂に入ると、マリーさんはお掃除してる

そしてもう1人、テーブルについてる人がいた。

「ミアちゃん、こんにちは。」

「ユーリさんだー。いらつしゃいです。」

「あ、ミア、ごめん、お茶お願いしていいかしら?」

「はい、すぐ淹れてきますね。」

厨房に戻って、お茶の準備。

ポットに茶葉とお湯を注いで、カップとストレーナーを一緒に持っていく。

食堂に戻ったときには、マリーさんもテーブルについて、お話して

た。

テーブルで3つのカップにお茶を注いで差し出す。
そしてあたしも席に着いたんだけど…

何かお話があるのかな？

「それで、何とかかなりそうなの？」

「はい、昨日も同じとこで見た人がいるそうなので、明日また行ってみようかなって。」

マリーさんとユーリさんが話してるけど…どこに行くんだろ？
って思ってたなら、ユーリさんがあたしの方を向いた。

「実はね、昨日冒険者ギルドに行ってたじゃない？」

あのとき調べた植物の魔物のことだけど、依頼主に直接お話を伺いに行ったの。」

「ほえ…」

ユーリさんの聞いてきたところによると、依頼主の魔法士ギルドに所属する人が、植物を動かす魔法の研究をしてたみたいなんだけど、何か条件がおかしかったのか、魔法が変にはたらいちゃって、できた植物が、動物みたいになって逃げ出しちゃったっていうことだった。

「それで、とくに害はないみたいなんだけど、原因の解明になるかもしれないし、みんなを驚かせちゃだめだろうってことで、冒険者ギルドに依頼を出したっていうことみたいなの。」

「そうなんだ…」

魔法って失敗することもあるんだね…」

「そうね…ミアちゃんが使ってた癒しの魔法みたいにすぐ効果があるものは、失敗することはほとんどないみたいだけど、長い時間を

かけてかける魔法とか、いろんな触媒を使うときなんかは、失敗することもあるみたいけど…

あたしもそういう魔法は知らないから、よくわからないんだ。」

あたしも、まだまだ知らないことだらけだもんね…

今度アリサさんかゼル先生に聞いてみよっかな？

「っと、ちょっと逸れちゃったね。

この間あたしが見た魔物も、そのとき逃げ出したものに間違いなさそうなんだけど、今朝もう一度、冒険者ギルドに行ったときに、昨日もあたしが見た場所と同じようなところで、その魔物を見た冒険者がいたって聞いて、もしかして捕まえられないかなって思ってたね。」

「ユーリさん、捕まえに行くの…？

危なくないの？」

フェリックスさんたちも言ってたけど、他の冒険者さんたちも、悪魔が出たと言ってたし…

ちよっと心配かも…

って思ってたんだけど、ユーリさんがテーブルの上に何か出したんだ。

「…あれ、これってギルドの身分証^{カード}？」

「うん、何だか自分でやってみたくなくなっちゃって。

実は今まで、冒険者ギルドってもっと怖いところになって思ったんだけど、ミアちゃんと一緒に行って、割と信頼できそうかなって登録しないと依頼を受けられないからね。

それで、うちのお店に来てくれる知り合いの冒険者で手が空いてる人が、一緒に行ってくれるから、大丈夫よ。」

ユーリさんの言葉を聞いて、マリーさんが苦笑してる。

「やっぱり、冒険者の一般へのイメージって偏ってそうね!。」

「あはは! マリーさんとか、個人的にお付き合いのある人たちはみんないい人ばかりなんですけどね。」

それで、さっそく明日、行ってみようかっていうことになって。
「なるほどね。」

急みたいけど、準備はしっかりしておくこと。

あとは、いくら注意してもしすぎるってことはないから、簡単そうだとか、気を抜かないようにね。」

「はい、ありがとうございます。」

それじゃ、ちよつと準備もあるし、ミアちゃんにも冒険者仲間になったって報告できたから、今日はこれで帰りますね。」

そっか、ユーリさんわざわざ来てくれたのって、そのためだったんだ。

もしかしたらいつか一緒にお仕事することもあるのかな?

何て考えながら、玄関までユーリさんを見送りに行く。

「お茶、ごちそうさま。ありがとね。」

「気をつけて行ってきてください!。」

「うん、また報告に来るね。」

それじゃ。」

あたしも手を振って、ユーリさんを送りだした。
うまく捕まるといいな!。

捕まったら見せてもらえるかな?

60 マーケット

今日は久しぶりに大きな商隊が来たみたいで、広場が大きなマーケットみたいになってるみたい。

普段、宿に必要なものを買い出しに行く市場は、広場から少し入ったところにあるんだけど、商隊が来たときは、市場に露店が並ぶのがいつもの形になってる。

それでも今回ののは、普段の商隊より、規模がすごく大きいみたいで、お泊まりのお客様たちも、お昼前にはみんな出て行っちゃった。そんなわけで、今日はお昼の食堂がとってもお客様の少ない日になっちゃった。

厨房の片付けは少なかったからすぐ終わっちゃったし、食堂の掃除をしているマリーさんのお手伝いに行ったんだけど、こっちも使わなかったテーブルとかあったから、あっという間に終わっちゃう。ということで、いつもより早めに休憩に入って、ゆっくりお茶の時間に。

そこで、クルトさんがこんな提案してくれた。

「せっかくだし、マーケットを見にいつてみるかい？」

夜はお泊まりのお客様も戻ってくるだろうから、いつもの時間には仕込みに入らないといけないけど、時間は十分あるよ。」

いつもよりおっきな商隊ってことだから、何か珍しいものとか見られるかもしれないよね。

見たことない果物とか…

「ミア、嬉しそうね。

お口、緩んでるわよ?」

「へあっ?!はわわ…」

マリーさんに言われた通り、あたしの口は開いてたのだ…
うう、恥ずかしい…

「それで、どうする?」

「あたし、行ってみたいです。」

あたしの答えに、クルトさんはうんうんとうなずいてる。
でも、マリーさんは少し考えてるみたい。

「んー、ちょっとわたしは留守番してるわ。

2人で行ってきたらどうかしら?」

「ふえ?マリーさん行かないの?」

「ごめんね。

でもせっかくだから、楽しんできてね。」

ふみゆ…ちょっと残念。

とゆことで、クルトさんとお出かけすることに。

一度部屋に戻って準備して、すぐに出かけることになった。

「いってきまーす。」

「いつてらっしやい。」

「それじゃ、すまないけど留守中頼んだよ。」

マリーさんに見送られて、広場に向かって出発。

大通りまで出ると、確かにいつもよりも人が多いような気がする。
気のせいかもしれないけど…

「うわぁ…お店いっぱいだ…」

人もいつぱいだ…」

広場につくと、お祭りのときくらいに露店がたくさん出てたから、びっくりしたんだけど、クルトさんはあたしを見てあははって笑ってる。

広場いっぱい露店があつて、人もたくさんだから、はぐれないようにクルトさんの左腕につかまって歩くことにした。

ほんとにいろんなものが出てるんだね。

街ではあんまり見ることもない、海でとれるお魚の干物や塩漬けを並べてるお店では、クルトさんもいろいろ見てて、いくつか買ってた。

他にも香辛料や、貝でつくったアクセサリ、きれいな石とか…

あ、知ってる人発見！

「ラルフさーん、こんにちはー。」

「あ、ミアちゃん、クルトさんもこんにちは。」

「こんにちは、ラルフくんは何かお目当てのものが？」

「はい、これだけの規模ならって思ったんですけど、ありましたね。」

「

そういつて指差した先にはいろんな武器と一緒に四角い塊が並んでる…金属の塊？

いろんな色があるんだ…

「質のいいインゴットなんて、普段は並ぶことなんてないですからね。」

そういつてるラルフさんは、もう並んでる金属の塊に集中してた。すっごい一生懸命に見てるし、邪魔しちゃだめだねってことであい

さつしてお別れした。

その先でも、いろんな薬を売ってるところや、いろんな油を売ってるところや、革細工を置いてるお店なんかもあった。

「ほんとにいろいろ売ってるね。」

「あつ！果物屋さんだー。」

「ミアはほんとに果物が好きだね。」

「野菜も置いているみたいだね。」

クルトさんもそういいながら、やっぱり食材は気になるみたいで、2人でいろいろの物色してみる。

普段見ることのないような、変わった果物もたくさんあったから、何か買ってみようかな？

黄色くて細長い実がたくさんつながってるのとか、オレンジ色の卵みたいな形のやつとか、こい緑色で卵みたいな形だけど、表面がちよつとでこばこしたのとか…まだ熟してないのかな？

「いらつしゃい、こんなのあんまり見たことないみたいだね？」

「はい、果物好きだけど、どれもみたことないです。」

「この緑色のもつて、まだ食べれないんじゃない？」

「ああ、これはね、この色でもう食べれるんだよ。」

中に大きな種があつてね。

種に沿ってナイフで切つてあげればきれいに2つに分けられるから。」

「ふーん。でも緑色だと甘くなさそう…」

「そうだよ、これは甘くない果物なんだ。」

甘くない果物なんかあるんだ…

それって、おいしくなさそうなんだけど…

って思つてたら、おじさんが笑つて黄色くて細長いのを進めてくれ

た。

「こっちは甘いし、皮も手で剥くことだってできるから、お勧めだよ。」

「それだといくらですか？」

「1本なら銀貨1枚だな。」

うにゅ… ちょっと高いかも…

珍しい果物っぽいから高いのかなあ…

迷ってたらいつの間にかクルトさんが後ろに立ってた。

「まあ、こういうものは運んでくるだけでも大変だからね。」

その小さな房でまとまってるのを買うなら少し負からないかい？」

「まとめてもらえるならこっちもありがたいんで、6本だけど、4枚ってところでどうですかい？」

「じゃ、それでいただこうかな。」

結局、クルトさんが買ってくれたんだけど… いいのかな？

クルトさんはさっき買ったお魚を持ってたから、果物はあたしが持つことになったんだけど、じっと見てるあたしに気づいたクルトさんは、見上げてるあたしの頭をポンポンと叩いて笑った。

「私も食べてみたかったし、マリーにもお土産になるからいいんだよ。」

さ、とりあえず今日はここまでにしよう。

明日か、もしかしたら明後日くらいまではこのマーケットは続くだろうからね。」

そう、気がつけばお日様がちょっと傾いてきてた。

ちよっと急ぎめで戻った方がいいかもしれないかな？

夜の食堂の準備もしないといけないもんね。

それにしても、この果物も楽しみだよね！

60 マーケット（後書き）

いろいろ出しちゃいました。

商隊は暖かい海辺の方から来たということ。

61 おいしいおみやげ

今日はマーケットの2日目。

休憩時間に行ってみようかなって思ってたんだけど、ユーリさんが来てくれたから、お茶会に変更になったんだ。

「これ、おみやげね。」

「わ、おつきい…」

ユーリさんが差し出したのは、緑色で黒いしましまになってるおっきくて丸いもの。

あれ、どこかで聞いたことなかったっけ？

「ユーリ…これが動いてたってことは…ないわよね？」

「え…あー、違いますよ。」

これは依頼者からのお礼ですから。

動いてた方はちゃんと引き渡してきましたよ。」

…そっか、そういうえばユーリさんが見たっていう魔物が緑色で黒いしましまだったっけ。

それでマリーさん心配したんだね。

でも、これが動いてるとか、ちょっとかわいいかも？

「ま、せっかくだしいただこうか。」

クルトさんはちゃっかり包丁を用意してるし。

こんな大きなもの、どうやって切るんだろうって思ったんだけど、クルトさんが包丁の刃を差し込んで、そのままぐるーっと1周させたら、きれいに半分になった。

「わー、ほんとに中は赤いんだ…」

何か不思議…外と中がこんなに違うんだー。」

「そう言われてみればおもしろいね。」

さあ、食べやすい大きさまで切ってしまうから、覗きこむのは一旦終わりだよ。」

そういうとクルトさんは、どんどん切っていく。
気がつけば三角形がたくさんできてる。

「たくさんできちゃったね…」

「そうだね、でも意外と食べられるんだよ。」

それじゃ、いただこうか。」

切り終わった三角形をてっぺんからかじってみると、じゅわつと果汁がしみだして口いっぱいに広がった。
でも、結構あっさりした甘みで、どんどん食べれそう？

「はうっ…何かガリッてした…」

「種は取るか出すかしないとだめよ。」

うー…見える種は取ったのに、中にあったのかな…

ちよつとずつ、気をつけて食べなきゃ…

って思ったんだけど、みんな食べるの早い…

食べてから、あとで種を出してる…のかな？

っていうかクルトさん、種だしてくない？

いろいろ気になったけど、結局みんな口数少なく食べ続けてる。

「んー、さすがにもう入らないわ。」

「そうですねー。」

マリーさんとユーリさんがそう言って食べるのを止めてしまった、
ゆっくり食べてたあたしも、クルトさんも、後が続いてしまった。
まだ残ってるけど…

「残りはリキュールにつけて、あとで食べられるようにしておくよ。
ユーリちゃんも持って帰ったらどうかな？」

「え、いいんですか？」

「それじゃ少しだけお願いします。」

ユーリさんの返事に笑顔で答えて、クルトさんは残った果物を持って
厨房に向かった。

あたしも一緒に行って布巾を取ってくる。

結構テーブルの上が水浸しみたになっちゃったんだよね。

布巾をしばって戻ってきたら、マリーさんとユーリさんが、散らば
ってた種を集めてくれた。

テーブルを布巾でふき上げて、種を包んで厨房に持っていく。

種は裏に捨てちゃっていいよね。

もしかして生えてきたりするかな？

ちよっとおもしろそうだから、そうしてみよっと。

「ミア、ユーリちゃんが持って帰れるように、ちよっと深めの器出
してくれるかな？」

「はい。」

ふたのあるやつ？」

「ああ、それがいいね。」

布巾を洗って干してたら、クルトさんも作業終了したみたい。
器を持っていくと、そこにさっきの果物を小さく切ったのをいくつ

も入れて、上からたまつてた汁をかけていく。

「それじゃ持っていこうか。」

「うん。」

「そっちは？」

「これはあとでうちでもいただこうと思ってね。」

ユーリさん用の他に、まだ残ってる果物が結構あったけど、夜にまた食べれそうだね。

それにしても、おなかたばたばになっちゃった。

たくさんお茶飲んだときみたい。

食堂に戻ったら、ユーリさんが昨日のことをお話してた。

「ボアの子どもも、この果物みたいに縞模様があるんだけど、何となく似てるかなって思って、前に見たとこに網を張って待ってたらね、きつちりそこを通ってきたのよ。」

「へー……」

「それであつさり捕まっちゃって、あたしたちも驚いてたんだけど、ほつとしてたらまた同じのがでてきたのよ。」

「1匹じゃなかったんだ？」

「いっぱいいたら……食べきれない……じゃなくて……大変そうだよね。」

「そうなのよ。」

結局、全部で4匹捕まえたんだけど、連れて帰るのが大変だったわー。

網が、予備も合わせて2個しか持っていってなかったから、2匹は力のある人で抱えて帰ることになったんだけど、足をばたばたさせて抵抗してたわ。」

ユーリさんが身振りもつけて説明するから、あたしもマリーさんもクルトさんもおもしろくって思わず笑っちゃった。

「街に連れて帰ってきたときの周りの反応もおもしろかったけどね。みんな目を丸くして固まってるんだもん。」

うん…何も知らずにそんなの見たらびっくりするんだろね…

でも、無事に帰ってきてよかった。

って言ったら、ユーリさん、「そういえば他に何も出なかったわね…」って、思い出したようにいってたけど…

あ、そろそろ夜の食堂の準備しなきゃいけないね。

今日はマーケットいけなかったけど、楽しかったからし、おいしかったし、こんなのもいいよね♪

61 おいしいおみやげ（後書き）

ボーッとしてる間に10000PV越えました！
ほんとにいつもありがとございます！

62 雨の日の過ごし方

マーケットも3日目って思ってたんだけど、今日はもう開かないみたい。

昨日でだいたい商品が売れちゃってるのが1つの理由で、もう1つは…

「しかしよく降るわねー。」

「こんなに降るのも久しぶりだね。」

「夜中からずっとだもんね。」

お昼も終わって、マリーさんとぼーっと窓の外を見てる。

今日はずーっと雨が降ってるんだ。

しかも、結構強い雨。

この雨のせいかな、今日のお昼はお客様がとっても少なかったの。

お泊まりのお客様も今日は出歩かずに宿にいるから、そのお客様たちくらいで、他はほとんど来なかったんだよね。

「やれやれ、こんなに降るなんてね。」

「とりあえずお茶にしようか。」

「あら、今日はちよつと贅沢ね。」

「シナモンだなんて。」

クルトさんが持ってきたお茶をカップに注いでくれた。

ちよつと甘くて不思議な香りがしてて、とってもおいしそう。

でも、香辛料って高いから、普段のお茶とかに使うことはないんだけど、今日は特別ってことだね。

クルトさんが淹れてくれたお茶には、もうミルクが入ってるみたいだった。

「あれ？もうミルクも入ってるの？」

「お茶と一緒にシナモンを入れて沸かして、そのあとミルクを入れて温めたからね。」

甘さは自分で調節したらいいから。」

こうしてしばらく、ちよつとぜいたくなお茶会を楽しんでただけど、雨は一向にやむ気配がない。

どうしようかな…何ができるかな？

料理の練習は…ちよつとこないだ怖かつたし…

お掃除も割とちゃんとしてたもんね…

あ、魔法の練習かな…？

慣れると口に出して唱えなくてもいいって言ってたもんね。

これなら1人でもできるし。

「この後、あたし、部屋に戻っててもいい？」

「ん？別にかまわないよ。」

夜の準備はいつもくらいの時間に始めるつもりだから、そのときまた降りて来てくれるかな？」

「はい。」

「ごちそうさまでした。」

先にカップだけ片付けようと思ったんだけど、クルトさんがまとめてやってくれるってことだったから、お願いして部屋に戻ることにした。

2階の廊下を歩いてると、部屋の中から話声が聞えたりする。お客様たちも、やることなく大変かもしれないね。

部屋について、扉の鍵を開けて入って、明かりをつける。

ベッドでいいかなって思ってたなら、何だか窓がカリカリ音がする…

もしかして…って思っで、ちよつとだけすき間を開けてのぞいてみたら、黒い塊が。

「うあ…ちよつと早く入りなよ…」

「にゃ…」

ネコくんが通れるくらいのすき間を開けて呼んだら、返事して入ってきてくれた。

少し開けてただけなのに、床がちよつとぬれちゃってる。やっぱ雨が強い。

だいぶぬれて、ネコくんいつもよりしぼんでるみたい。

布でくるんでふいてあげた後、膝の上で毛布をかけてあげたら、そのまま丸くなっちゃった。

「もうだいじょぶかな？」

「にゃー。」

毛布の上からなでてあげると目をつむったまま答えるネコくん顔だけが毛布から出ててかわいいなあ。

でもこのままじゃ、ちよつと練習できないし、ベッドで休んでもらうことにして、抱き上げた。

ネコくんは嫌がるでもなく、おとなしくだっこされてくれたので、そのままベッドの真ん中に寝かしてあげる。

「さてつと、やってみよつかな。」

あたしが今、使えるのは4つ。

でも《ヒーリング負傷治癒》は、ケガしてないしダメだよね。

それに、たぶん簡単なのから始めた方がいいような気がする。つてことは、《ライト光》から、かな？

「あ、発動体忘れてたや…」

ちゃんとペンダントをつけて、と。

意識を集中して、心の中で ルーンワード 魔法語 をなぞっていく。

「《光》！」

差し出した指先に、ほわっと明るい光の玉が現れた。

んー、できちゃったみたい。

心の中でなぞるのを、ぱっとできるようになれば、すぐに使えるようになるのかな？

光を消して、そのあと何回か試してみたら、何となくうまくできるようになってきた気がする。

この調子なら、他のもできるかな？

時間もまだ少しいけるみたいだから、ちょっと背伸びして、ホーリーライト 《聖光

》の方を試してみることにした。

もしも、ほんとにもしもだけど、何か変なのに出ちゃったら、ぱっと使えないとだめだもんね。

…っていうか、時間かかってたらその間にやられちゃったりしたら怖いし。

「会っわけないんだけどね…うん。」

「…にゃ？」

「あれ、口に出てた…ごめんね、まだ寝てていいよー。」

んー…練習しよう。

えっと、何だっけ、これはちょっと長かったよね。

真白き光、清らかなるもの、世界に仇為す邪悪なるものを押しと

どめる力となれ だよね。

これ、魔法が増えると思いだせなくなりそう…

アリサさんもゼル先生も、本を持ってるのはそういうことなのかな…
あたしも今度つくった方がいいかもしれないし、アリサさんに相談してみよう。

それはともかくとして…やってみよう。

また意識を集中させて、しっかりイメージを持って心の中でなぞっていく。

「《聖光》！」

ネコくんがまぶしくないようにって思っで、ベッドと反対側に手をかざしておいたんだけど、今度もちゃんと成功したみたい。

前にやったときと同じように、真つ白な光がふわっと広がった。

でも、ちよつと時間がかつちやつたかな？

これも慣れればつとできるようになるかな。

もうちよつと練習しようと思つたけど、そろそろ準備の時間も近そうだし、今日はここまでにしておこつと。

ネコくんはまだ丸まつてたからそのままにして部屋を出て鍵をかけようと思つたんだけど、お仕事の途中で起きたらかわいそうだよね…
んー、ちよつとだけ部屋の扉開けておこつか。

もし降りて来ちゃつたら、そのとき何とかすればいい…よね？

それじゃ、準備がんばるぞつと。

63 雨上がりの朝

昨日の雨がウソみたいに今日は青空でとってもいい天気。

結局ネコくんは、あたしのお仕事中ずっと部屋にいたみたいで、戻ったら出迎えてくれた。

お腹すいてるかなって思ってた夜の残りをちょっと持ってきたんだけど、お水少し飲んだくらいであんまり食べなかったんだよね。

でも、元気だったからだいじょぶなのかな？

そのままあたしの部屋で一泊して、朝には窓をかりかりしてたから、開けてあげるところち向いて「にゃ。」と一声鳴いて、出て行っちゃった。

今日は朝の食堂も、常連さんが来てくれたりといつも通りのにぎわいを見せてる。

昨日来てなかったお客様も、声をかけて入ってきてくれて、何だかほっとするよね。

そんなこんなで朝の食堂も終わろうかかってときに、大通りの方が何だかにぎやかになってる。

「何かあったのかな？」

「たぶん、商隊が出発するのよ。」

食堂の掃除をしながら何気なくつぶやいた言葉に、マリーさんが答えてくれた。

商隊の人たちも大変だよな。お天気が悪いとお店出せなかったり、すぐに移動しなくちゃだめだったり。

でも、いろんなとこにいけるのはちょっと楽しいのかな？

片付けも一段落したから、次はどうしようかと思って思ったんだけど、

クルトさんは市場でいろいろ探してくるのと、マリーさんは冒険者ギルドに顔を出したいってことだったので、お留守番することになった。

この時間だと、特に忙しいこともないから、あたしだけでもだいじよぶなはず。

ただ待ってるだけじゃつまないし、魔法の練習とかしてみようかなって思ってたなら、玄関の扉がノックされた。

「はい？」

「マリーさん、いますか？」

「あ、ラルフさんこんにちは。」

マリーさんは今、冒険者ギルドに行ってます。」

「ああ、ミアちゃん、こんにちは。」

そうか…どうしようかな。」

あら、急用なのかな？

あたしが聞いてわかることならいいんだけど…

「どんなご用ですか？」

「ん？ああ、うちの店でマリーさんから注文受けてたんだけど、それについて相談をね…」

「ラルフさんのとこで…うー、それはあたしじゃわかんないですね…」

しよぼんってなったら、ラルフさんは笑って「しょうがないよ。」って言うてくれた。

一応、お昼の準備までには戻ってくると思っただっていうことを伝えたら、また来てくれるっていうことで、ラルフさんは一旦帰ることにしたんだけど、そのときまた玄関がノックされた。

「ただいまー、って何でラルフがいるんだよ？」

「おわ、リック?!」

開いた扉から入ってきたのはフェリックスさんたちだった。

後ろにアリサさんもエリカさんもレックスさんもいる。

とりあえず入ってもらうことにしたんだけど、フェリックスさんがラルフさんを引きとめて、ちょっとお話があるみたい。

「それじゃ、奥のテーブル使ってください。

たぶん、もう誰も来ないと思うけど…一旦厨房に行きますので、誰か来たら教えてください。」

そう言うと、みなさんうなずいてくれたので、一旦厨房に戻る。

お茶くらいならあたしでも何とかなるはず。

って思ったんだけど、よく考えたら火がないんだ。

クルトさんが出るときにたぶん消しちゃってるよね。

しょうがないから、お水にしょ…

いつもクルトさんが、ご飯のときにそえてる、果物が入ったお水。

この黄色い果物、そのまま食べると酸っぱいけど、ちょっとお水にしぼってあげるとさわやかになるんだよね。

5つ用意して、トレーに乗せていざ食堂へ。

「あれ、マリーさんお帰りなさい。

帰ってきたの気付かなかったよー。」

「こっちから声かけてみたんだけど、届かなかったみたいね。」

いつの間にか帰ってきてたマリーさんがテーブルについてるんだけど、人数は5人のまま…ラルフさんがいなくなってる？

「あれ、ラルフさんは？」

「ラルフなら、マリーさんに相談することが終わったから、帰ったよ。」

フェリックスさんの説明に納得。

そういえばその用事できてたんだもんね。
つと、お水配らなきゃ。

せつかく5つあるし、マリーさんにも。

「ミア、気がきくわね。

さすがうちの看板娘だね。」

「はう……」

マリーさんがほめてくれたんだけど、何だかちよつと照れくさい……
トレーを置きに厨房に戻ろうとしたんだけど、その前にマリーさんからお仕事が。

「リックたち、またうちにしばらくいるみたいだから、部屋の準備だけお願いするわね。」

あ、トレーはわたしがやっておくから。」

「はい。」

それじゃすぐ準備してきますね。」

トレーをテーブルに置いて、2階へ向かう。

これでまた、アリサさんに魔法習えるかもしれないって思うと、ちよつと楽しみで、お部屋の用意も快調に進んじやうね。

それに、またいろんなお話聞けるかもしれないし、何だかとてもうきうきしてくる。

あ、でもうきうきしすぎてお仕事失敗しないようにだけは注意しなきゃね！

64 発表って何だろう？

昨日はあのあと、宿のお手伝いをずつとしてた。

アリサさんたち、帰ってきてすぐだったから、疲れてたら悪いなって思っ、授業はお願いしなかったんだ。
今日は時間があればお願いしてみようかな。

朝の食堂が終わって片付けしたら、何だか表が騒がしい。
思わずマリーさんと顔を見合わせちゃう。

「何かあったのかしら？」
「ちよつと見てきます。」

扉を開けると、近所の人たちが集まって何か話してた。
こんな道の真ん中でどうしたんだろ？って思ってたら、近所のおばさんが声をかけてくれた。

「ミアちゃん、聞いた？」

「えと、何…でしょうか？」

「広場で何か発表があるそうよ。」

お昼前ってことだけど…」

「ほへ…マリーさんたちにも伝えますね。」

「でも宿も忙しいだろうし、うちの人が行ってくれるから、あとで連絡回すわね。」

「あ、ありがとーございます。」

おばさんたちにお辞儀して宿に引っ込んだんだけど、よくわかんないや。

とりあえずマリーさんに報告したら、ちよつと考えて、とりあえず

クルトさんとも相談することになった。

厨房で同じことをクルトさんにも説明したら、クルトさんもちょっと考えてるみたい。

お昼の準備の時間っぽいもんね…

「とりあえず、マリー行ってきたくれるかい？」

厨房は私がいないとだめだし、食堂の方は、ミアに入ってもらおう。

そんなに長くはならないだろうし、逆にいえばお客様も広場に集まってるだろうから、急ぎ目に戻ってくれば、十分間に合うさ。」

「そうね、それじゃミア、わたしが行っている間、ここよろしくね。」

「は、はい！」

急に大役が回ってきた…

ドキドキして固まってるあたしに、2人ともそんなに心配しなくていいからって言うてくれるんだけど…

でもがんばらなきゃね。

マリーさんが出発するまでに、食堂の準備を前倒しで進めておいたおかげで、いつもより早めに終わっちゃった。

あとは厨房でお手伝いしてたんだけど、そろそろマリーさんが出かけることになったので、あたしは食堂に戻ってカウンターに入った。

「それじゃミア、あとはよろしくね。」

「はい、いつてらっしゃいますー。」

マリーさんが出かけていった後、1人でカウンターの中にとくと、何か不思議な気分、っていうかやつぱり落ち着かないよー。

でもよく考えたら、お泊まりのお客様もだいたいお出かけしてるし、

やっぱりこの時間に来る人は少ないよね、きつと。

しばらくは誰も来ることなく、じーっと待ってるだけの時間が過ぎていった。

もう、広場での発表は始まったっぽいよね。

っていうかもしかしたらそろそろ終わってるのかな？

なんてことを考えてたら、玄関の扉が開いて、常連さんがいらっしやった。

「あ、いらっしやいませー。」

「おろ、今日はミアちゃんが仕切ってるのかい？」

「えと、マリーさんが広場での発表を聞きに行つてて、その間だけです。」

「広場での発表…そういや、朝何かそんな話聞いたなあ…」

そう言いながら、いつものカウンターの席に座る常連さん。
まずは注文の確認だね。

「いつものでいいですか？」

「ん？ああ、頼むよ。」

「はい、少々お待ちください。」

ぱつと厨房に走って、クルトさんにランチプレート1つをお願いします。

そのまま走って戻って、またカウンターに。

んー…マリーさんとクルトさん、2人でやってたときってすっごく忙しかったんじゃないかな…

「それで、広場での発表ってどんなものなんだい？」

「はひ？えと…あたしも知らないんです…」

発表があるっていうことだけ聞いただけなので…」

「そうかい、それじゃマリーさんが帰ってきたら聞いてみるとするよ。」

「はい、おねがいします。」

常連さんとそんな話をしてたら、また扉が開く音が聞こえた。

今日はお客様の出足が早いかも…って思ったんだけど、入ってきたのはマリーさんだった。

「おかえりなさいー。」

「ただいま。」

あら、今日はちょっと早めにいらっしゃったんですね。」

カウンターに来てた常連さんに気付いて、マリーさんが声をかける。常連さんも軽く手を挙げて返事してる。

やっぱりマリーさんがいないと、だよね。

マリーさんがそのままカウンターに入ってくれたので、あたしは厨房の方へ、お料理を取りに行くことにした。きつとそろそろできるころだよね。

「あ、ミア、ちょうどよかった。」

今持っついていこうかと思っただところだよ。」

「じゃ、持っついていきますね。」

マリーさんも今帰ってきました。」

「了解、それじゃいつもと同じように頼むよ。」

「はい。」

お料理を持って食堂に戻ると、お客様も少し増えてきた。

マリーさんが注文は聞いてくれたので、厨房に伝えに戻る。

さあ、忙しくなりそう。

ここからが本番だね！

それにしても、広場での発表って何だったのかな？

お客様に聞かれてもだいじょうぶなように、あとで教えてもらわなきゃ。

65 マリーさんの報告

お昼の食堂の時間が終わってたけど、フェリックスさんたちは朝に出かけて行っただけ、戻ってきてない。

アリサさんに授業してもらえるかって思ってたんだけど、忙しいみたいだね。

ちょうどいいからって、お茶しながらマリーさんが聞いてきた発表の内容を、クルトさんと一緒に聞くことになった。

「まあ、あんまりいい報告ができるわけじゃないんだけどね。

王都から国中への通達だったわ。」

「国中ってまた大事じゃないか。」

「ええ、この間から、頻繁に悪魔が見られるようになったとか、リックたちも言ってたでしょ。

それとも関係があるみたいなんだけど、クオート公国の小さな村が襲われたらしいのよ。」

「なるほど、たしかに急を要するわけだ。

クオート…というと、グラキナの向こうだね。

ここからはだいぶ遠いが、そこまで活動的になっているとは…」

2人の会話を聞いてたけど、大変なことになってるっぽいのはあたしでもすぐわかる。

普通は遺跡とかに隠れて住んでいるようなやつらが、そんなことするんだもん…

「それで、最近のいろいろなことも含めて、もしかしたら、魔界につながる道の封印が弱まってるんじゃないかっていうのが、王都の見解らしいんだけど…」

「私たちには何か指示があったのかい？」

「そこまで嚴重なものはなかったけど、できるだけ不必要に外に出ないとか、外に出るときはできる限り集団でとか、街道を外れないようにとか、そういうったことをもつと注意してほしいってことだったわ。」

「まあ、今までとそこまで大きく変わるわけでもないようだね。物流とかに影響は出そうだけど…」

「あ、でも各地の衛兵とかは派遣数を増やすみたいよ。」

ふむ、とうなずくクルトさん。

クルトさんの言い方だと、そんなに心配しなくていいのかな…？あ、でも…

「街はだいじょぶかな？…襲われたりしない？」

「うん、ここは大きな街だし、そう簡単には手出しができないさ。

悪魔は魔獣なんかと違って悪知恵が働くからね。

無謀なことはしないとと思うよ。」

「そうね、それにここは襲われた村からずっと遠くだし、衛兵もいるし、冒険者もたくさんいるから安心よ。」

そっか…でも小さな村とかの人は大変なことになりそう…

それにしても封印が弱まってるってとんでもないことなんじゃないのかな…？

「封印って、昔の人たちがしたんだよね？」

「そうだよ。」

私たちのご先祖様たちが協力することで、魔界へ続く道と言われている洞窟に封印したんだ。」

「洞窟ってどこにあるの？」

「一応この大陸にあるんだけど、詳しい場所が分かってないんだよ。」

答えてくれたクルトさんもちょっと困った顔してるけど、詳しい場所が分かんないって、どゆことだろ？
秘密なのかな？

「それっぽいって言われている洞窟がいくつかあるのよ。
自然にできてるようなものもあれば、何かの遺跡のようなものもあるし…」

でも、魔界へつながっているって確かめられたことはないの。」
「ふえ…どしてですか？」

「奥までたどり着いた人がいない、ってことみたいね。
だから、どの洞窟がそうなのかもわからないし、もしかしたら全部違ってるかもしれないわ。」

何だか変な話…

それなのに封印がどうなってるかとかわかるのかな…

そんな話をしたら、フェリックスさんたちが帰ってきた。
この時間ってことはお昼は外で済ませてきたのかな。
あら、何だかお疲れ気味っぽいけど…

「ただいま。」

堅苦しい話は疲れるわ…」

「みんなお帰り。」

お昼は済んでるわよね。

お茶淹れるから座ってて。」

マリーさんが答えたときには、あたしとクルトさんがもう動き出していた。

振り返ったマリーさんがちょっと驚いて、そのあと笑って、よろし

くつて言ってくれた。

クルトさんにポットの方を任せて、あたしはカップの用意をする。つていつても棚から出すだけなんだけどね。

ポットの方が準備できたから、クルトさんと一緒に食堂に戻って、みなさんにお茶を注いで回った。

全部そろったところで、あたしとクルトさんも座ってお話の続き、かな？

「ギルドの方にも、国からの依頼って形でいろいろ来てたよ。

魔界への道も進めるって話が出てるみたいだし。」

「へえ…本格的に進めるのね。

大丈夫かしら…」

フェリックスさんたちは冒険者ギルドに行ってたみたいだった。

何だか結構有名みたいなんだよね…ご指名の依頼とかもあったし。そんな人たちに魔法を習ったりしてるあたしは、ぜいたくなことしてるのかな…

「そーいえばー、マリーさんはー、わたしたちと組む前にー、行ったことあるですよねー？」

「ええ、それはそのとき見つけたものだし。」

マリーさんが指したのは、フェリックスさんの剣だった。

っていうか、マリーさん、フェリックスさんたちと冒険者やってたんだ…

じーっとマリーさん見てたら、気づいてくれた。

「ミア…どうしたの？」

「マリーさんって、フェリックスさんたちと冒険者してたの？」

「あら、言っただけじゃなかったっけ？」

「聞いてなかったと思う…」

あ…『プリマ・ホワイト白の舞姫』って言う名前だけは…」

って言ったら、マリーさん、顔が赤くなってガクっとなっちゃった…
そいえば前もこんなことがあった気がする…

はうー…失敗しちゃったかも…

「ミア、今度ちゃんと教えてあげるから、その二つ名だけは言わないで…」

はひい…ごめんなさい…

6 マリーさんの昔話 その1

「さてと、何から話したらいいかしらね…」

「じゃあ、どうして冒険者になったの？」

「そこから?!」

まあいいわ…」

今度つて言つたマリーさんの昔のことをどうしても聞きたくて、夜にお願いしたら、寝るまでのちよつとだけならいいつて言つてくれたんだ。

だから、お茶しながらつて思つてただけど、クルトさんはお茶だけ用意して、クスクス笑いながらごゆつくり、つて部屋に戻つちやつた。

「わたしはこの出身じゃなくて、マルハウつていう港町で育つたの。」

父は商隊を率いる商人で、うちにいる方が少ないような人だったわ。

だから、いつも母と、兄が2人いたから、3人で暮らしてるような感じだったの。」

「お兄ちゃんがいたんだ。」

「ええ、でもいつも母は1人で家を切り盛りしてたから忙しくて、2人の兄がよくわたしの面倒を見てくれたから、影響を受けたのかしら？」

割とおてんばだったのよね。」

ふーん…マリーさんのお兄ちゃんとか、どんな人なんだろう？

似てるのかな？だったらかっこいいのかなー…

お母さんも、きっと美人さんだよな。

「それで、兄たちも大きくなって、家族で集まって、この先どうしていかって言う話をしたことがあったの。」

父は、兄たちのどちらかに仕事を継いでほしいって思ってたんだけど、上の兄は自分にはあまり向いてないって言って、辞退したの。それで、下の兄が仕事を継ぐことになったんだけど、上の兄もずっと家にいるわけにはいかないからって、自分で自信のあった剣の腕前を生かして、冒険者になるって言ったのよ。」

「マリーさんじゃなくて、お兄さんが冒険者になったんだ…」
「先に言いだしたのは兄だったわ。」

父はそんな不安定なものはだめだって言っただけで、兄は家を出ても冒険者になるって言ってきかなかったの。

それで、結局いろいろあったんだけど、最終的に父も認めてくれたのよ。」

冒険者って危険とかもあるから、お父さんも心配したのかな…

「ところがそれで終わりじゃなかったのよね…」

しばらくして、父はあたしに縁談を進めてきたの。」

「えんだん？」

「そうね…簡単にいえば、結婚相手を勝手に探してきたのよ。」

「ふえ…」

「急にそんなこと言われてもピンとこなかったし、わたしは断ろうとしたんだけど、父もなかなか退いてくれなくて…」

「もしかして、それってクルトさん？」

「え？あー全然違う人よ…知らない人。」

むー、そっか…

もしマリーさんがその人と結婚してたら、あたしがここに来ることもなかったんだよね…

何か変な感じだけど、ほっとした気がする…

「それで結局、父とケンカみたいになっちゃって、半分家出みたいな感じになっちゃったのよ。」

「ええっ?! 大変…」

「全然当てもなかったものだから、どうしようかって思ったんだけど、冒険者になってた上の兄が、面倒見てくれることになって、そのとき冒険者になったの。」

「そなんだ…冒険者になるぞーってなったんじゃないかなったんだね。」
「きっかけとしては変なものだったわね…」

でも、結局後から聞いたら、父が心配して兄に面倒見てやってほしいって頼んでくれてたみたいなんだけどね。」

「ケンカしててもお父さん、心配だったんだね…」

やっぱりマリーさんのお父さんなんだね…

「さて、これでいいかしら？」

「ふえ、もう終わり？」

そのあとどうなったの？」

「ミア、そろそろねむくなったりしないの？」

「まだだいじょぶだから…もうちょっとだけ！」

ほんとにまだ眠くないし、続きが知りたかったから、一生懸命お願いした。

マリーさん、ちょっと考えたけど、しょうがないわねって続きを話してくれたの。

「しばらくは兄と一緒にいた冒険者のグループで、いろいろ依頼をこなしたりしてたわ。」

もちろんいつもうまくいったわけじゃないけど、それなりにっ

て感じかしら？」

「依頼ってどんなのがあったの？」

「街の近くに住みついた魔獣をやっつけるなんてのもあれば、旅をする人たちの護衛なんかもしたわ。」

学者さんに頼まれて遺跡に行ったりもしたわね。」

「いろんなことするんだね。」

「そうね、冒険者って割と何でもやさんだから。」

それであるとき、魔界につながる道っていわれてる洞窟の1つに挑戦してみることになったのよ。」

「ええっ？！

どうしてそんなとこ行くことになったの？」

だって、魔界って悪魔がいるんだよね…

そんな怖いとこ行ったらってしょうがないのに？

「わたしたちが行ったのは遺跡のようなところだったんだけど、宝物なんかも見つかることがあるから、挑戦する冒険者も結構いるのよ。」

「そーなんだ…

悪魔とかもいたの？」

「そうね、何体も出会ったし、戦ったわね。」

やっぱりすっごい怖いとこだ…

宝物があるって言ってもそんなの…危なすぎると思う…

「でも、結局わたしたちも途中で引き返すことになったの。広すぎて手に負えなかったのよね。」

ただ、そのときに1つの剣を手に入れたの。」

剣…もしかして、フェリックスさんが持ってる剣かな？

お昼にそんな風に言ってたよね。

「っと、その顔はわかったってことよね。

そう、今リックが持っている剣がそのとき見つけたもの。

ミアは実際に見たことはないわよね。」

「うん、フェリックスさんが戦ってるそこなんて見たことないから。」

「あの剣の刀身は、真っ白なの。

きつといいものに違いないってことで、魔法士ギルドで鑑定をしてもらったんだけど、そのときに名前がわかったのよね。」

剣に名前がついてるんだ？

作った人がつけたのかな…剣が大好きな人…？

「古い時代に作られたものの中には、今では再現できないようなものもあるんだけどね、隠された名前がつけてあったりするのよ。

魔法をかけたりして調べるみたいね。」

「ほへ…」

インセント・ホワイト

「それは「無垢なる白」という名前の剣だったんだけど、いろいろ相談した結果、わたしが持てばいいってみんなが言ってくれて、わたしが使うことになったのよ。

さ、それじゃ今日はここまでね…もう遅いしそろそろ休まないといけないわ。」

「え…」

「また今度続きは話してあげるから、今日はちゃんと休みなさい。でないと、約束してあげないわよ？」

「あう…ちゃんと休むから、今度またお願いします…」

うー、早く次のお話の機会をつくってもらわなきゃ！

67 その本の名前は

「さてー、それでは始めましょうかー。」

今日は久しぶりにアリサさんが時間があるからって授業してくれることになった。

あ、でもちよつと聞きたいこともあったんだ。

「よろしくお願いします！」

アリサさん、ちよつと聞きたいことがあるんだけどいいですか？」

「いいですよー、何でもしようかー？」

「アリサさん、魔法のこと書いてる本を持ってますよね。」

「はいー、このことですねー。」

そう言つてアリサさんが取り出したのは、ぶあつい本。
この間も見せてもらったものだね。

「その本つてアリサさんがつくったんですか？」

「えつとー、本の中身のことですよねー…？」

…うん、さすがに本自体をつくったとは思ってないですよ？
でも、実はアリサさんつくれそうな気もしてきた…

「本っていうかー、忘れないようにー、記録するものでー、魔法書
つていうんですー。」

魔法をー、たくさん使うようになるとー、忘れてしまったりする
かもしれないのでー。」

これはー、ギルドで売ってるんですよー。」

そう言つて、魔法書を閉じてあたしに差し出してくれた。
表紙もごつくてがんじょうそう。
あれ…開けない…？

「アリサさん、これ?!」

「はいー、開かなかつたでしょー？

魔法書に署名をした人がー、認めればー、ちゃんと開くことがー、
できるんですー。」

「ふえ…」

アリサさんはあたしから一旦魔法書を受け取つて、軽く念じて、ま
たあたしに渡してくれた。
もう一度ゆつくり開いてみると、今度は簡単に開いちゃった。

「うわぁ…すごい!」

「魔法書の持ち主よりー、強い魔力を持っていればー、無理やり開
くこともできるんですけどねー。」

昔の魔法士やー、ソーサラー魔導師たちのー、ウィザード魔法書が見つかるー、忘れ
られていた魔法がー、載っていたりもするみたいですよー。
開くのがー、大変みたいですけどねー。」

ふーん…やっぱり魔法も忘れられたりするんだね。

ところで…魔導師って何だろ？

魔法士と違うみたいだけど…

「アリサさん、魔導師って何ですか？

魔法士は聞いたことあるけど…」

「魔導師はー、魔法士なんですー。」

「はひ？」

「2色以上のー、素質を持っている人がー、魔法士になれるのです

がー、他と合わせ持つことのできないー、白色とー、黒色のー、素質以外のー、赤色ー、青色ー、緑色ー、黄色のー、4色の素質をー、持っている人がー、魔導師と呼ばれていてー、たくさんの魔法をー、扱うことができるんですー。」

4色も使えるってなると、魔法の数もすごいことになりそうだね…そんな人の魔法書なら、たくさん魔法が載ってるよね、きっと。

「まあー、4色も素質がある人なんてー、やっぱり少ないですからねー。」

「そっかー…魔導師ってすごいんだね。」

「例えばー、見つかった魔法書もー、最後のページまでー、魔法がー、ぎっしり書かれていたそうですよー。」

そう言っつて、アリスさんはまた自分の魔法書を開いて見せてくれる。最初の方からずーっといろいろ書いてあるけど、真ん中くらいで何も書かれてないページが出てきた。

それでも、ぶあつい本だから、たくさん書いてあるんだと思うけど…

「わたしはー、白色だけなのでー、本が埋まることはー、ないと思いますー。」

「それでもたくさん書いてありますよね…」

あ、そうだった…本のこと聞いたのは、あたしも本をつくった方がいいのかなって思って、それでこんな質問になっちゃったんです。

「

「そうですねー…この本はー、ギルドに入るとー、もらえるんですがー…」

ミアちゃんはー、ギルドに入る予定がー、ないみたいなのでー、どうでしょうねー…」

あ、そつか…ちゃんと保護されてる本じゃないとダメなのかな…
とりあえず忘れないようにメモを取るくらいはしていけばいいかも
しれないよね。

「またー、何かいい方法をー、思いついたらー、お知らせしますね
ー。」

「はい、ありがとーございます。」

「それではー、少し時間が短くなってしまいましたが一、今日の授
業をー、始めましょうー。」

「よろしく願います！」

今日はどんな魔法を教えてもらえるのかな？
って思ってたんだけど、今日はちよつと違ってた。

「今覚えている魔法にー、まずはしつかりー、慣れていきましょう
ー。」

「ふえ…」

「慣れていくとー、その魔法をー、時間をかけずにー、使うことが
できますしー、その魔法を前提としたー、次の段階の魔法をー、使
いこなすときにー、必要になりますからー。」

そつか、ちゃんと基礎的なことができてないと、難しいことはでき
ないんだね。

じゃ、がんばって慣れるぞー。

「どんな風にしたらいいですか？」

「はいー、何度も使って慣れていくのがー、やっぱり一番早いです
ねー。」

「それ、前にちよつと自分で試してみました。」

「そうだったんですかー。」

ミアちゃんは一、結構鋭いですねー。

それではもう一つ、治癒魔法のように一、使う機会が限られるものでも一、声に出して一、詠唱を繰り返すのは一、割と訓練になりますよー。」

そっか…《^{ヒーリング}負傷治癒》って練習できないもんね…

今日はアリサさんに見てもらいながら、いろんな練習させてもらおうと♪

68 職業（クラス）選択の自由？

昨日の夜、部屋で冒険者ギルドの身分証カードを見ててちよつと考えてたんだけど、職業クラスってみんなどうやって決めてるんだろ？

あたしは白色魔法が使えるから治療師ヒーラーって言われたけど、ユーリさんはどんな職業で登録したのかな？

フェリックスさんたちのも実は知らないよね…

そう思うと、何だかとても気になっちゃった。

それで今日、朝の食堂でご飯を食べてるフェリックスさんたちにちよつと聞いてみたんだよね。

他のお客様も少なかったし…だいじょぶだったよね？

「え、登録した職業？

俺は戦士ファイターだよ。

魔法の素質もなかったし、力には自信があったからな。」

「でも…力押しばかりじゃダメって…マリーさんに…よく言われてた。」

フェリックスさん、エリカさんに言われて、えーってなってる。でも戦士っていうのは予想通りかも。

「じゃあ、エリカさんは？」

「私…？私は…野伏レンジャー…だよ。」

エルフだから…森とか自然の中で活動するのは…得意だったから。

「

「野伏は、野外での活動に長けてるような人になるもんだからな。」

エルフで冒険者だと、多いよな。」

「うん…魔法士ギルドに入ってたれば…魔法士ソーサラーでも…よかったんだだけ

ど…

森で…ある程度習ってきてたから…」

ふーん…エルフって森の中に村をつくったりしてるってどこかで聞いた気がする。

でも、結構自由に選べるっぽいのかな…？

「アリサさんは…治療師だね？」

「そうですよー。」

白色魔法が使えますしー、ミアちゃんと一緒にですー。」

うん、もちろんそうだよね。

白色魔法が使える人で、治療師以外もいるのかな？

もしかしたらみなさん知ってるかも？

「白色魔法が使って、治療師じゃない人っているのかな？」

「どうなんでしょうー？」

わたしはー、知らないですねー。」

他の3人も首を横に振ってる…ってことはないのかな？

そいえば、レックスさんは何だろ…やっぱり戦士？

「レックスさんは何ですか？」

「自分は格闘士グラップラーですよ。」

武器を使わずに戦ってるっす。」

何だかちょっと変わった感じなのかな？

でも、レックスさんもごっついから強いんだろな…

「ミアちゃん、詳しく知りたいならギルドで直接聞いてみてもいい

んじゃないか？」

「あ、そつか…今度行つたとき聞いてみます。」

「まあ、職業なんて、仲間組むときにどんなことが得意かって言う自分のアピールだから、あんまり変なもんはないだらうけどね。」

うん…そう言えばそうだよな。あんまり変な職業だと、誰も一緒に冒険したりしないよね…。

一番自信があるものにしてるのが普通だよな。

つと、あんまりお話ばかりしていると、お仕事おろそかになっちゃう。

「ユーリさん、こんにちばー。」

「あれ、ミアちゃん？いらっしやいませ。

お茶、足りなくなつた？」

「あ、今日はちよつと聞きたいことがあつて来ただけなの。」

「ふーん、あ、時間ある？」

「うん、しばらくはいけるよ。」

休憩の時間に、ユーリさんとこに来てみたんだけど、あたしの返事を聞いてユーリさんはお茶を入れてきてくれるって、奥に行っちゃった。

聞きたいのって、ユーリさんの身分証の職業だけなのに…

でもユーリさん、すぐに戻ってきた。

もうお茶も持ってきてくれてる…早いよー。

「あ、実は自分で飲もうと思って、お店の準備しながらお湯も沸かしてたのよ。」

「そっか、忙しいときにごめんなさい。」

「ううん、大丈夫よ。」

それより聞きたいことって？」

「えっとね、この間ユーリさんも冒険者ギルドに登録したでしょ。そのとき職業ってどうしたのかなって気になっちゃって。」

あたしの質問に、ユーリさんはさつと身分証をだして見せてくれた。身分証の職業のそこには、ハーバリスト薬草士って書いてある。

「これって…？」

「うん、どうしたらいいかって相談したんだけど、治療士ヒーラーってダメなんだって。」

たぶん治療師とややこしいからだと思うんだけど。

それで、薬草を採集したり、使って治療する人たちを、まとめてそういう区分にしているみたい。」

「ふえ…そなんだ…」

「でも、もうちょっと武器を使ったりするのが得意なら、戦士でもいけたのかもしれないわ。」

外に薬草採りに行ったりしてると言ったら、野伏とか狩人とか、アーチャー弓が得意なら射手でもいけますよ、なんて言われたし。」

ふーん…いろいろ聞けたけど…やっぱり自分が得意なものじゃないといまいちよくわかんないかも…

これじゃギルドに聞きに行ってもしょうがないかな…

「そんなに職業に興味があるなら、ミアちゃんとか、冒険者の宿なんだから、お客さんに見せてもらえばいいんじゃない？」

「ふにゅ…そだね。」

また聞けそうなら聞いてみることにするー。」

うん、ギルドに聞きに行ってもたぶんよくわからないことになりそうだもんね…

機会があつたらお客様に聞いてみよつと。

68 職業（クラス）選択の自由？（後書き）

少し訂正しました

69 今日は特別？

今日もいつも通り目が覚めて、いつも通りの朝が始まった。
窓を少し開けると、さわやかな風が感じられる。
んー、今日もいい天気になりそうだね。

服を着替えて下に降りると、ちょうどマリーさんも食堂に入ってきたところだった。

「おはようございますー！」

「おはよう、今日もバッチリみたいね。」

「バッチリです！」

「それじゃ、準備に取り掛かりましょ。」

「はい。」

布巾をしばらく厨房に入ると、クルトさんももう仕込みの真っ最中。

「おはようございますー！」

「ああ、おはよう。」

今日もミアは元気いっぱいだね。

しっかり頼むよ。」

「はい。」

返事しながら布巾をしばって、食堂に戻る。

テーブルとカウンターを布巾でふきあげれば、ここは準備完了だね。

「はい、じゃあとはわたしやっておくから、クルトの方を手伝ってきてね。」

残り少しをマリーさんに任せて、厨房に戻る。

クルトさんがあまり動かなくてすむように、お皿とかの準備を先にしちゃうかな？

そう思っただけで、いつものお皿を準備した。

「あ、ミア、今日はもう1つお皿を出してくれるかな。」

「もう1つ？」

「うん、その上の右側のところに片付けてあるやつにしようか。」

朝にこんなに食器並べることないのにどうしたんだろ？

今日は特別メニューかな？

「さて、そろそろお客様が降りてくるころだね。」

こっちはいいから、食堂の様子を見てきてくれるかな？」

「はい。お客様が来たら、運ぶ方に回るね。」

そう言っただけで食堂に戻ったけど、今日はおお客様があんまり来てないみたい？

いつも常連さんがこのくらいには来てる人が何人かいるのに少ないよね…

「あ、ミア、順番にお願いね。」

手が足りなくなったらわたしも回るから。」

「はひ…？」

いつもならマリーさんが運ぶ方に回することはほとんどないのに、お客様が少なそうなのにどうしたんだろ…

とりあえず、厨房に戻って順番に運んで行こうとしてびっくりした。いつものお皿に、いつもよりたくさん盛り付けてあって、さらに別のちよっと小さいお皿にも…

「今日はちょっと運ぶのが大変だろうけど、頼むよ。」

「クルトさん、これって…?!」

「ん?…あ、そうか。」

ミアはもしかして日食のことを覚えてないのかい?」

日食…って、とりあえずそれ以外もだけど覚えてないよ…

むーってなってるあたしに、クルトさんはとりあえず運んできてっ
て。

うん、お客様を待たせちゃだめだよね。

食堂まで運んでいくと、お客様もだいぶ増えてて、いつもと同じ感
じになってた。

あ、そっか、今日のメニューだと、あたしだけじゃきつと運ぶの間
に合わない…

マリーさんが言ってたのはこのことなんだね。

とにかく、できるところまではやらなきゃ!

結局、途中からマリーさんにも運ぶのを手伝ってもらって、何とか
配膳できた。

お客様も今日は少し遅い感じがするけど、みんなたくさんのご飯を
しっかり食べてる。

そして、いつもより少し時間がかかる感じで朝の食堂営業が終わり
になった。

「ふう、お疲れさま。」

わたしたちも早く食べてしまいましょ。」

「ああ、厨房の方に用意してあるよ。」

みんなで厨房に行くと、お客様に出したのと同じ料理、だから量もいつもと違ってすつごく多い。

食べきれるかな…？

「今日はどーしてこんなにたくさんご飯あるの？」

「そうだ、日食のことがミアはわからないんだっただね。」

今日は昼間に太陽が隠れる日なんだ。」

「ええっ？！それって…」

「心配することはないよ。毎年あることだから。」

でもでも、おひさまが隠れるって…

それに、このいっぱいのご飯との関係もわかんないし、って思ってたらマリーさんが説明してくれた。

「おひさまが隠れてるときはね、お仕事とかせずに、家でじっとしているのが習わしのよ。」

だから、今日はお昼ご飯を誰もつくらないから、朝にたくさん食べるのよ。」

「そーなんだ…じゃ、ちゃんと食べないとだめなんだね。」

お昼がないって思うと、食べれそうな気がしてくる…

でも、家でじっとしてると退屈そう。

「日食のときは何もしちゃだめなの？」

「そうね…仕事はしないけど、それ以外に特に何かしちゃだめってことはないわ。」

もちろん緊急のときや、休んでられないような仕事する人もいる

わよ。

衛兵もそうよね。」

そっか…衛兵さんが休んだるときに何かあったら街は大変だもんね。それじゃ何でお仕事休んだろ…？

「別に夜にお仕事する人もいるから、お日様隠れててもお仕事してもいいと思うのに。」

「なるほど、ミアの言うことはもつともだね。」

「だけど、これにはちよつと理由があつてね。」

実は日食は神々の争いのときに始めて起つたと言われているんだ。

「

「ほへ…神さまがしたのかな？」

「そうかもしれないね。」

あるとき、昼間に力が強くなる光の神に対抗するために、闇の神が月に頼んで太陽を隠したんだそうだよ。

そうして昼間でも夜のように闇の力が強まるようにしたそうだよ。」

「じゃあ、闇の神さまがどんどん強くなつちゃうの？」

「ところが、月はあまり長い間、太陽を隠していることができなかったみたいで、次第に太陽が見えるようになってしまったんだ。」

そうすると今度は、日食の間、しっかりと力を蓄えた光の神が有利になったって言われているんだよ。

その逸話から、闇の神の陣営に属した者たちにとっては、日食中はとても神聖なものとしてその一時を過ごし、光の神の陣営に属した者たちは、日食が明けるまで力を蓄えるという意味で、その一時を安らかに過ごすようになったということなんだよ。」

「ふーん…」

何だかすごいお話だよね…お月様動かしちゃうなんて。

とにかくゆっくり過ごしてればいいみたいだし、それまでにご飯食

べちゃわないとね。

「あら、ミア、あんまり急いで食べると……」

「うぐっ……」

「ほら、のどに詰まっちゃったじゃない。

はい、これゆっくり飲んで……」

マリーさんにお水をもらって、ほっと一息。

はー…急いでもちゃんと落ち着いて食べないとダメだね…

69 今日は特別？（後書き）

いつも読んでいただいております。

7月から初めて、2ヶ月ちよつと、昨日でユニークアクセスが2000を突破していました。本当にありがとうございます。

これからもマイペースなお話になると思いますが、お付き合いいただければ幸いです！

70 夜みたいな昼に来たのは

ご飯を食べて、片付けしてしまってから、お客様の部屋を全部回って、明かりの確認。

夜みたいに暗くなるみたいだから、ないと困るみたい。

マリーさんとクルトさんと3人でお泊まりされてる部屋を手分けして回ってく。

あたしも2つ回ったけど、どっちの部屋にもちゃんと明かりが灯ってた。

「さて、それじゃしばらく休むとしようか。

ミアはどうする？」

「んー…部屋でお休みします。」

「そうか、私もマリーも、下の部屋にいるから、もし何かあったら来てくれればいいからね。」

夜の食堂の準備の前にはまた明るくなるから、いつもくらいの時間にまた準備を頼むよ。」

マリーさんとクルトさんはそのまま、階段を降りて行ったから、あたしは廊下の一番奥の自分の部屋に戻ることにした。

窓を開けてみたけど、まだ全然暗くなってる。

でも、いつもより街は静かな気がする。

もう出歩いてる人も少なそう。

それにしても、何したらいいのかな…

部屋でじっとしてるのもつまんないよね。

っていつてもあたしの部屋って、何にもない。

あ…本とかあったらよかったのかなー。

こないだ連れてってもらったミルファム教会は本がたくさんあったよね…

そんなことをぼーっと考えてたら、何となく外が暗くなってきたみたい。

窓から外を覗いてみると、空の下の方が夕方みたいで、上の方がぼんやり暗くなってきた。

「うわあ…何だか不思議な空…」

ずっと見てると、ほんとにゆっくりだけど、暗くなっていつてるみたい。

しばらくその不思議な景色を見てたんだけど、急に声をかけられてびっくりした。

「にゃー。」

「ひえっ…ってネコくん？」

ネコくんは屋根からぴょんと跳んで、窓から入ってきた。そのままベッドの上で丸くなってる…

何だか自分の部屋みたい？

「ま、いつか。」

一人で何しようか困ってたところだし。」

窓を閉めて、デユラブライト《持続光》の魔法を使う。

あたしの部屋は、魔法の練習も兼ねて、明かりは魔法でつけるようにしてるんだ。

小さな石に明かりを灯せば、暗くしたいときも箱の中にしまったりすればいいから、使いやすいんだよね。

「さつて、ネコくん…って？」

魔法をかけた石をテーブルに置いて、ベッドの方を振り返ると、何かネコくん、寝てる…？

遊びにきてくれたんじゃないの？！

「勝手にきてくつろぐだけなんて、ちよつとずるいよー。」

ベッドの端に座つてネコくんに声をかけたら、耳だけがぴくぴく動いたけど、丸くなったまんまだし。

もー、しよーがないなー…

ネコくんと一緒に、ベッドにごろんと寝転んで、ネコくみをなでると、最初ちよつと顔をこつち向けたけど、すぐに目を細めてしまった。

たぶん飼い猫じゃないだろうけど…毛並つやつやさらさらだ…

もしかしてあたしのとこみたいに、いろいろ遊びに行ったりしてるのかな？

そうやって、ネコくんの毛並を楽しみながら、あたしも何だか眠くなつてきてただけど、急にネコくんが動いたから目が覚めちゃった。

ネコくんは窓のどこまで歩いて行つてこつち向いてる。

「外に出るの？」

「にゃ。」

帰っちゃうんだ…残念。

窓を開けると、入ってきたときみたいにぴょんと跳ねて、器用に窓辺に着地した。

そのまま屋根の上にて、真上を見上げて、またあたしの方を向いた。

「にゃ。」

「ん？どうしたの？」

上を見たけど、空が真っ暗になってて…あ、星が見えてる！
ほんとにお日様隠れちゃったんだ。

「すごいねー！

星まで見えるなんて…」

「にゃっ！」

空に見とれてたら、ネコくんがまた鳴いた。

今度は器用に右手で手招きしてる。

屋根に出てこいってこと？

暗いし、ちょっと危ない気がするけど、ネコくんはじっとこっち見てるし…

そっか、明かりを持ってくればいいんだ。

「ちょっとだけ待ってね。

明かりを持ってくるから。」

「にゃにゃー。」

あれ、今度は首を横に振ってる…

何かネコくんとお話できてる…よね？

「明かりはだめなの？

じゃ、ちょっと目が慣れるまで待ってね。」

今まで部屋の中ちよつと明るかったから、急に暗いところは見えな
いんだよね。

光ってる石を箱の中に入れて、窓辺に戻ると、ネコくんはまだちゃ
んと屋根の上に来てくれた。

そのままちよつとだけ待っていると、暗いけどだんだんと屋根の様子
とかが見えてくる。

これならいけるかな？

窓枠に足をかけて、屋根の上にゆっくり降りる。

あんまり勢いよく降りたら音がして、マリーさんたちがびっくりし
ちゃうもんね。

ネコくんのとこまで行って、しずかにしゃがみこむ。

「おまたせ。

次はどうしたらいいの？」

「にゃっ。」

また上を見るネコくん。

そんなに変わらないと思うけど…

そう思つて見上げたあたしは、びっくりしちゃって、そのままぺた
んと座っちゃった。

「何あれ…ゆらゆらしてる…」

頭の上の方で見えたのは、白いもやつとしたものがあつて、その真
ん中にくつきりと黒い円盤みたいなもの。

部屋の中からだと見えないとこに、こんなものがあつたなんて…

「ネ、ネコくん…これ見せてくれようとしてたの…？」
「にゃー。」

上を見ながら声をかけたけど、ネコくんは返事してくれた。
あれが隠されたお日様…だよなきっと。

その神秘的な空を、あたしは屋根の上であおむけになって見てた。
どうしてかわからないけど、心が研ぎ澄まされていくような感じが
する…

「にゃ。」

また不意にネコくんが鳴いた。

よく見ると、しろいもやもやが、かたよってきてる気がする。

って思った瞬間、黒い円盤の端っこ、もやもやが増えてきてたところ
が急に強く光った。

「ひゃう、まぶし…」

目がくらんで、光から目をそらして目をつむる。

何かちよつとちかちかするけど、だいじょぶだよな。

ゆっくり目を開けると、少しずつ光が増えてきてるみたい。

お日様、出てくるんだね。

「すごいねー、こんなの初めて見たよー。

ってあれ、ネコくん？」

周りを見てもネコくんはいないみたいだった。

どこ行っちゃったんだろ？

帰っちゃったのかな…

んー…まあ、お礼は次のときでもいいよね。

そういえば、夜の準備もあるんだっけ…

とりあえず落ちないように部屋に戻って、ちよつと休憩したら準備

に行こうかな。

だんだん明るくなってきた、さっきとは違うけど力がわいてくるみたいなのがする！

夜もきつと、お客様たちおなかペコペコでくるよね。

忙しくなりそうだし、しっかり準備しなきゃね！

71 お客様の秘密 その1

今日は初めて見るお客様が来た。

夜の食堂の準備をそろそろしようかなってくらいの時間に、5人組の冒険者さんたちが来たんだ。

そのうち2人はフードの付いたマントを着てる。

片っぱの人は、何かおっきなものを背負ってるのかな？

「いらつしやいませ、お泊まりですか？」

「ああ、できれば2部屋頼みたいんだが…」

「少し待っててくださいね。」

マリーさんが厨房の方に行ってたから、急いで呼びに行こうとしたんだけど、扉のところで戻ってくるマリーさんとぶつかりそうになっちゃった。

「きゃう、ごめんなさい！」

「大丈夫？わたしもよく見てなかったわ。」

あら、お客様がいらつしやったから、呼びに来てくれたのね。」

「うん、お泊まりで2部屋使いたいって…」

「わかったわ、あとはわたしがやるから、ミアは部屋の準備の方をお願いね。」

奥の2つ、隣り合わせのところね。」

そう言うマリーさんはお客様の方に向かった。

あたしはそのまま2階に上がってお部屋の準備に。

「お待たせしました。」

それでは2部屋で用意させていただきますね。」

「ああ、それで…」

何かいろいろ相談してたみたいだけど、上にあがっちゃうとあんまり聞こえないんだよね。

とにかく2部屋だし、急いで準備しなきゃ。

準備が終わって階段を降りてくると、お客様たちはテーブルについてた。

やっぱりちょっと時間がかっちゃったかな…お待たせしちゃったみたいだね。

フードをかぶってた人たちも、フードを脱いでお茶してた。

「すみません、お待たせしました。」

お部屋の準備できました。」

「ミア、お客様のご案内もお願いするわ。」

「はい、それではお部屋に案内いたします。」

こちらへどうぞ。」

お客様をお部屋まで案内してくと、男の人3人と女の人2人に分かれて部屋に入っていく。

鍵を渡して戻ろうとしたら、マントを着てるお姉さんに声をかけられた。

「あの…夜に少し宿を出たいのですが…よろしいですか？」

「夜っていうと…ご飯のときとかでしょうか？」

「いえ、それよりも遅くに、ですが…」

んー…前にフェリックスさんたちと流れ星見に行ったときは普通にお出かけしたけど…

ちゃんと聞いてきた方がいいよね。

「すみません、ちょっと聞いてきます。

待っててください。」

「はい、それではお願いします。」

お辞儀して下に向かってるときに、何かちょっと気になった。

んー、何だろ？

とにかく、急いでマリーさんに聞いてみようと思って、階段の途中からマリーさんと呼んでみた。

「マリーさん！」

「ごくろうさま、あとは食堂の準備をしましょう。」

「あ、えつとね、お客様が夜に、ご飯の後でお外に出られるかって

……」

「ん？あ……そうね、出るときに戻ったときに声をかけてくれればいいって伝えておいて。」

「はい。」

そのままお客様のお部屋に向かう。

コンコン、とノックすると、さっきのお姉さんが出てきた。

「さっきのことですが、お出かけするときと、戻ってこられたときに声をかけていただければだいじょうぶです。」

「そう、ありがとう。」

「それではごゆっくりです。」

そういってお辞儀して戻ろうとしたら、お姉さんがまた声をかけてきた。

「あの…わたしのこと…あ、いえ、ごめんなさい。」

「はひ…？」

「ごめんなさい、お仕事の邪魔をしてしまつて。

それでは少し休ませていただきますね。」

お姉さんはそういつて扉を閉めちゃつた。

どうしたんだろ…？

そいえばまた何か気になつたような…

結局何が気になつたのかはよくわかんないまま、食堂の準備も終わつて、そのまま夜の食堂の営業が始まつた。

今日もいつも通りのにぎわいだつただけど、ちよつと落ち着いたところでマリーさんがあたしを呼んだ。

「ちよつと運ぶの手伝つてくれる？」

「ふえ？」

「今日いらつしゃつたお泊まりのお客様、お部屋でお食事したいつてことだから、上まで運ばなきゃいけないのよ。」

「そなんだ、でも食堂はだいじよぶなの？」

あたし1人でも運べるよ？」

「まあ、2人でさつと行きましょ。」

マリーさんが3人分、あたしが2人分を持つて2階に上がる。

あたしはさっきのお姉さんがいる部屋に持つていくことになつた。

コンコン、とノックすると返事が返つてきた。

「お食事をお持ちしました。」

「はい、すぐ開けるからちよつと待つてね。」

かちやかちやつと鍵を開ける音が聞こえて、扉が開いた。

出てきてくれたのはさっきのお姉さんじゃなく、もう1人のショートカットのお姉さんだった。

「ありがとう、わざわざ悪いねー。」

「それじゃテーブルまで運んでくれる？」

「はい、あ、扉ありがとうございます。」

お姉さんが扉を押さえてくれてるから、そのまま中に入れてもらってテーブルにトレーを置く。

横に座ってたさっきのお姉さんも、ありがとうって言うてくれた。

「それでは、お食事がすみましたら廊下の方にトレーを出しておいてくださいね。」

「ありがとうね。」

「キミ、名前は何て言うの？」

「ふえ……えと、ミアです。」

「そっか、ミアちゃんは普通に接してくれるんだね。」

「はひ？」

「じゃ、食べたらトレー出しておくからよろしくね。」

「あ、はい、ごゆっくりです。」

何だかよくわかんないけど、下もあんまり空けてられないし、2人にお辞儀して部屋を出た。

「マリーさんはもう降りちゃったかな？」

「食堂が終わるまではまだ時間がありそうだし、早く戻らなきゃね！」

72 お客様の秘密 その2

夜の食堂も落ち着いて、お客様もだいぶ減ってきたところでマリィさんに上の食器を片づけてきてほしいってお願いされた。

2階に上がると、廊下にトレイが出してある。

丁寧にお皿とトレイを種類ごとに重ねてあったから、回収も楽にできると思ったんだけど、奥の部屋の方はまだトレイが出てなかった。

あとでもう一度見にこよくなつて思ったそのとき、扉が開いて、ショートカットのお姉さんがトレイを持って出てきてくれた。

「あ、ミアちゃん、ちょうどよかった。

これ、お願いね。

あと、ちよつといいかな?」

「はひ?」

「まだ仕事もあるんだと思うけど、仕事が終わったらうちの部屋に寄ってくれないかな?」

お願いしたいことがあるんだけど。」

「お願い、ですか?」

何だろ?あとでじゃないとダメなのかな?

お姉さん、両手を合わせてお願いしてるし、お茶の時間にいけばいいじゃぶかな。

「うん、無理なら無理で構わないから、あとでお願い。」

「んー、わかりました。

片付けとかもあるからまだしばらくかかりますが、それでもいいですか?」

「あ、ありがとう!」

それじゃ待つてるね。」

お姉さんからトレーを受け取って、厨房に運ぶ。
食堂を通ったときに結構お客様がいなくなって片付けるものが増えるのも見えだし、急いで回収に戻らなきゃね。

何度か往復しているうちに、お客様はみんななくなってた。

あとは食堂と厨房のお片付けだけだから、あたしはいつも通り水場で洗い物。

途中からマリーさんも手伝いに入ってくれた。

「そだった…マリーさん、さっき上のお皿とか片付けるときに、お客様に片付け終わってからお願いしたいことがって言われたんだけど…」

「あら、何かしら？」

「わかんない、終わったら部屋に寄ってほしいって言われたの。」

「ふーん…それじゃあとで行ってみるわね。」

「あ…もしかしたらあたしが呼ばれたのかも…」

マリーさんはちょっと考えて、とりあえず2人で行ってみようかってことになった。

どうなるかわからないから、今日は終わった後にお茶の時間はとらないことに…

ちゃんと誰に用事なのか確認しとけばよかったね…

とにかく無事片付けも終わって、マリーさんとお客様のお部屋を訪ねることになった。

「でも、終わってからでも来てほしいってどういう用事なのかな？」
「何かしらね。」

まあ、考えるよりお客様に聞いてみましょうか。」

マリーさんが扉をノックすると、中から返事が聞こえた。
何かドキドキしてきた…

「はいはい、今開けるね。」

この声は、ショートカットのお姉さんの方かな？

扉が開いて、出てきたのはやっぱりショートカットのお姉さんの方だった。

マリーさんを見てちょっとびっくりしたみたいだけど…

「あー、すみません、女将さんにも来てもらっちゃって。

ミアちゃんにお願いできればって思ってたんだけど…

ちょっと入ってもらっていいですか？」

あれ、やっぱりあたしに用事だったのかな…

マリーさんと顔を見合せて、とりあえず中に入れてもらった。

「女将さんにはうちのリーダーが話したと思うんですけど、レイアは…あ、この子は、鱗妖なんですよ。」

りんよう…？ショートカットのお姉さんは、もう1人のお姉さん…
レイアさん？を指差してそう言った。

マリーさんの方を見たんだけど、あとでねって言われちゃった。
そのとき、ショートカットのお姉さんがほんと手を叩いた。

「そっか、ミアちゃん知らなかったんだね。

どうりであんまり反応なかったんだ。」

「ほへ？」

「レイアは、妖魔族の中でも、水に親しい種族の鱗妖なの。
だから、耳のところにヒレがあるでしょ。」

そう言われて、レイアさんの耳のところをよく見てみると、確かに魚のヒレみたいになってる。

初めて見たけど、何だかきれいな飾りみたい…

「うん、やつぱりミアちゃんなら大丈夫そうだよ。」

「そうですね。」

「えっと…話が見えてこないんだけど…」

「あ、すみません、実はレイアが水浴びしたいんだけど、昼間は他の人の目が気になるから…」

それで、夜ならって思ったんだけど、ミアちゃんに案内してもらえないかなって思ってた。」

そっか、だからあたしに終わってから来てほしいって言ってたんだ。マリーさんは、しばらく考えてたけど、兄さんの紹介だし…ってつぶやいて、あたしに聞いてくれた。

「せっかくのご指名だし、ミアが行ってきてくれる？」

「うん、行きたいな。」

「それじゃ、暗いし気をつけて行くのよ。」

お2人の準備ができたなら、食堂に来てちょうだい。」

「はい。」

そう言うとマリーさんは下に降りて行った。

2人とも、マリーさんにお礼を言って、準備に取り掛かっている。

あたしは廊下で待つてることにしたんだけど、すぐに2人は出てきてくれた。

「ごめんね、お待たせ。」

「よろしく願いますね。」

あまりにつれしそうに言われたから、あたしも何だかうれしくなっちゃた。

「こちらこそよろしくです。

レイアさんと…」

「あ、ごめん、まだ名前言ってなかったよね。

わたしはエステルだよ。」

そういつて手を握られてぶんぶんとちよつとおっきな握手。

とりあえずあんまり遅くなると困るからみんなで食堂に降りてった。

「準備できたみたいね。

ミア、鍵を渡しておくから、帰ったらわたしたちの部屋に返しにきてね。」

「はい、いつてきまーす。」

マリーさんのお見送りで、エステルさんとレイアさんと3人で夜の街中へ出発〜！

73 お客様の秘密 その3

もうだいぶ遅い時間だけど、大通りまで出ると、まだ明るいお店があつたりもする。

昼間に比べるとだいぶ人は少ないけど、人通りもあるんだよね。

そういえば、エステルさんは普通の服だけどレイアさんは来たときと同じマントを着てフードをかぶってきてる。

もしかして、今までも妖魔族の人が来てたこともあつたのかな…？

「そういえば、ミアちゃんって妖魔族に会つのは初めて？」

「え、あ、はい…たぶん。」

ちようど考えてたところにエステルさんの質問が来てちよつとびっくり。

「たぶんって？」

「だって、フードとかかぶってたらかんないし、レイアさんがフードをぬいでたあとも、あたし気付かなかつたから…」

「なるほどね…じゃあ、レイア見てどう思う？」

「ふえ？…えーっと、きれいです！」

そのとき、なぜか2人の足が止まっちゃって、次の瞬間、レイアさんがわたたして、エステルさんが笑いだした…

あれ？何か変なこと言つたかな…

「ほらほら、レイア、落ち着いて…ぷぷぷ。」

それにしても、ミアちゃんサイコーだわ。」

「は、はひ…ありがとうございます…？」

何だかほめられたのかな…？

エスリアさんが、わたたしてゐるレイアさんをうしろからぎゅってして、動きを止めたら、ようやくレイアさんも落ち着いたみたい。人通りが減ってるからか、あんまりあたしたちのことを気にする人もいなかったみたいで、また川に向かって歩きだした。

「こっちの大陸だとね、やっぱり妖魔族は少ないから目立つのよ。特に内陸に行けばいくほどね。」

人によつてはあからさまに訝しげな視線をぶつけてくる人とかもいるから、レイアも結構気にしちゃってて。

そこにミアちゃんのあの感想だったから、ね。

ほんつとにレイアってばかわいいわー。」

「取り乱してしまつてすみません…。」

そつか…大陸ごとに分かれちゃったから、あんまり見ることもなかっただね。

でも、普通に仲良くできそうなのに、何でそんな風にみる人がいるのかな…

よくわかんないや。

「宿とかもだいぶ選んで泊まつたりしてゐるんだけどね。」

あ、でも白枝亭はアンフィットにいたときにお世話になつた人が進めてくれたんだよね。」

「そーだつたんですか。」

それから、いろいろお話ししながら3人で広場を越えて進んでつた。エステルさんたちはアンフィット大陸でグループを組んでただけど、こっちのロシア大陸の遺跡についての文献について調べるために渡ってきたんだって。

何だかすっごい大冒険だよね。

そうこうしているうちに、川辺についた。
このあたりは割と浅くて、暑いときなんかは街の人たちもたくさん水浴びに来るところだけど、さすがにこんなに夜遅くには誰もいない。

「川下のほうに行けば、もうちょっと深いところもあるんです。そっちの方がいいですか？」

「ううん、ここで十分です。」

「ありがとうございます。」

レイアさんがそう言ったので、エステルさんもここにしようって。あたしもエステルさんも川辺で待ってるだけなんだけど、レイアさんはマントを脱いで、服の裾を持ち上げて川に入ろうとしている。両手がふさがってるから、明かりが持てないね…

「あー、レイアさん、明かりいりますか？」

「少しは見えるので大丈夫ですよ。」

「それに今は持てませんから。」

そういうとレイアさんはそのまま川に入っていく。

川の底って、ぐらぐらしてる石とかあるから、踏んじゃうとこけそうになったりするんだよね。

なんて考えてたら、エステルさんが耳打ちしてきた。

「妖魔族はね、闇に属する種族だから、暗いところでも割と周りが見えてるんだよ。」

「ほへー…すごいですねー。」

「うん、でもきつと今からもっとびっくりするかもよ?」

エステルさんが指さす先では、レイアさんが両手を組んで何か祈ってるような感じだった。

そして、次の瞬間、あたしは自分の目がおかしくなったのかと思った。

レイアさんの足が…長いお魚の尻尾みたいになっちゃったから！でも、何だかとてもきれいで、思わず見とれちゃう…

「びっくりしたでしょ？」

鱗妖は2つの姿を持つてるの。

今の姿だと、水の中でもスイスイなの。

この姿が本来の姿みたいだから、足のまま長い間いると疲れるんだって。

だから、水がたくさんあるところだと水浴びしたくてしょうがないんだよ。」

「そっか…大変なんですね…」

「うん、でもレイアにもゆっくりしてもらいたいからね。」

レイアさんはしばらく川の流れに身をゆだねてたけど、また両手を組んで祈ってる。

そしたら、今度はまた足に戻っちゃった。

川から上がってきたレイアさんに、エステルさんが持ってきてた布を渡した。

レイアさんは受け取った布で足をふいてく。

「すみません、ずいぶんお待たせしてしまいました。」

「わたしはいいよー。」

っていうか、誘わなかったらひどいんだからね。」

「わかっていますよ、ありがとうございます、エステル。」

ミアちゃんもありがとうございます。」

「あたしも誘ってもらえてうれしかったです。」

ありがとうございます！」

いろんなお話も聞けたし、レイアさんのきれいな姿も見せてもらえたからよかったなと思って思ったんだけど、レイアさんはまた、わたわたし始めた…

そしてまたエステルさんがぎゅってして落ち着かせてる。

何だか最初はレイアさんの方がお姉さんっぽいつて思ったけど、エステルさんの方がお姉さんなのかもしれないね。

目的も無事達成したから、あたしたちは宿に戻ることにした。

帰りにエステルさんが、明日、もう1人の妖魔族の方も紹介してくれるって約束してくれた。

その人は翼族っていつて、その名前の通り翼を持ってるんだって。

仲良くしてもらえるかな？してもらえるといいな♪

74 旅立ちの日に

レイアさんたちは、今朝の朝食もお部屋でとることになってる。ちよつと遅くていいからってことで、食堂の方が落ち着いてから運ぶことにさせてもらったんだ。ちなみに今日も食堂はいつも通りにぎわってる。

だいぶ落ち着いてきたところで、マリーさんと一緒にお食事を持って2階に上がる。

今回もマリーさんが3つ持ってくれているので、あたしは自動的にレイアさんとエステルさんのお部屋に行くことになった。扉をノックするとエステルさんの元気な返事が返ってきた。

「はいはい、今開けるねー。」

少し下がって待つてると、勢いよく扉が開いて、エステルさんが顔をのぞかせた。

あたしの持つてるトレーを見てすっごくにこにこしてる。

「やった、ごっはん〜」

「ミアちゃんありがとね〜」

「中まで持つていきますね。」

エステルさん、何か鼻歌歌って踊りながらついてくる…

レイアさん、ため息ついてるけど…

とにかくテーブルにトレーを置いた。

「ん〜、おっいしっそ〜」

「エステル、落ち着きなさい…」

「だって、お腹すいたんだもん。」

こんなにうれしそうだと、何だかあたしまでうれしくなっちゃうね。ご飯の邪魔しちゃだめだし、下もまだお仕事あるからお辞儀して帰ろうとしたんだけど、エステルさんが話しかけてきた。

「にあひゃん、あひよれ…」

「エステル、ご飯食べながらしゃべらないで…」

「もごもぐ…んぐ…ふひい…」

あ、えとねミアちゃんあとでうちの部屋寄ってね。

昨日行つてた子紹介するから。」

うん、それはわかったけど…エステルさん…ちょっとすごかったよ…食堂に降りるとお客様も減つてて、そのままあたしも片付けに回る。食器を水場に運んで食堂に戻って、っていうのを何度か繰り返しているうちに、お客様はみんないなくなつてた。

「だいたい終わったわね。」

ミア、上もたぶん食事終わってるだろうし、食器回収頼んでいい？」

「はい、いつてきます。」

階段を上がつて見てみると、今朝はエステルさんとレイアさんの方だけトレーが出てる。

ついでに、扉も開きっぱなしだった。

トレーを回収しようとしたら、中からエステルさんの声が。

「あ、きたきた。」

ミアちゃんちょっとだけいい？

エミーを紹介してあげる。」

「ふえ？」

「昨日言ってた翼妖の子だよ。」

「もう、エステルってば……ミアちゃんまだ仕事中ですよ？」

それに、エメットはその呼ばれ方あんまり好きじゃないのに……」

レイアさんの声をよそに、エステルさんは隣の部屋の扉をノックしてる。

いいのかな……

「わたしだよー、開ーけーてー。」

「エステル、周りに迷惑だからもうちょっと声を押さえて。」

いつの間にかレイアさんも隣に立ってた。

ちよつと間があつて、扉が小さく開いて、昨日見たリーダーの男の人が顔を出した。

「ねね、エミー呼んでよ。」

「……宿の人もいるじゃないか、それにその呼び方はやめてやれ。」

「ミアちゃんなら大丈夫よ。」

昨日もレイアの水浴びに付き合ってもらってるし。」

男の人はあたしの方を見て、ほお……って言って、エステルさんをじつと見てる。

そして、扉を大きく開けて中を指差してる。

「ありがと、ミアちゃんおいで。」

「は、はひ……」

中に入ると、テーブルにはきっちりと重ねられたトレーがあつて、その周りで荷物をまとめてるお兄さんと、背中に大きな翼のあるお

兄さん、っていうか男の子？がいた。
エステルさんが、とてとてと走って行って、翼の生えた男の子を連れてくる。

「何すんだよ！」

「もー、エミーったら怒らないの。」

「こっちこっち、ミアちゃんにごあいさつしてね。」

「エミーって呼ぶなって言ってるだろ……」

で、ミアちゃんって何だよ。」

うー……だいじょぶかな……

何だか忙しそうだし……

「この宿の子だよ。」

レイアもお世話になったんだ。

ミアちゃん、この子がエミーだよ。」

「あの……えと……はう……」

お、おはよーございます！」

……

……何でこんなに静かになるんだろ……

……って思ったら、目の前の翼のある男の子……エメット……くん？がちよ
っと笑った。

それにつられてなのかな、周りのみんなも何となく笑ってる。

ちよっと恥ずかしい……

「あんた、おもしろいやつだな。」

「ちよっと、エミーってばミアちゃんに失礼だよ。」

はい、謝って。」

「何でだよ、おもしろいからおもしろいって言うただけじゃん。」

あと、俺はエメットだ、女みたいな呼び方するな！
「そこまでだ。」

後ろからリーダーさんの（さっきよりもちょっと低い…）声が聞こえた瞬間、エステルさんもエメットくんも、ピタッと動きを止めた。リーダーさんがゆっくりと2人に近づいてく。

「ようし、ちゃんと学習してるな？」

「はい……」

「レイアがこれだけ普通にいられるってことは、このお嬢さんではきた人だってことは間違いない。

が…仮にも仕事中のやつを捕まえてこの騒動はないわな。」

エステルさんとエメットくんが、そろって首を縦にぶんぶん振ってる。

リーダーさんは2人の後ろに回って、2人の首をつかんでぐっと押し下げた。

「お嬢さん、すまねえな、うちのやつらが迷惑かけてしまつて。

まあ、エステルもこっちに來てからあんまりレイアやエメットにふつうに接してもらえることがなかったから嬉しかったんだと思うが、こいつはよく暴走するもんでな…」

「いえ、そんな…あたしも昨日誘ってもらつて嬉しかったですから…」

「エメットもこんな口の利き方してるが、割と繊細なやつでな。

とにかく、仕事の邪魔しちまつて申し訳ない。

お前らもちゃんと謝れ。」

「「ごめんなさい……」」

リーダーさんすごい…

思わずあたしも固まっちゃったんだけど、レイアさんが肩をポンポンと叩いてくれて、ちよつとほつとしたら、まだ頭下げてる2人が目に入った。

もうリーダーさんは首を放してたんだけど…

「えと、えとぜんぜんだいじょうぶですから。」

「うありがとゝみあちゃゝん！」

エステルさんがちよつと涙目になつてた…

エメットくんも荷物整理に戻つてる。

そして、リーダーさんはそろえたトレーを渡してくれた。

「これを取りにきてたんだろ？出すのが遅れてしまったな。」

「あ、ありがとーございます。」

それじゃ持つていきますね。」

「ああ。」

そうだ、エステルもレイアも準備急げよ。」

みなさんにお辞儀をして、とりあえずトレーを引き上げる。

ずいぶん長居しちやつた気がする…急がなきゃ。

水場の片付けが終わつて、食堂でちよつと休んでたら、エステルさんたちが降りてきた。

レイアさんとエメットくんは来たときと同じフード付きのマントを着てる。

きつと出発するんだね。

カウンターにいるマリーさんに、あいさつしてるみたい。

ぼーっと座つてたら、そのままみなさん、あたしのとこまで来てくれたから、あわてて立つてお辞儀する。

「世話になったな。」

「帰りにまた寄らせてもらうことにしたから、そのときはこいつらともどもまたよろしく頼む。」

「ふえ…は、はひ、ありがとーございますー!」

エステルさんとレイアさんが前に出てきて握手してくれた。

「ミアちゃん、ちょっといつてくるね。」

「また帰りにね。」

「ありがとーございました。」

「帰りに寄ったときも、ぜひ夜の散歩に付き合ってくださいね。」

「マリーさんもカウンターから出てきてたので、玄関でみなさんをお見送りする。」

みなさんの冒険がうまくいくように願いを込めて。

「ありがとーございました!」
「いってらっしゃいですー!」

75 ギルドにおつかい

今日は冒険者ギルドにお使いにきてる。

白枝亭に依頼の申し込みがたまってきたから、まとめて登録に来たんだ。

今日はそんなに混んでないし、せっかくだからリゼルさんのところに並ぼつと。

「次の方どうぞー。」

あ、ミアさん、こんにちは。」

「こんにちはー。」

今日も白枝亭に集まった依頼の方をお願いしに来たんです。」

「はい、それではお預かりしますね。」

少し待ってもらえればすぐ行けると思います。」

「よろしくですー。」

リゼルさんが奥に依頼状を持って行ってくれた。

奥に審査してくれる人がいるみたいなんだよね。

ちよつと時間がかかりそうだから、どんな依頼があるか見てみようかな。

あたしもできるものあつたりして…

うーん、いろいろあるね。

森に住み着いた魔獣を倒してくださいとか、王都までの護衛とか…

あ、これって…逃げだした植物を探しています。球形、緑に黒のしま模様…ってあれだよな…まだいたんだ…

こっちは…金属素材を探しています…ラルフさん…？

そんな感じでいろいろ見てたら後ろから急に声をかけられた。

「あれ、ミアちゃん？」

もしかして依頼受けるの？」

「はひ…？あ、ユーリさん。」

違うよー、うちにきてた依頼をお願いしにきたの。」

「そっか、結構じっくり見てるから、てっきり依頼探しかなって。」

受けれるのがあるかなって思ったのは思ったけど、ね…

あれ、ユーリさんは、依頼探しに来たのかな？

「ユーリさんは、もしかして依頼探し？」

「うん、前に植物の魔物の依頼受けたでしょ。」

「さっきそこに出てたよ。」

また逃げ出したのかな…」

「そうなの？！さすがにもう行かないわよ…」

あ、でもそのときの依頼者の研究仲間で、薬の研究してる人が薬草入手の依頼をよく出してるのよ。」

ほへ…薬の研究って何かすごそう。

どんな薬作るんだろ？

苦くない薬とか作れないのかな…

アルケミスト

「錬金術師たちは、それぞれにいろんな研究してるみたいなのよね。人によつては、自分で作ったもので戦ったりするような冒険者もいるみたいよ。」

「作ったもので…戦うの？」

苦い薬とか…？」

「ええっ？！…ふふふつ、まさかそんなことないと思うよ？」

もしかしてミアちゃん、よっぱど前の薬が苦かったのね。

あたしの作ったのは、薬草を煎じて作ったものだけど、錬金術師が作るのは、薬草だけじゃなくていろんなものを材料にするみたい。

薬っていつでも、ケガとか風邪を治したりするだけじゃないみたいだし。」

ますますどんなものを作ってるかわかんなくなってきた…

んー…あ、でも冒険者の人もいるってことは、もしかしたら白枝亭に泊まってる人にもいたのかもしれないよね。

これからも会う機会があるかもしれないし、もし会えたら聞いてみようかな…

「白枝亭のミアさん！」

「あれ、ミアちゃん呼ばれてるわよ。」

「はひっ？ちよっと思ってるね。」

リゼルさんが呼んでくれてたので、ちよっと思っただけでカウンターに急ぐ。

カウンターには、あたしが持ってきた書類がそろってる。

「お待たせしました。」

今回持ってきていただいた分はすべて受け付けたので、こちらで依頼に加えておきますね。

白枝亭でも掲示してもらえればと思います。」

「はい、よろしく願います。」

「あと、こちらの方は、ギルドの方からの依頼の分ですので、合わせて掲示してくださいね。」

「ありがとうございます。」

「今回はこれで全部ですね。」

お疲れさまでした。

またよろしく願いますね。」

リゼルさんが渡してくれた書類の束を受け取って、なくさないよう

に袋に入れてしまう。

そして、あいさつしてカウンターを離れて、ユーリさんのところに戻った。

「あ、ミアちゃん、大丈夫だった？」

「うん、全部受け付けてもらえたみたいです。」

「そっか、よかったね。」

この後、宿にすぐ戻っちゃう？」

「んと、あんまり混んでなくて早く終わっただけ……」

「じゃ、ちよつとだけ待っててくれる？」

あたしも1つ依頼受けてきたら戻るから、帰りにうちに寄ってくれないかな？」

今もさつきと同じくらいであんまり混んでないから、ユーリさんの
もすぐ終わるよね。

それなら時間もだいじょうぶなはず。

「うん、たぶんだいじょうぶ。」

「よかった、実はまた新しいフレーバーのお茶ができたの。」

少し持って帰ってクルトさんにも味見してもらってほしいなって
思ってる。」

「わーい、新作ー！」

「もちろん、ミアちゃんの感想も聞かせてね。」

それじゃちよつと受付だけしてくるから待っててね。」

ユーリさんはそういうと、カウンターの列に並んだんだけど、あつ
という間に順番がまわってきそうだね。

新作のお茶、どんなのかな…？

早く飲んでみたいなー」

76 代理見習い

お昼の後の片付けも終わって、どうしようかなって食堂で考えてたら、扉が開いて誰が入ってきた。

「ただいま。」

あ、ミアちゃん、マリーさんどこかな？」

「フェリックスさん、おかえりなさい。」

マリーさん、下に降りてます。

多分すぐ戻ってくると思うけど……」

「じゃあ、戻ってきたら、ラルフが来てくれって言ってたって伝えもらえるかな。」

「はい、わかりました。」

じゃ、ちょっと部屋戻ってるからっていつてフェリックスさんは上がってった。

ラルフさん、何か用事かな？」

あんまり遅いと、夜の準備もあるし、先に伝えに行った方がいいかな？」

マリーさんとラルフさんは、地下の倉庫で在庫の確認中なんだよね。やっぱり先に伝えに行こつと。

厨房の奥の階段を降りるとそこが倉庫の入り口。
上から声をかければいいよね。

「マリーさん。」

……

あれ？

「マリーさん！」

「ミアー？ちよっと待ってねー。」

あ、よかった、聞えたみたい。

すぐにマリーさん上がってきてくれた。

「どうしたの？」

「フェリックスさんが、ラルフさんが来てほしいって言ってたのを伝えてほしいって。」

「そう、ありがとう。」

ちよっと待っててくれる？」

そういうと、マリーさんまた倉庫に降りてった。

そしてすぐに戻ってきたんだけど、エプロンを外してる。

「クルトにも言ったんだけど、鍛冶屋さんに行ってくるわね。」

たぶん何もないと思うけど、一応カウンターに入っておいてもらえる？」

下はクルトだけでいけるって言ってたから。」

「はい、いってらっしゃいです。」

マリーさんを見送ったあと、カウンターに入ってたんだけど、しばらく誰もこなくてちよっと眠くなったりする。

ぼーっとしてたら、階段から誰か降りてくる音がした。

見てみるとフェリックスさんとレックスさんの2人が降りてきてる。

「あれ、ミアちゃんがカウンター？」

「マリーさん、さっきの伝言聞いて、お出かけです。」

「そっか、ちよっと俺たちもまた出てくるわ。」

「はい、いつてらっしゃいますー。」

フェリックスさんたちを見送ったら、またぼーとしちゃう。
マリーさん、普段ずっとカウンターに入ってたたりするけど、眠くなったりしないのかな…

待つてるだけじゃなくて、もしかして何かしてるのかな？

なんてこと考えてたら、玄関の扉が開いた。

お客様かな？って思ったら、酒屋のリユートさんだった。

「こんにちは…あ、いらっしゃいましたか。」

「こんにちは、どしたんですか？」

「注文されていたお酒を裏に届けてあるんですけど、返事がなかったもので…」

あ、そっか、クルトさんまだ倉庫にいるのかも。
急いで呼んでこなくちゃ。

「すみません、すぐにクルトさん呼んできます。」

「はい、それでは裏に回ってますね。」

「お願いしまーす！」

リユートさんに返事して、倉庫に急ぐ。

おっきな声で呼ばうとしたら、ちょうどクルトさんが上がってくる
ところだった。

「わふ…よかった。」

クルトさんあのね、今酒屋のリユートさんが、注文してた分を裏
に届けてくれてるの。」

「ん？あ、そうか、今日だった。」

すぐ行くよ、ありがとう。」

「じゃ、カウンターに戻ってますね。」

ふい、よかった。

それにしても、夜に食堂に来るお客様、お酒頼む人いっぱいいるよね。

前に飲んだの、おいしかった気がするけど、覚えてないんだよね…
何でみんな平気なのかな…

あたしもおっきくなったらちゃんと飲めるのかな？

そんなことを考えながら、またぼーっとしてたら、階段からパタパタと音がする。

見てみるとアリサさんが走って降りてきてる。

「あー、ミアちゃんー。」

魔法士ギルドでー、約束してたのにー、すっかり忘れてましたー。

遅くなるかもーってー、マリーさんに伝えてくださいー。」

「は、はひ…お気をつけていってらっしゃいます…」

そのままパタパタと走って、出て行っちゃった。

あんなに急いでるアリサさんは初めて見たかも…

あたし、こんなにボーっとしていいのかな…

何かやることなかったっけ…

夜の準備、ちよつとでもやっておこうかな？

っていつても、テーブルふいたりするくらいしかできないけど…

結局どうしようかってまよってる間に、マリーさんは戻ってきた。

「ただいま、ごめんね、休憩時間もらっちゃって。」

「あ、おかえりなさいー。」

マリーさんは、何か布にくるまれた長いものを両手で抱えてる。

何が入ってるんだろ…？

「ん…？どうしたの？ちょっと疲れた？

これだけ置いてきたら交代するから休憩してね。」

「う、ん…あ、でもだいじょぶだよ。」

何かお手伝いすることあったらするよー。」

「そうね…とりあえず置いてくるから。」

荷物を置いてマリーさんはすぐに戻ってきたから、報告だけすませ
ちゃう。

「じゃ、リックとレックスとアリサが出かけてて、アリサは戻るの
が遅くなるかもしれないのね。」

「ご苦労さま、慣れてなかったら疲れたんじゃない？」

クルトに、おやつ用意してもらってるから、奥で休んでらっしゃ
いな。」

「わーい、ありがとーです！」

厨房でクルトさんが果物を用意してくれてた。

クルトさんにお礼を言って食べてただけど…お手伝いするって言
ったのにおやつにつられちゃった気がする…

それにしても、あの荷物って何だったんだろ…何だかちょっと気にな
るな…

77 荷物の中身は何ですか？

「昼間の荷物？」

あれは剣なのよ…リックが気を使ってくれてね。」

今日も無事に食堂の営業も終わって、お茶で一息ついてるところで、
気になってたマリーさんの荷物のことを聞いてみた。
そしたらこんな意外な答えが返ってきたの。

「剣…？」

「そつ、わたしが冒険者だったころに使っていた剣を、リックに引き継いだのは知ってるわよね。」

冒険者を引退することに決めたときに、少しでもあの子たちの力になればって思ってたね。」

「ふーん…どうして冒険者やめちゃったの？」

尋ねると、マリーさんちょっと赤くなって、ふふふって笑ってクルトさんを見た。

クルトさんも落ち着いてお茶飲んでるみたいだけど、ちょっと耳が赤い…よね？

「まあ…いろいろあったのよ。」

「いろいろ？」

「そつ、いろいろ…ね。」

「えー、聞きたいよー！」

お願いしてみたんだけど、マリーさんはまた今度ねって…
むー…聞きたいな…

「そうそう、剣の話が途中だったわね。」

実はラルフとお父さんが協力して作ったものなのよ。」

「ラルフさんが？」

「そうなの。」

リックたちが材料を持ち込んで頼んでくれたの。」

何でフェリックスさんたちがマリーさんの剣を頼むんだろ？

…もしかしてマリーさん、冒険に行っちゃうのかな…？

それ、困る…

「マリーさん、どっか行っちゃうの?!」

「え?別にいけないわよ…」

あ…違いわ、別にこの剣は、冒険者になるためのものじゃないわよ。

何ていうのかな、一種の備えみたいなものよ。」

備えていっても何の備えなんだろう…

剣って…戦うことにしか使えないよね…

やっぱり何だか危ない気がするけど…

「最近、いろいろあるみたいでしょ。」

だから一応、何か身を守るためのものがあつた方がいいんじゃないかって考えてくれたみたいなんだけどね。

わたしが使ってた「無垢なる白」インセント・ホワイトっていう剣は、とても珍しい素材で作られていて、普通に使われているような鉄なんかよりも軽いものだったの。

それと同じ形で、できるだけ近いものを作ろうとしてくれて、いろいろと材料を探してくれたみたいなのよね。」

そうなんだ…よかった、マリーさんがどっか行っちゃうんじゃない

て。

フェリックスさんたちも、マリーさん想いなんだね。
何だか素敵な関係だよな！

「でも、使わずにすめば一番いいんだけどね。」

「あ…うん、そーだよな。」

前に聞いたときからも、タレイアに悪魔が来たことはないみたいだからちよつと忘れそうだったけど、増えてるんだよな…

タレイアが襲われたりしなければそれが一番いい、みんなが平和に過ごせるのが一番いいよね。

それにしても、マリーさんってどれくらい強かつたんだろ？

『プリマ・ホワイト白の舞姫』っていう名前でも知られてたみたいだし、ちよつと有名人っぽいよね…マリーさん自身はこの名前、あんまり好きじゃないみたいだけど。

「マリーさんって、フェリックスさんより強いのか？」

「ええっ?!急にどうしたのよ…」

「だって、フェリックスさんたちみんなマリーさんのこと尊敬してると思うし、レックスさんだってマリーさんのこと、すごい人みたいに言ってた気がするから。」

「さすがミアはうちでがんばってるだけあつて、人を見る目ができているみたいだね。」

びっくりしてるマリーさんをよそに、クルトさんが嬉しそうにそう言ってくれた。

がんばってるなんて言われると、ちよつと恥ずかしいけど、嬉しいな。

「まあ、マリーは純粹な戦士ファイターではなかったし、比べるのは難しいかもしれないね。」

「ほへ？」

「強さだけで尊敬されたわけじゃないんだと思うよ。」

「マリー、そんなに膨れなくても、ミアなら別にいいじゃないか。」

「

もーって言うって膨れてたマリーさんも、笑ってるクルトさんを見てふうっと息をついて、お茶をすすってる。

でも、にこにこしてマリーさんの方を見るクルトさんの視線に負けて、自分で言うわよって話し始めてくれた。

「わたしは魔法も使えないし、武器だってまともに練習したことなんてなかったの。」

兄たちとチャンバラみたいなのはしてたけどね…

だから、いざ冒険者になるときにどうしようかって思って、とりあえず最初は戦士として登録したの。一緒にいる間に、兄から剣の使い方なんかを教えてもらってたね。」

へー…それでもちゃんと冒険者してきたんだからすごいよね。

「ある程度、戦えるようになってきたところで、兄のいた冒険者のグループの人たちと一緒に連れて行ってもらえるようになったんだけど、そのグループに、舞踊士ダンサーがいたのよ。」

「舞踊士？」

「そう、その人に呪舞を教えてもらって、途中でわたしも舞踊士に変えたの。」

職業クラスって変えられるんだ…

途中で得意なことが変わっても平気だね。

あたしは変える必要もないと思うし、冒険するかどうかもわかんないけど…

「ま、そういうことで今日のお話はおしまいね。
遅くなる前に片付けちゃいましょう。」

「えー…」

マリーさんは、言うが早いか自分のカップを持って水場に行っちゃった…

何だか急いでる…？

前を見るとクルトさんが口に指を当てて、しーってしてる…あたしも口を押えてうなずいた。

「マリーが『白の舞姫』って呼ばれてるのは、舞踊士だったからなんだよ。」

でも、恥ずかしくてその話をしなくなかったんだと思うから、これは内緒だからね。

さ、片付けに行こうか。」

そっか…何で恥ずかしいかはよくわかんないけど、今日はこれ以上お話聞けないっぱいしお片付け行かなきゃね。

そいえば…ジユブって何だったんだろ？マリーさん教えてくれるかなー？

78 お呼ばれました その1

それは朝の食堂がちょうど終わったところだった。

玄関の扉がノックされて、上品な服装の人が入ってきた。

「失礼いたします。

私、ヴァルヴィック様の使いで来させていただきました。

ミア様はいらっしゃいますでしょうか？」

「はひ？あたしですか？」

ヴァルヴィックつてどこかで聞いたような気がするけど…

マリーさんの方を見ると、何だかちょっと困ったような顔してる。

誰だっけ…？

「マリー様、別に商売のことではありませんので、お気を悪くなさらないください。

今回も旦那様と一緒にアルフォンス様とメルンダ様がいらしておりまして、もしミア様にお時間をいただけるなら、お2人に会っていただければと思いますようお願いに上がった次第です。」

「あ…アルくとメリーちゃん…

そっか、ヴァルヴィックつて！」

「ミア、気づいてなかったのね…」

迷子になった2人に会ったのは、もうしばらく前のことだよね。ちよつと懐かしいな。

でも準備があるから、今は無理だよね…

「あの…今はちよつと無理なんです。

お昼からなら…マリーさん、いい？」

「ええ、ミアが2人に会いたいつて思うなら、行つてらっしゃい。」
「かしこまりました。」

お2人もお喜びになると思います。
それではお昼が終わった頃に、お迎えにあがりますので、どうぞ
よろしくお願いいたします。」

そういうと、その人は深々とお辞儀をして出て行つた。
何だかきつちりした人だったな……

「ま、心配ないかしらね。」

「ほへ？」

「んー…ちよつとね。」

いろいろとあるのよ、うちの実家も商人だから。

でも、ミアは心配せずに行つてきたらしいからね。

それじゃ、片付け終わつてないところを終わらせましょ。」

一時中断してた片付けを再開、つていつても食器は水場に引き上げ
であるから、こっちはマリーさんに任せて、あたしは食器を洗う方
に回る。

厨房に入ると、クルトさんはだいたひ片付け終わつて、あたしたち
のご飯の準備に取り掛かつてるところだった。

「遅くなりましたー。」

「いや、大丈夫だよ。」

私もこっちの準備が終わつたら手伝うから。」

「はい、でもできるだけがんばるね。」

そんなこんなで朝の片付けも終わり、そのあとはマリーさんとお部屋の掃除に。

そうこうしているうちに、お昼の準備、そして食堂営業と、あっという間に時間が過ぎていく。

お昼の食堂も終わって片付けもすんだところで、少し休憩することにした。

そろそろお迎えも来るころかな？って思ってたら、扉がノックされた。

入ってきたのは、朝も来たあの人。

「ミア様、お迎えにありがとうございました。」

「ご準備の方はよろしいでしょうか？」

「はい…あ、エプロンだけ置いてきますー！」

よく考えたらお出かけだから、エプロンは一応外していかなきゃね。外しながら階段に向かおうとしたら、マリーさんが声をかけてくれた。

「ミア、わたしが片付けておいてあげるわ。」

「ありがとですー！」

「それじゃ、気をつけて行ってらっしゃい。」

「行ってきまーす。」

マリーさんにエプロンを預けて、迎えの人について外に出る。そこでいきなりびっくりした…

「どうなさいましたか？」

「え…と、これ…乗るんですか…？」

目の前には馬車が来ていた。

しかも結構よさそうな感じの…こんなの見たことしかないよ…

迎えの人は、さも当たり前だって感じて馬車の扉を開けてくれているけど…

「はい、わざわざ来ていただくのに、歩いてもらうわけにはまいりませんので。」

「はう…」

いきなりちよつと尻込みしちゃったんだけど…

道を歩いてる人たちも何だかチラチラ見てるし…ちよつと恥ずかしい…

えーい、乗っちゃえ！

…中也イスがふかふかしてるし。

扉を閉めた迎えの人は、そのまま御車台に乗り込んだみたい。

「よろしいでしょうか、出発します。」

「は、はい。」

あたしの返事を確認して、馬車はゆっくり動き出した。

思ったほど揺れないのはいい馬車っぽいからなのかな…

そのまま大通りにでて、広場の方に進んでく。

何か不思議な感覚…歩いてるときとは違う感じがする。

馬車は広場を越えて、その先の高級な住宅とかが並んでる一画の方へ進んでいって、大きなお宿の前で止まった。

白枝亭みたいな冒険者の宿じゃなくて、お金持ちの人とかが使うようなところ…もちろん入ったことなんてないよ…

うー、緊張してきたよ…

心の準備をする間もなく、馬車の扉が開かれた。

「お手をどうぞ。」

差しのべられた手につかまって、馬車を降りる。
そしたら、宿の方からまた別の人が出てきたよ…

「ミア様、お待ちしておりました。」

さあ、こちらへ。

アルフォンス様とメリンダ様がお待ちです。」

あたし…こんなところに来てよかったのかな…

一体どうなるんだろ?! 何だか大変なことになってきたよー!

79 お呼ばれました その2

宿から出てきた人（もちろんこの人も上品な服を着てる…）に案内されて中に入ると、ぶ厚いじゅうたんがしいてあるロビーが広がってた。

置いてある調度品も高そう…

やっぱりあたし、場違いな気がする…

そのままついていくと、廊下を通って部屋の扉の前にたどり着いた。案内してくれた人がノックして中に声をかけてる。

「ミア様をお連れしました。」

「いいよー。」

中から声がして、案内してくれた人が扉を開けてくれた。

促されて中に入ってみると、そこは応接室みたい…宿なのに…

そして、ソファアに座ってたのは、アルくんとメリーちゃんだった。

「ミアねーちゃん、久しぶりー！」

「わーい！」

「アルくんもメリーちゃんもほんと久しぶり、元気だった？」

「うん、メリーも僕も元気だよっ！」

アルくんとメリーちゃんが、ソファアから駆けよってきた。

はー、知ってる人に会えて、ちょっとほっとしたよー。

アルくんやメリーちゃんにとっては、これが普通なんだろう…

「坊ちゃま、私は表に控えておりますので、何かありましたらお呼びください。」

「あ、うん。」

「そうだ、お茶を用意しておいてよ。」

「かしこまりました。」

んー… やっぱリアルくんはいいとこのお坊ちゃんなんだね…

召使いさんとかいるのも普通なんだ…

その人が出ていって、あたしたち3人だけになったところで、あたしは両手を2人につかまれて、ソファーまで引つ張っていかれた。

「きゃっ、ちよつとそんなに引つ張つたらあぶないよー。」

「まずは座つてもらわなきゃ、な、メリー。」

「ねー、おにーちゃん！」

何だろ？ 2人が何かを考えてるっぽいのはわかったけど…

そのままソファーに座らされたあたしの前に、2人が並んで立った。

「ミアねーちゃん。」

「おねーちゃん。」

「この間はほんとに」

「ほんとーに」

「「ありがとー」ございました！」

…最後のところは2人できれいに声をそろえてお辞儀してる。

この間って、迷子のことよね…

もしかしてこれを言いたかったってことかな？

「ううん、別にあたしは何もしてないよ。」

一緒に教会に行っただけで、あとはシスターさんとか衛兵さんとかがやってくれたんだから。」

「そんなことないよ、ミアねーちゃんがいなかったら、僕たちずっ

とあそこにいたかもしれなかったし。」

「ん、でも無事戻れてほんとよかったね。」

何となくでみんな笑ってしまった。

うん、あのときのことかごんどん思い出されてきたけど、ほんとによかったよね…

そんなお礼の儀式？が終わったところで、扉がノックされた。

「お茶をお持ちしました。」

「入ってー。」

扉が開いて入ってきたのは、さっきと違って女の人だった。きれいな模様のカップをテーブルに並べて、同じ模様のポットからお茶を注いでく。

そして、同じ模様のお皿に乗った、パンみたいなものも並べてる。並べ終わったら、お辞儀して出て行っちゃった。

2人と相談して、とりあえずお茶しながらお話することに。

「ミアねーちゃんって、あの宿で働いてるんでしょ？」

「そうだよ、白枝亭っていうの。」

「父上に聞いたんだけど、冒険者の宿っていうんだよね？」

「うん、普通のお客様も来るけど、冒険者さんがたくさん来るよ。」

「へー、すっごいよねー…」

僕たちも、街から街に移動するときは、冒険者を雇うことがあるんだ。

魔獣とか出たら、馬車の窓もちゃんと閉めないとダメなんだけど、1回だけ見たことがあるんだ。

すっごい強いよね、冒険者って。」

アルくんは、冒険者にちよつとあこがれがあるのかな？

んー…あたしも一応冒険者なんだよね。

冒険したこともないし、依頼を受けたこともないけど…
これは内緒にしておいた方がいいよね、きっと。

「それでさ、魔法で火とかぶついたり、剣で戦ったりするんだ。
かつこよかったなー…」

でも途中で父上が気づいて、窓を閉められちゃったんだ。」

「ふーん…あ、魔法ならあたしも使えるよ。」

「えーっ?!」

アルくんがびつくりしたのか、急に大きな声をあげた。
いつの間にかあたしの膝の上に乗ってたメリーちゃんがその声にび
つくりして目がまん丸になってるし、外からも声がかかる。

「坊ちゃん、どうなさいました?」

「え?あ…何でもない、ちょっと驚いただけだ。」

「左様でございますか。」

外からの声はそれで終わりだった。

何かすごいなあ…

そこからアルくんがちよつと声をひそめて尋ねてきた。

「ミアねーちゃん、ほんとに魔法使えるの?」

「うん、あ、火を出したりは無理だよ?」

「じゃあどんなのが使えるの?」

「つかえるのー?」

アルくんのまねをしてメリーちゃんまで聞いてくる…

んー…これ、言ったら使わないとダメになるよね…

ま、《^{ライト}光》くらいならだいじょぶかな?

「えつとね、光が出せるよ。」

「光？それって強い？」

「強いって…ただの光だよ。」

「うーん…でもそれ使ってみて！」

やっぱりね…でも1回くらいならいいよね。

服の下に入れてある発動体^{ペンダント}を出して、左手で触れて、右手を上げて集中…

もう《光》なら詠唱なしでだいじょだもんね。

「《光》！」

「うわぁ…ほんとに出た！」

「おねーちゃんすごい！」

ただの光だったけど、2人には大好評だったみたい。

そのあとも、いろいろ質問されたけど、どうやって使えるようになったかって言われても…

素質の話とかしてみたけど、アルくんにはちょっと難しかったみたい。

そのあともいろいろお話したんだけど、そろそろ戻らないと夜の食堂の準備が始まっちゃいそうだったから、帰ることにした。

メリーちゃんは、もう帰るのー？ってだいぶ不満そうだったけど、アルくんはあたしが仕事してるのがわかってくれてるから、外にいる人に声をかけてくれた。

「お呼びですか？」

「ミアねーちゃんが帰るから、送ってあげて。」

「かしこまりました。」

「すぐに馬車を用意いたします。」

「ええっ?!別に歩いて帰るからいいよー?」

「ダメだよ、ミアねーちゃんは僕たちのだいじなお客様なんだから。」

「

歩いて帰れるってだいぶいったんだけど、アルくんは譲ってくれなくて、結局馬車で帰ることに。

またちよつと恥ずかしいかも…

少ししたら、さっきの人が戻ってきて、馬車の用意ができたことを教えてくれた。

アルくんたちは部屋を出ちゃダメみたいだから、ここでごあいさつ。

「ミアねーちゃん、また遊びにきてほしいな。」

僕たち、ずっと宿だと暇なんだ。」

「うん…

また来れたら来るね。」

そうだよね、きつと前の件があったから、ますます宿に閉じこもりっぱなしになるんだろね…

いつまた機会があるかわかんないけど、そのときはまたお話しできたらいいな。

またあの豪勢な馬車で白枝亭まで送られたあたしは、玄関でフェリックスさんとレックスさんが出てくるところに鉢合わせて、2人が目をまんまるにして固まってしまったんだけど、その横をすつと抜けて宿に入る。

だって、食堂の準備が始まるもんね!

80 噂が立っていました

今日の夜の食堂営業は、いつもとちょっと違う忙しさ。
原因は…

「おまたせしました、日替わり2人前ですー。」

「おう、きたきた。」

「そういえばミアちゃん、今日えらく豪華な馬車に乗ってたんだって？」

「はう…何でみなさん知ってるんですか…」

けっこうたくさんのお客様が、あたしが馬車に乗ってたっていう話を知ってるみたいで、配膳するたびに聞かれてる気がする…

その度に同じ説明をしてるんだけど、お客様が入れ替わるとまた聞かれたりするの…

「…ということで、お友達に招待されたんです。」

あたしも馬車に乗せられるなんて思ってたかったですよう。」

「へえ…ミアちゃんはすごい友達がいるんだなあ…」

「そんなすごいって知らなかったです…」

配膳もどんどんしなきゃたまっていから、お客様にお辞儀して、次のお料理を取りに行く。

厨房に戻ると、やっぱりちよつとたまってた。
よっし、次つぎー！

そうやって、何度も同じ話をしながら今日の夜も無事営業終了して、

片付けも一段落した。

今日もいつも通り、仕事の後のお茶タイム。

「ミア、今日は大人気だったわね、うふふつ。」

「マリーさんまで…」

でも何であんなに見られてたんだろ…」

「たぶん、話を聞いただけって人もいたと思うけどね。」

ミアもすっかりうちの顔だし、そんな豪華な馬車に乗ってたりすると、どこかに行っちゃうかもって思われたのかもしれないわね。」

んー…そんなことないのにね。

今のところ、記憶が戻りそうにもないし…

でもマリーさんとクルトさんが迷惑じゃなければ、このままでもいいかなって思ってたかもする…

何かとんでもない記憶とか思いだしちゃったらやだな…

「ミア、どうしたんだい？」

ちよつと疲れ気味かな？」

「はわ、違います、ちよつと考え事してただけです。」

「そうかい？それならいいんだけど。」

ちよつとぼーつと考えてしまったらクルトさんに心配されちゃった…
にぎりこぶしをつくって、元気をアピール！

「そういえば、結局どんなことしてたの？」

「んー…アルくとメリーちゃん…あ、迷子になってた2人ね。」

2人ともあたしにありがとうを言いたかったみたい。

それで、そのあといろいろお話してたんだけど、冒険者に興味があつたみたいだよ。

街から街に移動するときに、護衛についてもらって、魔獣が何か

と戦うところを見たことがあるって言うた。」

「へえ…あ、会ったのってその2人だけ？」

「ううん、」あとお手伝いさんみたいな人には会ったよ。

迎えに来た人とは別の人に。」

ふーん、って何かうなずいてるマリーさん。

何か気になってたのかな？

「あ、あとね、魔法のこともお話したよ。」

「そうなの…魔法と言えば、最近ミアもアリスもタイミング合わなくて授業してもらってないわね。」

「うん…またお願いしてみたいな。」

そいえば、前にちよつと気になったことがあったんだけど、聞いていい？」

マリーさんに聞いてみるものがあつたんだよね。

ジユブのこと…聞いてもいい、よね。

マリーさんがうなずいてくれたから、思い切って質問。

「昨日、マリーさんが言ってた、ジユブって何かなって思ってた。」

「あ…わからないわよね。」

呪舞っていうのは、魔法みたいな効果がある踊りのことよ。

これを踊れる人が舞踊士ダンサーとも言えるわね。

普通の踊り子さんとはちよつと違う、かな？

ま、魔法ほど効果がぱつと現れないとか、はっきりしなかったりもするんだけど…」

「ほへ…マリーさん、それができるの?!」

「引退してからやってないし、無理かもね…」

「えー、残念…見てみたかったよー。」

そのうち元気があつたらねって言ってるけど…マリーさんいつも元気だよー。

もうちょっとお願い攻撃してみたんだけど、やっぱりダメみたい…お茶も飲んじやったし、そろそろお休みしようかってことになった。

「じゃ、カップ洗うね。」

「そう？それじゃミアにお任せしようかしら。」

「はい。」

マリーさんとクルトさんのカップも受け取って水場に持っていく。3つだけならすぐだし、ぱっとやっちゃおう。

すっかりこすったカップを、桶にためた水ですすげば、はい完了。あとはひっくり返して網の上に置いておけば、明日にはきっちり乾いてるはず。

マリーさんたちはもうお部屋に戻ってるかな？

食堂をのぞくと、まだ2人ともいた…

クルトさんは座ったままだったけど、マリーさんは立って…もしかして踊ってる？

「んー、ちょっと忘れてるかも…」

「それだけ覚えてるだけでも大したものだと思うよ。」

「せっかくだし、ちゃんと思い出しておきたいわ。」

んー、もしかして練習…？

じゃまするのも悪いけど、片付け終わったもんね…

「終わりましたー。」

「あ、ミアご苦労さまだったね。」

今日は休むとするかな。」

「はい、お休みなさいです。」

マリーさんはずっと考えてるみたい。

きつと思いついてるんだろね。

クルトさんが押していつてるから、きつと部屋には帰れるはずだし、あたしも今日はお休みしよつと。

んー、いつくらいにマリーさんの祝舞を見られるかな…楽しみ♪

81 マリーさんの昔話 その2

「さてと、前はどこまで話したかしら？」

「えっと…イノセントホワイ「無垢なる白」をマリーさんが持つことになったってと
こだよ。」

「そうだったわね。」

それじゃ続きを話していきましょうか。」

今日はお昼にたくさんお手伝いをしたから、マリーさんの昔のお話の続きを聞かせてもらえることになった。

って言っても、ちよっとお客様が多かったからがんばただけで、お話を聞かせてもらうことが目的じゃなかったんだけどね。

「まあ、お昼もがんばってたし、あまり長い時間になると明日に差し支えるかもしれないから、ある程度までね。」

「うん、お話が終わったらちゃんと休むよ。」

「あの剣をわたしが持つことに決めたのは、あとから聞いたんだけど、兄の提案で、みんなが賛成してくれたからなの。」

でもそのときはそんなことわからなかったんだけどね。

その後も何度か洞窟や遺跡の探索、魔獣や魔物退治の依頼なんかを受けたわ。

そして、その中でわたしはだんだん「無垢なる白」を使いこなせるようになっていったの。」

ふーん…きつと武器を使うって大変なんだね…

包丁だって、あんなに難しいもん。

あれ、でもそれまでは剣を使ってたんじゃないのかな？

「マリーさんは「無垢なる白」を使う前はどんな武器を使ってたの

「？」

「ん？前って…剣よ？」

「無垢なる白」よりも少し小振りな剣だったけどね。」

「ほへ…それでも使うのに練習がいるんだ…」

「あ、そういうことね。」

単に剣として使う分にはあまり問題はなかったのよ。」

剣として使っって…剣だよな？

どうということ？？

「剣としては、前に自分が使っていた剣よりも少し大きいけど、重さはむしろ軽かったわ。」

オリハルコンっていう金属でつくられた武器で、この金属でつくられたものは決して壊れないの。」

今の世界でこれを使って何かをつくることのできる人もきつといないわ。」

山と鍛冶の神様エルギノが自分でつくりだしたり、大昔のドワーフにつくり方を教えたみたいだけど、今は伝わっていないの。」

「ふえ…じゃあ、すつごく珍しい武器なの？」

「まあ、そうなるわね。」

つと、少し逸れてしまったけど…もちろん剣として使う分には、男の人より非力なわたしでも使い易かったから、むしろ楽だったのかしら。」

わたしは呪舞をするために、軽めの武器を使ってたし、そういう意味でもわたし向きだったと思うわ。」

それじゃ、別に問題ないんじゃない？

何に慣れる必要があったのかな？

「ふふ、そんなに難しい顔しなくてもちゃんと種明かしするわよ。」

問題はね、「無垢なる白」に秘められた力だったのよ。

魔法士ギルドで教えてもらったんだけど、剣を使って印を結ぶことで、悪魔や不死者みたいな不自然な存在に対して強い力を発したり、簡単な封印を施すことができるものだったの。」

「じゃあじゃあ、悪魔なんか怖くなくなった？」

「怖くないことはないんだけど、うまく使えば有利に戦えるっていうのはあったわね。」

だから、そのための練習をしながら冒険してたわけ。」

そっかー…でもそんなことができるようになったら、きっと有名になっちゃうよね。

だからマリーさんはいろんな人に知られてるんだよね、たぶん。

「そして、わたしがだいぶ秘められた力を使いこなせるようになったときに、兄を含めて一緒にグループだった人たちが、アンフィト大陸に行くって言い出したの。」

ううん、わたしに「無垢なる白」を渡してくれたときにはもう決めていたの。」

「ふえ…マリーさんは行かなかったの？」

「うん、一緒に行くって言ったんだけど、兄がどうしても許してくれなかった。」

父にわたしを頼まれて、わたしがある程度の力をつけるまで待っていてくれたのよね。

そして、何度も話したけど、どうしてもわたしは連れて行けないのは変わらなかったから、わたしもあまりわがままを言って困らせたくないと思って、ついていくことは諦めたわ。」

「そなんだ…マリーさん、そのとき寂しかった？」

きつと寂しかったよね…

1人は寂しい…あたし、今、マリーさんやクルトさんと別れること

になったら…ううん、そんなこと考えたくもない。
でも、マリーさんは少し笑って話を話してくれた。

「寂しくなかったって言ったら嘘になるけど、それまでにみんながわたしのことをすごく考えてくれていたのもわかってたからね。」

それに、すぐに新しいグループを組むことになったからね。」

「ほへ…そなんだ。」

「ミアも知ってる人たちよ？」

「え、それってもしかして…！」

あたしが知っているって言ったら、そう…

フェリックスさんたちじゃないよね？

マリーさんはあたしの顔を見て、うふふつと笑った。

「はい、それじゃ新しいグループを組むことになったのは誰でしょう？」

「フェリックスさんたち…だよね？」

「正解、兄が冒険者ギルドにも声を掛けてくれていて、その中でわたしがいいなって思ったグループに入れてもらうことになったの。」

それがリックたちのグループだったのよ。

まだそのときはリックもラルフもアリサもエリカも、駆けだしの子たちだったけどね。」

「そーなんだ…」

「さてと、そろそろいい時間だね。」

今日はここまでにしましょう。

また今度続きを話してあげるわね。」

まだまだ続きは聞きたいけれど、マリーさんもあたしも、明日もちゃんとがんばるためにはしっかり休まないといけない。
今日はお茶の用意もしてないから、もう休むだけ。

「マリーさん、ありがとーでした。」

「どういたしまして。」

それじゃすっかり休んでね。

おやすみなさい。」

「はい、おやすみなさいです。」

マリーさんと別れて階段を昇って部屋に帰る。

今日もいろんなお話聞かせてもらえて嬉しかった♪

次はいつ続きが聞けるかな…？

82 おつきな音が苦手なの

ゴロゴロゴロツ！

大きな音が聞こえて思わず耳を押さえてしまっ。

「あうー…」

「それにしてもひどい雨になってきたわね。

ミアちゃん大丈夫？」

「うー…」

今日はユーリさんのところに遊びに来てただけで、急に空が暗くなつて、強い風が吹き始めて、雨が降り出した。

そこまではよかったんだけど、雷が鳴りだしてしまつて、とっても怖い…

「ちょっとうるさいけど、建物の中ならたぶん大丈夫よ。」

「でもでも…」

「しばらく待つてれば、きっと雷も治まつて雨もやむわ。」

笑いながら、ユーリさんはあたしとゼル先生のカップにお茶を注ぎ足してくれた。

でも、あのおつきい音はほんとに怖いんだもん…

そのとき、また扉の隙間がピカツと光つてゴロゴロゴロツてすごい音がする。

両手で耳を押えても、音は聞こえるんだよね…

「自然の雷には敵いませんが、魔法でも雷をつくることのできるのですよ。」

「ええっ？！そんなのいらないです…」

「これは随分と嫌われてしまったみたいですね。」

ゼル先生がそう言って苦笑して、ユーリさんもクスクス笑ってる。もしかして先生は雷の魔法が使えるのかな…

「それでは、ミアさんの気が少しでも紛れるように、魔法の話でもしてみましようか。」

雷の話も出てきてしまうので申し訳ないですが…」

「はう…でもお願いします！」

「わかりました。」

私が青と緑の魔法を使えるのは以前にお話ししましたね。青は水や守りを象徴し、緑は風、奪取を象徴しています。ですから単独で使えば…」

そこで言葉を切って、先生はカップに残ってるお茶を飲んでしまつて、ワンドを取り出す。

カップの上にワンドをかざして集中する。

「クリエイトウォーター
《水作成》」

ゼル先生が唱えると、ワンドの先から水が流れ出してカップにたまっていく。

そしてあふれそうになる前に軽くワンドを振ると水の流れが止まった。

「このように、象徴するものを扱う魔法が使えるわけですね。
では、ここに緑を加えるとどうなるか…たとえば青の魔法で《保プロテ護クシオン》というものがありませんか。」

この守りの力に、奪取するという緑の力を加えると…

ユーリエくん、何か適当なものはないですか？」

「適当なものって…あ、ゆで卵でもいい？」

「なるほど、いいですね。」

「お願いします。」

ゆで卵…がどうなるんだろ？

って思ってたらずーりさんが奥からゆで卵を持ってきて渡してくれた。

「さて、持ってきてもらったのは普通のゆで卵です。」

「はい…そですよね？」

「これに魔法をかけてみましょう。」

テーブルに置いてもらえますか？」

ゼル先生の指示通りにゆで卵をテーブルに置いた。

ゼル先生がワンドをかざして集中する。

「《ウィークン防御弱化》…もう一度、卵を持ってもらえますか？」

「はい…」

ゼル先生が魔法をかけたゆで卵は、見た目はあんまり変わった感じがしない。

でも、手に取ったときにその違いがわかった。

ちょっと力が入っちゃっただけなのに、殻が簡単に割れちゃったんだ。

「ゼル先生…これって…」

「はい、守りを奪われたわけですね。」

このように2つの色の象徴するものを合わせた魔法が使えるようになるわけですが、さらに違った特性も表すことができるのです。

例えばこのように…と、ここではまずいですね。」

「先生…うち、壊さないでね？」

ゼル先生が止まってしまつて、ユーリさんは何か思い当たつたみたい。

一体何をしようとおもつてたんだろ？

「今日は実演はやめておいた方がいいですね。

外は雨ですし…」

実は、青と緑を重ねることで、新しく2つの特性を扱うことができるのです。

その1つが、先程ミアさんが怖がつていた雷の力ですね。」

「ふえ…ゼル先生、雷が出せるんだ…」

「そうですね。」

まあ、主に敵を撃つような魔法になるので、めつたに使いませんが…

大丈夫ですよ、ミアさんに向けて撃つことなんて絶対にありませんから、そんなにイスの端に寄つてしまつと落ちてしまいますよ？」

うん、でもやつぱり何となく怖いよね…

ゼル先生、実はすっごい強いんじゃないかな？

「そして青と緑を重ねて扱えるもう1つの特性が、破術です。」

「破術？」

「はい、例えば先程のゆで卵は、魔法の効果が切れるまでは、軟らかくなつてしまつているわけですが、その効果を無理やり打ち消してなくしてしまうような力のことですね。」

この系統の魔法を極めると、強力な結界を破つたりすることもできるそうです。

私はそこまでの力を扱うことはできませんがね。」

ふーん…何だか、すごくたくさん種類の魔法が使えるんだね…
あ、だから2色以上だと魔法士ってことになるのかな？
きつとそうだよね。

「さて、少しは気が紛れたでしょうか？

いつの間にか雨もだいぶ弱くなってきましたね。」

「あらほんと、音があんまり聞こえないわ。

よかったわね、ミアちゃん。」

「はい！

ゼル先生もありがとーです。」

お話を聞いている間、ちよつと雷のこと忘れられてたかも。

最後に思い出しちゃったけど、結局あのは雷鳴らなかったのかな？

「ずいぶんと長居をしてしまいましたね。

私はお先に失礼させてもらいます。

ユーリエくん、ごちそうさまでした。」

「おそまつさまです。

また来てね、先生。」

につこり笑って会釈して出ていく先生が開けた扉の向こうでは、もう雨が上がりそうだった。

あたしも夜の準備があるし、そろそろ帰らなきゃね。

「ユーリさん、あたしもそろそろ帰るね。」

「そっか、準備しないとね。

ミアちゃん、がんばってね！」

「はい、ありがとです！

それじゃ、またですー。」

手を振るユーリさんにあいさつして、お店の外に出た。

外は雨も上がって、だいぶ明るくなってきてる。

ふと空を見て、あたしはとっても素敵なものを見つけてしまったから、今出てきた扉の中に声をかけた。

「ユーリさん、おっきな虹が出てるよー!」

この後、ちょっとだけ帰るのが遅くなっちゃったけど、準備にはちゃんと間に合ったんだからね？

83 成長したかも

「……………ふい。」

手先のものに集中させてた意識を戻す。

あたしの左手には、皮をむきおわったじゃがいも。

右手には、皮をむくための包丁。

ちよつとずつ練習して、ようやくちゃんと皮がむけるようになってきた。

「うん、だいぶ早くなったね。

もう皮むきは大丈夫かな。」

「よかったー…

でもまだ集中してないといけないよ。

クルトさんみたいにおしゃべりしながらなんて絶対無理だよ。」

お客様に出す分は、あたしがやったら大変なことになるし、あたしたちが食べる分の下準備を手伝わせてもらってるの。

っていつても、皮をむいたり、切ったりするだけで、火を使って料理したことないんだけどね。

「それじゃ、小さく切っちゃって。」

「はい。」

あたしがじゃがいも切ってる横で、クルトさんが他のものをどんどん準備していく。

さすがクルトさん、すごーい早い…

じゃがいもが切り終わるころには、他のものも全部そろってた。

「さて、はじめるとしますか。」

そういえば、ミアにはまだかまどの使い方を教えてなかったね。」

「うん、いつもクルトさんがやってくれてるから、お湯も沸いたのしか使ってないよ。」

「ついでだから、教えておこう。」

これを使うんだよ。」

そう言ってクルトさんが取り出したのは、赤く透き通った水晶のか
けら…あれ、どっかでこんな見たような気がする。

クルトさん、細めの薪を1本取って、その水晶のかけらに押し当て
てる。

「火よ

「ほへ…ルーンワード魔法語？」

「まあ、見ていてごらん。」

クルトさんが薪を押し当ててると、だんだん煙が出てくる。

そう思ったらもう火がついてた。

これって…前にミルフアム教会で見た「ライトクリスタル光結晶」とよく似てるんだ。

「クルトさん、これって「光結晶」みたいなもの？」

「ん？ああ、よく知ってるね。」

これは「ファイアクリスタル火結晶」だよ。

キーワードで起動させると、《ティンダー発火》という赤色の魔法と同じよ
うな効果が得られるんだ。

割と手軽に火をつけることができるから便利なんだけど、悪用さ
れると困るから、魔法士ギルドもうちののような商売として使うこ
ろにしか販売してくれないんだけどね。」

「ほへ…」

「ミアは魔法語が使えるし、「光結晶」を見たことがあるなら、

これも同じように起動できるのはわかんと思うから、今度から手が足りないときはミアにつけてもらうこともあるかもしれないね。」

便利な道具があるんだー…

もつといろいろできるものがあつたらおもしろいかも？

魔法士ギルドで売ってるなら、ゼル先生なら詳しいかな？
今度聞いてみよつと。

「あとはうまく薪を組んで、種火になる薪を入れればいいんだよ。

火が強かったり弱かったりするときは、薪の位置を少し変えてあげれば…たとえば強いときは、よく燃えている薪が、鍋の下から外れるように動かすとかすれば調節できるからね。」

「そっか…クルトさんがかまどの下をごそごそしてるのは、火の強さを調節してたんだ。」

「ははは、じゃあ今まで私が何をしてるかわからなかったのか。」

むー…でもその通りです…

あたしがちよつとうつむいてる間に、クルトさんは材料をお鍋にいれてく。

いつ見ても、あつという間に作業が進んじやって、どんな風にする
と何ができるかはわかんない。

やっぱりクルトさんはすごいんだ。

「あとは少し煮ればいいかな。

ミア、今朝出してたパンの残りがまだあるはずだから、3人分切
つておいてくれるかな？」

「はい。」

パンは外側がちよつとかたくて、普通の包丁だと切りにくいから、
刃が波型になつてるのを使うの。

台の上にパンをおいて、軽く押さえて切るだけだから、じゃがいの皮をむくよりずっと簡単。

固くしぼった布巾をかぶせられたお皿の上に、元は大きなまん丸だったパンは、朝にお客様に出してた分の残りで、半分くらい残ってるのがあった。

1個のまん丸パンから、10人分くらいは切り出せるくらいおつきい。

お客様に出すときは、はしっこは切り落として、真ん中の部分を、大きさに合わせて厚さを変えて切っていかなきゃダメだから、あたしにはできないんだけど、自分たちの分ならちよつとくらい厚さが変ったっていいんだよね。

とにかく、3人分を切りだして、残りにまた布巾をかぶせとく。

「クルトさん、切れたよー。」

「こつちも大体できたみたいだね。」

それじゃスープボウルを出してくれるかな？

そのこの台の端に置いてくれればいいよ。」

クルトさんに言われたとおりに、スープボウルを出して台に乗せる。あとは出来上がったらクルトさんがよそつてくれるし、あたしはマリーさんに声をかけてこなきゃね。

「じゃ、マリーさんに伝えてくるね。」

「ああ、頼んだよ。」

今日もとってもいいにおい。

早くマリーさんと呼んでこなきゃ！

84 お出かけの約束

昨日厨房で見た「火結晶」^{ファイアクリスタル}のことを、ゼル先生に尋ねようと思ってただけど、もつと身近に聞ける人がいたんだよね。

朝の食堂のときに、アリサさんを見かけて、ちよつとお話が聞きたいつてお願いしたら、お昼前の休憩のときに、時間をつくってもらえたんだ。

「火結晶」ですかー？

確かにー、魔法士ギルドにはー、あると思いますがー、あれはー、普通の人にはー、買えませんよー？」

「火結晶」や「光結晶」^{ライトクリスタル}以外にも、魔法が使えるものってあるんですか？」

「ありますよー。

ウォータークリスタル^{ウォータークリスタル}、ダイククリスタル^{ダイククリスタル}などですねー。」

「それって、どんな効果があるんですか？」

「水結晶」はー、《水浄化》^{ピュリファイウォーター}ですねー。

汚れてる水でもー、きれいにすることがー、できるのでー、冒険者だどー、持っている人もー、いますよー。」

そっか、確かにいつもきれいなお水があるとは限らないもんね。

「光結晶」や「水結晶」は、結構便利に使えるそう。

「闇結晶」はー、《闇》^{ダークネス}ですがー…何かをー、隠したりするのにー、使えるー…のかしらー？」

「ふえ…？《闇》ってどんな魔法なんですか？」

「黒色はー、わたしにー、あまり縁がないのでー、詳しくはー、ないのですがー、光をー、遮る空間をー、つくるみたいですよー。」

「んー…ただ暗いだけじゃないんですか？」

「そうですねー、ロウソクやー、ランプの明かりではー、照らせないそうですー。」

《光》などのー、魔法の光ならー、打ち消し合うそうですー。」

ふーん…何だかいまいちイメージがわかないや…

そいえば、妖魔族の人たちは、黒色魔法が使えるんだよね…

もしかして、鱗妖のレイアさんとか、翼妖のエメットさんなら使えるのかな？

今度泊まりに来ていただけたら聞いてみようかな。

「もしー、ミアちゃんかー、興味ありましたらー、魔法士ギルドにー、行ってみますかー？」

「ほへ？ギルドに入ってもなくても行っているんですか？」

「大丈夫ですよー。」

でないとー、ギルド外の人かー、お買い物することがー、できないのでー。」

「あ、そっか。」

んー、ちょっと行ってみたいです。」

「わかりましたー。」

それではー、午後のー、休憩のときとかはー、どうでしょうかー？」

今日は特に予定もないし、だいじょぶだね。

あ、でも一応マリーさんたちに聞いておいた方がいいかな。

「たぶんだいじょぶだと思いますけど、マリーさんたちにも聞いておきます。」

アリサさん、お昼もうちで食べますか？」

「はいー、そのつもりですよー。」

「そしたら、そのときにちゃんと返事しますね。」

「わかりましたー。」

それではー、ちょっと今からー、出かけてきますねー。」

お昼ご飯にはー、戻ってきますのでー。」

「はい、ありがとーございました。」

いつてらっしゃいます。」

アリサさんをお見送りして、結構時間が過ぎてたことに気付いた。もうちょっとしたらお昼の食堂の準備にかからなきゃいけないし、下に降りてこ。

エプロンをつけて、自分の部屋を出て鍵をかけたら、そのまま食堂に直行した。

ちょうどマリーさんも来たところみたい。

「マリーさん！」

「あら、ミアもちょっと早めに来てくれたのね。」

「うん、もうすぐだったし。」

えっとね、今日って午後の休憩のときに、お出かけしてもだいじよぶかな？」

「大丈夫だと思うわよ。」

あ、でもクルトにも聞いておいてね。」

「はい、

じゃ、先に聞いてくるね。」

テーブルをふいたりするのに、布巾も絞ってこなきゃいけないし、ちょうどいいよね。

厨房に入ると、クルトさんもそろそろ準備に入ろうとしてるところだった。

「あれ、ミア、まだちょっと時間あったんじゃないかい？」

「うん、でもちょうどよかったからいいの。」

今日の午後の休憩のときに、お出かけしてもだいじょぶかな？」

「ん？別にかまわないよ。」

そんなに急ぐ仕事もないし。」

よかった、アリサさんが来たら報告しなきゃね。

クルトさんにもありがとーって言ったら、ふと気付いたようにつけたして言った。

「そういえば、マリーにはもう聞いているかい？」

「うん、マリーさんもだいじょぶって。」

「それなら問題ないよ。」

ま、そろそろ準備しようか。」

「はい。」

水場で布巾を2つ絞る。

あたしの分とマリーさんの分。

テーブルをふいたら、今度は厨房のお手伝いがあるし、早めにどんどんやっていかなきゃね。

さあ、しっかりお手伝いして、お片付けもがんばって、できるだけ早くお出かけできるようにしなきゃ！

85 魔法士ギルドに行きました

「ここがー、魔法士ギルドですー。」

「ここ…?」

「そうですよー。」

それではー、入ってみましょうー。」

約束した通り、アリサさんに魔法士ギルドに連れてきてもらったんだけど、ギルドっていうからおっきな建物を想像してたんだけど、もしかしたらミルフーム教会よりちっちゃいんじゃない…
ちよつとびっくりして固まってしまった。

「どうかしましたかー?」

「……ほへ…あの…思ったよりちっちゃい、かなって…」

「そうですかー、始めていらした方はー、みなさんそうですよー。」

とにかくー、入ってみましょうー。」

「はひ…」

魔法士ギルドってあんまり人気ないのかな…

ウォータークリスタル

でも、冒険者の人たちも「水結晶」とか買ったたりするっていったよね。

うーん、よくわかんないや。

とりあえずアリサさんについて、建物の扉をくぐる。

「…普通ですよね?」

「普通ですよー。」

中に入っても別に変わったところはないみたい。

大きなカウンターがあつて、ギルドの人かな…が2人いた。灯りも普通にランプがつつてあつて、魔法でつけてたりするわけじやなさそう。

アリサさんはカウンターに座ってるお兄さんに話しかけた。

「こんにちはー。」

「アリサさん、こんにちは。」

そちらの方は？」

「白枝亭のー、ミアちゃんですー。」

「は、はじめまして。」

急にこつちに振られてちよつとおどおど…
座つてたお兄さんがあたしの方を見てる…

「なるほど、それで師匠の部屋ですか？」

「いいえー、ちよつとー、売り物をー、見せてもらおうかなとー、
思ひましてー。」

「珍しいですね。」

何が必要なんですか？」

「ごめんなさいー、買っわけではー、ないのですー。」

ミアちゃんにー、見せてあげたくてー…

「そういうことですか。」

まあ、アリサさんならいいですよ。」

「ありがとうございますー。」

とりあえず「マジッククリスタル魔結晶」をー、お願いしますー。」

お兄さんがカウンターの中から布の包みを4つ出す。
そしてそれぞれの包みから、白、青、黄、黒の水晶のかけらみたいな
なを取り出して、カウンターにしかれたやわらかそうな布の上に
並べてくれた。

「今ここにあるのはこれだけですな。」

説明は…なくても問題ありませんよね？」

「はい！」

あー、でももしできましたらー、簡単にー、お願いできますかー？」

「お連れの方に、ですな。」

「魔結晶」とは、魔法士が石に魔法を込めてつくりだしています。
込められる魔法は、各色のごく初歩のものだけになります。」

そういうとお兄さんは、1つずつ手にとって見せてくれる。

見た目はほんとに色つきの水晶っぽいなだね。

「どれも、簡単なキーワードで起動できるのも共通ですな。」

キーワードは魔法語ルーンワードを用いますが、実際に魔法を使う場合と違って、意味を知らなくても使えるために、一般の方々にも簡単に使うことができるようになっていきます。」

「そうだー、ダイククリスタル「魔結晶」をー、試させてもらってもー、いいですかー？」

「ここで…ですか？」

「すぐにー、消しますからー。」

お兄さんは少し考えて、隅でお願いしますねっていつてアリサさんに「魔結晶」を渡してくれた。

それをアリサさんはあたしにそのまま渡したから、お兄さんも少し驚いたみたいだけど、止められなかったからいいんだよね…？

「キーワードはー、闇よ だとー、思いますー。」

「は、はひ… 闇よ ！」

言われた通りのキーワードをとなえと、「闇結晶」を握った手から、暗闇が広がっていく。
そしてあつという間に辺りが暗くなって見えなくなっちゃった。

「ア、アリサさん…」

「はいー、大丈夫ですよー。」

…《^{ライト}光

真つ暗な中でアリサさんが魔法を使う声が聞こえると、また周りが見えるようになった。

でも、《光》を使ったのに、光はどこにもない。

「あれ…アリサさん、《光》使いましたよね？」

「使いましたよー。」

ミアちゃんが使ったー、《^{ダークネス}闇

》とー、《光》はー、同じ場所でー、使われるとー、お互いにー、打ち消し合うのですよー。」

ほへ…そなんだ…

とりあえず、「闇結晶」を壊さないうちにお兄さんに返した。

「ありがとーございました。」

「どういたしまして。」

使った感じはどうでしたか？」

「真つ暗でした…」

これって何に使うんですか？」

「そうですね、もともと黒色魔法は我々には縁のないものなので、あまり使い方を考えることもありませんが、これに関しては光を嫌うものを扱うときに使ったりするそうですよ。」

ふーん…光を嫌うもの…そんなものがあるんだね。

ま、あたしがそんなものを扱うことはなさそうだけど。
もう一度お兄さんにお礼を言って、帰ろうとしたんだけど、そのとき奥の部屋から声が聞こえてきた。

「魔法生物研究室より緊急連絡。

研究中の魔法生物が逃走、一時的に転送陣を封鎖します。

研究棟にいるものは直ちに室長指示に従って行動してください。」

…何か大変なことになってない？！

恐る恐るアリサさんの方を振り向いたんだけど…アリサさんも、ギルドのお兄さんたちも、平然としてる…

だいじょぶなのかな…？

「あの…今のつて…」

「あー…たまにこういうことがあるんですよ。

まあ、心配しなくて大丈夫だと思います。」

「せっかくだからー、先生にもー、ご挨拶しようー、思っていましたがい、今日はー、やめておきますねー。」

「はい、お疲れさまです。

師匠にはアリサさんが来たこと、あとで伝えておきますよ。」

「よろしく願いますねー。」

結局そのままアリサさんと白枝亭に帰ったんだけど…魔法士ギルド

…何かすごい…

86 温泉と湯浴み場と

「マリーさん、俺たちまた明日から依頼が入ったから。」

「あら、そうなの。」

「今度はどんな依頼？」

「前にも頼まれたことがあるんだけど、ニーゼルまでの護衛だよ。湯治に行くっていうやつ。」

「そういえばそんな依頼も受けてたわね。」

お昼過ぎに出かけて行ったフェリックスさんが、夕方に戻ってきてマリーさんとそんな話をしてた。

フェリックスさんたちって結構有名みたいだから、ご指名の依頼もあるみたいなんだよね。

でも、ニーゼルって初めて聞いたけど、どんなところ？
ちょっと聞いてみようかな。

「ニーゼルってどんなところなんですか？」

「ん？ああ、一言でいえば農村だな。」

ちよつと山の方になるんだけど、タレイアにくる食料品なんか、ニーゼルで作ってるものが結構多いんだぜ。」

「ふえ、そなんだ。」

「あとは今回もそうだけど、温泉があるんだよ。」

俺たちの依頼主みたいに湯治に行く人がいるかな。」

「おんせん……？とうじ……？」

また知らないものが増えちゃった……

横で聞いているマリーさんがくすくす笑ってる。

「もしかしたらミアも見たとあるのかもしれないけど、ここに来

てからはそんなの見る機会ないだろうからわからないわね。」

「あ、そうか。」

温泉っていうのは…大きな湯浴み場、でいいよな、マリーさん？」

湯浴み場っていうと、お湯をためたお風呂があるところだね。

タレイアには1つだけ公衆湯浴み場があるんだけど、行ったことないんだよね。

高級な宿とかは、専用の湯浴み場があるって聞いた気もするけど。

「まあ、間違ってるとは言わないけど…あんたの説明はいつも大雑把すぎるわよ。」

「そついわれてもなあ…」

「さて、温泉っていうのはね、泉みたいなものなんだけど、湧いてくるのがただのお水じゃなくて、お湯になってるのよ。」

「ほへ…すごい…」

「ニーゼル以外にもいくつがあるんだけど、場所によってお湯が違ったりするらしいわ。」

たとえば海みたいにしよっぱいお湯が出てたりとか、白く濁ったお湯が出てたりとか、ぐつぐつ煮えてるくらいに熱かったり…とかね。」

「ぐつぐつ?!」

何か温泉って危ないんじゃないかな…

濁ってるとか、煮えてるとか…

そんなのに入るの?!

「熱すぎるのはちゃんと冷まして使っみたいだけだね。」

温泉のお湯は、普通に街の湯浴み場で使っお湯と違って、怪我や病気にいいっていわれてるのよ。

その効果を目当てにして、遠くの温泉まで出かける人が結構いる

のよ。」

「そなんだ…何か危ないところかなって思っちゃった。」

「ふふふ、大丈夫よ。」

それに、温泉によっては蒸し風呂があるところもあるわ。」

蒸し風呂は、タレイアにもいくつかあるんだよね。

うちの近くだと、パン屋さんと協力してやってるところがある。

パン屋さんのかまどから出た熱を使うみたいだけど、あんまりくわしくは知らないや。

だって、蒸し風呂も行ったことないもん。

暑かったら川で水浴びしたりできたし、余ったお湯をもらって水で冷まして汗を流したり、体をふいたりすれば十分だし。

「依頼主の娘さんが、少し体が弱いみたいだから、前に行ったときにアリサがいてすぐ助かったみたいなんだよ。」

だから、いつもの護衛とかより待遇が良くてさ…ちょっと断りづらいし。

ま、護衛ついでに俺たちも骨休めできそうかなって。」

「そうね、アリサレベルの治療師^{ヒーラー}で、娘さんなら女性の方がいいだろうし、そうなると下手に探すよりも、あんたたちとつながってる方が依頼者も楽なんだろうね。」

出発は朝になるのかしら？」

「朝は朝だけど、朝食が済み次第、くらいかな。」

無理して急ぐような旅でもないから。」

いろいろ準備があるから、ってフェリックスさんは部屋に戻ってた。

温泉かあ…一度くらい行ってみてもいいかな…？

あ、でもその前に普通の湯浴み場とかに行かなきゃ、何が違つかわかんないよね。

そういえば、マリーさんってこれだけ詳しくたつてことは温泉も行ったことあるんだよね。

「ねえねえ、マリーさん、温泉と街の湯浴み場って結構違うの？」

「そうね、お湯はきつと全然違うんじゃないかしら。」

街の湯浴み場は、川の水を引き込んで沸かしてるっていうから、普通のお湯だと思うわ。

でも、温泉に浸かったらすぐけがや病気が治るわけじゃないから、何度も何度も通うとかじゃなければ、そんなに違いがないのかもしれないわね。」

「ふーん……」

温泉の近くに住んでる人なら、便利なのかなー。

タレイアの近くにも、温泉が出てきたりしたらいいのにな。

っと、そろそろ準備に入らなきゃね。

マリーさんに声をかけようと思ったら、先にマリーさんが思いついたように話し始めた。

「そういえば、ミアが来てから湯浴み場なんか行ってないわね。今度行ってみましょうか。」

「え……うん、行ってみたいー！」

「じゃあ、クルトにも話しておかなきゃね。」

今夜、相談してみよう。」

んー、急展開だけどちょっと楽しみ。

どんなかなー……わくわくしちゃうな♪

87 修理できますか？

「こんにちはー。」

「いらっしやいませ。」

「お、ミアちゃん、どうしたんだい？」

「クルトさんのお使いです。」

「そう、お使いで鍛冶屋さんに来てるの。」

「朝の食堂の営業が終わって、片付けしたら、クルトさんに声をかけられたんだよね。」

「ミア、ちょっとお使い頼まれてくれるかい？」

「マリーには私の方から言っておくから。」

「はいー、何を頼んできたらいですか？」

「うん、これを持って鍛冶屋さんに行ってきたほしいんだ。」

「渡されたのは包丁だった。」

「でも、途中の刃が欠けてる。」

「どうしたんだろ？」

「実は、昨日の晩、ちゃんと置いてなかったみたいで、今朝見たら床に落ちてたんだけどね…」

「どうもそのときに欠けてしまったみたいなんだ。」

「はう…じゃ、修理してもらうの？」

「うーん…ちょっと欠けが大きいから、修理できそうなら頼んでも」

らいたいんだけど、無理そうなら同じものを注文してきてほしいんだ。

これはボルトさんにつくってもらったものだからね。」

ボルトさんっていうのはラルフさんのお父さん。

つまり鍛冶屋のご主人さん。

そんなわけで、鍛冶屋さんへのお使いを頼まれたあたしは欠けた包丁を受け取って、すぐに向かおうとしたんだけど、また声をかけられた。

「そうだ、ついでにミアも自分の包丁をつくってもらってきなさい。」

「ええっ?!」

「最近、料理もがんばってるじゃないか。

自分用の包丁を持つのも、上達するためのきっかけになるかもしれないよ。」

「そう…なの?」

「ああ、支払いの方は、今度私が行くからって伝えてくれればいい。」

とにかく、あたしも自分にあった包丁をつくってもらわなきゃいけない。

でもまずは持ってきた包丁を見せなきゃね。

「えっとね、まずはこれです。」

刃が欠けちゃったから、直せそうなら直してほしくて、無理なら

同じのがほしいのです。」

「ん、ちよつと見せてくれるかな。」

「あー… 厳しいかもしれないな… ちよつと父さんに聞いてみるよ。待っててくれるかな。」

「はい。」

ラルフさんが、包丁を持って奥に入っていった。

奥は作業場になってて、とっても暑いつていったけど、お店になつてゐるここは全然暑くないよね。

壁際とか棚とかに、いろんなものが並べてある。

小さなナイフやお鍋、畑で使うクワとかも置いてあるね。

あ、カウンターの後ろにあるのって、剣かな…？

きよろきよろしてたらラルフさんが戻ってきてた。

「ミアちゃん、ここにあるものが珍しいみたいだね。」

「はい。」

いろんなものがありますー。」

「父さんは何でもつくってしまうからなあ…」

自分の親ながら、大したもんだと思うよ、ほんと。」

そんな風に言ってるラルフさんは、ちよつと嬉しそう。

きつと、とっても自慢のお父さんだね。

ふとラルフさんが思い出したようにあたしの方を見た。

「ごめんごめん、包丁のことを聞いてきてたのに。」

やっぱりあれ、ちよつと研ぎ直すだけじゃ難しいみたいだから、新しいのつくるよ。

出来次第、連絡入れるから。」

「はい。」

あと、もひとつあるです。」

「ん？つても修理はあれだけだよね。

何か足りないものでもある？」

「えっと、あたしの包丁もつくってほしいです。」

「ミアちゃんのこと？」

「はい、クルトさんにつくってもらったらいって言われたの。」

ラルフさんが不思議そうな顔してる。

んー、やっぱりあたしが包丁とか変なのかな……
しょぼん……

「あ、ごめん、その年で自分の包丁とか、すごいと思って……」

「ほへ？自分の包丁って、すごいのですか？」

「そうだね……例えばクルトさんみたいに料理を仕事にしてるような人は大概持つてるけど。」

ま、クルトさんの見立てなら間違いないだろうし、どうせなら親父に見てもらいなよ。」

そういうと、またラルフさんは奥に入っていった。

今度はさつきよりすぐにボルトさんと一緒に戻ってきた。

ボルトさんは汗をふきふきしてる。

やっぱり奥は暑そうだよね……

「こんにちはです。」

「おう、こんにちは。」

ミアちゃん、自分の包丁だって？」

「はい、お願いしますー。」

「じゃあ、ちよつと手を見せてくれるかな。」

そういうと、ボルトさんはあたしの右手をとって、じーっと見てる。
たまに横に向けたり、また元に戻したり。

そして、顔を上げてあたしの方を見る。

「ようし、それじゃミアちゃんの方も合わせて打っておくから、楽しみに待っててくれい。」

「はいー、よろしく願います！」

あ、そだ…支払いは今度クルトさんが来るって言ってたです。」

「ああ、わかった。

クルトさんにもよろしく伝えて置いてくれい。

ラルフ、準備だ。」

ボルトさんはそのまま奥に入ってしまった。
それじゃあたしも白枝亭に戻らなきゃね。

「じゃあミアちゃん、またね。」

「はい、またですー。」

「あ、そうだ、1つ頼まれてくれるかな？」

「はひ？」

「この前の剣、問題ないかどうか、また教えてほしいって伝えてもらえるかな。」

この前の剣…ってそういえばラルフさんとボルトさんが協力してつくったっていったね。

でも、マリーさん、受け取ってから使っていないんじゃないか…

だって、剣って戦うために使うんだよね。

とにかく伝えればいいのかな？

「じゃ、マリーさんに伝えますね。」

「よろしく頼むよ。」

お店の前まで見送ってくれたラルフさんに手を振って、白枝亭に帰

る。

自分の包丁つかあ…ちょっと楽しみだけど、その分がんばらなきゃね。

あれ、そっいえばどれくらいで完成するのかなあ？

88 二度寝

そこはどこまでも真っ白な世界

ああ…またあの夢かって思ったんだけど

今日は少し違う…？

いつもなら周りを囲んでいるはずの影がない…

そうやって周りを見渡して、また前を向いたときに

いつの間にか、目の前に誰かが…って言うてもいつも通りの人の影、
が立っていた

相変わらず、目の前にいるようなんだけど、ずっと向こうにいるよ
うにも感じる

そのとき、その影から、困ってるような、迷ってるような、そんな
気持ちが伝わってくる

そしてあたしも、どうしてか懐かしい気持ちになった

『そ……………追……………たの……………違……………ったの……………れぬ……………だ……………手遅……………』

え…何て…もうちょっとはつきり言わなきゃ聞こえない

そついいたいのに声が出ない

不意に後ろから『にやっ！』っていう声が聞こえる

その瞬間

世界が暗転し

体が落ちていくような感覚を…

「ほへ…？」

何だか涼しい風が…

真っ暗だったけど、ぼんやりと部屋の中が見えてくる…

あれ…窓が開いてる…？

おかしいな…寝る前に閉めたはずなんだけど…

最近は朝晩が涼しくなってきたよだね…

窓の外は…まだ暗い…

ちよつと早起きしすぎたのかな…

とにかく窓を閉めたほうがよさそう。

窓を閉めようと体を起こしたら、枕の辺りから何か黒いものが飛び

降りた。

どうやって入ってきたんだろ？

少し目がさめちゃったから、頭もちよつとくらいははたらいてる。だから、黒いものがネコくんなのもわかったんだけど、何でネコくんがあたしの部屋にいるかはよくからない。

「ネコくん、寝てるところに入ってくるなんてダメだよ？」

声をかけると、ネコくんはふっと立ちあがってまたベッドにぴよんととび乗った。

そして、こつちを見てまた短くにやつとないた。

そのままネコくんを抱き上げると、ふわつとしててあったかい。

「ふわふわー…もふもふー…ほかほかー…」

ネコくんのぬくもりで何だかまたちよつと眠くなってきたみたい…まだ早いからちよつとくらい…いいよね…

…あれ、何で外にいるんだろ？

ここ…広場だね？

だれも…いないのかな？

あたりを見渡しても何だかぼやっとしてる

とにかく白枝亭に帰らなきゃ

そう思って歩き出そうとしたとき

急に寒気を感じた

何か嫌な

とても嫌な感じがする

ここに向かつて

何か大きな悪意をもったものが

たくさん近づいてきている気がする

『にゃーっー』

ネコ…くん…？

いつの間にか足もとにネコくんがいた

あたしが気付いたのを確認したのか

前を向いてネコくんが走り出した

ついていこうと必死に走るけど

ふわふわしてうまく追いかけれない

どうしようつて思ってたら

ネコくんが振り返って

あたしのところへ戻ってきた

そして

そのままジャンプして

あたしに飛びついてくる

ネコくんを受け止めた瞬間

真っ暗なような

まぶしいような

よくわからない状態になって

周りが見えなくなった

そしてあたしの手になにか固い感触が…

「にゃー」

「ふあ？」

ネコくんを抱っこした状態で、ベッドに倒れてるあたし。
夢…かな？

また寝ちゃってみたい。

腕をゆるめるとネコくんがとことこ歩いて、少し離れたところに座った。

もしかして苦しかったかな…ごめんね。

頭をなでてあげると、気持ちよさそうに目を細める。

そのとき、またひゅつと涼しい風が入ってきた。

そっか、閉めてなかったっけ。

閉めなきゃって思ったとき、ネコくんがこっちを向いて座りなおした。

そして、お辞儀するみたいに頭をぴよこつと下げた。

そのしぐさがお礼をしているみたいで、思わずあたしも（座ったままだったけど）お辞儀を返しちゃった。

ネコくんは窓に向って歩きだして、一度こっちを振り返って、両目をパチツとつむってから、ぴよんと窓枠から出て行った。

それにしても、変な夢ばかり…

前によく見た夢は最近見てなかったけど、今日の夢はとびきり変だったよね。

もつと楽しい夢とかいっぱい見れたらいいのにな。

窓を見ると、今日も空は澄んでいる。

ちよつと涼しいけど、いい天気になりそう。

そろそろいつもの時間だから、準備しなきゃ。

窓を閉めて、服を着替える。

そういえばこの服もちよつと朝や晩は寒かったりするよね。
マリーさんに相談してみようかな。

よっし、準備完了。

2回も寝たのに、何だかいつもよりちょっと眠い気がするけど、今日も1日、がんばるぞっ！

89 湯浴み場

「この建物だよね？」

「ええ、そうよ。」

「それじゃ行きましょうか。」

今日は湯浴み場に来ることになったの。

ちよつと涼しくなってきたから、あつたまるのが目的の人が増えてくるんだつて。

あたしたちは、午後の休憩時間を利用して来てるんだけど、街の人たちがよく使う時間は、お仕事が終わってからだから、その前に来れるのは、人も少ないみたい。

クルトさんはお留守番してるつて言つたから、マリーさんと2人で来ることになったんだけど、割と普通の建物っぽい……？
白枝亭くらいの大きさかな？2階はないみたいだけど。
よく見たら入口が2つある。

「男、女……」

「それじゃ入りましょうか。」

「え、うん。」

マリーさんの後に続いて建物に入る。

もちろん女つて書いてある方に。

入るとすぐにカウンターがあつて、おばさんが座つてた。

「いらつしゃい。」

「2人分と、棚は1つでお願いします。」

「はい、それじゃ銀貨3枚と半ね。」

マリーさんがお金を払って、小さな鍵と服みたいなものを受け取った。

そのまま奥へ進むマリーさんについていくと、少し段になってるところがあつて、そこでサンダルを脱いじやった。

あたしもまねしてサンダルを脱いで、持って入ったところには、扉のついた棚がずらつと並んでた。

「えつと、65…あ、ここね。

ミア、ちよつと鍵開けてくれる？」

そう言つて、マリーさんはさっき受け取った小さな鍵を渡してくれた。

扉の鍵穴にその鍵を差し込んで回すと、カチャツと音がして扉が開いた。

中は結構大きいんだ。

「それじゃ、これに着替えて、脱いだ服と荷物は棚に入れてね。」

「着替えるの？」

「そつよ、これはお湯に入るときの服なんだから。」

お湯に入るのに服を着るなんて、変な感じ。

とにかく受け取った服を広げてみたら、袖がなくて丈の長い、羽織るだけって感じのものだった。

「前に紐があるでしょ。

それで結んでとめればいいのよ。

ほら、こんな風に。」

マリーさんを見ると、もう着替え終わつてた。

ほんとだ、合わせる部分と脇の部分に紐があるから、前を少し合わせて紐を結ばいいんだね。

…と、こんな感じかな？

「大丈夫みたいね。」

髪をまとめてあげるからちよつと後ろ向いてね。」

そいえば、マリーさんも髪をまとめてアップにしてる。

後ろを向いたら手早くマリーさんが髪の毛をまとめてくれた。

「ありがとです。」

「どういたしまして。」

それじゃ行きましょう。」

マリーさんが棚の扉の鍵をかけて、首から下げた。

あと、小さなカゴに何か入れて持つてるけど…

棚があつた部屋の奥の扉に入ると…あれ、外？

建物に囲まれてる中庭みたいなのに、屋根だけの部分があつて、その下にお湯が貯まつてるところがあつた。

「まずは体を流してからね。」

かけるわよー？」

「は、ひっ…あー…あつたかいー。」

マリーさんが、手前に貯めてあつたお湯を桶で汲んであたしにかけしてくれた。

ちよつどいいあつたかさで、何だかほつとする…

マリーさんは自分にもお湯をかけてる。

あたしがすればよかったかな…

お湯が貯まってるところは、きれいな石作りになってる。階段みたいになってて、そのままお湯に入れるんだね。

「滑らないように気をつけてね。」

「はい。」

ひあっ！」

ジャポン、と足がお湯に入ると、さっきかけてもらったお湯よりちよつと熱かった。

でも、ゆっくり入ればだいじょぶかな…

そのままお湯の中をじゃばじゃば進んでく。

「ここでもいいかしら。」

壁際に段があるから、座れるわよ。」

マリーさんと並んで座ると、肩の上くらいまでお湯につかっちゃう。最初はちよつと熱いかなって思ったけど、体全体がじわーっとあつたまってくるこの感じ、結構いいかも。

でも、しばらくおしゃべりしながらお湯に使ってたら、ちよつとポーツとしてきた。

「ミア、大丈夫？」

もしかしてのぼせちゃったかしら？

少し縁に上がって横になるといいわ。」

「はい。」

お湯から上がってごろんとすると、風がとっても気持ちよかった。何だかこのまま眠れそう…

「のぼせはよくなった？」

あんまり外にずっと出てると、体が冷えすぎるから、もう一回入ってね。」

「ふぁ、はいー。」

そういえばちよつと体が冷たくなってる気がする。

あわててお湯に入るとまた熱かったけど、やっぱりすぐになれちゃう。

「さ、ちよつと上がりましょ。」

頭も流さなきゃね。」

今度は長くないように気を付けてくれてたみたい。

お湯がたまつてるところの横に、入ってきたときとは別の建物があった、そこに入った。

「ここは洗い場よ。」

その樋にお湯が流れてて、必要なときに栓を抜けばお湯が流れてくるのよ。

はい、それじゃここに座って。」

小さな腰かけに座ると、マリーさんがカゴから何かを取り出した。豆くらいの小さな粒、それを少しお湯をためた桶に入れてかき混ぜてる。

「その粒って何ですか？」

「あれ、ミア使ったことなかったかしら？」

うちにも置いてあるんだけど…」

…あつたつけ？見たことない気がする。

あたしが気づかなかつただけかなあ…？

「これは頭を洗うためのものよ。」

普通のセッケンだと髪が傷むけど、これなら髪を傷めずに洗うことが出来るのよ。」

「ほえ…あたし、お水がお湯で流してるだけだったよー。」

「ごめんね、気づかなくて。」

帰ったらどこにあるか教えるわね。

それじゃ目をつむって…」

あたしが目をつむると、頭にお湯がちょっとだけかかった気がした。たぶんさっきお湯に混ぜてたのだよね。

マリーさんが頭を優しくなでるように洗ってくれてる。

「流すわよー。」

という声の後、頭にお湯がかかってきた。

何度かお湯で流した後、水気を切ってまた髪をまとめてくれた。

「わたしも洗っちゃうから、ミアはその間に体を洗っておいてね。」

あ、体を洗うときは、いったん脱ぐのよ。

そこにかけておけばいいから。

セッケンはカゴに入ってるからね。」

「はい。」

あたしが体を洗ってる間に、マリーさんは自分の髪も洗って、体も洗い始めている。

マリーさんが早いのか、あたしが遅いのか…きっと両方だよ…

そのあともう一度、お湯につかって体をあつたためてから出ることもなった。

髪はまだちょっとしっとりしてるけど、乾くとさらさらになるんだって。

ちよつと楽しみかも。

初めての湯浴み場は、ほっこりあったかで大満足。

でも、ちよつと急いで戻らないと、宿の準備が間に合わないかも…？！

90 完成

「いらつしゃいませ。」

「おはよう、今日もいつもの頼むよ。」

「はい、かしこまりました。」

今日も朝の食堂はいつも通りのにぎわいです。

朝と夜がちよつと涼しすぎるかなって思うけど、そんなのには負けません。

だって…

「おまたせしましたー。」

「おつ、来たね、ありがとう。」

「そういえばミアちゃんも今日から衣替えかい？」

「はい、朝がちよつと涼しいから。」

そう、袖の長い服に替えたんだよね。

生地はそんなにぶあついわけじゃないけど、袖があるだけで結構違うんだよね。

エプロンは一緒なんだけどね。

朝の食堂も無事終わり、お片付け。

せっかくの長袖も、水場でのお仕事の時だけは、ちゃんと袖をまくらなきやいけないんだけどね。

油が冷えて固まったりしてるとお湯を使って洗い物をするのもあるんだよね。

でも洗うのに全部お湯を使うほど沸かしてられないっていうのもあって、水を使う方が多い。

あと、お湯ばっかりだと、手が荒れちゃうのが早いんだって。

ただやっぱり、お湯を使ったあとに、お水を使ったりすると冷たさがします…

片付けがだいたい終わって、次はお部屋の掃除と洗濯。

マリーさんと手分けして、お泊りのお客様が出発した部屋のシーツや布団をまとめて掃除をする。

布団を干したり、シーツを洗ったりもしなきゃいけないから、たくさん出発されると大忙しだったりするんだよね。
ちょうど掃除をしているときに、クルトさんが上がってきた。

「ミア、今日のお昼の後、少し時間はあるかな？」

「今日は何も予定がないからだいじょうぶです。」

「それなら、少し時間をもらっていいかな？」

「はい、いいですよー。」

それだけ確認してクルトさんは降りてった。

んー、何だろ？お買いもののお手伝いとかかな。

お昼の営業も終わって片付けも一段落。

ちよつと休憩してから、クルトさんと出かけることになった。

マリーさんも話を聞いてたみたい。

宿を出て進んでいく先は、市場とはちよつと違う方向。

こっちは…あ、もしかして

「鍛冶屋さんに行くの？」

「そうだよ。」

「この間頼んでいた包丁が仕上がったって連絡があったからね。」

「そっかー、どんな風になってるかな？」

「何だかわくわくしてきた。」

鍛冶屋さんに着いて、中に入るとカウンターには小柄な女の人が出た。

「いらっしやいませ。」

「こんにちは、エレインさん。」

「あ、クルトさん、お待ちしてましたよ。」

「ちょっと待っていてくださいね。」

「そういうと、エレインさんは奥に入っていた。」

「今の人は誰だろう？」

「って思ってたら、ラルフさんが来た。」

「クルトさん、こんにちは。」

「父さんもすぐ来るので、先に物を確認してもらえますか？」

「そういつて、布にくるまれた物をクルトさんに差し出した。」

「包みを開けると、ピカピカの包丁。」

「あたしが持ってきたのとはだいぶ違う感じだけど、クルトさんはそれを握ってみたり、回しているんなど見てる。」

「うん、さすがだね。」

「この短期間で仕上げてくれるのはボルトさんとこだけだよ。」

「ありがとうございます。」

「俺も早くできるようになりたいんですけどね。」

「ああ、期待しているよ。」

「そうそう、マリーがこの間の剣は全く問題ないと伝えてくれて。」

「そうですか、よかった。」

そうこうしているとボルトさんと、エレインさんが戻ってきた。ちようどお仕事中だったみたいで、とっても暑そう…

「やあ、クルトさん、ちようどとりこんでてすまない。母さん、お茶を頼む。」

「はいはい、いつてきますね。」

…あれ？えと、エレインさんってボルトさんの奥さん？
ってことは…

「あの…エレインさんってラルフさんのお母さんですか？」

「へ？ミアちゃん知らなかったのか…」

俺の引退式の時も、白枝亭にいたんだけど…」

「はわわ…覚えてないです…」

あのときは、まだあんまり誰も知らなかったし、お客様が多くて全然覚えてなかったよ…

それに、ラルフさんのほうがエレインさんよりずっとおっきいんだもん…

「さて、クルトさん、仕上がりの方は問題ないですか？」

「ええ、いつも通りばっちりですよ。」

この品質でこの納期だから、ボルトさんのところに頼ってしまうんですから。」

「いやいや、わしらがつくったものをあそこまで使ってもらえるのは、わしらにとってもありがたいことですね。」

さて、もう1つの注文の方が…ラルフ、出してくれ。」

ラルフさんが、さっきと同じような布の包みを出して、あたしに差し出してくれた。

ぱつと見てわかるのは、さっきのよりちっちゃいこと。あたし用、ってそういうことなのね。

「とりあえず持ってみてくれるかな。」

「あ、はい。」

包みを開けて包丁を取り出して持ってみる。

クルトさんの包丁よりちっちゃいけど、あたしが使うにはちょうど良さそうな長さになってる。

「ふむ、まずまずといったところかな。」

にぎりが少しごついかな…削ってみるかな。

ミアちゃん、ちょっと貸してもらえるかな。」

ボルトさんに包丁を渡すと、その場でにぎるところを削っていく。

あたしはあんまり違和感なかったんだけど、ぱつと見ただけでわかつちやうのかな？

それってすごいよね…

「ふむ、こんなものか…」

ミアちゃん、もう一度握ってもらえるかな?。」

「あ、はい。」

…ふあ…すごい、ぴったり!。」

「いい感じだの。」

それじゃ、こっちはしっかりと仕上げをしておくからの。」

包みの布と包丁をボルトさんに返す。

今でも十分すごいのに、まだ仕上げが残ってるんだ。
大変なんだね…

「あらあら、もしかしてお話は終わっちゃいましたか？
おまたせしてしまいましたね、どうぞ。」

「ああ、ありがとうございます。」

「いただきますー。」

ちょうどエレインさんがお茶を持って戻ってきたので、そのままちよっとお茶会モードに。

涼しくなってきたから、あったかいお茶がおいしい。

ボルトさんとラルフさんは冷たいお茶っぽい。

だって…カップの中で浮かんてるのって、きつと氷だよな。

ボルトさんは一気に飲み干してる。

「っふうー、体に沁みる…」

「ボルトさんたちは冬でも冷たい飲み物が必要みたいですね。」

クルトさんがそんなボルトさんを見て言った。

そしたらボルトさん、はっはっはっっておっきな声で笑って答えてる。

「まあ、1年中、火と向き合ってますからな。

母さんのおかげで仕事もはかどるし、休憩も幸せですな。」

「ふえ…エレインさんの？」

「母さんは魔法士ソーサラーなんだよ。

赤と緑を使えるから、火も扱えるし、温度を下げて水を凍らせることもできるんだよ。」

「まあ、ラルフみたいに冒険者になったことはないですけどね。

一応魔法士ギルドの一員なのよ。」

んー、もう何だかびっくりすることだらけで、いろいろ聞いてみたいとも思ったけど、お仕事の邪魔もできないよね。

クルトさんが包丁の代金を支払って、帰ることになった。ラルフさんが外まで見送りに来てくれた。

「ミアちゃんの方は、仕上がったらまた届けますね。」

「ああ、悪いね、助かるよ。」

それじゃまた。」

「さよならですー。」

「ありがとうございます。」

短い時間だったけど、何だかいろいろあったりびっくりしたりでちょっと疲れちゃった。

夕方の準備まで、今日はちょっとお部屋で休憩にしようかな…

9 1 おかえりなさい その1

「いい感じみたいだね。」

「うん、とってもつかいやすいです。」

今日の午前中にラルフさんが届けてくれたあたしの包丁を、実際に使ってみて。

大きさもちょうどいいし、にぎる部分もこの間削ってもらったあとで、ピカピカにしてもらってる。

これなら皮をむくのもちよつとは早くできるかな？

「それじゃ、準備しようかな。」

ミアも、食堂の方がすんだら手伝ってもらおうからね。」

「うん、がんばるー！」

食堂の準備をするために、いったん包丁を片づけとく。

道具をしつかり管理するのもプロの心得なんだよ。

クルトさんが言ってたんだけどね。

水場で布巾を2つしぼって食堂に向かう。

食堂では、マリーさんがもう準備を始めてた。

「ごめんなさい、遅くなっちゃった。」

「大丈夫よ。」

新しい包丁、試してたんでしょ？

どうだった？」

「うん、とっても使いやすいよ。」

あ、マリーさん、布巾どうぞ。」

「ありがとう、ミアも本格的に調理補助ね。」

「えへへ、がんばります！」

マリーさんにも布巾を渡して、あたしはテーブルを拭いていく。そのとき、カランカランとベルの音がして、玄関の扉が開いた。

「「いらつしやいませ。」」

マリーさんと声がそろっちゃった。

この時間ならお泊まりのお客様かな？

「たっだいまー。」

あ、ミアちゃん元気してた？」

「エステルさん！」

おかえりなさいー。」

この間、うちに泊まってくれたエステルさんだった。

あれ、でも1人かな？

他の人はどうしたんだろ？

って思ってたなら、また扉が開いて4人入ってきた。

「エステル、勝手に走りだすんじゃない…」

ああ、女将さん、エステルが失礼した。

また2部屋頼みたいのだが…」

「ええ、大丈夫よ。」

ミア、ここはいいからご案内お願いね。」

「はいー。」

カウンターで鍵を取って、エステルさんたちを案内する。

って言っても、前と同じ部屋が開いてるから、そこに入ってもらったことになったんだけど。

「それでは、ごゆつくりです。

「ご飯はどうしたらいいですか？」

「ん？ああ、そうか。

「君は気が利くな。」

「めずらしー、フィルっちがほめてるー。」

エステルさんがリーダーさんをツンツンつついて笑ってる。

んー、エステルさんはやっぱりエステルさんだ…

「…お前のこともほめてやりたいんだがな。

「そうさせてくれないのはなぜかな？」

「人のことを勝手に略して呼ぶしなあ… 今晩は久々に特訓でもするか。」

「ぎく… え、えつと… フイランダー隊長、わたくし、体調が…」

「つまらんネタでごまかそうとするな…」

「と、すまない、食事は前と同じようにしてもらえるかな？」

「かしこまりました。」

リーダーさんに確認をお辞儀してさがろうと思ったら、もう一度声をかけられた。

「あと… いや、いい。」

「ほへ…？」

「すまない、気にしないでくれ。」

「はひ… 何かありましたらまたお声かけくださいね。」

んー、どしたんだろ？

でもこっちから聞いておせっかいだったらだめだもんね。

とにかく降りて準備をしなきゃね。

階段をトントントンと降りてくと、マリーさんがもうカウンターに

入ってた。

「あ、ミア、ありがとう。」

もうこっちは大丈夫だから、クルトの方を……」

そのときあたしの後ろで、トントントンと音がした。

振りかえると、さっきのパーティーの人……名前知らないお兄さんが降りてきてた。

「どうかなさいましたか？」

「すみません、武具を修理したくて、鍛冶屋に行きたいのですが、場所を教えてくださいませんか？」

「あら、それは大変ね……ミア、ラルフのところに案内してあげて。」

「忙しいのにそんな……地図が何かあれば……」

「いいえ、きつとこの子が一緒の方が早いと思いますから。」

それじゃミア、よろしくね。」

「はい。」

お兄さんはちょっと迷ったみたいだったけど、丁寧にお辞儀してよろしく願いしますって。

そういうわけで、お兄さんを案内することになった。

「えーっと、ミアさんだよね。」

わざわざありがとう。」

「だいじょうぶです。」

えと……」

「ああ、ごめん、僕はクレメンテ、よろしくね。」

「クレメンテさん、よろしくです。」

そのあと、クレメンテさんとお話ししながら鍛冶屋さんに向かったの。

クレメンテさんは斥候^{スカウト}っていう職業^{クラス}で、迷宮とかの罠を解除したり、逆に仕掛けたりみたいなこともするんだって。他にもいろんなことを任されてるみたいだけど、難しいこともあるからって。

そんな話をしながら、鍛冶屋さんに到着した。

「あ、エレインさん、こんにちはー。」

「あら、ミアちゃん、包丁どうだった？」

「ばっちりですー。」

「よかったわ。」

「そちらの方は？」

カウンターにいたエレインさんが、クレメンテさんの方に目を向けた。

わざわざあたしに案内するようにってマリーさんが言ってくれたんだから、ちゃんと紹介しなきゃね。

「あ、うちにお泊まりのお客様です。」

「武具の修理をお願いしに来たんです。」

「そうですか、いらつしやいませ。」

「どのような感じになっておられるのでしょうか？」

「あ、これですけど…」

そういつてクレメンテさんが持ってた剣と盾を見せて説明してる。

エレインさんがそれを聞いてメモを取って…

「って何度かやりとりして、無事お願いできたみたい。」

「白枝亭なら、またこちらからご連絡差し上げますね。」

「すみません、ありがとうございます。」

「いえいえ、うちも白枝亭には贔屓にしていたいですので。」

ミアちゃんもありがとう。

クルトさんとマリーさんによろしくね。」

「はいー、それじゃまたですー。」

エレインさんにあいさつして、クレメンテさんと帰ることにした。

クレメンテさんが心配してくれたから、ちよつと早足で帰ることに
なっただけど、ちゃんと準備に間に合うように帰れるかな？

92 相談のお願い

夜の食堂も少し落ち着いてきたところで、エステルさんたちに食事を持っていくことにしたんだけど、今日はちよつと忙しいから、マリーさんは食堂にいてもらつて、あたしだけで運ぶことになった。もちろん1回じゃ無理だから、何度か往復しなきゃいけないけど。扉をノックして声をかける。

「お食事をお持ちしました。」

「ああ、すぐ開ける。」

ちよつと待つてくれ。」

扉はすぐに開いて、クレメンテさんが出てきてくれた。

そのとき、隣の部屋の扉も開いてエステルさんが顔を出す。

「ミアさん、ありが…」

「あー！何でクレムたちが先なのよっ！

わたしもお腹すいたー！」

…びっくりした、すつごくおっきな声なんだもん。

クレメンテさんも苦笑いしてるし。

「ではエステルたちに先に渡してください。」

「はい。」

「やった、クレムありがとー。」

エステルさんは、あたしが持ってきたトレーをその場で受け取って部屋に戻つてく。

よっぽどお腹すいてたのかな…

「ミアさん、僕も運ぶのを手伝いますよ。」

「え、でも…お客様にそんなこと…」

「夕方、鍛冶屋さんにお付き合いたいだけのお礼もありますからね。ぜひ手伝わせてください。」

結局、クレメンテさんが折れてくれなかったから、お手伝いしてもらうことになった。

残り3つだったから、クレメンテさんが2つ持ってくれて、あたしは1つだけ…いいのかな…

とにかくお部屋まで運んでく。

「またエステルの我儘か？」

「いつものことですからね。」

ところで隊長、今頼んでおいてはどうですか？」

「ああ、そうだな。」

ミアさん、今晚、少し女将さんに話を伺いたいんだが、時間をつくってもらえないか聞いてもらえないかな？」

「はい、わかりました。」

片付けのときにお返事できるように聞いておきますね。」

「よろしく頼む。」

マリーさんにお話って何だろう？

忘れないうちに伝えなきゃ…

食堂もお客様がほとんど帰ったから、エステルさんたちの食器を片

付けに行くことになった。

マリーさんはまだ残ってるお客様がいるから、あたし1人で上る。そうそう、フィランダーさんに返事もしなきゃいけないよね。扉をノックして声を掛けると、するとすぐに返事があった。

「すまないね、食器は奥にまとめてある。

クレム、エステルに言ってきてくれ。」

「わかりました。」

声を掛けられたクレメンテさんが、部屋を出て行った。

エステルさんも何か用事かな？

「それで、女将さんは…」

「はい、ちよつとならだいじょぶって行ってきました。」

「そうか、それではいつでもいいので時間をつくってもらえたら、声を掛けてもらえるように伝えてほしい。」

「わかりました。」

それじゃ食器を運びますね。」

奥のテーブルに乗ってる食器（きっちり重ねてもらえてた）を持って部屋の外に出ると、なぜか食器を持ったエステルさんが…何かふくれてる…？

「あの…ありがとうございます。」

あたしの持つてるのに重ねてもらえますか？」

「…いいの、ミアちゃんのお手伝いするんから！」

ひう…何か怖い…

隣でクレメンテさんが口を押さえて笑うのをガマンしてるけど…何か詳しく聞くのも怖いし、お願いしちゃっていい…のかな…？

結局、エステルさんと一緒に食器を運ぶことになった。
降りてきたときには、お客様はみんな帰っちゃった後みたい。

「マリーさん、伝えておいたよ。」

時間がつくれたら声を掛けてほしいって。」

「ええ、わかったわ。」

ところで…」

マリーさんの視線の先には食器を持ったエステルさん。
さつきみたいにふくれてはいないけど…

「すみません、わたしが運ばせてほしいって言ったんです。」

「そうですか…どうもありがとう。」

「いえ、いいんです。」

ミアちゃん、どこに運べばいいの？」

「あとはあたしがやります。」

エステルさんありがとです。」

エステルさんは返事を聞くとちょっと嬉しそうになって、そのあと降りてきた階段をチラッと見た。
上を気にしてるみたい。

そのあとちよつと考えて、テーブルに持ってた食器を置いた。

「ミアちゃんありがと！」

「ごめんね、それじゃお願い。」

「はひ？こちらこそありがとです。」

エステルさんは両手を合わせてウインクして、そのまま小走りに階段を上がっていった。

もしかしてクレメンテさんにさせられたのかな…

エステルさんが置いていった食器も一緒に持って厨房に向かう。
先にテーブルの方を片付けちゃったために、布巾をしばって食堂に戻る。

さ、片付け片付け！

片付けも終わって、いつもならお茶するところだけど、今日はフィランダーさんがお話したいっていったから、そっちだね。

「ミア、それじゃ呼んできてもらえる？」

「はい。」

2階が上がって、フィランダーさんのお部屋の扉をノックする。
返事が返ってくるかなって思ってたならそのまま扉が開いて、ちょっとびっくりした。

「何度もすまないな。

時間をつくってもらえたのだろうか？」

「はい、食堂の方に降りてもらえますか？」

「ああ、もちろんだ。

少し待ってくれ。」

そういうとフィランダーさんは隣の部屋をノックした。

レイアさんの声かな？

返事が返ってきてすぐに扉が開いた。
顔を出したのはレイアさん。

「レイア、あれを持ってきてくれ。」

「はい、隊長。」

あれ、って何だろう？

ちよつと待つてたらレイアさんが布に包まれた長い棒みたいなものを持って出てきた。

「お待たせしました。

ミアちゃん、お願いします。」

「えと、食堂です。

どうぞ。」

お話に来るのはフィランダーさんとレイアさんの2人だけみたいだね。

いったい何のお話なのかな…あの包みが気になるけど…

9 3 相談の内容

食堂に降りると、マリーさんとクルトさんがお茶の準備をしていた。

「こちらからお願いしているのに申し訳ない。」

「いや、うちはお持て成しが商売ですからね。」

ところで、お2人だけですか？

とりあえず腰を下ろしてください。」

「はい、失礼します。」

フライランダーさんがクルトさんにお辞儀して、レイアさんと一緒に座った。

レイアさんはテーブルの上に包みを置く。

何か大事そうなお話っぽいよね。

「マリーさん、あたし部屋に戻ってた方がいいかな？」

「隊長、ミアちゃんと一緒にいてもらってもいいですよね？」

「ああ、構わない。」

小さな声で聞いたつもりだったんだけど、返事は違うところ、レイアさんとフライランダーさんから返ってきた。

とにかくだいたいじょぶみたいだから、マリーさんの隣のイスに座って一緒にお話聞くことになった。

「それで、わたしに話って一体？」

「まずはこれを見てもらいたいのです。」

レイア、開けてくれ。」

「はい。」

レイアさんが開いた布の包みからは、きれいな赤色の杖が出てきた。ほんのり光ってるようにも見えるその杖は、よく見るとちょっと明るい部分や暗い部分があつて、まるでかまどの火みたいにゆらゆらしてた。

「ふっわあ…すごい…」

「なかなかこんなものにはお目にかかる機会はなさそうだね…」

クルトさんも目を細めてみる。

あたしはこんなきれいなもの見たことないけど、クルトさんもそうなのかな？

ふと隣を見ると、マリーさんが何か難しそうな顔してる…

「これ…もしかして「オリジナルカラーズ根源たる色彩」なのかしら？」

「流石ですね、その通りです。」

「それでわたしに話を聞きにきたってわけね…」

でもわたしはもう持ってるじゃないわよ？」

「はい、わかっています。」

現在の所有者の所在がわからないもので…」

「なるほどね…」

「根源たる色彩」って何だろ？

クルトさんは驚いてるみたいだし…知ってるみたいだね。

レイアさんもきつと知ってるよね。

ってことは知らないのあたしだけかな…聞いてもいいかな…？
ちよつとお話止まっちゃうてるしいいよね…

「あの…「根源たる色彩」って何ですか？」

「「えっ？」」

フィランダーさんとレイアさんが同時に声をあげた。
しかも同じ顔してる…うー、有名なものっぽい…

「ミアは知らなくてもしょうがないわよ。

「根源たる色彩」っていうのはね、神々が人に与えたと伝えられている6つの武器よ。

悪魔の力に対抗することができると言われているわ。」

「ほへ……悪魔の力に対抗…それってすごい…」

あれ？さっきマリーさんがもう持っていないって言うってたよね。
ってことは前に持ってたってことだよな…
もしかして…もしかするの？！

「あの…インセントホワイト「無垢なる白」って…もしかして…」

「よく覚えてたわね。」

そう、あの剣も「根源たる色彩」の1つよ。

さて…それでわたしに何を聞きたいの？

たぶんほとんどわからないと思うけど…」

改めてフィランダーさんとレイアさんの方を向いて、マリーさんが
尋ねた。

それにしても…すごい武器なんだね…

今度フェリックスさんに見せてもらわなきゃ。

「はい、俺たちは封印を解く方法を偶然知ることができただけで、
実は物についてはほとんど知らないのです。

今わかっているのが、これが「根源たる色彩」に間違いなさそう
だということ、名前が「揺らめく赤」フレアレッドであること、だけなのです。」

「つまり…使い方がわからないのね…」

「恥ずかしながら…その通りです。」

使い方があった…なかなか難しそう…

そいえば、マリーさんは「無垢なる白」を使えてたんだよね。
だから聞いているのかな。

「アンフィト大陸でも、1つ見つかったって話だけど、そっ
ちには聞かないの？」

ランプリングイェロー
「「高鳴る黄」のことですね。」

あの斧は、エルメート帝国の宝物として厳重に管理されているの
で情報がほとんどないのです…」

「そうなの…わたしは魔法士ギルドで時間を掛けて調べてもらった
だけなのよね。」

「無垢なる白」について言えば、まず剣との間に契約のようなも
のを結ぶこと、これを使うための条件だったわ。

使い方は、剣を使って印を結んで悪魔に傷を負わせる、だったん
だけど…剣だから、なのかしらね。」

そこでふうつとため息をつくマリーさん。

フィランダーさんとレイアさんも難しい顔してる…

「契約のようなもの、というのは、一度結んでも解くことができる
ようですね？」

「ええ、新しい契約を結べたからこそ、わたしはあれを引き継いだ
んだから。」

まあ調べてもらうのが一番だとは思うけど…使ったしたら誰が使
うかも考えないといけないわね。」

「使うのはレイアにしようと思っています。」

力量的にも問題はない…」

「ふうん…とにかく、これ以上はわたしにもわからないわ。」

「はい、ありがとうございます。」

何だか微妙な雰囲気になっちゃった…
問題、解決しなかったんだもんね…

……

……

…うう、みんな黙っちゃった。
どうしよう…

「あつあのっ… ちよとだけ… 持ってみてもいいですか？」
「ミア、ダメよ、だいじなものなんだから…」

思わず変なこと言っちゃった…
うん、ダメだよね…

そう思っただけで、レイアさんがフィランダーさんに話しかけたんだ。

「いいんじゃないでしょうか？」

わたしも隊長も何度も持つてるけど、ただの杖にしか思えませんし。」

「そうだな、難しい話に付き合わせてしまったし。

レイア。」

「はい。」

レイアさんは返事をする。「揺らめく赤」を持って、あたしのところまで来てくれた。

すごい、近くで見ても不思議…

何だか吸いこまれそうだよ。

「もう…」

ほんとすみません。」

「いいえ、ミアちゃんにはわたしもお世話になってますから。
さ、ミアちゃんどうぞ。」

「は、はひ…」

いざ持つとなると何だかキンチョウしてきた…

はわわ…手のひらに汗が…

エプロンでふいちゃえ！

レイアさんが差し出してくれたのを受け取ると、見た目よりも軽い
感じ…

何だかほんのりあったかい気がするのは気のせいかな…？

「ひう…ドキドキする…」

って、何これ…?!」

「「ミアっ!」「「ミアちゃん?!」「何だっ?!」」

そのとき、目の前が真っ白になって、みんなの声が遠くに聞こえた

…

94 とりあえず解決？

「ミア、大丈夫?!」

両肩を持たれて、誰かに揺さぶられてる…

あれ、そっか、目をつむってるから暗いんだ。

ゆっくり目を開けると、目の前にマリーさんの顔が見えた。

「あれ…?」

「大丈夫? 何ともない?」

「はひ… 何とも… ないと思う…」

クルトさんもレイアさんもフィランダーさんも心配そうに見てる…
えっと… 杖を持たせてもらって… 目の前が真っ白になって…

「どうなったの…?」

「とりあえず、杖を置きなさい。」

「ふえ?… あ、うん。」

マリーさんに言われて、まだ杖を握ってたことに気がついた。
よく見ると、杖の模様のゆらゆらがさつきより明るい… よね?
どこに置こうかときよろきよろしたらレイアさんが声を掛けてくれた。

「ミアちゃん、預かるわ。」

「はい、おねがいします。」

レイアさんに渡して、手を放すと、杖はまた元の明るさに戻っちゃったみたい。

んー…何なんだろう？

「ふう…とりあえず座りなさい。

レイアさんも座ってくださいね。

なぜこうなったかはわからないけれど、何が起こったのかはたぶんわかるわ。」

「それはいったいどういう…」

マリーさんの言ったことに、フィランダーさんが慌てたように聞き返してる。

えと…つまり…なぜっていうのはあたしのせいなのかな…

どうしよう…大変なことになってたら…

「ミア、落ち着きなさい。

別に大きな問題ではないはずよ。

なぜかはわからないけれど、「揺らめく赤」フレイレッドはミアと契約がなされた状態になっているわ。」

「『えええっ?!』『』『』」

…何かきれいにそろった。

でも、あたしはもちろん、フィランダーさんもレイアさんもクルトさんもびつくりしたのは間違いないよね…

「大丈夫よ、ミアが同意すればちゃんと引継ぎはできるはずだから。」

「そ、そうか…いや、夜に大きな声をあげてしまって申し訳ない…」
「しょうがないわよ…わたしだって驚いたもの。」

わたしのときは、契約の儀式、とでも言うのかしら、そういったことをしたんですけどね。」

えと、何だかやっぱりあたしが変なのかな…
うー…どうなっちゃうんだろ。
すっごく不安だよ…

「とにかく、先に引き継いでしましましょう。
レイアさん、魔法士ソーサラーよね。」

「は、はい、そうですね。」

「それなら 魔法語ルーンワード に問題はないでしょ。
わたしは覚えるのに苦労したんだけどね。

ミア…ミア？」

「は、はひっ？！ごめんなさい…」

ちよつといろいろ考えたら、自分の世界に入っちゃってたかな…
うつむいてたら、マリーさんがぎゅってしてくれた。

「はいはい、あんまり不安にならないの。
きつと大丈夫よ。」

とりあえず「無垢なる白」イノセントホワイトの引継ぎのときにやったことを「揺らめく赤」に置き換えて説明するから、ミアもレイアさんもしっかり聞いてね。」

「はい。」

あたしとレイアさんはもちろん、フィランダーさんもクルトさんも真剣な顔でマリーさんの言葉を待ってる。
ちゃんと聞いて、ちゃんと引継ぎしないとね。

「まずは引き継ぐ側、つまりミアが「揺らめく赤」を持って、こう言うの。」

我、「揺らめく赤」と契約を交わす者なり。
今ここに、「揺らめく赤」を新たな契約者へと引継がんとす。

新たな契約者はここへ。

ミアも 魔法語 大丈夫だし、いけるわね？」

「うん、だいじょぶ、ちゃんと覚える。」

よっし、間違えないように…

しっかりと…

覚えるぞっ。

「たぶんこのとき、さっきみたいに杖が光るから、引き継がれる側、つまりレイアさんのことね。」

それを確認して杖に触れてください。

そして、2人で触れた状態で、今度はレイアさんがこう言つの。

我、「揺らめく赤」を引き継ぎ、新たな契約を交わす者なり。

「揺らめく赤」よ、我を受け入れたまえ。

我が名はマリー、赤とともに歩む者なり。

いけそうですか？」

「は、はい…でも…」

「でも？」

「あの…途中でマリーさんの名前が出てきたんですが…」

…うん、我が名はマリーって言ってるよね。

マリーさん、あって顔になってる。

「ごめんなさい、わたしは 魔法語 知らないから、契約の練習したときに自分の名前しか覚えてなかったのよ…」

だから、そこに自分の名前を当てはめればいいわ。」

「そ、そうだったんですね…びっくりしました。」

でも、それなら大丈夫だと思います。」

「我ながら、よく覚えてたもんだわ…」

内容なんてもう忘れるとこだったわよ…

とにかく、先にやってしまったらどうかしら？」

レイアさんの方を見ると、笑顔でうなずいてくれた。
だいじょぶだね。

よし、それじゃまずは杖を持つんだよね。

「あ……」

「どうしたの？」

杖を持ったときに、頭に何か浮かんだ気がした。

ううん、違う、杖が何か教えてくれているような……

その教えのままに杖を振っていくと、杖の先から出た赤い光が線になって残っていく。

そしてきれいな模様みたいなものが完成した。

これは……悪魔の攻撃を防ぐための力なの？

「ミア……もしかして使い方がわかったの？」

「んー、何か杖が教えてくれたみたいなの……」

悪魔の攻撃を防ぐための力？」

みんなが目を丸くしてこっち見てる……

何か恥ずかしい……

って思ったら、光の線でできた模様が消えちゃった。

「意識を集中していないと維持できないものなのかしら……」

とにかく、引継ぎをすませてしましましょう。」

「うん。」

えっと……我、「揺らめく赤」と契約を交わす者なり。

今ここに、「揺らめく赤」を新たな契約者へと引継がんとす。

新たな契約者はここへ。」

言い終わると、マリーさんの言った通り杖がさつきみたいに明るくなった。

それを確認してレイアさんが杖の先をにぎる。

「我、「揺らめく赤」を引き継ぎ、新たな契約を交わす者なり。」

「揺らめく赤」よ、我を受け入れたまえ。

我が名はレイア、赤とともに歩む者なり。」

レイアさんが言い終えたときに、杖はさらに明るく一瞬だけ輝いた。そして、すぐに元の明るさに戻ってる。

「はい、もう大丈夫のはずよ。」

それにしても、「揺らめく赤」が親切なのかしら…？

「無垢なる白」のときは、そんな簡単に使い方までわからなかったのに…」

「あ、でもわたしにも杖の意味みたいなものが感じられます。」

ミアちゃんがやったことと同じことはできそう。」

ふう…とりあえず無事お返しすることができたみたい…

みんなもちよつとほつとしたみたいでよかった。

「それ以上に詳しいことは、もうギルドにお世話になるとかし無理じゃないかしらね。」

「いえ、こんなにわかってしまうだけでも十分です。」

本当にありがとうございます。」

レイアさんがフィランダーさんと一緒にマリーさんにお辞儀してるけど、マリーさんはちよつと困ったように笑ってる。

「まあ、よくわからないことだらけですけどね。
とにかく、今日はこれでお開きにしましょう。」

そいえばだいぶ遅くなっちゃってる。

レイアさんとフィランダーさんには先に上がってもらって、ぱつと片付けなきゃ。

2人におやすみなさいのあいさつをして上がるのをお見送りしてから、カップを重ねようとしたら、クルトさんがカップを持ってくれた。

「ミア、私がやっておくから今日はもう上がっていいよ。」

すっかり休んで、明日はまた仕込みの方も手伝ってくれるかな？」

「クルトさん、ありがとです。」

仕込みもがんばるね。

それじゃおやすみなさいです。」

「ああ、おやすみ。」

「おやすみ、ミア。」

何だかいろいろありすぎでもう疲れちゃった。
今日はすぐ寝ちゃいそう…おやすみなさい…

95 朝寝坊

ドンドンドン。

何か鈍い音が聞える…

「ミア、まだ寝てるの？」

…あう？

マリーさんの声だ…

うー……う？

！！

もしかして寝過した？！

「は、はひ、起きました！」

慌てて飛び起きて、鍵を外す。

扉を開けると、マリーさんが立ってた…

「ごめんなさい…」

「大丈夫？疲れてるんじゃない？」

「だいじょぶです、着替えてすぐ降ります。」

マリーさんはあたしの顔をじーっと見てたけど、うん、とうなずいて頭をくしゃつとなでてくれた。

「それじゃ、下で待ってるわね。」

「はい。」

できるだけ早く着替えなきゃ。

髪もまとめないと。

むー…寝坊なんてしたことなかったのに…

…そいえば何か夢を見てた気もするけど、思い出せないや。

なんて、ボーッと考えてる場合じゃないよね。

とにかく大急ぎで用意して食堂に行かなきゃ！

あ、でも廊下は静かに歩かないと、まだお客様はお休み中かもしれないもんね。

「ごめんなさい、おまたせです。」

「大丈夫よ…あ、ミアちょっとこっちに来て。」

テーブルも拭いてくれてるマリーさんが、イスを1つ引いてあたしを呼んだ。

座ったらいいのかな？

マリーさんの方を向いてイスに座ったら、マリーさんは後ろに回っちゃった。

「ちょっと髪をほどくわね。

いくら急いでも、ちょっとぼさぼさになりすぎよ。

女の子なんだからね。」

「はう…」

マリーさんは髪を結うのが得意なんだよね。

あたしが自分でやるよりもずっと早い。

今も手早くほどいて結び直してくれた。

「はい、これで大丈夫。

こっちはわたしがやっておくから、クルトの方を手伝ってね。」

「ありがとです。

じゃ、いってきますー。」

厨房に入ると、クルトさんが忙しそうに動いてる。
仕込みから手伝うって言ったのにできなかった…

「クルトさん、ごめんなさい。」

「おはよう、ミア。」

調子はわるくないかい？」

「あ、だいじょうぶです。」

「ならよかった。」

それじゃ準備頼むよ。」

マリーさんもクルトさんも優しい…けど、そこに甘えてちゃダメだよね。

もう寝坊なんてしないようにがんばらなきゃ。

とにかく、今からしっかりお手伝いして、出遅れた分を取り返そー！

朝の食堂も無事終わって、今度は自分たちのご飯を準備する。

だいたいそろったところで、いつものようにあたしがマリーさんに伝えに行こうと思ったんだけど。

「ミア、盛り付けをまかせていいかな？」

マリーには私が声を掛けてくるから。」

「はひ？わかりました。」

スープをよそって、パンをそえて並べとく。
ちよっと待っていると、マリーさんだけが来た。

「はれ？クルトさんに会わなかった？」

「クルトはちょっと用事。」

先にわたしたちだけすませてしまいましょう。」

そんなわけで、マリーさんと2人でご飯を食べ始める。
食べながらマリーさんがあたしにいろいろ聞いてきた。

「ミア、どこか具合がおかしくなったりはしてない？」

「ん…だいじょぶだと思う。」

「疲れてたりとか…」

「全然平気だよ。」

「そう？それならいいんだけど…」

あたしが寝坊しちゃったから、体調が悪いんじゃないかって思われてるのかな？

でも、別にいつも通りで、疲れてないし、だいじょぶなんだけど。

「寝坊はしちゃったけど、たぶん何ともないよ。」

いつも通り元気だよ？」

「そう…」

実は昨日の件が引つかかっているのよ。」

昨日…フレアレットっていうと、あれだよね。

「揺らめく赤」…

ちよつとびっくりしたけど、ちゃんとレイアさんに引き継げたから問題ないと思うんだけど…

「触っただけであんなに反応するなんて思わなかったし、何かミアに反動みたいなのがあつたら困るでしょ。」

「反動？」

「そうね…たとえば魔法を使うと、マナを消費するのよね？」

「うん、体の中から抜けてくみたいに感じるよ。」

「強い魔法ほど、たくさんマナの消費を使うでしょ。」

それと同じように、強い力行使するには何か代償が必要になったり、反動があったりするみたいなの。

だから、もし今回のことでミアに何かそういったことが起こってたら、って思ったら心配になってね。」

そっか、それでずっと気にしてくれてたんだ…

でも、昨日もマナを使った感じじゃなかったし、何か影響を受けた感じもなかったもんね。

「マリーさん、ありがとです。」

でもあたし、たぶんだいじょぶ。」

「ええ、わかったわ。」

でももし何か変なことがあったり、気になったりしたらすぐ知らせてね？」

「うんっ！」

お話が終わったところで、ちょうどクルトさんも戻ってきた。マリーさんを見てなんかうなずいてるけど…

「さて、しっかり食べて、この後がんばらないとな。」

ミア、部屋の掃除とか片付けが終わったら、お昼の仕込み、頼むよ。」

「はう…今度は寝坊することないから、ちゃんとやるね。」

「そうだね、それじゃ期待させてもらおうかな？」

ひう…ちよっとプレッシャー…でもだいじょぶだね。

ちゃんと練習してきたんだから！

96 おかえりなさい その2

「ただいま帰りましたー。」

お昼の営業も落ち着いてきたところに、聞きなれたおっとりした声が入り口から聞えた。
入ってきたのは3人。

「アリサさん、エリカさん、レックスさんおかえりなさいー。
フェリックスさんは？」

「はいー、冒険者ギルドにー、報告にー、行ってますよー。
わたしたちだけー、先に来たんですー。」

あー、でもー、リックの分もー、ご飯お願いしますねー。」

「はいー、かしこまりましたー。
それじゃテーブルへどうぞ。」

少しお客様も減ってきてたから、すぐにテーブルにご案内できた。
そのままあたしは厨房へ。

「クルトさん、あと4つ入ります。
フェリックスさんたちが帰ってきたの。」

「そうか、今回は少し早かったみたいだね。」

そっついながら、あっという間に盛り付けをすませてしまうクルトさん。

あっという間に4人分のランチが完成しちゃう。

「それじゃ運んでもらえるかな？」
「はい。」

さすがに4つ全部一気に運ぶのはまだ無理だから、2つずつ運ぶことにした。

テーブルに持っていくと、フェリックスさんはまだ戻ってないみたい。

「お待たせしました。

あと2つもすぐにお持ちしますね。」

「ありがとうございますねー。」

戻るときに、お客様が帰った後の食器をいくつか回収していく。

だいぶお客様も減っちゃったね。

回収した食器を水場に置いて、残った2つのランチを運ぶ。

食堂に入ると同じくらいに、カランカランと音がして、玄関の扉が開いた。

「ふう、ただいま。

間に合ったか？」

「大丈夫ツス、多分もうすぐ来るツスよ。」

「はい、お待たせしました。

フェリックスさんもおかえりなさい。」

「おっ、ぴったりか。

ただいま、ミアちゃん。」

さっきの2つは、アリサさんとエリカさんの前に並んでたから、今持ってきた分をレックスさんとフェリックスさんの前に置く。

ペコつとお辞儀してテーブルを離れて、また食器の回収。

っていうか、もうフェリックスさんたちしかないのね…

だいぶ遅いもんね。

「クルトさん、多分今のが最後ですー。」

「了解、リックたちはまだ少しかかるだろうから、交代でご飯を食べてしまおうか。」

「はい。」

ためた水に食器をつけておいて、先にご飯をいただくことになった。

クルトさんはあたしが終わったら食べるみたいだし、ちょっと急ぎめに食べなきゃね。

あたしが食べてる間に、クルトさんが洗い物をしてくれてたから水場もだいぶ片付いてきてる。

うー、だいぶ急いだつもりだったんだけどな。

「ごちそうさまでした。」

クルトさん、変わりますー。」

「それじゃ、食堂の方を見てきてくれるかい？」

もしかしたら食事がすんでいるかもしれないからね。」

「はい、いつてきまーす。」

食堂に入ると、もう食事は終わってたみたいで、マリーさんとみなさんがお喋りしてた。

んー…お茶とかだしたらいいかもしれない…

「すみません、食器だけ下げますね。」

「はいー、ここにー、そろってますー。」

アリサさんが指したところに、4人分の食器が重ねてあった。結構いろんな人がこんな風に協力してくれるんだよね。

食器を運んで行こうとしたら、マリーさんに呼びとめられた。

「ミア、向こうが片付いたらクルトと食堂来てくれる？」

「ちょっと話があるから。」

「はい。」

お話、何だろ？

とにかく厨房に食器を持って戻って、クルトさんにも伝えなきゃ。

「クルトさん。」

「あ、食事終わってたんだね。」

「はひ、えっと…」

こっちが片付いたら食堂に来てほしいって。

お話があるってマリーさんが言ってたよ。」

「そうか…まあ、だいたいは片付いているし、その食器を洗ってしまおうか。」

ミア、ちょっと任せていいかな？」

「うん、だいじょぶだよ。」

あたしはそのまま、水場で食器を洗う。

クルトさん、他の分全部洗っちゃったんだね…任せっぱなしだよ…

そのクルトさんはご飯の準備かな？

4つだけだし、さっさと洗ったつもりだったんだけど、その間にクルトさんは2人分の賄いの盛り付けを終わって、お茶まで準備してる。

「こっち終わりました。」

「ちょうどよかった。」

ミア、お茶を持ってきてくれるかい？

私はマリーの分も合わせてお昼を持っていくから。」

「カップもだよな。」

おっきいポットってことは、フェリックスさんたちの分もだよな。

「うん、ちょっと量が多いけど頼むよ。」

大きめのトレーにポットとカップを載せて、クルトさんについて運んでく。

食堂ではマリーさんたちがお話してた。

「お待たせ、マリーもちよつと食べといて。」

「あらありがと。」

「みなさん、お茶をどうぞー。」

マリーさんとクルトさんが並んで座つたのを確認して、みなさんにお茶を配っていく。

最後にあたしの分を持って、あいてるイスに座つた。

「ミアもありがとね。」

じゃ、ちよつと話戻るんだけど…」

そのお話はちよつと大変なものだったんだ…

97 ちょっと大変な事態に？

「じゃ、ちよつと話戻るんだけど…」

リック、もう一度簡単に出いいから話してくれる？」

みんなが席に着いたのを確認して、マリーさんがフェリックスさんに話を振った。

何だか深刻そうな雰囲気…

「俺たちが護衛の依頼を受けて、ニーゼルまで行ったのはクルトさんもミアちゃんも知ってるよな。」

そのときにも見たんだけど、悪魔が増えてる気がするんだ。」

「増えてる…とは？」

クルトさんが怪訝そうに尋ねた。

そいえば、街でもそんな話は聞いてないよね？

「うん、実は護衛途中に何度も悪魔を見たんだよ。」

ただ、空を飛んでる小さなやつで、襲ってきたりはしなかったんだけどね。

もしかしたら、同じやつが何度も飛んでたのかもしれないけど、こんなに頻繁に見ることなんてなかったからさ。」

「なるほど…」

「最初に確認したのが、ニーゼルに向かってる途中で、着いてからはあんまり気にしてなかったんだけど、帰りはさらに活発に動いてるような感じで、何度も見たんだよ。」

それで、さっきも冒険者ギルドに行ってきたんだけど、街の付近はあんまり来てないみたいだけど、やっぱり俺たちが見始めたところの時期から、目撃の報告が増えてるみたいなんだよ。」

そっか…街にいたらあんまり感じることもなかったのはそのせいなんだね。

ちっちゃい悪魔か…ちっちゃくてもやだなあ…

何だか空気も重いよ…

「ただ、未だに襲われたっていう報告も上がってきてないみたいでさ…

今までだと悪魔は人を見れば襲い掛かってくるようなやつが普通だって言われてたんだけど、ギルドの方でも不審がつてるよ。

今見てる悪魔も、何か偵察のような感じじゃないかっていうことで、総力をあげて情報を集めてるみたいだけど、まだはつきりしたことは分かってないみたいなんだ。」

「というわけで、何かちよつと気になるわよね…

うちも、お客様から何か聞ければいいんだけど。」

マリーさんが後を引き継いでそう言った。

襲われないのはいいと思うけど…何だか不気味だよな。

うちならいろいろ情報集めることもできそうだよな。

そりゃ冒険者ギルドの方がたくさん集まるとは思っけど、何もしないよりいい気がする。

「よし、少し情報収集を心掛けておこうか。

マリー、そっちは頼んだよ。

ミアも何か教えてもらえたら私がマリーに必ず教えてくれ。」

「はい！」

よっし、今日の夕方から早速がんばらなきゃ。

たくさんお客様来てくれるといいな。

どんな風に聞いたらいいか考えておかなきゃいけないね。

ん…

「さて、それじゃもう1つの方ね。

アリサ、お願いしていい？」

「はいー、もちろんですよー。

それではー、ミアちゃんー、行きましょうかー。」

「ほへ？」

突然言われたから頭が固まっちゃった…

行くって…どこへだろ？

「あ…そっか、まだミアに言ってなかったわ…

アリサと一緒に魔法士ギルドに行ってきたほしいの。」

「魔法士ギルドに？」

「ええ、例の杖の件よ。

今のところ何ともなさそうだけど、一応しっかりしたところで見てもらった方がいいわ。

レイアさんたちも、午前中に魔法士ギルドに報告に行ってみたんだから、たぶん話も通ってると思うわ。」

「わたしもー、簡単にお話をー、伺いましたからー、一緒に行きますよー。」

「は、はひ…」

どんなこと調べられるんだろ…何だかちょっと怖いかも…とにかく準備するために、部屋に戻ろうとしたらもう一度声を掛けられた。

「ミア、ごめんもう1つだけお願い。

フィランダーさんとレイアさんに声を掛けてあげて。

リックたちと話したがってたから。」

「はい。」

準備も急いだ方がいいかな？

階段を駆け上がって、マリーさんに言われた通り、部屋に戻る前に
フィランダーさんの部屋の扉をノックした。

「何かな？」

「すみません、ちょっといいですか？」

「ああ、今開ける。」

よかった、声でわかってもらえたみたい。

しばらく待っていると、扉が開いてフィランダーさんが出てきた。

「何かあったのか？」

「えと、フェリックスさんたちが帰ってきたから…」

あ、あのフェリックスさんは「無垢なる白」の…
イノセントホワイト

「ああ、知っている。」

もしかして話ができるのかな？」

「はい、食堂にいます。」

「ありがとう。」

そういうとフィランダーさんは隣の部屋をノックしてレイアさんを
呼んでる。

こっちはもうだいじょぶそうだね。

見えてるかわかんないけど、フィランダーさんの後姿にお辞儀して、
自分の部屋に入った。

んー…準備って言っても、何かいるのかな？

とりあえずエプロンは外して行こう。

発動体はいつもつけるようにしてるから問題ないし…
ベンドラント

あれ、準備完了かも。

「お待たせしましたー。」

「慌てなくてもー、大丈夫ですよー。」

階段を駆け降りるとアリサさんも準備してくれてたみたいで、扉のところに立ってる。

テーブルではフィランダーさんとレイアさんがフェリックスさんたちといろいろお話してるみたい。

「それじゃ、いってきます。」

「はい、気をつけてね。」

アリサ、ミアのことよろしくね。」

「任せてくださいー。」

マリーさんに見送られて、いざ魔法士ギルドへ出発！

98 アリサさんのお師匠様

「こんにちはー。」

「ああ、アリサさん、お戻りでしたか。」

「はいー、お昼にー、着いたところですよー。」

魔法士ギルドも2回目だけど、やっぱりちょっとちっちゃい気がする。

今は受付の人とアリサさんがあいさつしてるところ。

「それで、今日はどこに用事ですか？」

「はいー、午前中にー、オリジナルカラーズ「根源たる色彩」のことでー、鱗妖のー、魔法士さんがー、いらつしやったとー、思うのですがー……」

「ええ、ギルド長とお話されていたみたいですが。」

「その件にー、関わるお話なのでー、まずはー、お師匠様のところにー、お願いしますー。」

「わかりました。」

それでは奥へどうぞ。」

奥の扉から、前は入らなかったところへ通された。

中は少し大きめの真四角な部屋になって、入ってきた扉の他に、前に1つ、左右に1つずつの扉が見える。

「ここ……？」

「ミアちゃんは一、初めてですねー。」

普通ー、ギルドの人以外は一、この奥にー、入ることがー、ないのですよー。」

「ほへ……そんなとこにあたしが入っていいの？」

「わたしがー、付き添ってますからー、問題はー、ないですよー。」

「ではー、床のー、真ん中のー、円の中にー、立ってくださいねー。」

そう言われて床を見ると、何か複雑な模様みたいなものが描いてある。

ちょうど部屋の真ん中くらいに、ぽつかりと何も描かれていない円になってる部分があった。

円は結構広くて、2人で立つには広すぎるくらい。

たぶん、10人くらいはいける感じかな？ 詰めたらもうちょっといけそう。

「それではー、いきますよー。」

わたしとー、手をー、繋いでー、くださいー。」

あとー、眩しいからー、目をつむっててくださいねー。」

「は、はひ。」

アリサさんと手をつなぐと、アリサさんもしっかり握り返してくれた。

あとは、目をしっかりつむって待ってる。

アリサさんの声が聞こえた。

「白色の層へ我らを導け」

一瞬、体がふわつとした。

けどそれ以外に何か変わった様子はないみたい。

「着きましたー。」

もうー、目を開けてもー、大丈夫ですよー。」

目を開けると……とっても良く似た部屋にいた。

同じ床の模様の、同じ円の中に立ってる…

目の前の壁にも左右の壁にも後ろの壁にも扉がある…

ただ、灰色だった壁や床や天井の色が、白になってる。

「これって…？」

「転送陣ですよー。」

緑色魔法をー、固定化してー、マナを送り込むことでー、起動させていますー。」

「ほへ…??」

「そうですねー…」

マジッククリスタル

「『魔結晶』のー、大がかりなもの…でしょうかー？」

…うん、あんまり考えないようにしよう。

「白色の層はー、光に関する魔法とー、治癒に関する魔法とー、精神に関する魔法をー、研究する研究室がー、ありますー。」

あとー、ギルド長の部屋がー、あるんですー。」

わたしがー、魔法を習ったー、お師匠様はー、精神に関する魔法をー、研究しているんですー。」

「アリサさんの先生なんですね。」

「はいー、まずはそこにー、行きましょうー。」

アリサさんの先生っていうと、アリサさんよりすごいのかな…

どんな人だろう、ちょっとときどき。

アリサさんは4つある扉のうちの1つに近づいていく。

あたしも後を追ってついていく。

扉には『精神系魔法研究室』と書かれた小さなプレートが付いていた。

アリサさんがその扉を開けると、通路がのびていて、いくつか扉も

見えた。

「お師匠様のー、お部屋はー、奥から2番目ですー。
行きますよー。」

「あ、待つてくださいつ。」

アリサさんが歩き出したので、あわてて追いかける。
通路はそんなに長くなって、扉は左右に2つずつと、突当りに1つある。

アリサさんと一緒に奥から2番目の扉の前に立った。

アリサさんが扉をノックすると、部屋から返事が返ってきた。

「はい、どうぞ。」

「アリサですー。」

「失礼しますー。」

「し、失礼します。」

アリサさんについて部屋に入ると、そこは大きめの机があつて、壁際にはいくつも本棚がある部屋だった。

机の上にはいくつも本が広げられていて、イスに座ったおじさんが本を読んでいる。

「お師匠様ー、ただいま戻りましたー。」

「お帰り、アリサ。」

「そちらのお嬢さんは？」

「以前にー、お話したー、白枝亭のー、ミアちゃんですー。」

「ああ、なるほど。」

そういつておじさんは立ちあがった。

背が高く、ちょっと髪の毛は白髪混じり。

んー…ラルフさんのお父さんのボルトさんよりも年上かな？

「はじめまして、わたしは精神魔法研究のまとめをしているジョルジュと申します。」

「あ、ミアです。」

「よろしく願います。」

「君は白色魔法が使えるそうだね。」

「ギルドには所属するつもりがないみたいだが、また何かあればいつでも相談に来るといいよ。」

うん…とても丁寧な感じがする。

アリサさんの先生だし、当然っていえば当然なのかも？

「さて、何か用事があつてきたのだろうか？」

「はいー、午前中にー、「根源たる色彩」のことでー、ギルドにお客様がー、いらしたと思いますー。」

「ああ、報告は受けている。」

「わたしは直接見ていないが、赤と契約を結べたそうだね。」

「実はー、わたしもー、直接見ていないのですー。」

「ふむ…それでは赤についてのことはしないだね？」

「いえー、赤についてですー。」

…えっと、何か話がかみ合ってるのかかみ合っていないのかよくわかんなくなってきた。

でも、ジョルジュさんは怒るでもなく、ペースを崩さずに会話を続ける。

アリサさんのペース、よくわかってるんだよね、きつと。

「ということは、ミアさんと何か関係があるのだね？」

「そうですー。」

実はー、ミアちゃんかー、赤に触れたときにー、契約の儀式なしにー、契約ができてしまったみたいなんですー。」

「ほう……何だって?!」

ふんふんとうなずいていたジオルジュさんが急におっきな声をあげたから、あたしはびっくりした。

けど、アリサさんは特にびっくりした風でもなく、何も変わらず……すごい。

「お師匠様ー……」

「ん、何だね?」

「急にー、大きなー、声を上げるとー、びっくりしてしまいますー。」

「

……びっくりしてたんだ。

全然見えなかったけど……

「ああ、すまないね。

だが……このことは、午前中の来客者からギルド長に伝わっているのかな?」

「どうでしょうかー……」

お話してるとはー、思いますがー……」

「ふむ……すまないが、アリサもミアさんも、少し来てもらえるかな?

ギルド長に直接確認をとっておいた方がいいだろう。」

何か、大変なことになってきた気がする……

あたし何もしてないのになー……

99 2回目のチャレンジ

アリサさんとジオルジュさんと3人で、一度転送陣のあった部屋まで戻って、今度は別の扉の方へ。

そこには『ギルド長室』って書かれたプレートが付いていた。

ジオルジュさんが扉を開けると、また廊下が続いている。

けど、今度はさっきのときより短くて、扉も左右に1つずつと正面に1つしかない。

ジオルジュさんはそのまま正面の扉の方へ歩いていった。

あたしもアリサさんと一緒に後についてく。

扉の前で、ふう、と一息ついて、ジオルジュさんがノックした。

「ジオルジュです。」

「入りなさい。」

中から返事が返ってきて、ジオルジュさんが扉を開ける。

ジオルジュさんがいた部屋よりもちよっとおっきいね。

応接間みたいになってて、豪華そうなソファとテーブルがある。

その奥にはやっぱり大きな机があって、本や置物が乗っていた。

「失礼します。」

「失礼しますー。」

「あ、し、失礼します。」

ジオルジュさんが最初に入って、アリサさんが続いて、あたしが最後に入った。

中にいたのは、ジオルジュさんよりも年上の、おじいさんって言うてもいいくらいの人だった。

でも、背筋はピンと伸びてて、動きもきびきびしてる。

「ふむ、アリサと…そちらの方は？」

「アリサがよく世話になっっている宿の方です。」

おじいさんがあたしの方を見て、ジオルジュさんが説明してくれた。
そして前を開けてくれる。

「白枝亭でお手伝いしているミアです。」

「ようこそ魔法士ギルドへ。」

ワシはタレイアのギルド長を務めておるオーウェルじゃ。

まあ、座るとええ。」

オーウェルさんに促されて、ソファアに座ると、オーウェルさんは
机の上の置物を取り上げて何かつぶやいてる。

そして、すぐに置物を元に戻して、あたしたちの向かい側のソファ
ーに座った。

「さて、急にどうしたんじゃ？」

「ギルド長、オリジナルカラーズ「根源たる色彩」のことですが…」

「ああ、あとで招集をかけるつもりじゃったが…」

赤…「揺らめく赤」と銘打たれておったな…本物に間違いないよ。
フレアレッド

「いえ、そこではなく…」

午前中にいらっしゃった方からどのような報告をお受けになられ
ましたか？」

ジオルジュさんが詰め寄るような感じで尋ねたのを、手で制してる
オーウェルさん。

何だかジオルジュさんの焦りみたいなのが気になるよ…

そのとき、扉がノックされる音がした。

「入りなさい。」

「失礼します。」

入ってきたのは、お姉さん。

持っているトレーにカップが乗ってる。

そのカップをテキパキとみんなの前に置いていく。

中身は…お茶かな？

いつもあたしが飲んでるのはちよつと香りが違っけど…

「失礼しました。」

「ああ、ご苦労じゃった。」

カップを配るとすぐにお姉さんは出ていってしまった。

オーウェルさんはお茶を少しすすって、またこっちに向きになった。

「さて、報告の内容じゃが…」

アンフィットからの冒険者グループで、向こうで封印を解くための情報を手に入れたと言っておったな。

情報は正しかったようで、問題なく封印を解いて持ちだしたが使い方がさっぱりであったと。

それが、白の元所有者に話を聞いて、契約まですませたということじゃったな。」

「なるほど…」

契約に関しては詳しい話は？」

「最初に別の者が契約をしてしまって、引継ぎを行ったそうじゃな。追って詳しく報告することじゃったが…」

あれ…っていうことは、もしかしてあたしたちが詳しく報告することになるのかな…？

って言っても、あたしはよくわかってないんだけどな…

「そうですか…ではアリサ、報告を頼む。」

「はいー、わたしもー、聞いただけですーがー。」

実はー、「揺らめく赤」をー、ここにいるー、ミアちゃんかー、持っただけでー、契約がー、なされてしまったとー、いうことですよー。」

「ふむふむ…」

…ん？

……何じゃと?!」

ひうつ！

オーウエルさん、急におっきな声出すんだもん…
びっくりした…

「ですからー、ミアちゃんがー、「揺らめく赤」をー…」

「アリサ、もういい。」

「はいー…?」

固まってるオーウエルさんに、話を続けるアリサさん、それを止める
ジョルジュさん…

ああ、何だか分なくなってきた…

「ギルド長、大丈夫ですか?」

…

……あ、ああ、すまぬ。

しかし…ミアさんじゃったな…お主、魔法士か?」
ソーサラー

「え、いえ…あの…白色魔法が使えます。」

「むづ…白か…ますますわからんのづ…」

「どういうことですかー?」

アリサさんもよくわかってないみたい…それじゃあたしにわかるわけないよね。

何かちよつとだけほつとした…

何か考え込んだままのオーウェルさんに代わって、ジオルジュさんがアリサさんに答えてくれた。

「そうだな…遺跡などでも発見される武具や道具の中には、それ自身に封印が施されているものもある。」

インセントホワイト

ランプリングイエロー

現在確認されている「無垢なる白」、「高鳴る黄」についても、同じような封印が施されていたということなので、他の「根源たる色彩」も同じような封印が施されていると考えてまず間違いないんだ。

現に、「揺らめく赤」も最初何も反応していなかったようだからね。」

「でもー、封印を解いてー、「揺らめく赤」をー、手に入れたのはー、ないのですかー？」

「おそらく、彼らのといた封印は、「揺らめく赤」自体の封印ではなく、「揺らめく赤」が置いてあった場所の封印だったのだろう。」

「根源たる色彩」は、かつての封印に用いられた後、6色の光となって世界へ散らばったと伝えられているが…誰が何のために封印したかはわかっていない。」

とにかくあたしがさわっただけで封印が解けちゃったことは、やっぱり変、みたいだよね…

そのとき、ようやく考え込んでいたオーウェルさんが復活したみたい。

「封印を破るには、青と緑の力を使わねばならぬが、ミアさんは白色の使い手ということじゃったな。」

何か大きな力に係ったりしたことはないじゃろうか？」

「えと…わかんないんです。」

「わからぬとは？」

「あう…」

「ギルド長ー、ミアちゃんは一、記憶喪失なんですー。」

前にー、わたしがー、調べたときはー、封印かー、呪いのようなものをー、感じたのですがー…」

どう説明しようかって思ってたら、アリサさんが代わりに説明してくれた。

正直、こういう風に伝えればいいのかがぜんぜんわかんないもん…

「ふむ、その失った記憶の中にもかしたら手がかりがあるやもしれぬが…」

「ギルド長なら封印を破ることもできるのでは？」

「まあ、やってみなければわからんが…その前にミアさん本人の意思じゃな。」

ただ事が事なものでな…最近の悪魔族に関する報告を聞いていると、ただ事ではなさそうじゃし、「根源たる色彩」に係ることとなれば、悪魔族の封印にも係ってくる。

そうなると、できれば協力を願いたいところじゃが…」

オーウェルさんとジョルジュさんがそろってあたしを見る。

もし、これで記憶が戻ったらどうなるんだろう…

今のままじゃいられなくなるのかな…でも思い出さなきゃいけないことがもしかしたらあるかもしれないんだよね…

「ミアちゃんー…マリーさんたちにー、一度相談してみますかー？」

「ん…ううん、いい、あたし、やってもらおうと思います。」

「いいんですかー？」

「うん、もしかして、わかることがあるなら、きっとその方がいいと思うし、マリーさんもクルトさんも、きっとそうした方がいいって言ってくれると思うから。」

きつとそうだよね。

悪魔を何とかできるかもしれないなら、きつとみんなそうした方がいいっていうはず。

あたしはオーウェルさんの方を向いてお辞儀した。

「よろしくお願いします。」

「いや、ワシが無理やり頼んだようなもんじゃ、ありがとう。すまんがすぐにでもかかりたい。」

こちらへ来てくれるかの？」

オーウェルさんは、部屋の奥にあった立派な杖を持って部屋を出ていく。

あたしもオーウェルさんに続いて部屋を出てると、オーウェルさんが廊下の左側の扉の前で立ち止まった。

もちろん、アリサさんとジョルジュさんも一緒に来てくれる。

オーウェルさんが部屋の扉に手をかざして念じると、扉は勝手に開いちゃった。

部屋の中に入ると、そこは床に複雑な模様が描かれていた。

来るときに使った転送陣と似てるかな？」

「そこに座るのじゃ。」

気持ちを楽に、ワシの魔法を受け入れるようにしていれば問題ない。」

「はい。」

オーウェルさんに言われた通り、模様の真ん中に座って、気持ちを

落ち着かせるために目をつむった。

息をおつきく吸って、ふーっとはき出す。

うん、だいじょぶ。

目を開けると、オーウェルさんが両手で杖を持って集中してる。

「では始めるとしようかの。」

「……………なるほど、封印とも呪いともつかない、変わったものじゃ。」

「

そいえば、封印と呪いってどう違うんだろう？

ふとそんなことを考えてしまったけど…

「彼のものにかけられし縛めを解き放ち、彼のものを自由にせんと欲す…『シルブレイク魔封解放』」

オーウェルさんの持っている杖が緑と青の光に包まれ、床の模様も同じ色の光を放ちはじめる。

そして、その光がどんどん強くなっていった、あたしは思わず目をつむった…

100 そのとき…

「ふおっ?!」

声を上げたのはオーウェルさんだった。

目を開くと、光は消えてる。

でも、何も思い出せてないよね…

「ギルド長！

大丈夫ですか？」

「あ、ああ…

とんでもない反動じゃ…危うくやられるところじゃったわい…」

「すぐに治療します。」

「すまぬがよろしく頼むよ…」

ジオルジュさんがオーウェルさんの手のひらを看てる。

その手は火傷してるみたいになってた…

一体何があつたの…？

ジオルジュさんが魔法を使ってオーウェルさんの手のひらの火傷を治していく。

あたしはただその様子をぼーっと見てた。

「ミアちゃん…大丈夫ですかー？」

「ふえ？…あ、はい…」

いつの間にか近くにきてたアリサさんがあたしの前にしゃがんで声を掛けてくれた。

アリサさんが立って手を差し出してくれたから、その手につかまって立ちあがる。

「いやはや…とんでもない魔法でもかかっておるのかの…」

ワシも久々にびっくりしたわい…

ミアさんは大丈夫かな？」

「はい、だいじょうぶです。」

えっと…どうなったんですか？」

「うむ、どうも記憶にかかっている封印か呪いか、まあそう言ったものが非常に強いものみたいじゃな。」

ワシ程度の腕ではどうにもならんようじゃ。

力になれんですまんのう…」

オーウェルさんはこんな風に言ってくれたけど、ちょっとほっとしてるとこもある。

んー、ワシ程度…って、オーウェルさん、ギルド長っていうくらいだから、すごいんだよね、きつと。

いったいあたしの記憶にどんな秘密があるっていうんだろ？

うーん…わかんなすぎる…

あつ！そんなことより、オーウェルさんの火傷…

「オーウェルさんはだいじょうぶですか？」

「ああ、ジオルジュが治してくれたから問題ないわい。」

無理やり魔法を解こうとすると、その強さに応じた反動があるものじゃが…とびきりの反動じゃな。」

「すみません…」

「いや、ワシが無理やり頼んだことなんじゃから、気にせんでほしい…と言っても気にはなるかの…」

まあ大丈夫じゃ、杖がほとんど受けてくれたからの。」

杖…あれ、そういえばオーウェルさんの杖はどこに？

改めて見回してみると、さっきオーウェルさんが立ってたあたりに

何か青や緑や黄色の破片みたいなものが落ちてる…
もしかしてあれ、杖…だったものかな…？

「さて…ジオルジュ、導師召集の連絡じゃ。

一応話はしておかねばならんからの。」

「ギルド長、一応などという言い方は…」

「ほほ、まあかたいことを言うでない。」

少し困った顔でそう言って、ジオルジュさんは部屋を出ていった。
ジオルジュさんを見送ったオーウェルさんは、あたしたちの方に向
き直った。

「アリサや、お主はミアさんを送ってやりなさい。

あと、「オリジナルカラーズ根源たる色彩」の契約者たちにも一応忠告をしておいて
くれるかの…」

「はいー？忠告ですかー？」

「うむ、赤の契約者に伝えたんじゃが、6つそろえば門をも封じる
力があると伝えられておるから、2つでも合わせることで封印の力
を強めあうことができるのかもしれない、という話をしたのじゃが…
2つが同じ場にあることでどうなるかは、ワシらは何も知らんの
じゃ。」

安易に合わせることは控えた方がええかもしれん…

今のようなことが起こらぬとは限らんからの。」

んー、そっか…

何が起るかなんてみんなわかんないんだね。

でも、何も起こらなければ一番いいんだけどね…

「わかりましたー。」

「それではミアさんや、またいろいろとお話を聞かせてもらいたい

んじやが、よいかの？」

「ふえ？は、はい…宿が忙しくないときなら…」

「ほほ、働き者じやの。」

受付には話を通しておくから、またいつでも来るとよい。

それでは、今はここまでにしようかの。」

オーウェルさんについて部屋を出たところで、もう一度向き直る。

アリサさんがお辞儀したからあたしもならってお辞儀した。

「ギルド長ー、ありがとうございますー。」

「あ、ありがとうございます。」

「いやいや、こちらこそありがとうございます。」

気をつけて帰るんじやぞ。」

オーウェルさんに見送られて、最初についた白い部屋に戻る。
今度も一緒かな？

部屋の模様の真ん中に立つと、アリサさんが笑顔でうなずく。
合ってるみたいだね。

アリサさんと手をつないで目をつむって待っていると、アリサさんの
声が聞こえた。

「 入口へ我らを導け 」

来たときと同じように、体が一瞬ふわつとした。

目を開けると白かった壁が灰色になってる。

戻ってきたみたいだね。

部屋を出ると、ちゃんと受付がある。

受付のお兄さんにあいさつをしてギルドを出ると、空がちよつと曇
ってきてた。

「あらー…何だかー、雨にー、なりそうですねー。」

「ほんとだ…ちょっと急いで戻りましょう。」

「そうですねー。」

何だかあんまり急いでる感じがしないけど、とにかくちょっと急いで宿への道を歩きはじめたとき、何かを感じた。
強い力を…でもマナとはちょっと違う、何て言ったらいいんだろ…

「ミアちゃんー？」

「どうかしましたかー？」

「あ…今何かおっきな力を感じたんです…」

「力ー…ですかー？」

わたしにはー、わからなかったですがー…」

「えっと、どう言ったら…」

あー！アリサさんあっち！」

あたしが指さした方で、赤と白の光の柱のようなものが立ってる。
アリサさんもそれを見て驚いてる。

光の柱はすぐに消えてしまったけど、あれは…白枝亭の方？！

「アリサさん、行きましょう！」

「はいー！」

あたしたちは走り出した。

でも、宿まではそんなに近くないから、全力で走るときっと持たないから、少し急いで小走り。

細い道を行くと危ないから、大きめの道を進むことにした。

広場に出たとき、あたしはまた強い力…うっん、気配を感じた。
それはさっきとは全然違う、とっても嫌な感じ…

「ア、アリサさんっ…」

「ミアちゃんー…ちょっとー、休みましょうー。」

顔がー、真っ青ですよー…」

アリサさんが心配して止まってくれる。

感じる気配はどんどん強くなっていく…それに、とっても数が多い気がする…

「どうしたのですかー?」

「体は…だいじょぶです…」

何かとっても嫌な感じが…たくさんの…悪意…?」

「悪意ー…?」

わたしにはー、よくー、わかりませんけどー…」

嫌な気配に押しつぶされる気がして、あたしはその場にしゃがんでしまう。

アリサさんが肩を抱いてくれてるけど、震えが止まらない…

「熱はー、ないようですねー。」

困りましたー…おんぶしましょうかー?」

「だ、だいじょぶです…」

でも…もう来ます…」

「来ますってー…いったい何がー…」

そこで、アリサさんの言葉も詰まった。

聞こえるの…キイキイとうるさい声が…

「ミアちゃんかー、感じてたのはー、この悪魔のー…」

街にー、こんなにもー、来るなんてー…

仕方ありませんー、魔法をー、かけるのでー、受け入れてー、くださいねー。

《その心に光を、その心に力を、優しい光よ、励みとなれ》チアー鼓舞

魔法がかかると、少し気持ち became 楽になった。

悪意は消えてないけど、押しつぶされることはない。

「ありがとうございます。」

「さあー、いそぎましょうー。」

空には小さな不気味な姿の悪魔たちがたくさん飛びまわってる。

遠くの方で降りていく姿も見える…

急がなきゃ！

101 目覚めるとき（前書き）

今回から戦闘に係わる描写があります。
ご注意ください。

101 目覚めるとき

広場を抜けようとしたとき、あたしたちの前に小さな悪魔が降りてきた。

しかも3匹も…思わず足が止まってしまった。

あたしの前にアリサさんが飛び出した。

「インプですか…とはいえこの数…」

「ミアちゃんー、離れないでくださいねー。」

「は、はいつ。」

あたしが返事するよりも早く、アリサさんは集中に入っていた。

そして、普段のアリサさんからは想像もつかないくらいの速さで魔法を使う。

「真白き輝き、滅する力、世界に仇為す邪悪を打ち砕く刃となれ
ホーリーレイ
…《聖光刃》…！」

アリサさんが突き出した手からまぶしい光がインプめがけて飛んできた。

そして、光に当たったインプはそのまま消えてしまう。

「ふあ…」

「ミアちゃんー、急がないとー、どんどん降りてきますー。
行きますよー。」

あまりの早技にびっくりして、あたしはちょっと固まってた。
目の前で手を振りながら、アリサさんが急かす。

「あ、すみません…」

「大丈夫ですかー？」

「まずいですねー、中にー、大物もー、いるようですー。」

「できればー、戻るまでー、鉢合わせはー、したくないですねー…」

アリスさんが見つめる方には、インプよりもずっとおっきい、もつと恐ろしそうな悪魔の姿も見える。

確かにあんなのに会っちゃったら…ううん、とにかく今は急がなきゃ。

「ミアちゃんー、後ろー！」

「ふえ？」

振りむいたときには、インプが飛びかかってきてた…

思わず顔を手でかばって目をつむったときに、聞きなれた、でもちよつと場違いな声が…

「にゃー！ー！」

「ギャツ！」

インプが飛びかかってきたと思って予想してた衝撃はきてない…

おそろおそろ目を開けて手の隙間から見たのは、空に逃げてくインプと…

「ネコくん？！」

「にゃつ。」

「すごいー…ネコがー、悪魔をー、追い払うだなんてー…」

アリスさんもあたしもただただびっくりしてしまった。

でも…助かった…

「ネコくん、ありが…」
「にやにやつ！」

あたしがお礼を言う間もなく、ネコくんが走り出して、少し進んだところでこつちを向いて鳴いた。
何だかネコくんが急げって言ってるみたい。

「アリサさん！」
「はいー、いきましようー。」

あたしたちが走り出したのを見てネコくんが案内するように先を走っていく。

大通りでは、衛兵さんたちが街の人たちに、建物の中に入るように呼びかけながら、たぶん冒険者の人たちと一緒に降りてきたインプを追い払ったりしてる。

でも、インプはすぐに空に逃げたりして、なかなかやっつけることはできてないみたいだけど、おかげであたしたちはインプに襲われることなく大通りを進んでいく。

あと少して白枝亭に続く道へ入れるというところで、ネコくんが急に止まった。

「にやにやつ！」
「どうしたの…？」

そう問いかけたとき、あたしも感じてしまった。
強い悪意がそこにいるのを…

足が固まったみたいで進むことができない…
角から出てきたのは、あたしの倍以上もありそうな大きな悪魔だった。

たぶん広場から飛んでるのが見えたやつ。
その悪魔があたしたちを見降ろしてた…

「脆弱なる者どもよ、この奥では我らが主、様が我らのために使命を果たさんとしているところ。」

様の手を煩わせるわけにはいかぬ、ここで滅ぶがよい。」
「ミアちゃん！」

悪魔が、あたしの体よりも太そうな腕を振り上げ、振り下ろそうとしたときに、アリサさんの声がして、あたしは突き飛ばされた。地面に投げ出されて、腕とひざを擦りむいたみたいだけど、痛いなんて感じてる場合じゃない。

「つくう…」

振り返ると、アリサさんも地面に倒れてた。

アリサさんの左腕にはおっきな傷が見える…

けど、腕の傷なのにうめいてるだけ…どうして…？

「脆弱なる者どもが庇い合ったところでどうなるものでもない。

我が爪の麻痺毒が回ってきたか。

もはや碌に動けまいが…」

「あ…アリサさんっ！」

もう、何が何だか分かんない…

アリサさんのところに行きたいのに、足が言うことを聞いてくれない…

「おとなしくしていればよいものを…

死に急ぐのであれば先に始末してやろう。」

悪魔の声に振り向くと、また腕を振り上げてる。

もうどうしようもないみたい…

目を落としたとき、そこにいたネコくと目が合った。

ごめんね、せつかくさつき助けてくれたのに…

そう伝えたかったけど、口も動いてくれなかった。

せめて気持ちだけでも…そう思ったとき、ネコくんがこつちに駆け寄ってきてあたしに飛び付いてきた。

手を広げてネコくんを受け止めた瞬間、目の前が真っ白になった。

気がつくと、あたしは真っ白な世界に立っていた。

そして、その白い世界にあたしともう1つ白くないものがあつた。

確かにさつき受け止めたはずのネコくんは、なぜかあたしから10歩くらい離れたところに座ってこつちを見ていた。

これって、夢でも見てるのかな…

ネコくに近づこうと思って、足を踏み出そうとしたとき、ネコくんがしゃべった。

「動かないで、落ち着いてよく聞いてください。」

「ネコ…くん？」

どうしてしゃべれるの？

やっぱりこれって…」

「夢ではありません。」

そして我々には時間がない。

できることならば、人として平穏な一生を過ごしていただきたいかった。」

夢じゃ、ない…？

ネコくん…いったい何の話をしてるんだろう…

やっぱりこれは夢で、夢の中で夢じゃないって…話をしてるのかな。

「主よ、あなたはとても優しいお方だった。

故に大きな罪を犯してしまわれた。」

「おつきな…罪？」

「そのことに関しては、私から伝えることは禁じられています。

そして、その罰によって、あなたは力と記憶を失って、人の体に封じられた。」

罰…？力と記憶を封じる…？

あたしの記憶…もしかしてそのせい？

「私はあなたの使い魔として、あなたを見守ることを許されていたのですが、あなたの身に危険が及ぶようであれば、その力を解放するという使命も同時に与えられています。」

「あたしの…力？」

「そうです。」

あなたは既に封じられたその力の一部を、自ら取り戻してしまうほどの強さを見せておられます。

ただ、今のままではあの程度の悪魔にも敵わない。」

あの程度…ってアリサさんだって勝てないのにあたしが勝てるわけないよ…

「大丈夫です。」

あなたは非常に強い力をお持ちだった。

そのすべてを今すぐ解放することはできないかもしれないが、そ

れでもあの程度の悪魔には負けにくいぐらいの力があるはずです。

それに…今はあなたの心の中で、時の流れを歪めて話をしてい
ますが、あなたがやらなければ、あなたを助けてくれたあの女性も…」

アリサさん！

そうだ…あたしのせいでアリサさんがケガをして…だから動けなく
なって…

どこまでできるかわからないけれど、できるところまでやるしか
ないんだ…

「ネコくん…あたし…」

「わかっております。」

あなたなら、親しき方を見捨てたりするはずはないと。

力の封印を解くためには、私をもう一度使えばよいのです。」

「もう…一度？」

「失礼しました、その記憶も封じられていましたね。」

私は使い魔であると同時にあなたの武器でもあった。

ですから、私の名前を呼んでいただければ、あなたを助けるため
の姿を取ることができます。」

「名前…ネコくんの？」

「私の名前はミディアドーレ…」

さあ、強く念じてください。

力を取り戻したいと、親しき方を救いたいと！」

深呼吸をして気持ちを落ち着ける。

あたし、やってみるよ。

助けてくれたアリサさんのために。

大好きなみんなのために。

「お願い、ミディアドーレ！」

「かしこまりました、我が主よ。」

ネコくんの…ううん、ミディアドールの声が聞こえた瞬間、光に包まれて、体がふわっと浮き上がるような感じがした。

そしていつの間にかあたしの両手には何か棒のようなものを持っている感覚がある。

（主よ、先程の瞬間に戻ります。

おそらく悪魔めの一撃が来ますが、落ち着いて防いでください。）

ミディアドールの声が聞こえたとき、体が落ちるような感じがしてあたしは地面に降り立った…

しっかりと足が触れてるのを感じる。
あたしは…立…つ…ていた。

「この光は何だっ?!

貴様…いつの間に立ちあがった…
しかもその武器…」

あたしの両手に握られているものを見て言ってるんだと思う。
くすんだ銀色の長い棒の先には、三日月のような刃がついている。
立ったままでも草刈りができるような大きな鎌だった。

「まあよい、そんなもの1つで今さらどうなるわけでもないわ!」

また悪魔が腕を振り上げる。

そしてその鋭い爪がついた腕が振り下ろされるのがみえる。
でも、なぜか焦ることはなくて、何をすればいいのかわかっている
ように自然と口が動いた。

鎌を右手に持ち、左手を突き出す。

「アイギスガード
《絶対防御》」

「何っ?!!」

振りおろされた腕はガキンと大きな音を立てて、あたしの左手にも
うちよつとで当たるところで止まった。

一瞬だけ、赤と青と黄色の光がきらめいて、すっと消える。
悪魔はぱつと後ろに下がった。

表情はよくわかんないけど、声は信じられないって感じだった。

（主よ、護ってくださいった方を…

それと、周りへ被害を出さぬように、治療後は隔離してください。

）

ミディアドールの声が心に伝わってきた。

うん、と心の中で返事をしてアリサさんのところまで下がる。

「貴様…一体…」

悪魔もこっちのようすをうかがってるみたいだし、今のうちにアリサさんを治さなきゃ。

いつでも守れるように、左手を自由にしたままアリサさんの前に立つ。

あ…でも麻痺を治す魔法…習ってなかったよね…

（主よ、治したいと思ってください。）

治したい…アリサさんを…そう思ったら、また自然と言葉が湧いてきた。

悪魔の方を向いたまま、鎌の柄でアリサさんに触れる。

「コンプリートリカバリイ
《状態完治》」

鎌全体が白く光る。

きつとちゃんと魔法がかかってるってことだね。

（主よ、悪魔めが動き出す前に隔離してください。
暴れられるとやっかいです。）

ミディアドールの声に従って、悪魔に向かって走る。

悪魔の方は、あたしを迎え撃つためか、しっかりと構え直してる。おかげで動かないから、このまま閉じ込めちゃえばいいんだね。走りながら、閉じ込めたい…って考える…うん！

「シーリングバリアー
《結界》」

あたしと悪魔を中に閉じ込めるように、半球状のガラスみたいなものが覆っていく。

その広さは大通りの幅いっぱいぎりぎりって感じ。

外の様子が見えるってことは、外からもこっちが見えてるのかな…

「ふっふっふ…何をするのかと思えば…」

所詮貴様の魔法、貴様さえ始末すれば解けるではないか。」

悪魔は中にあたしだけしかいないことで余裕を持つちゃったみたい。だけど、あたしはもう負ける気はしない。だっ…

（さあ、主よ、あとは悪魔めを滅ぼすだけです。）

うん、わかってる。

まだあいつはあたしのことをよくわかってないはずだから、今のうちに一気にやっちゃえばいい。

アリサさんにケガさせて、街の人にも迷惑かけて…

絶対許さないんだから！

両手で鎌を持って悪魔に向ける。

「エクソサイズフレア
《破魔爆光》！」

悪魔へと光が集まってそれがはじけるように広がる。
光の中で悪魔の体が崩れていくのが見えた。

「まさかああ…これほどのおお…力をおお…し…ん…ぞ…」

消えていく中で悪魔の声が聞こえた。

光が落ち着いたときには、もう悪魔はいなくなってる。
ふうつと一息ついて、《結界》を解いた。

「ミアちゃん…ですよねー？」

後ろから、アリサさんの声が聞こえる。
ちゃんと魔法かかってたんだね。

「アリサさん、だいじょぶですか？」

「はいー、ありがとうございますー。」

それにしても…

いえー、今はー、白枝亭にー、急ぐのがー、先ですねー。」

「あ、はい、行きましょう！」

アリサさんと白枝亭の前に続く道へと走ろうとすると、後ろから「
ありがとー」とか「がんばれー」とか聞こえてきたけど…
とにかく急がなきゃ。

「そういえばー、インプがー、少なくなりましたねー。」

「ふえ…？」

あ…ほんとだ…」

アリサさんの声に、空を見てみると、確かにインプの数が減ってる
気がする。

街に降りちゃったのかも…
でも、この道にもいないよね。

「ところでー、ミアちゃんー…

マナはー、大丈夫ですかー？」

「マナ…ですか？」

んー、だいじょぶだと思います。」

「そうですかー。」

それならいいのですがー、先程ー、とんでもないレベルのー、魔法をー、いくつもー、使っていらっしやったのでー…」

とんでもない…んだ…？

でも、普通に使えちゃったし…だいじょぶだね。

「それにー…いえー、落ち着いてからにー、しましうー。
もうすぐー、白枝亭ですねー。」

うん、もう見えてるね。

あの少し高くなってる屋根が白枝亭。

壊れてる感じもしないし、ちょっと安心した…

「だいじょぶみたいです。」

「はいー。」

あたしが先に立って、玄関の扉を開いたとき、建物の裏手の方からドーンと大きな音が聞こえた。
きつとこれはただ事じゃない…

食堂には誰もいなかった。

「アリサさん、お勝手口から裏へ！」

「はいー！」

あたしたちは、食堂をぬけて厨房のお勝手口に急いだ。

その間も何度か音が聞こえる。

何が起こつてゐるんだろう…

その答えは、お勝手口の扉を開けたときにわかったんだ…

103 さらに強い敵

お勝手口の扉の向こうは、いつも薪割りしたり、洗濯物を干したりしてた、ちよつと開けたところ。

そこに何人もの人が武器を構えて立っていた。

「マリーさん、クルトさんっ！」

「ミアっ？」

「無事だったのか、よかった…」

お勝手口のすぐのところのクルトさんがいて、マリーさんは少し離れたところにいた。

マリーさんの向こうに、フェリックスさんとフィランダーさん、レイアさん、エメットさんがいる。

「アリサか？」

「わいい、援護入ってくれ！」

「わかりましたー。」

フェリックスさんたちと向かい合ってるのは…男の人？

でも頭に真つ黒な角があつて、背中にはさっきの悪魔と同じコウモリみたいな羽…

それに…ものすごい悪意を感じる…

「ほう、増援か。」

命知らずな者どもよ…

しかし、我は六柱でもつとも慈悲深き者であるからな。

今一度問おう、大人しく神器を渡せばこの場は見逃してやろつ…どうだ？」

「はいどうぞ、何て言うわけがねえだろ！
行くぜっ！」

フェリックスさんがそう言うと、みんなが武器を構えた。
マリーさんまで…

「クルト、ミアを連れて中に入っでて。」

「ああ、みんな気をつけて。」

ミア、私たちは邪魔にならないように中に入っていよう。」

クルトさんに押されて、お勝手口から中に入った。

扉を閉めても、音は聞こえる。

金属がぶつかるような音や水がこぼれるような音、それにみんなの
声が。

「クルトさん…」

「ああ、ミアもたぶん見ただろうが、悪魔族が大挙して街に押し寄せたようだ。」

レックスとエリカは、エステルさんと街の方へ助けに出たんだが…
ミアたちとは入れ違ったようだね。」

「あの角の生えた人は…」

「どうもあれが今回の親玉らしい。」

…リックの剣と、レイアさんの杖を合わせたときに、赤と白の強い光が立ちあがったんだ。」

それって、魔法士ギルドを出たときに見た光の柱のことだよな。
合わせたら封印の力を強められるかもしれないけど、何が起るかわかんないってオーウェルさんが言ってたっけ。

「その力を感じて、あいつは剣と杖を回収に来たようだ。」

ところで…」

「はひ？」

「ミア、その手に持っているものは何だい…？」

「え…これは…ミディアドーレ…あ、ネコくんがえつと…」

そのとき、外で大きな爆発音がした。

クルトさんが慌てて扉を開ける。

その隙間から見えたのは、焦げた地面。

そしてだいぶ疲れてそうなマリーさんたちと…

「ふむ…上手く防げたようだね。

しかし、もう息が上がっているようだ。」

「くそっ…」

さつきと全く変わらず、ただ立っているだけの悪魔…

疲れた様子も、傷を負った様子もない…

そんなに強いのか…？

「失うには少し惜しい腕だが、邪魔立てするといふなら容赦はせぬ。
六魔将たる我が力の一片を見せてやろう…絶望するがよい。」

そう言う悪魔は、空中に手を伸ばした。

その手を胸の前に引いたとき、どこから出てきたのか、大きな剣を持っていた。

「…来るぞっ！」

フィランダーさんの一言で、みんなが動き出した。

フェリックスさんとフィランダーさんは左右に別れて悪魔に向かい、
アリサさんたちは魔法を使うつもりなのか、集中してる。

マリーさんはアリサさんたちの近くで剣を構えたまま動かない。

「とりゃー!」

「ふんっ!」

フィランダーさんとフェリックスさんが両側から斬りかかったけど、悪魔は地面の上を滑るように下がってそれをよけてる。

2人がかりで攻撃してるけど、悪魔は持っている剣を使って軽々と防いでしまう…

「所詮この程度か…」

「うおっ!」

悪魔が初めて振るった剣は、フェリックスさんを簡単に跳ね飛ばしてしまった。

そのとき、レイアさんの声が響いた。

「隊長、行きます!」

アイスピア

《氷槍》!」

セイクリッドスマッシュ

《聖闇破》!」

続けてエメットさんも魔法を使った。

大きなつららと、真っ黒の炎の塊みたいなのが悪魔に向かって飛んでいく。

でも悪魔は軽々とつららをよけて、黒い炎を剣ではじいた。

「この程度の魔法でどうするつもりかな?

敵を倒すならば、このくらいはしてもらわねば…」

フレイムバースト
《紅焰爆裂》

悪魔が一瞬で唱えた魔法は、レイアさんとエメットさんのところで

大爆発を起こした。

2人が悲鳴を上げて吹き飛ばされる。

ちよっと巻き込まれたアリサさんとマリーさんが2人に駆け寄って、マリーさんが前に立ってアリサさんが魔法を唱えた。

「エリアヒーリング
《範囲治癒》」

アリサさんの周りがやわらかな白い光に包まれて、傷が治っていく。でも、エメットさんは起き上ったけど、レイアさんは倒れたままだった。

「レイア?!」

「だいじょうぶですー、気を失っているだけですー。」

起きてこないレイアさんを見たのか、フィランダーさんが心配そうに声をかけたけど、アリサさんの返事に少し安心したみたい。

「他者の心配をしている場合かね？」

「ぐはっ…」

振りかえった一瞬の間に、フィランダーさんは悪魔の一撃で倒された。

起き上ったばかりのエメットさんがフィランダーさんのところへ走って、すぐに《負傷治癒》を使った。

フィランダーさんは立ちあがってまた剣を構えてる。

だけど悪魔の方がどう見たって強そう…

「どっしりっ…」

不安な気持ちがだんだん強くなってきて、手に力が入った。

（主のなさりたいようになさればよいのです。

確かにあれは六魔将ですが、本体ではない…

退けることくらいはできるはずです。）

「六魔将？」

（悪魔族を束ねている最強の6体のことです。

おそらく、封印が完全に解けていないので、使える力は限られて
いるはず…）

「いけるかな…？」

（ええ、今なら油断もあるかと…

一気に攻めてしまえば勝機は十分あるはずです。）

「わかった、やってみる…」

「ミア、どうしたんだ？」

さつきから何を喋って…

ミア…眼が…」

あたしの顔をのぞきこんだクルトさんが、そのまま固まってる。

…眼？眼って何？

「あたしの眼、何か変…？」

「ああ…赤いんだが…」

「…ほへ？何で？どうして?!」

（力を使おうとすると、本来の姿に近くなるのです。）

ミディアドールがこっそり教えてくれたけど…クルトさんにどう説明すればいいんだか…

「えと…だいじょぶだから!」

「あ、ああ…」

よくわからないあたしの返事の勢いに、クルトさんもうなずいてくれたけど…とにかく今は悪魔を何とかしなきゃ。

いつの間にかフェリックスさんとフィランダーさんに加えて、マリーさんまで悪魔を攻撃してる。

けど、悪魔は動きまわりながら3人がかりの攻撃を難なく防ぎ続けている。

ときどき、後ろのアリサさんたちにも魔法を飛ばしたりしてるけど、あたしたちの方は全く気にしてない。

今がチャンスだね。

「ミディアドーレ、行くね。」

（わかりました、主よ。

彼奴は先程より赤の力を多用しております。

赤の力は使わぬ方がよいかと。）

「わかった、ありがと。」

あたしは、ミディアドーレを構えてこっそりとお勝手口から抜け出した。

クルトさんは戦いのようすに集中してるから、あたしが抜けだしたのには気づいてない。

っていうか、気づいたら止められそうだし…そのままそっちを見ててね…

十分に注意を払いながらゆっくりと進んで、悪魔の後ろの方に回り込んだ。

しっかりと機会を見て行かなきゃね…

悪魔はフェリックスさんたちの攻撃を防ぎながら、それでも攻撃を繰り返して徐々に3人を押し始めてる。

さらにアリサさんたちの方に魔法を放ったときを見計らって、あたしは走り出した。

走り出したあたしに、一番に気付いたのはエメットさんだった。

よく考えれば当たり前のことだったんだけど、あたしが魔法で戦えるのを知ってるのは、今はアリサさんだから、他の人にとってあたしはただの宿屋のお手伝い、悪魔に向かっていくなんて変だもん。

その結果が…

「危ないぞっ！

来るんじゃないっ！」

その声に、悪魔を含めたみんながこつちを見た。

一番驚いてるのはきつとマリーさんとクルトさん…

一番落ち着いてたのは…悪魔だ。

もって考えて動けばよかったよ…

（主よ、初歩の魔法でよいので、彼奴の気を引いてください。

できれば役に立たないくらいイメージをつける感じで…）

「うんわかった……《ホーリィライト聖光》！」

ミディアドールの意見に従って、白色の一番初歩の攻撃魔法を使う。差し出した左手のずつと先、悪魔の頭上でふわっと真っ白な光が広がった。

悪魔がマリーさんたちと戦いながら、ちらつとこつちを見て鼻で笑う。

ミディアドールの作戦、成功かな…？

（おそらく彼奴は、こちらへの関心を少し失ったでしょう。

実力差があるとはいえ、3人相手に斬り結びながら、後ろからの魔法を捌いていますし、何より主は見た目が幼いので…)

うーん…何だか複雑…だけど、これでもう一度チャンスがあるかもしれない。

その場から動かずに、でもいざつてときに左手がすぐに動かせるように、右手だけで鎌を持つ。

今さらだけど、この鎌ってとっても軽いから、片手でも振りまわせそう…

戦いは、フェリックスさんたちがだんだん押されてきてた。

フェリックスさんたちが疲れてきてるのは、あたしにだってわかる。なのに悪魔にそんなようすは見られない。

「そろそろ終わりが見えてきたようだ。

我が分身の相手とはいえ、なかなかの戦いぶりだ。

では受けるがよい…」

「いけない…」

いつの間にか起きてたレイアさんが、悪魔の動きに反応してあわて杖を構えた。

そして、レイアさんの魔法と悪魔の魔法がほぼ同時に完成する。

アナイレイトフレイム

「《業火殲滅》…」

フィールドプロテクション

「《広域保護》！」

悪魔の前に真つ赤な炎がまき上がって、レイアさんを中心に青い光が広がった…

(まずい…主よ、行きましょう！

こちらには彼奴の魔法の影響は出ないようです。」
「うん！」

ミディアドールの声に、あたしは飛びだした。
炎と青い光がぶつかったのは一瞬のことで、白っぽ煙のようなものが上がってる。

近づくにつれ、煙が薄れていって、人影が見えた。

手前に1人、奥に3人…

悪魔に近かったフェリックスさんたちが倒れてる！

「ほう…さすがは赤の神器…

我が炎に耐えるとは…

しかし、私の傍にいたものは耐えられなかったようだな。」

悪魔が、後ろで立ってたレイアさんたちの方を見てそう言った。

まだ疲れたようす何てまったく見えない悪魔に対して、立ってるレイアさんたちは、疲れきってるし無傷じゃない…

倒れてるフェリックスさんたちやレイアさんたちにこれ以上悪魔の攻撃を向けさせるわけにはいかない…

できるだけ悪魔の真後ろになるように近づいて、あたしは鎌を振り上げた。

「何っ？」

「ふえっ…？」

もうちょっとのところで悪魔が気づかれてしまった。

振り下ろした鎌が、悪魔の剣に止められる。

悪魔が剣でぐっと押し返してきた勢いで、あたしは後ろにちょっと飛ばされてしまった。

「大人しくしていればよいものを…

よほど死に急ぎたいと見える。

望み通り始末してやろう！」

急に割り込んだのがよっぽど気に障ったのか、悪魔の口調は強くな
ってた。

そしてそのまま剣で斬りつけてきた。

（魔法で！）

「うん、《絶対防御》！」
アイギスガード

「何だとっ？！」

悪魔の振り下ろした剣は、あたしの左手の前のわずかなきらめきに
止まる。

衝撃はぜんぜんない。

自分の剣が止められたことにびっくりしたのか、悪魔が目を見張っ
た。

（今です！）

「やっ！」

ミディアドールの声に、あたしが一瞬だけ早く動くことができた。

あたしが鎌を振り下ろしたのを見て、悪魔も避けようとした。

だけど、その動きは少しだけ遅れてた。

あたしの鎌は、今度こそ悪魔に当たった。

「くっ、こんなひ弱そうな輩に…」

当たったのは悪魔の左の羽の部分、おっきな傷をつけることができ

た。

悪魔の顔が怒りに歪んでいく。

「調子に乗るな…《ブレイズショット火球連弾》」

「きゃっ！」

悪魔が魔法を使うと、火の玉がいくつもあたしに向かって飛んでくる。

何とか避けようと思うけど、いくつかが体をかすめていった。

これじゃ、近づくことも魔法を使うこともできない…

（何とか魔法の切れ目を狙いたいたのですが…）

「そんな…こと言つて、もこれ…じゃ…痛っ！」

うっかりミディアドールと話してたら、火の玉が腕に当たってしまった。

大きなケガにはなっていないと思うけど腕が痛いよ…

でもそんなことを考える間もなく、悪魔の攻撃は続いている。

ほんとにどうしたら…

「ぐあっ！」

急に悪魔の攻撃が止まった。

悪魔の後ろに誰かが立ってる。

「ミアに…手出しは…させないわ…」

「マリーさん！」

「一度ならず…人如きが我に傷をつけるなど、断じて許せぬ！」

振り返りざまの悪魔の剣の一撃が…

マリーさんの体に…
深く突き刺さった…

「マリー！」

クルトさんの声が響く。

悪魔が剣を引き抜くと、マリーさんの体はそのままその場に崩れ落ちてしまった…

「マリー…さん？」

うそ…そんなこと…

絶対にだめなんだから…！

（主よ、落ち着いてください…

まだ亡くなったとは限りません！

…いけません、今、力をすべて解放してしまうとあなたの体が…）

ミディアドーレの声は聞こえていたけど、あたしにはもう何が何だか分からなくなってしまった。

倒さなきゃ、助けなきゃ、どちらから…どうしたら…

そのとき…

プツン、と…

体の中で、何かがはじけたような気がした…

105 悪魔と死神と

悪魔はゆっくりあたしの方に向き直る。

剣を胸元に構えて一瞬集中すると、傷ついた羽がきれいにくつついた。

「我を傷つけたるものは全て滅ぼす…次は貴様だ！」

悪魔はマリーさんを刺したその剣で斬りかかってきた。

その一撃を、あたしは両手で持った鎌の柄で受けた。

ちよっと押されたけど、今度は飛ばされない。

「馬鹿な…」

自分の一撃を止められたことがよっぽど信じられなかったのか、悪魔が固まる。

鎌と剣が触れ合ってるその状態のままで、あたしは魔法を使った。

「エクソサイズフレア
《破魔爆光》！」

「くっ！」

光が集まるよりも一瞬早く、悪魔が飛びあがる。

空へ…逃がすわけには…いかない！

そう思ったとき、背中が熱くなった。

こんな感覚、どこかで…そう思いながら地面を蹴ると、あたしの体も悪魔を追いかけて空中に飛び出した。

「翼だと?!」

貴様…人では…」

そんなことどうでもいい、ただマリーさんを、みんなを傷つけたことが許せない。

空中で鎌を構え直して悪魔に突っ込む。

飛んでいく勢いのまま、悪魔に斬りつけてみたけど、悪魔も剣を使っ
て受け流す。

そのまま何度か攻撃したり、悪魔が反撃してきたりするけど、どっ
ちの攻撃もお互いに防いでる。

そのうち、だんだんと悪魔の動きに追い付けなくなってきた…

「ハッハッハ…動きが鈍っているぞ。

そろそろ限界と見える。」

「うー…」

（主よ、もう持たないでしょう…）

まだそこまでの力を取り戻す準備はできていなかったのです…）

でも、このままじゃ…

せめて今のうちに攻撃決めなきゃ…

そう思っても、どうしても悪魔の動きに置いていかれてる。

悪魔はだんだんと余裕を取り戻してきてるし…

どうしようか、って思ったときに下から何かが飛んできて、悪魔を
かすめた。

さっきも見た大きなつらら…ってことは…

「ごめんなさい、外してしまった…」

「真白き輝き、滅する力、世界に仇為す邪悪を打ち砕く刃となれ
ホーリーレイ

…《聖光刃》…！」

レイアさんに続いて、アリサさんが魔法を使う。

光の筋が悪魔の目の前に伸びて、悪魔が思わず止まった。

（主よ、今です！）

「うん！」

悪魔が下がったことであたしは追いついた。

そして振り下ろした鎌の先が悪魔の右腕に当たって、強い光を放った。

「グウウ…」

この光、この力…貴様…」

光が消えたとき、悪魔の右腕は、肘から先がなかった。

そして、あたしはゆっくり落ちていく。

下を見ると、フェリックスさんとフィランダーさんも立ちあがってた。

「今この体を失うわけにはいかぬ…」

そう言っていると、悪魔は消えてしまった。

何とか…なったのかな？

（どうやら退いたようです…

主よ、お体は…）

ミディアドールに言われて気付いたけど、もう体にあんまり力が入らない感じた。

ゆっくりと地面に降りた瞬間に、背中にあつたものが消えた感じがして、倒れそうになった。

あわててフェリックスさんが駆け寄ってきて支えてくれたから、倒れずにすんだけど。

「ありがとです…」

「いや…俺たちこそ助かったよ…」

「ミアちゃんがいなきゃ、みんなダメだった…」

「あ、マリーさんは?!」

マリーさんは、まだ倒れたままだった。

クルトさんがマリーさんの手を握ってて、アリサさんとエメットさんが魔法を使ってる。

その後ろにきれいな鎧姿の見慣れない女の人がいた。

「…もうしわけー…ありませんー…」

「そうか…」

アリサさんの言葉に、クルトさんがうなだれた…

それってどういうこと…

って聞こうとしたときに、後ろにいた見慣れない女の人が、ミニディアドーレとそっくりな鎌をどこからともなく取り出した。

「あなたは…?」

「ミアちゃん?

どうしたんだ?」

「え、あの女の人…」

「どの女の人だよ?

アリサのことじゃないよな?」

女の人に声をかけたのに、フェリックスさんには見えてない…?

すぐ近くにいるクルトさんたちも気がついてないんじゃないかと、見えてないってこと?

（ほう…私の姿が見えるというのか…）

心の中に声が響いた。

ミディアドールが話してくれるみたいに。

でも、女の人の口がそれに合わせて動いてるから、きっとその人の声だよ。

（稀有な者に出会ってしまったものだ。

私の名はセルヴィアナ、彼女の魂を導きにきた者…

ヴァルキューレ

戦によって命を落とした勇者は、死神の中でも我ら戦乙女によって導かねばならない。）

「えっ？そんなのダメっ！」

「ミア…？」

クルトさんが驚いて、あたしの方を見てる。

他のみんなも…

でもそれどころじゃない…マリーさんが連れて行かれちゃったら…

（駄目と言われても、私にはどうすることもできない。

ただ、気高き魂を導くことが私に与えられた使命だから…）

「でも…でもダメなの！」

マリーさんが連れていかれたら…連れ…て…」

涙が止まらなくなって、途中で言葉が出なくなってしまった…

何とか…できないの…？

（主よ…望みなさい…

あなたにはできます、その望みをかなえることが…

いや、あなたにしかできない…）

（今の声…）

ミディアドールの声は、セルヴィアナさんにも聞えたみたいだけど…
そんなことより、望む…って…
つまり、マリーさんが生き返るように…？
それにあたしにしかできないって…
とにかくミディアドールの言ったことを信じて望む。

「あ…」

（見つかったようですね…）

「うん！」

（一体何をしようというのだ…）

あたしの返事は自分で聞いててもわかるくらい弾んでた。

セルヴィアナさんが少し目を細めて不思議そうに尋ねてくる。

フェリックスさんの支えを離れて、あたしはマリーさんの横に座った。

周りのみんなには、あたしは1人でしゃべってる変な子に見えたかもしれない。

でも、そんなことはどうでもいいんだ。

今はただマリーさんのために…

（その鎌は…?!）

マリーさんの体に、右手で持った鎌を軽く触れて、その上から左手を重ねた。

その鎌を見てセルヴィアナさんの表情が固まったような気がするけど…

「白と黒、世界の礎にして両翼、互いに相反する力にしてその根源は1つなり。すべての命を生み出す力よ、戦乙女がー柱、ティス

ミアの名に置いて、今ここに再び重なりて、放れし御魂を呼び戻せ
…《死者蘇生》^{リザレクション}」
(まさか…そんな…)

魔法を唱えると、あたしの手元から白い光と黒い影が噴き出してマ
リーさんを包む。

そして、光と影はあつという間に薄れてしまった。

「う…うん…」

「マリー?!」

マリーさんの口からうめき声が聞こえた。
クルトさんが手を握って呼びかける。

「あ…れ…?」

クルト…ト…」

「マリー…よかった…本当に…よかった…」

クルトさんの言葉が涙で詰まってる。
よかった…うまくできたみたい…

(主よ、マリー殿を宿に運ぶように、皆にお伝えください。
まだ休養が必要です。)

「え、あ、うん…」

クルトさん、みなさん、マリーさんを宿の中へ…まだ休んでない
とダメみたいです。」

「あ、ああ…」

クルトさんがマリーさんを抱き上げて連れていく。
フェリックスさんたちはあたしの方を見てるけど…

（主よ、後で行くとお伝えください。）

「あたしは後で行くから、先にマリーさんを見ててください…」

「…わかりましたー、わたしはー、マリーさんについてますねー。

リックとー、そちらのみなさんはー、もしよかったらー、街の方をー、見てきてあげてもらえませんかー？」

「ん…了解。

フィランダーさんたちも、体に問題なければ一緒に回ってもらえませんか？」

「ああ、付き合おう。」

アリサさんがこっちみてウィンクしてる。

気を利かせてもらっちゃったみたいだね…

あたしたち以外、みんながこの場を離れて行ってくれた。

（主よ…お疲れだとは思いますが少し時間をいただくことになりそうです。）

「うん、だいじょぶだよ。」

（一度姿を戻します。）

そう言うと、あたしの手から鎌が消えて、足元にネコくんが現れた。ネコくんはあたしの前に座って、前にいる人の方を向いた。

（さて…セルヴィアナ様、お待たせしました。）

106 事情を説明（ミディアドーレが…）

改めてセルヴィアナさんを見してみる。

がっちりと鎧で身を守って、ミディアドーレとよく似た鎌を持つてゐる。

って思ったら、ぱっと鎌が消えて、セルヴィアナさんの肩に白い鳥が乗ってた。

（ミディアドーレ、お前がいるということは…）

（はい、お察しの通り、こちらが我が主でございます。）

（やはりティスミアなのか…）

あいかわらず2人の会話は心に直接聞こえてくる感じだった。

「…あれ？」

ティスミア…って？」

（あなたの元の名前です、主よ。

今は記憶に施された封印を解くことはできないので、覚えていらつしやらないとは思いますが…

先程使われた《死者蘇生^{リザレクション}》の詠唱の中にも名前が出ておりました。

）

「じゃ、じゃあ…あたしミアじゃないの？」

（…いえ、覚えておられないのですから、今のお名前でよいかと。）

「そっか、よかった。」

（勝手に話を進めないでほしいのだが？）

ミディアドーレとしゃべってたら、セルヴィアナさんの怖い声が聞こえてきた。

「ひう…ごめんなさい…」

（申し訳ありません、セルヴィアナ様。）

（それで…なぜティスミアがここにいる？）

（例の一件はご存じだと思いましたが…？）

例の一件…？

何のことだろ？

（そういうことではない…）

（なるほど、そういう意味でしたら、まったくの偶然です。

いや、あるいは上の意思かもしれないませんが、少なくとも私には知らされておりませんでした。）

（そうか…それで、どうして力だけが戻っている？）

（元より、力の解放については私に一任されておりました故…

ただ、私は主ができる限り平穩に過ごすことができればと思って
おりましたが。）

（一任されていた…？

そんなことがあるはずは！）

（…では直接お尋ねになればよいでしょう。）

何か…ちよつとケンカみたいになってきてない…？
だいじょぶかな…

（…レアトキステス、頼む。）

ちよつとだけ考えてたセルヴィアナさんは、肩に止まってる鳥に声をかけた。

そしたら鳥はぱつと飛び立っていつちゃった。

（それではもう一つ。）

（はい、何でしょうか。）

（《死者蘇生》…あの魔法は…）

（…私は主のことだけを考えております。）

2人のよくわかんない会話は、ミディアドールの言葉で止まってしまふ。

セルヴィアナさんは、じっとミディアドールの方を見て、ミディアドールもセルヴィアナさんの方を見る。

しばらくそのままの状態が続いたけど、セルヴィアナさんが先に視線をそらした。

（報告はさせてもらう。）

（わかっております。）

（できればもう…いえ、私が言うことではないな…）

（お心遣い、痛み入ります。）

そのとき、白い鳥が帰ってきた。

さっきと同じように、セルヴィアナさんの肩に止まって…何かしゃべってるっぽい？

（そうか…ミディアドール、お前の言った通りだった。

それにしても…今回は運がよかったな。

ティスミアがいなければ…）

（セルヴィアナ様、我が主の名はミア様にございます。）

（…街が壊滅してもおかしくなかったはずだ。）

あ、セルヴィアナさん、ミディアドールのこと無視した…

セルヴィアナさん、今までずっとミディアドールの方を見て話してたのに、急にあたしの方を見る。

（まさかこんな形で再会できるとは思ってなかったが…
貴女がここにいるのも必然なのかもしれない…）

さつきよりもちよつと優しい表情になったセルヴィアナさんがお辞儀した。

何となくあたしもお辞儀を返す。

ミディアドーレも頭をペコつと下げてた。

顔を上げたとき、セルヴィアナさんの背中には、翼があつた。

（再び道が交わることがあるならば、相見えることもあるだろう…）

そういうと、セルヴィアナさんはぱつと地面をけって飛び上がった。飛んでいくのになつて思ったら、飛んでいく途中でどんどん姿が薄れて消えてしまった。

「ふわ…」

（さて主よ、今度は皆様に説明しなければいけませんね。）

「あ…そだね…」

でもあたしまだ全然よくわかってないんだけど…」

（それは仕方のないことです。

私がサポートいたしますので。）

「うん、お願いね。」

とにかく宿に戻らなきゃ。

マリーさんだいじょぶかな…

アリサさんもいるしきつとだいじょぶだね。

さつきの戦いのせいで、宿の建物も、周りも、壊れちゃってるところがある。

街中、そんな感じかもしれないな…

そんなことを考えながら、お勝手口から入る。

後ろからミディアドーレもそこについてきてる。

もちろん厨房には誰もいない。

そのまま食堂の方をのぞいてみたけど、こっちも誰もいない。
ってことは、マリーさんは寝室かな？

マリーさんたちの寝室の扉を小さくノックして、そっと開けるとベッドの横にアリサさんとクルトさんが座ってた。
ベッドにはマリーさんが寝てる。

「ミア…大丈夫かい？」

「え…うん、マリーさんは？」

「今は眠っているよ。」

命の危険はないと、アリサも言っているから大丈夫だよ。

ミアのおかげだ、本当にありがとう…」

クルトさんが頭を下げてそう言った…

けど、あたしは自分にできることをしただけだから。

マリーさんだからしよと思ったただけだから。

伝えなかったけど、なぜかうまく言葉にできなかった。

そんなあたしの頭を、クルトさんはぼんぼんと軽くなでてくれた。

「ミアちゃんー、ここはー、クルトさんにー、おまかせしましょう
ー。」

追々ー、みんなもー、帰ってくるとー、思いますー。

お疲れだどー、思うのでー、わたしたちでー、簡単なー、料理を
ー、準備しておきましょうー。」

それって、すっごくいいアイデアかも！

ちよっと疲れてるけど、それはみんな一緒だもんね。

でも、クルトさんに許可もらわなきゃ。

「…クルトさん、いい？」

「ミアに任せるよ。」

もしわからないものがあれば聞きに来ればいい。」

「うん！」

アリサさん、行きましょう！」

「はいー、頼もしいですねー。」

そんなわけで、眠っているマリーさんとクルトさんを残して、あたしたちは厨房に向かいました。

107 事情を説明（あたしが？）

幸い、厨房の外壁は壊れてなかった。
問題なく使えそうだね。

「それではー、手分けしてー、準備しましょうかー。」
「はい。」

食材見てきますね。

アリサさん、火をお願いしていいですか？」
「わかりましたー。」

アリサさんなら「火結晶」ファイアカクリスタルの使い方、わかるもんね。

薪を1束運びこんでから、倉庫に行ってみる。

今日は面白いものなんてできる状況じゃなかったけど、ちゃんと蓄えはあるんだよね。

野菜と…豆、ハム。

スープならあたしでもできるかな。

パンは朝の分が残ってたらしいんだけど…

とにかく使いそうなものを持って厨房に戻る。

厨房に戻ると、アリサさんがきつちり火起こししてくれてた。

お鍋にお水も張ってくれてる。

「あー、おかえりなさいー。」

やっぱりー、火をー、つけるのがー、楽ですねー。」

「ほへ… あたし、「火結晶」以外でつけたことがないからよくわかんないです。」

とにかくアリサさんに手伝ってもらいながら材料を切って、お鍋に

入れていく。

ハムからでもスープのお出汁がでるってクルトさん言ってたし、いつもみたいに難しいのは無理でもだいじょぶだね。

スープが一段落してから、パンを探すと、ちゃんといつものところに絞った布巾をかぶせて置いてあった。

そのまま放っておくと、表面がカチコチになるんだよね。

「後は、何ができるかな……」

「とりあえずはー、これでいいかとー、思いますー。」

マリーさんのお食事はー、目を覚まされてからー、もう一度ー、様子を見てー、考えましようー。」

しばらく待っていると、みんなが順々に戻ってきた。

アリサさんのアイデアで、桶に少し温めたお湯をためて、汗を落としてもらえるようにして渡していく。

一度部屋に戻って、着替えた人から順番に食堂に戻ってきてもらうことにした。

「はあ……つと、みんなお疲れさん。」

「リック……おじさんっぽいよ……?」

最後に降りてきたフェリックスさんが、思いつきり伸びをしながら漏れた言葉に、エリカさんがこそつと一言。

なぜかみんなクスクス笑ってしまった。

テーブルをくつつけて、みんなで一緒に座れるようにしたから、何だかすごく広い。

順番に、フィランダーさん、レイアさん、エステルさん、エメットさん、クレメンテさん、レックスさん、エリカさん、フェリックスさん、アリサさん、そしてあたし。

いつもならもうすぐ夜の食堂営業が始まる時間だけど、今日は状況

が状況だから、表にお休みしますの看板を立ててる。

食堂の壁は、ちょっと壊れちゃってて、今は隙間が空いてる。日が落ちて涼しくなってきたから、風が入ってきたらちよつと寒い。後でクレメンテさんが応急処置してくれるって言うてくれた。

「それじゃ、品数少なくて寂しいけど、どうぞ。」

「いやいや、温かいものがあるだけでもありがたいよ。」

みんなそろったところで、アリサさんにも手伝ってもらってスープとパンを配膳する。

いつものご飯に比べると品数どころか、味も全然だと思っけど、みんなおいしそうに食べてくれてる。

「ミア、アリサ、任せっきりで申し訳ないね。」

「クルトさん！」

「マリーが目を覚ましてね。」

さっきアリサに見てもらったのもあって、具合もまずまずみたいだよ。

まだ動けるほどではなさそうだけどね。」

クルトさんの報告に、みんなほつとする。

ほんとによかった。

「ミア、鍋のスープ、少しもらうよ。」

それから、飲み物も自由に出してもらっていいからね。」

「はい。」

ということで、飲み物も出しつつ、しばらくはご飯を食べながら、みんなで街のようすの報告をしていく。

アリサさんは途中でクルトさんに呼ばれて、もう一度マリーさんの

ようすを見に行った。

結局、あたしたちが戦った悪魔がいなくなったら、街の他の悪魔たちもみんな逃げていったみたい。

それでも建物が壊されたり、ケガをしたりした人もたくさんいるみたいで、施療院や教会、治療士さんは大忙しになってるってことだった。

きつとユーリさんも大忙しだね…

明日から地区ごとで協力して片付けや建物直したりっていう作業が始まるみたいで、大工さんたちにも召集が掛ってるみたい。ほんとにいろいろ大変だ…

「あ、もうみなさん、食べ終わりましたよね。

お茶の準備して来ますね。」

「わたしたちも手伝うよー。」

片付けようと思ったら、エステルさんとレイアさんが協力を買って出てくれた。

その間に、クレメンテさんが壁を直してくれることになって、レックスさんもそっちを手伝ってくれることになった。

食器の方はエステルさんとレイアさんが洗ってくれるって言うてくれたから、あたしはお茶の準備に取り掛かる。

食器の片付けが終わって、お茶の準備ができたから食堂に戻ったんだけど、びっくりすることに、壁の穴はもうふさがってた。クレメンテさんもレックスさんももう座ってるんだもん…

「とりあえずの応急処置ですから、また本職の方に見てもらってくださいね。」

「はい、ありがとうございます！」

アリサさんとクルトさんも戻ってきた。

マリーさんは少しだけ食事してまた寝ちゃったみたい。

アリサさんのお見立てでは、2、3日もあれば回復できるはずってことだった。

11人に増えたお茶会。

何となくみんなが黙ってる…

「にゃ。」

「あれ、ミディアドール…そいえばいつの間にどっか行ってたの？」
(ずっとあそこにいましたよ。)

ひょこつとテーブルに飛び乗ったミディアドールの視線の先は、隣のテーブル…

うん、ぜんっぜん気づきませんでした。

(さて、みなさん、お待ちのようですが?)

「あ、そだね。」

えと…何から話せばいいのかな…?

(主のお好きなように。)

わからないことがあればフォローしますので。)

「ん…

えっと、みなさんに聞いてもらうことがあります。」

あたしが話し出すと、みんながこつちをじっと見た。

う…何だかすごく緊張してきた…

「あたしは…死神…なんだよね?」

「いや、聞かれても困る…」

ミディアドールの方を見たつもりが、その向こうにいるフェリック

スさんと目が合っちゃった。

（死神、というよりは戦乙女ヴァルキューレといった方が、わかりやすいかもしれません。）

「そっか、えと、戦乙女らしいです。」

その一言でみんなが固まっちゃったんだけど…

「あれ…何か変なこと言っちゃったかな…？」

（まあ、普通は信じられないでしょう。）

「えー…?!」

（ただ、あなたの力は皆がみておりますので。）

しばらく固まった状態が続いて、静かだったけど。

一番最初に口を開いたのはエステルさんだった。

「戦乙女って…勇者の導き手っていうあれよね？」

「え、え、エステル…失礼よ！こと、こ、言葉遣い！」

「へ？あ、えつと…ごさいますわよね？」

「ああ、もう…」

レイアさんと2人、何かおもしろいことになってるけど…
言葉遣い？

「ミディアドーレ、どういことかな？」

（戦乙女は神族の中でも8大神に次ぐ力を持ったものという認識があるはずですから畏敬の念を持った、というところでしょうか。）

「えー?!それ…何かやだ…」

（あなたの思うように振る舞えばよいでしょう。）

正確に言えば、人の肉体に封じられた時点で、神族そのものでは

ありませんし、何よりあなたは、神族としての記憶を封じられていらつしゃいます。

多少……力を取り戻しはしましたが、人と変わらないと言えます。

）

多少、つてところで詰まったミディアドーレ。

何か引つ掛かるけど、まあいいや。

「エステルさん、レイアさん、今まで通りでいいですよ。

あたし、神族としての記憶は封じられてるみたいだから。

体も人と変わらないって言ってるし……」

エステルさんもレイアさんも、周りのみんなもポカンした顔になっちゃった。

とにかく分かつてることを伝えてしまおう。

「それで、このネコくんが、ミディアドーレって言って、あたしの使い魔で、今日もいろいろ助けてくれたんです。

あ、そうだ、鎌にもなるんです。」

（姿を変えた方がよろしいですか？）

「うん、お願い。」

そう答えると、ミディアドーレがあたしの方へ近づいてきた。

そして白い光のようになってあたしの方へ飛んできて、気がつくにあたしの手には鎌が握られている。

「こ、こんな感じです。

いいよー戻ってー。」

邪魔になるといけないから、すぐに戻ってもらおうように願うする

と、鎌は一瞬黒くぼやけて影みたいになって、その影が集まってネコくんに戻る。
んー…不思議。

「あと、何を説明したらいいのかな？」

（皆に聞いてみてはいかがですか？）

「そっか…」

えと、他にどんなことを話せばいいですか？」

「ミアちゃんは一、体は一、大丈夫ですか？」

今日一日でー、とんでもない量のー、マナをー、使ったようにー、思ったのですがー…」

アリスさんは、あたしが1つめの悪魔を倒したときから見てるんだよね。

そういえば、いっぱい魔法使ったけど…

戦いが終わったときはちょっとふらふらしてたけど…

今はもうだいじょぶだよね。

「はい、平気です。」

「そうですかー。」

それならー、よかったですー。」

そう言つて笑顔をくれるアリスさん、心配してくれてありがとです。次に口を開いたのはレイアさんだった。

「ミア…さん…」

「えと…前と同じでいいですよ？」

「う…ミアちゃん？」

「はい！」

「…「揺らめく赤」フレアレッドと契約してしまったのは…その力の…？」

えっと、これはよくわかんないや。
ミディアドールの方を試してみる。

（おそらく、封じられているとはいえ、あなたの力に反応したとみて間違いないのではないでしょう。）

「ミディアドールは多分そうだって言ってます。」
「そうですか。」

もう1つ…たくさんの色の魔法を使ってみましたけど…」

（ふむ、人族、魔族は白か黒かそれ以外か、でしか使えないのでしたね。

白と黒、あるいはさらに他の色を使うことができるのは神族の力です。）

「白と黒と、さらに他の色を使うことができるのは神族の力、っていうことです。」

「では、わたしたちでは『死者蘇生』^{リザレクション}のような魔法は使えないということですね…」

（白と黒の合成は、主よ、あなたの得意とする分野でしたので…
神族でも使えない者がたくさんおります。）

「何か、白と黒の合成って、神族でも使えない人が多いみたいです。」

「わかりました、ありがとうございます…」

何だかちよつと落ち込んだ感じのレイアさんをエステルさんがよしよししてしてる。

もしかして何かあったのかも…わかんないけど。

「他にはありますか？」

…特になら…」

「ミアは…この後どうなるんだい？」

どこかに帰らなければいけないとか…」

特になければ、お片付けしてお開きに、って思ったときに、最後に聞いてきたのはクルトさんだった。
帰る、っていつでも…

「ミディアドーレ、どうなのかな？」

（先程も申し上げた通り、あなたは神族としての記憶を封じられていらっしやいます。

ですから、天界へ帰る術はありません。

人としてこの先も進んでいくことになりましょう。）

「ん…えっと、あたしは天界へ帰ったりはできないみたいだから…」

そこで言葉に詰まっちゃった…

だって、他に行くところがないんだもん…

迷惑、掛けることになるかもしれないんだよね…

「ということは、ミアさえよければ、これからもうちにいてもらえるっていうことかな？」

「え…？」

「私は、それにきつとマリーも、ミアがうちに来てくれてからとても素敵な日々を過ごすことができるから。

それに、今日は返しきれないくらいの恩を受けたからね。

ミアがこれからもうちにいてくれるならば、私たちは嬉しいんだけど、どうかな？」

「……」

（主よ、せつかくのお申し出ですよ。

しっかり返事を。）

あたしは頭の中がしびれちゃったみたいに、うまく考えることがで

きなくなつてた。

自分でも、よくわかんないような子なのに、クルトさんはいてくれるなら嬉しいって言ってくれた。

ただもう嬉しいっていう気持ち^が、びっくりするくらい強くて、涙が止まらなくなってしまった。

そんなあたしをクルトさんがぎゅってしてよしよししてくれる。

みんなが拍手してくれるのが聞こえた。

明日も、明後日も、あたし、ここにいていいんだね。

そんな心の声に答えるかのように、誰かが返事をしてくれた。

「にゃー。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0160v/>

モノクロームの夢の中から

2011年12月3日14時54分発行